第５節　第Ⅲ面（弥生時代中期～前期）の調査

１．土器群（SG）

第10次調査区で第Ⅳ面とした青灰色粘質土と砂質土との境は、第12次調査区では図のように西側に蛇行しながら延びている。この上に古墳時代から弥生時代の遺構が掘り込まれる黒色粘質土が堆積しているが、前述したようにグリッドＶライン付近から次第に遺構が希薄になる。このことから微高地の斜面、生活領域の境界付近と想定した。しかし弥生時代の遺構はさらに西側のＺライン付近でも存在しており、弥生時代には微高地を広範囲で利用していたことを示している。第Ⅲ面で確認した遺構を記述する前に検出作業中に取り上げた遺物について記す。まとまって出土した遺物については土器群（SG）として扱っている。また石製品の出土が目立った。

Fig.125　第Ⅲ面の検出作業

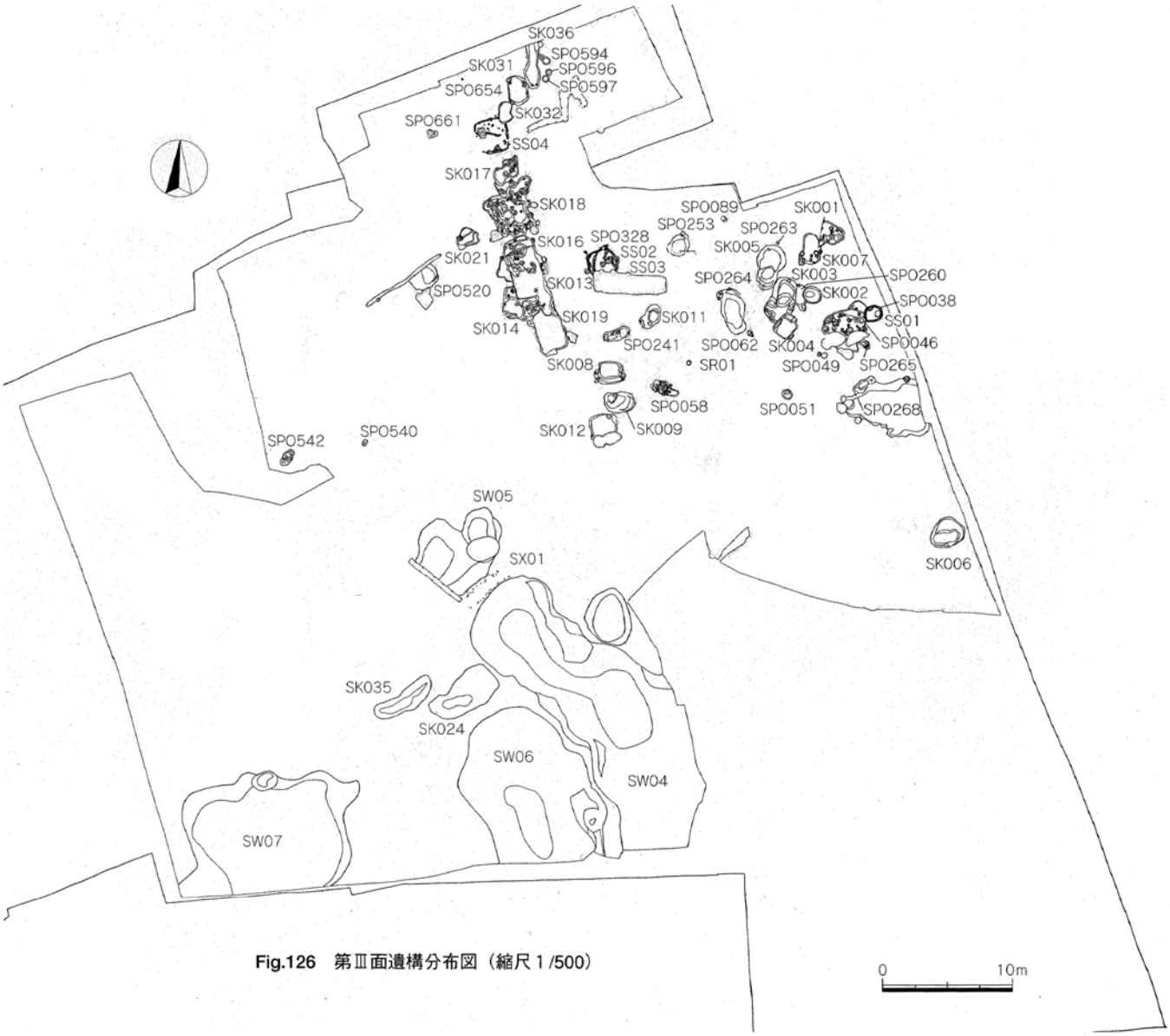


Fig.126　第Ⅲ面遺構分布図（縮尺１/500）

SG01　Z31グリッドにして拡がっている。主に弥生時代前期土器を中心にしている。

1は口径22.8cm、底径10.1cm、器高36.8cmの壺。平底の底部から体部は外湾しながら延び、胴部上位に張りを持たせている。頸部との境に横ミガキ状の沈線を巡らせており、頸部はほぼ真上に延びて外湾する口縁部へと繋がっている。口縁部はやや肥厚するが、明瞭な段はない。胴部から頸部外面は細かな横ミガキ、底部付近は縦のハケ目。焼成は良好でやや赤みを帯びた褐色を呈している。

2は壺の口縁部で口径32.0cm。厚みを持たせ頸部とは段を作っている。**3**は底部外縁に粘土紐を貼り付け高台のような作りをしている。この高台には２個一対の小孔がある。精良土に近い胎土で外面はナデ調整。

Fig.127　遺物検出作業

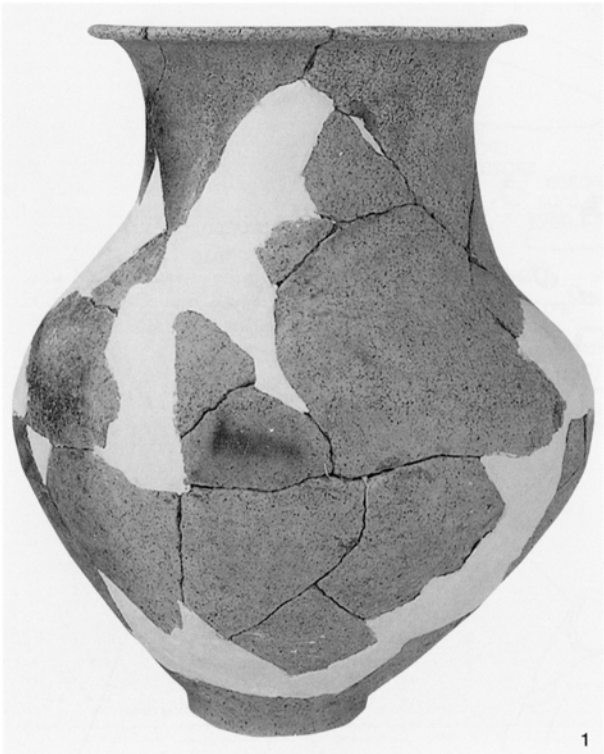


Fig.128　SG01の遺物

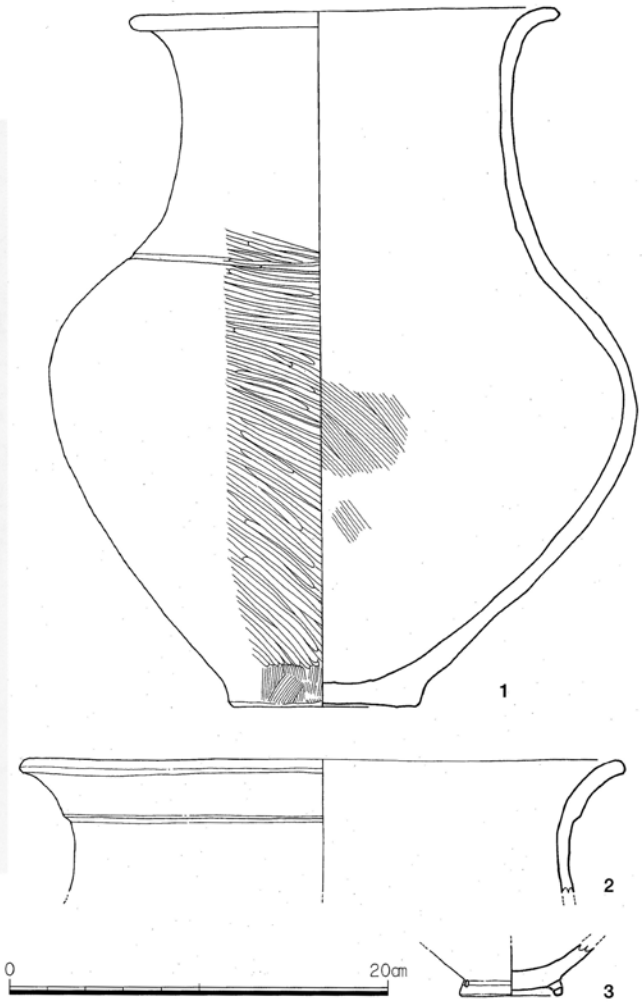


Fig.129　SG01の遺物（縮尺１/４）

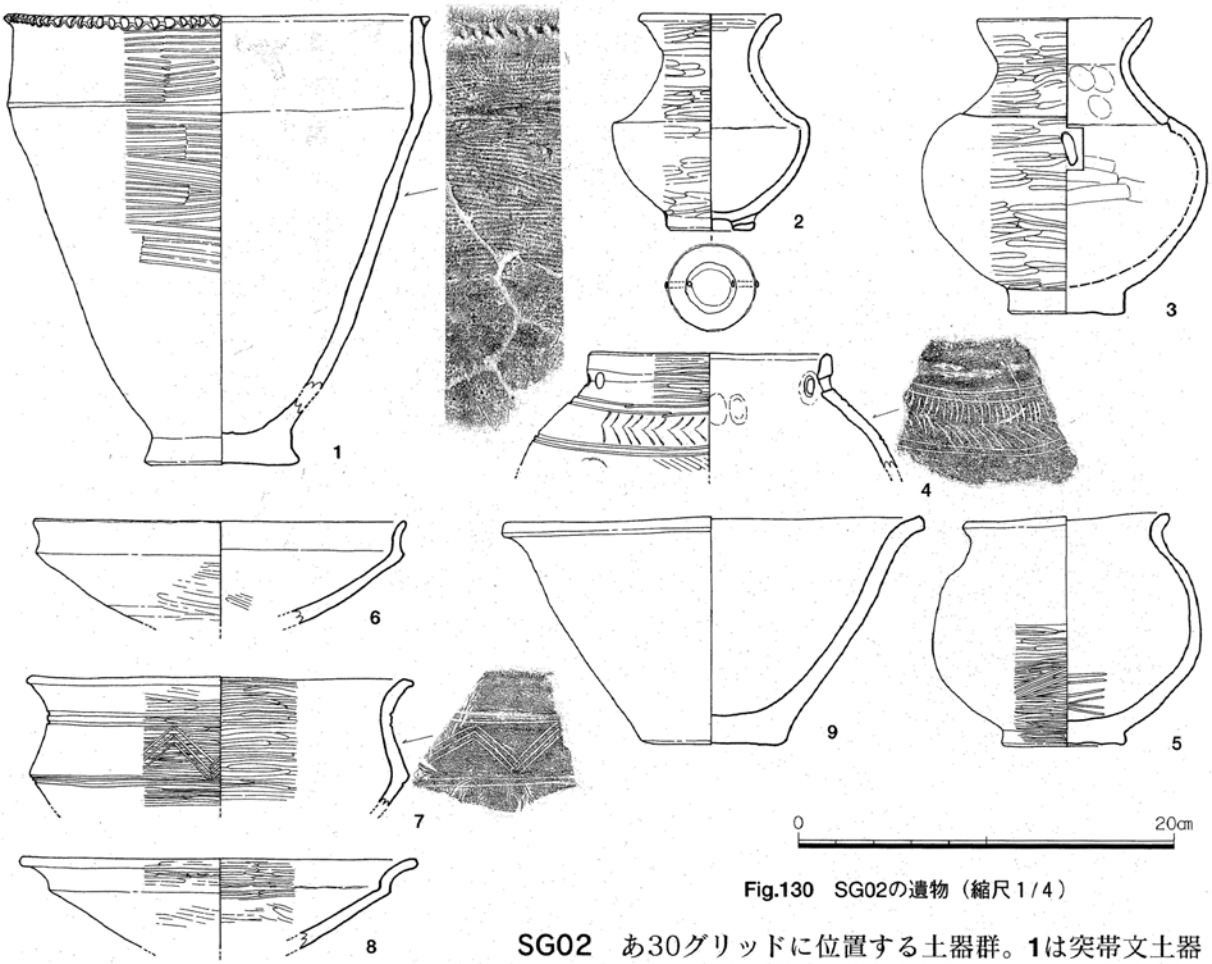


Fig.130　SG02の遺物（縮尺1/4）

SG02　あ30グリッドに位置する土器群。**1**は突帯文土器の甕。口径22.4cm、底径8.2cm、器高23.9cm。体部の反転は底部より器高1/6と上位にある。口縁部へかけて器壁は厚みを加えている。突帯は口縁端に接して貼り付け、上面に平坦部を作っている。外面は横条痕調整。**2**～**5**は壺。**2**は口径7.55cm、器高11.5cm。胴部は半球状で頸部へ屈曲する。高台状の底部には相対して小孔が開いている。口縁部はわずかに厚みを加えている。**3**は口径9.3cm、器高15.7cm。底部、胴部、頸部、口縁部の境が明瞭で、頸部と口縁部の長さがほぼ等しいという特徴を持つ。胴部上方に不自然な孔があり、焼成後の穿孔か。**4**は丸みのある胴部から頸部が直立しそのまま短い口縁部となる。胴部上半には２条の沈線の間に貝殻で羽状文を入れ、頸部には２個一対の小孔がある。**5**は球形の胴部に小さく外湾する短い口縁部が付く。口径11.1cm、器高12.3cm。**6**～**9**は鉢。**6**は口径19.6cm、屈曲して口縁部は立ち、端部で小さく

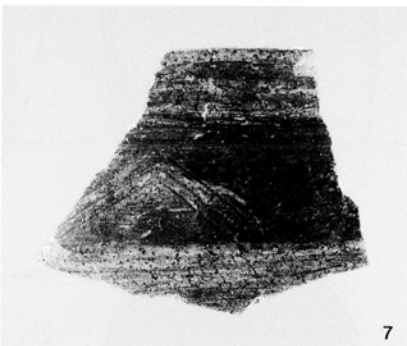
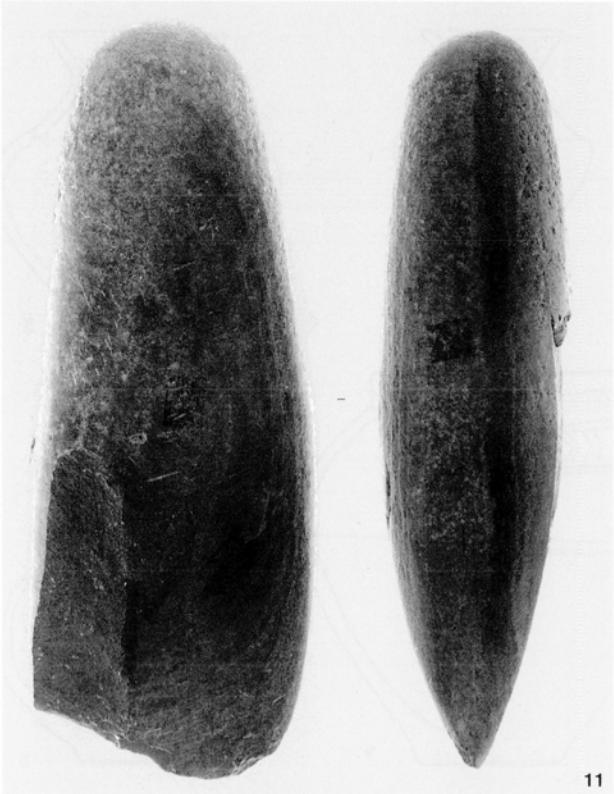
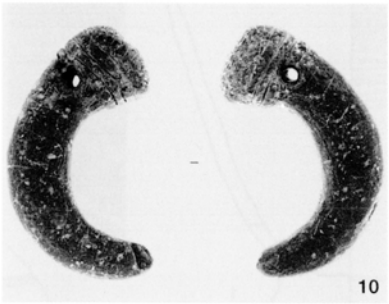


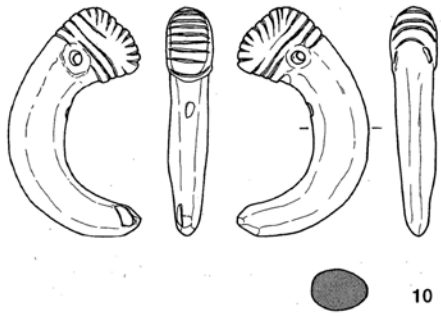
Fig.131　SG02の遺物

外湾。体部外面は摩耗。**7**は口径20.4㎝。体部が強く屈曲反転し、直線的に内傾する上半部に外湾する口縁部が付く。屈曲部には２条の沈線

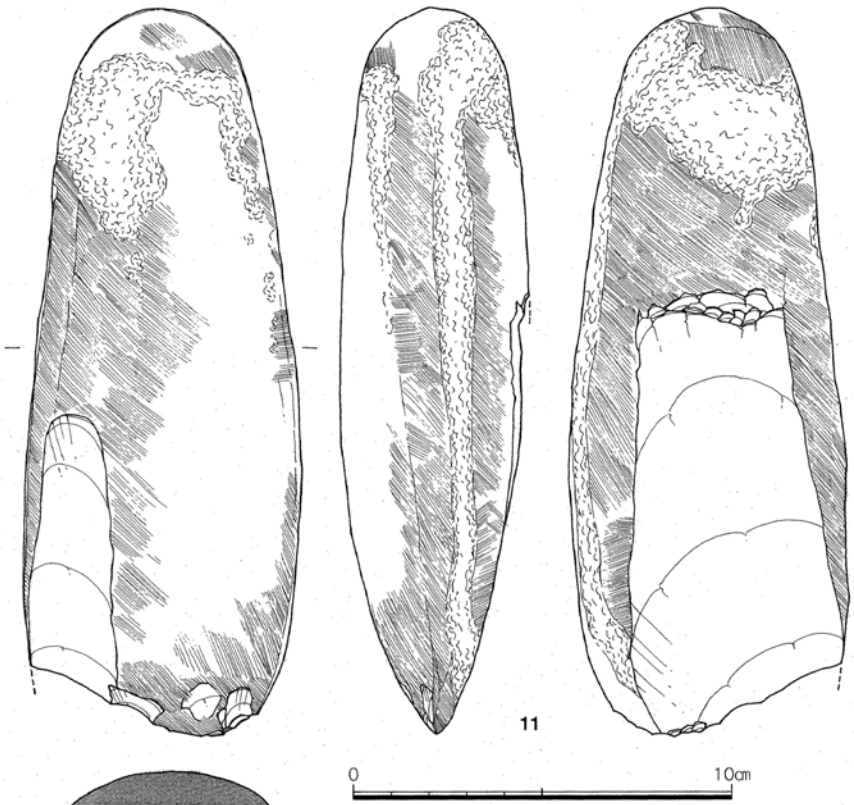


▲Fig.132　SG02の遺物





▼Fig.133　SG02の遺物（縮尺１/２）



を巡らせ、その上方には３本の沈線で山形文を逆時計回りで施文する。**8**の口径は21.0㎝。口縁部は長く湾曲し、体部も開きが大きいことから浅い器形となっている。**9**はハ字形に大きく開口し、口縁部を小さく屈曲させる。口径22.4㎝、器高12.1㎝。**10**は滑石の勾玉。頭部を大きく作り、沈線と刻み目を加えている。**11**は刃部を欠いているが現在長は19.30㎝の長大な磨製石斧。身断面は丸く厚みがある。全体に細かな研磨痕が残る。

２．検出面の遺物

第Ⅲ面への掘り下げ、遺構検出作業で取り上げた遺物について記す。各遺物の大きさや調整、胎土などのデーターについては別冊の観察表にまとめているので、ここでは主な遺物について記す。

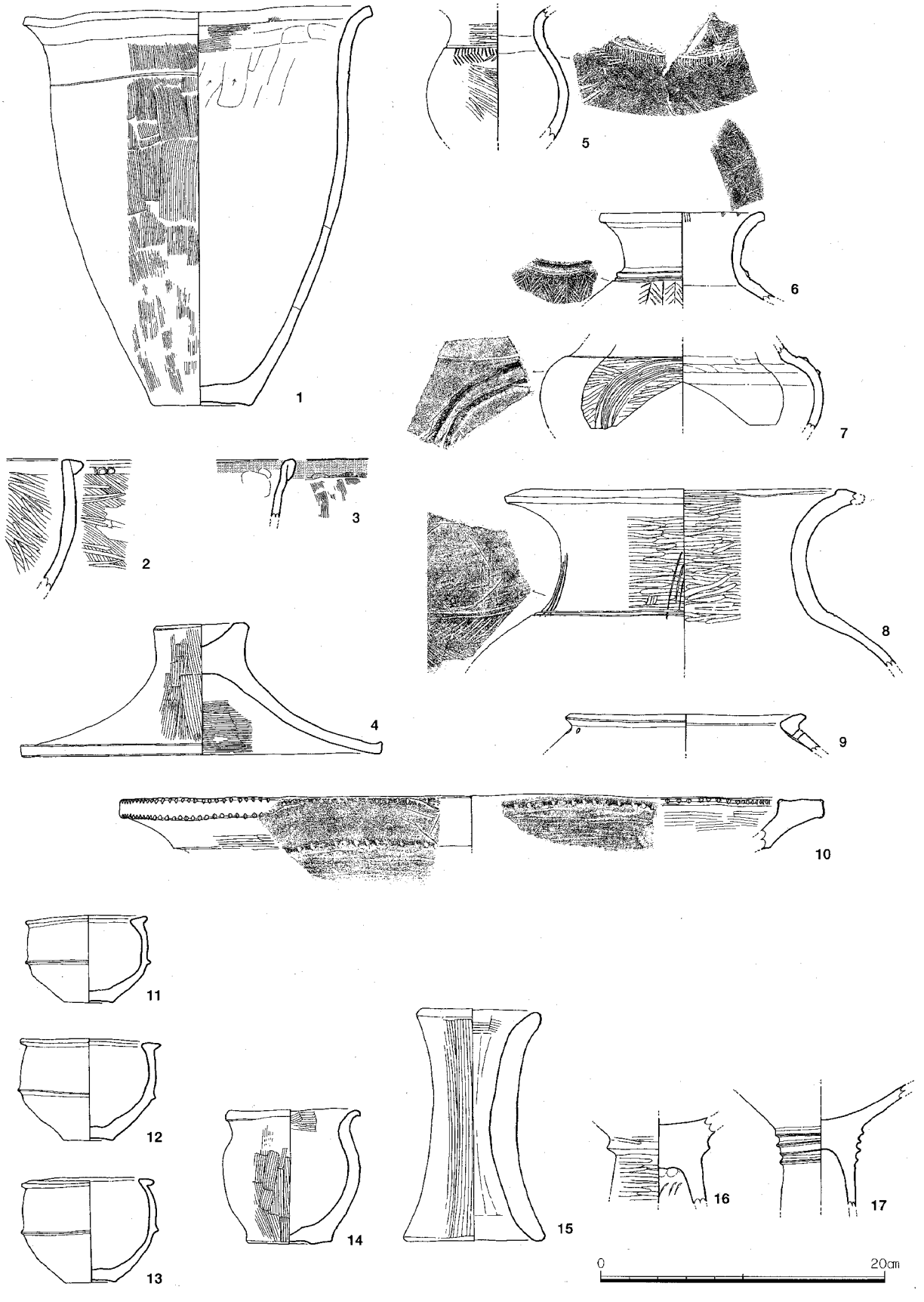


Fig.134　第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺1/4）

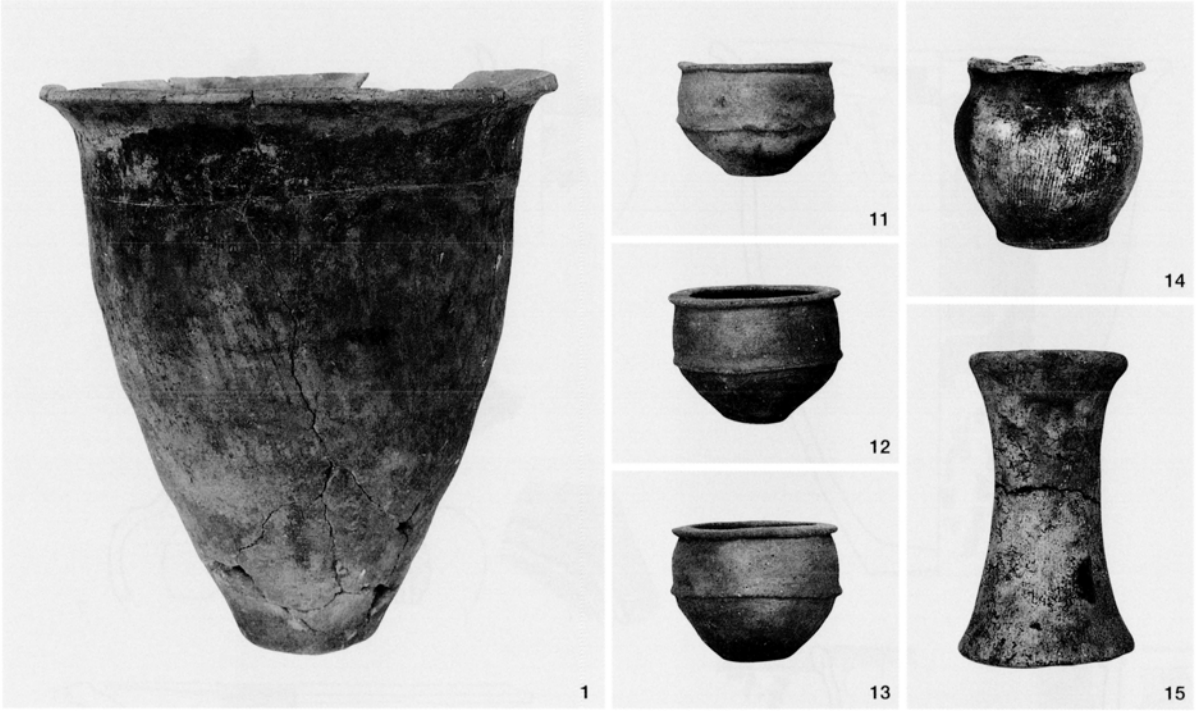


Fig.135　第Ⅲ面遺構検出面の遺物

土　器　**3**は精良土に近い胎土で、赤みを帯びた灰褐色を呈する。口縁部は折り返して帯状となる。外縁は細かなハケ目調整。内面は指頭圧痕。**6**は口径11.6㎝の壺。口縁部内端に鋸歯文、胴部上半に縦の羽状文で飾っている。**7**は壺の胴上半部。粘土紐を貼り付けて２条の下向きの弧文を表している。精良土で焼成は良く内外面とも灰黒色となっている。胴部最大径は20.0㎝。**8**は壺。頸部に縦の３本線の文様を入れた後に胴部との境に２条の沈線を巡らしている。**11**～**13**は一緒に出土した。大きさは異なるが同じような器形をしている。

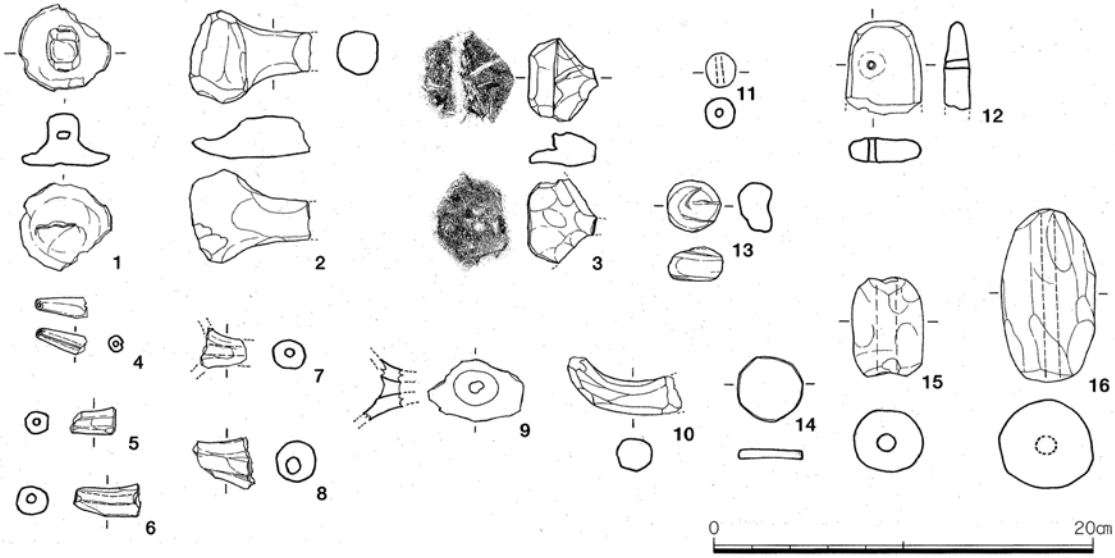


Fig.136　第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺１/４）

16と**17**は高坏脚柱部。坏部と脚柱部との境に断面三角形突帯を貼り付けるが、**16**は１条、**17**は３条。**16**の内面には爪跡が残る。

土製品　**1**～**16**は円盤、匙、注口、把手、管状土錘などの土製品。**1**は中央に方柱状の摘みがあり、横に孔を貫通させている。**2**、**3**は柄があることから匙を想定したが、身が浅く別の用途か。**10**は把手としたが、断面径約１㎝、長さ約３㎝と細く機能的ではない。

投　弾　雀居遺跡では竪穴住居跡や土壙などの遺構に伴って出土することが少なく、ほとんどが遺構検出面や包含層からの出土である。投弾の使用目的を示しているのだろう。すべて同じような楕円形をしているが、大きさや径に対する長さ、両端の形状などを細かく観察するとすべてが異なっている

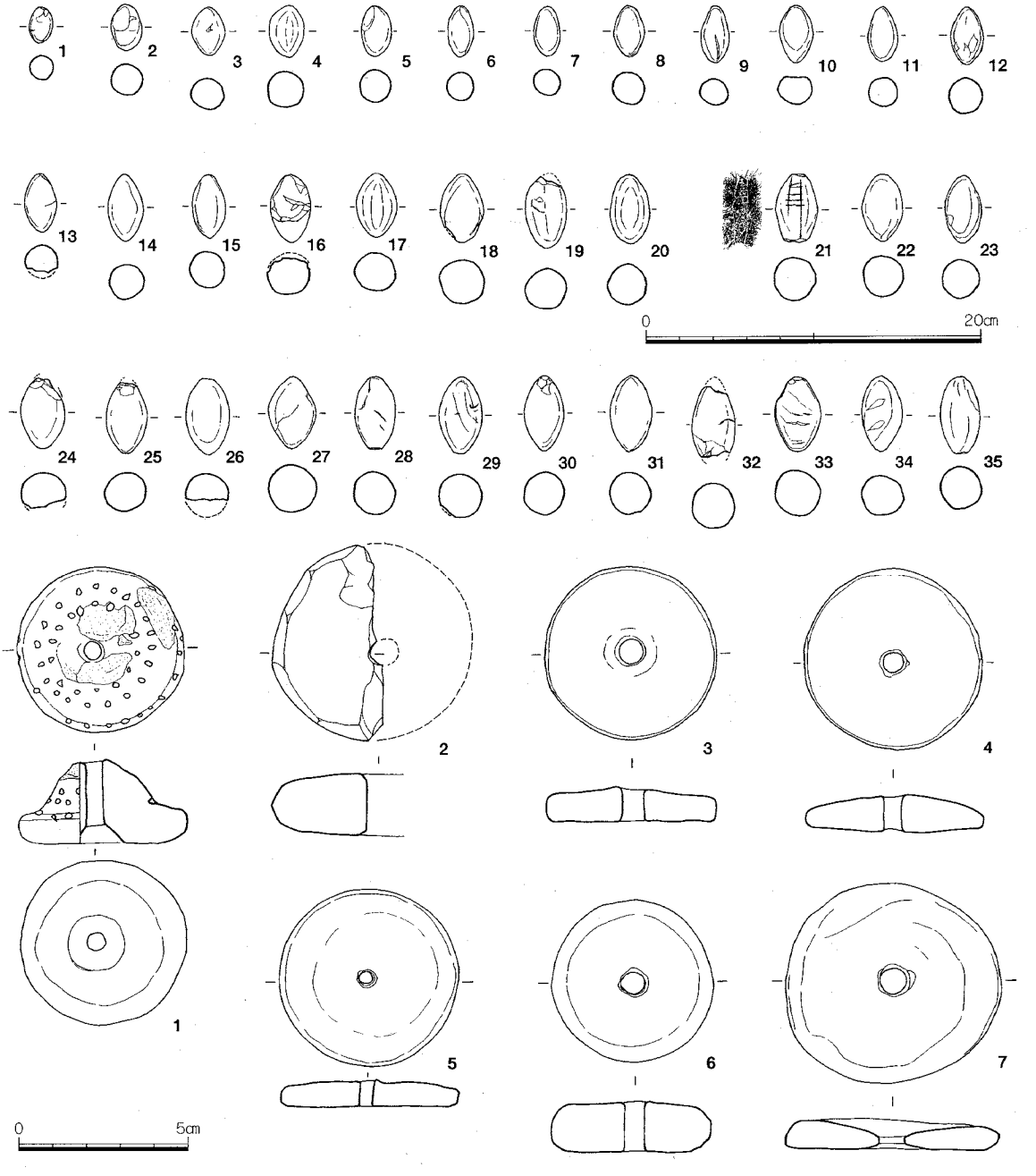


Fig.137　第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺１/４・１/２）

ことが分かる。**21**には投弾には珍しい線刻があるが、意味不明。

紡錘車　**1**は直径4.9cm。中央部が突出し、径１mm程の刺突文を３重に巡らせている。**7**は正円ではない。また紡茎を挿入する中央の孔付近は窪んでおり、垂飾品の可能性もあるか。

石製品　**1**～**24**は黒曜石の打製石鏃。すべて無茎式だが、大きさ、形状など多様な作り方である。**1**～**10**は基部が直線的な石鏃で、二等辺三角形の背の高低で２種に分けることができる。**11**、**12**は基部が外側に膨らみ丸みがあるもの。**12**は右図面だけでなく側縁も研磨しているのが注意される。**13**～**23**は凹基式の石鏃。大きさ、脚の長さや外縁の形状は異なるが、基部と背の高さとの割合はほぼ共通している。**24**は柳葉状で厚みもあり鏃には適さない。**25**は石匙。**26**～**30**は磨製石鏃。**27**は無茎式で、きわめて薄手の作り。**28**、**29**は柳葉状に細長く加工している。鎬は茎まで通るが鋭さを欠く。**29**は両端がないが横断面菱形で直線的な鎬が研ぎ出されている。**31**～**35**は磨製石剣。**32**の切っ先は風化して剥離。鎬は切っ先部だけで下方は扁平に研磨している。**33**は身の小破片だが断面菱形であることから石剣とした。**34**は茎のように見えるが石剣が剥離したもの。**35**は小さく切り込んだ関があり厚みのある茎を作っている。大型の鏃とすべきか。

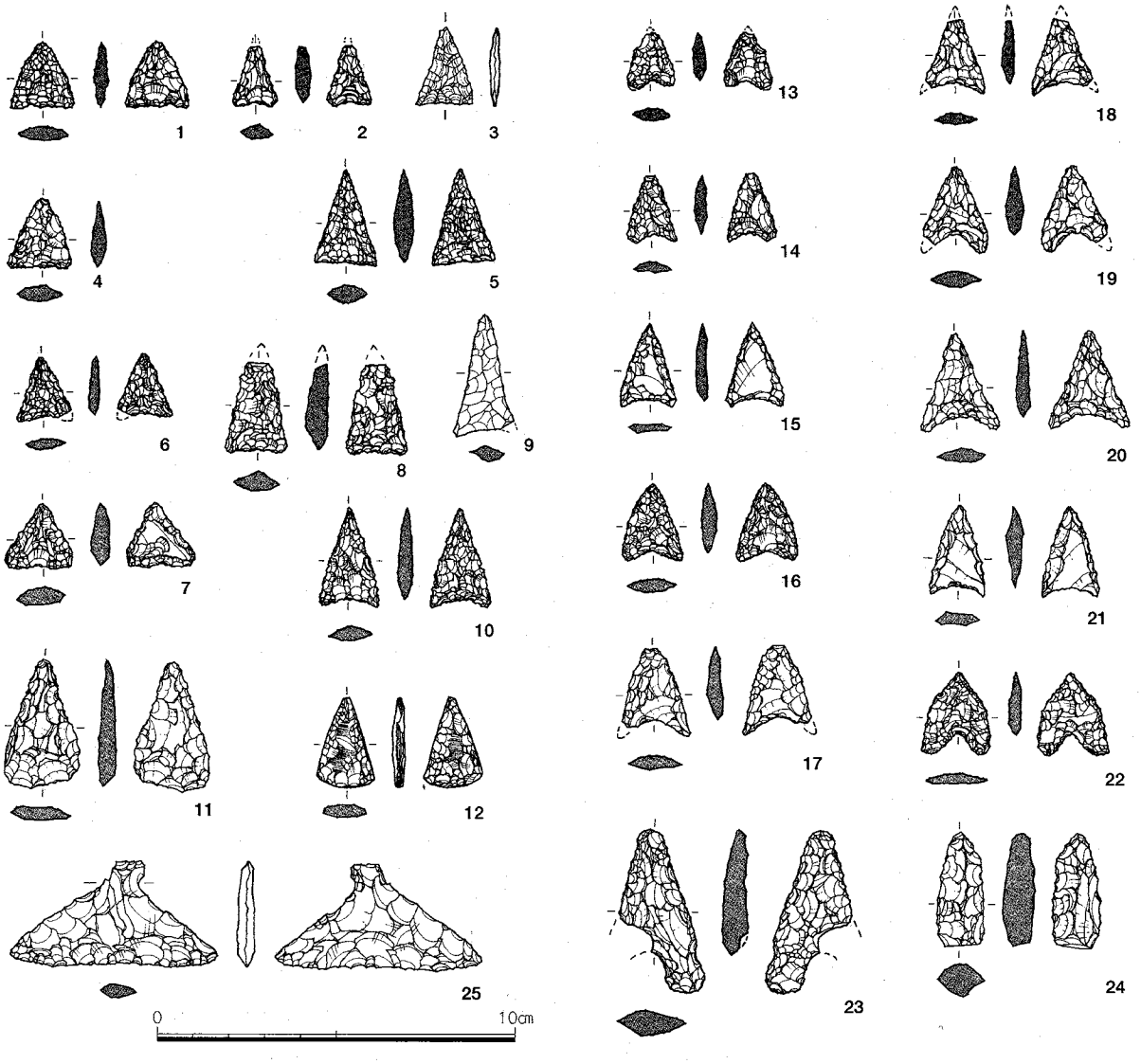


Fig.138　第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺１/２）

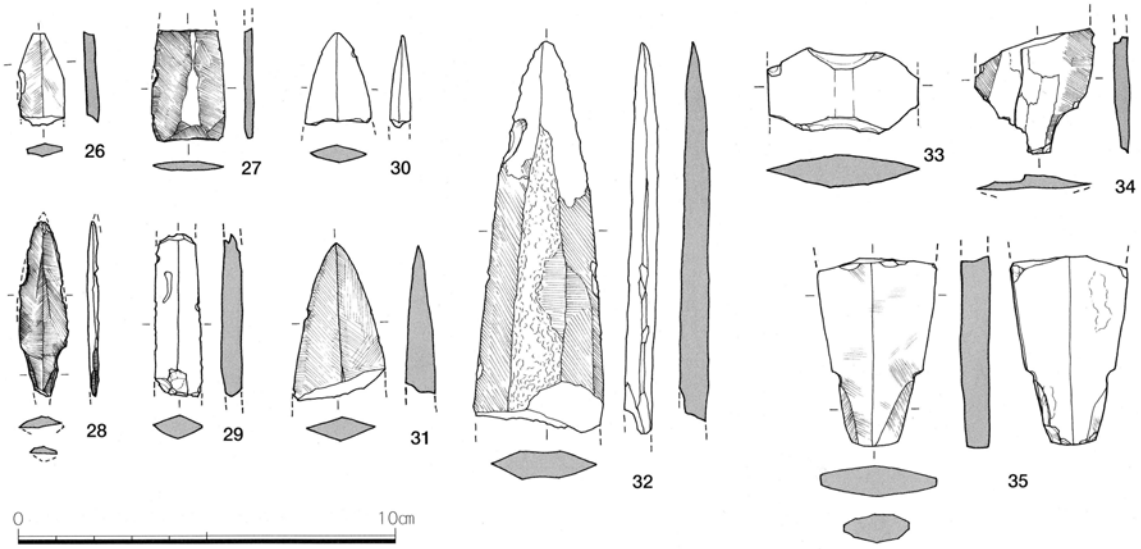


Fig.139　第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺 1 / 2）

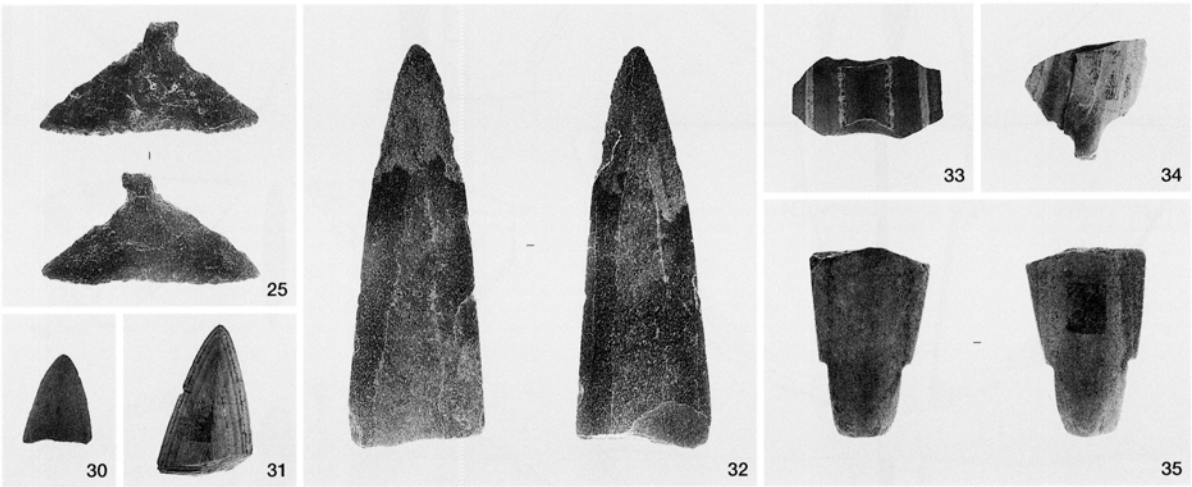


Fig.140　第Ⅲ面遺構検出面の遺物

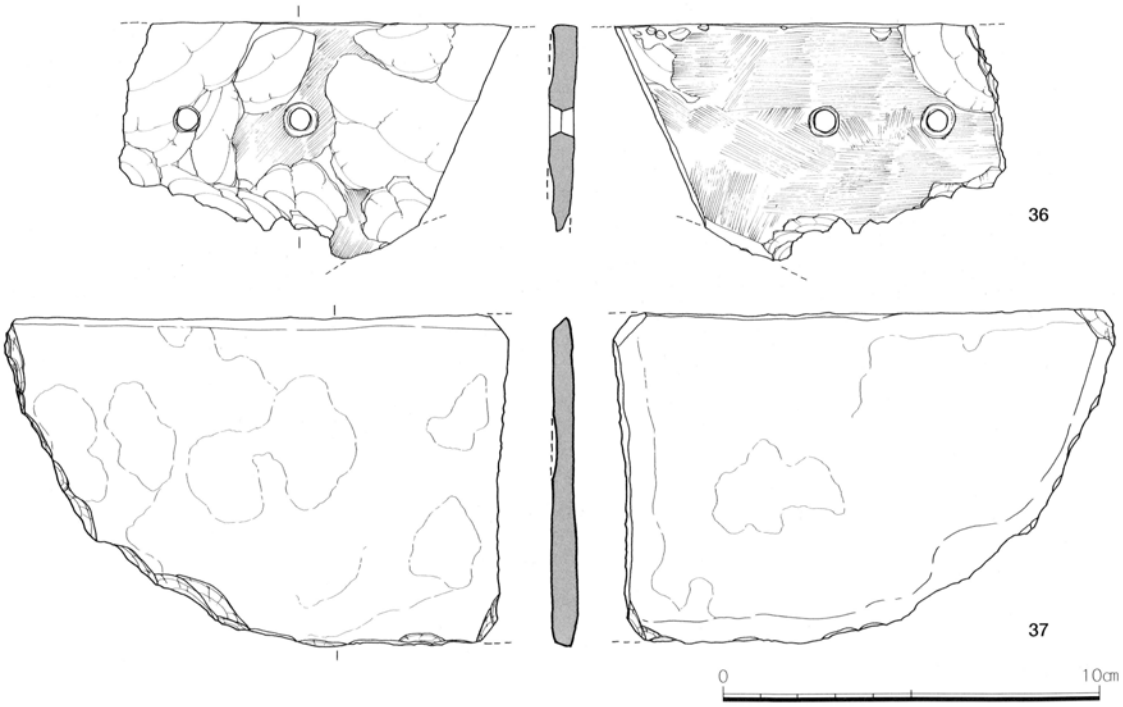


Fig.141　第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺 1 / 2）

36～47は石包丁（石製穂摘具）。47以外は半月形外湾刃。36、37はやや大型品。36は硬質の石材を用いている。図左面は剥離が激しいが、図右面は細かな研磨を施している。37は刃部の研ぎ出しがなく未製品か。38、39は厚みがあり、39は小型の石包丁。39、40は残存部と小孔の位置から原形を復元すると半円に近い形状となる。40は特に薄い作りで、刃部は両面からの研磨、やや剥離している。小孔はすべて両面からの穿孔。47は背が直線ではなく丸みがある。

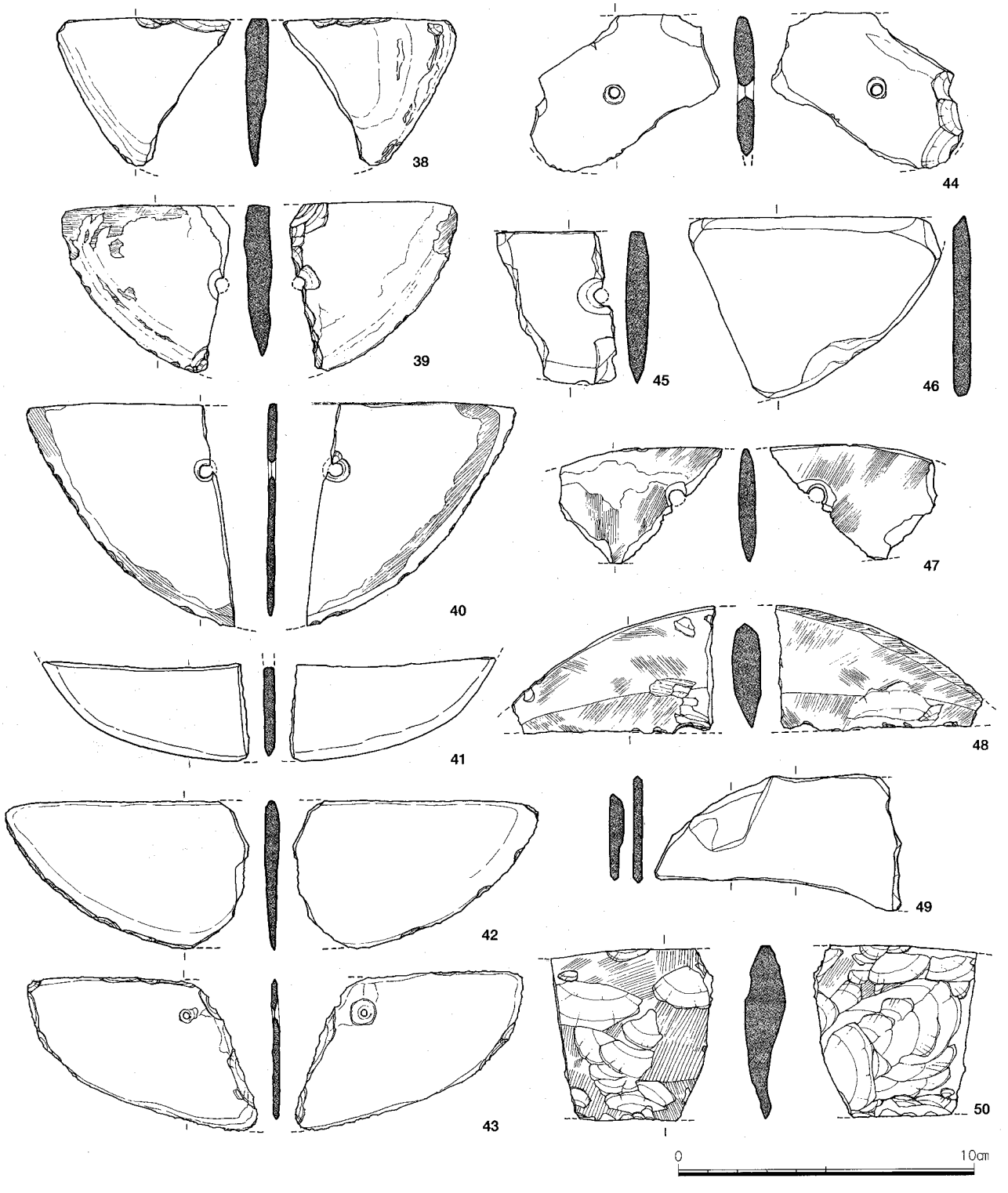


Fig.142　第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺1/2）

48～**50**は磨製石鎌。**48**は厚みのある作りで、先端部のために刃部は直線となっているが背が弧状となる内湾は刃となる。刃部は幅広く研ぎ出し、背側も面取り研磨している。**49**は形状から石鎌先端部破片としたが、刃部は明瞭でなく、また全体に剥離しているのが気になる。**50**は石鎌の中央部破片。図右面は原形面を留めていないが、図左面は細かな研磨痕が残っている。

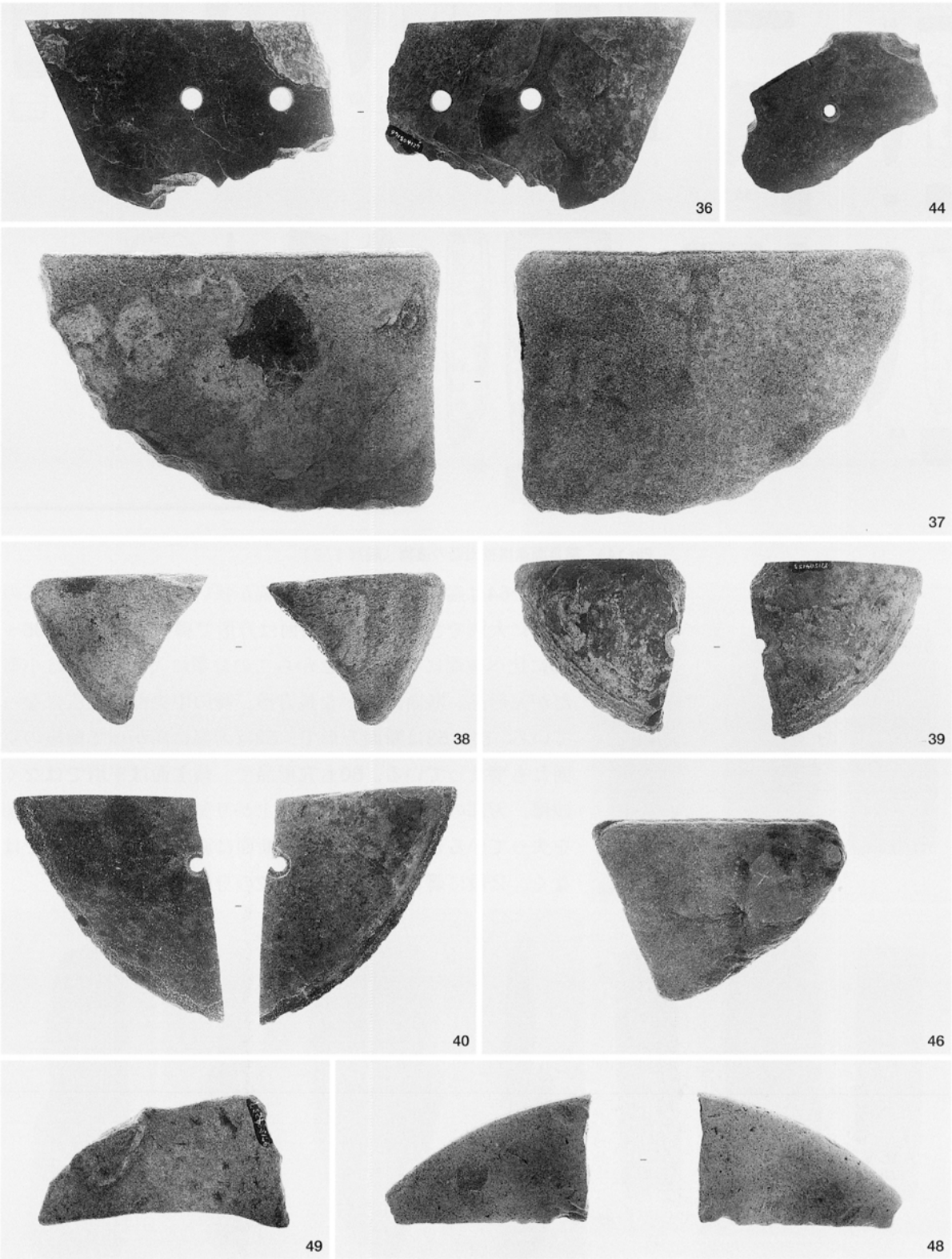


Fig.143　第Ⅲ面遺構検出面の遺物

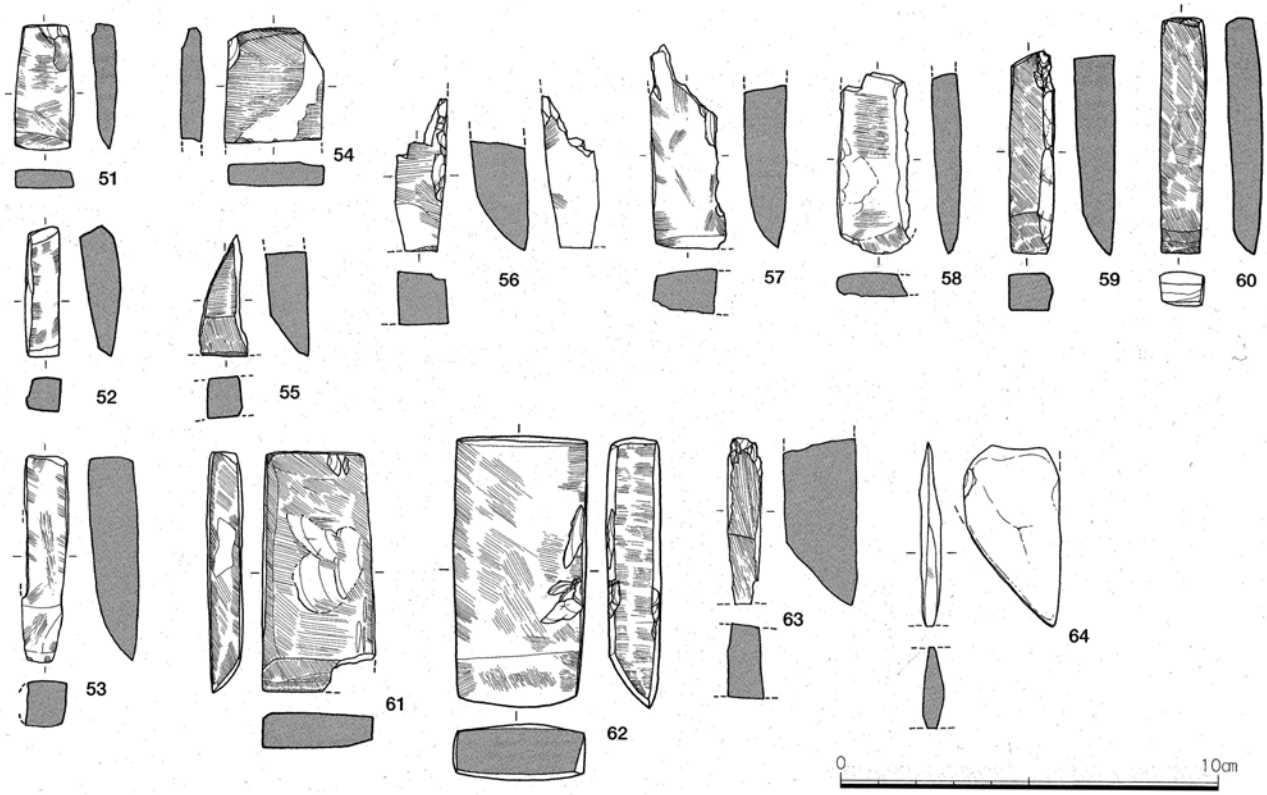
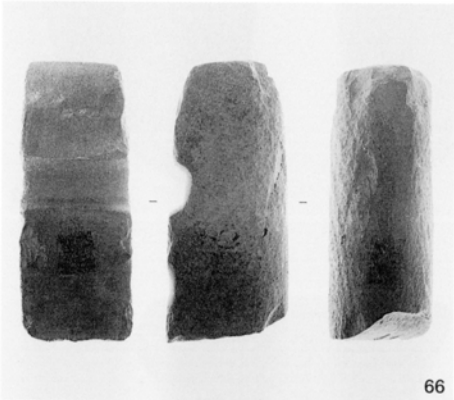
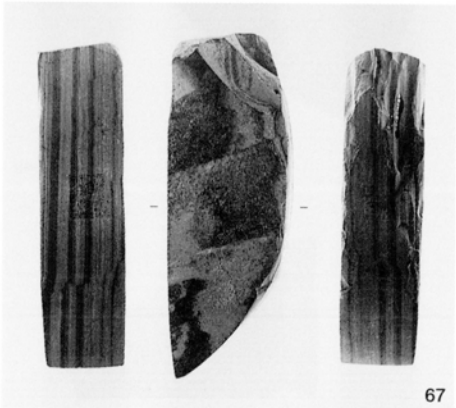


Fig.144　第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺１/２）



51～**64**は扁平片刃石斧。刃部幅が狭い鑿状のものと幅広のものに大別できる。鑿状の断面は方形で扁平ではないが**65**～**69**に比べ極端に小さいことからこの分類に入れた。**51**は小型だが完形品。断面は扁平な長方形。身の中央部が幅広になっている。**52**、**53**は断面方形で、**52**は刃部に向かって前後の主面とも窄まっている。**60**も完形品で、後主面は平坦ではなく頭部、刃部の両端で微かに跳ね上がり気味。**61**は刃部の一部を失っているがほぼ完形。刃部断面は直線で研ぎ出すのではなく、２段に研ぎ分けている。**62**の身は厚みがある。



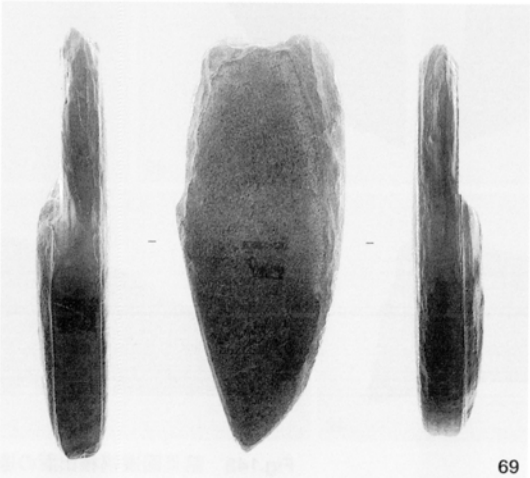


Fig.145　第Ⅲ面遺構検出面の遺物

65～**69**は柱状片刃石斧。**65**、**66**は後主面に溝状の抉りがあり柱状抉入片刃石斧。**65**は灰色の頁岩で頭部と刃部が折れている。身の断面は方形で前主面がわずかに丸みがある。左右側面は特に丁寧な研磨を加えていない。後主面の抉りは浅い皿状となる。**66**の抉入は逆台形にシャープに彫り込んでおり、両側面とも敲打痕を残している。後主面はほぼ平坦。**67**の断面は背の高い長方形で、前後主面の研磨は長軸に対し斜行している。**68**は身の破片。断面は前主面側が面取りされている。**69**は両面から刃部が研ぎ出され、また断面が方形でもないので厳密には柱状片刃石斧の分類に該当しないかも知れない。

70～**90**の21点は磨製石斧。主面、頭部、断面の形状で大分類した。

70～**76**は長台形の主面に丸みのある頭部が付き、断面は厚みのある楕円形である。**70**は細身の石斧で現在長13.7cm。横断面は厚みがあり円形に近い。**71**は現在長14.0cm。側縁は直線ではなくわずかながら膨らみがある。全体に敲打痕が残る。図裏面は大きく剥離している。横断面は楕円形でやや厚みがない。**72**の頭部は丸く尖り気味。全体に細かな敲打を加え、身の中央より刃部にかけて研磨。現在長13.0cm。横断面は6.8cm×4.6cmと厚みがある。**73**は身の上部破片。全体に敲打の後に研磨されているが十分でない。**74**は刃部だけの小破片。全体に細かな研磨が施されている。**75**は頭部だけ

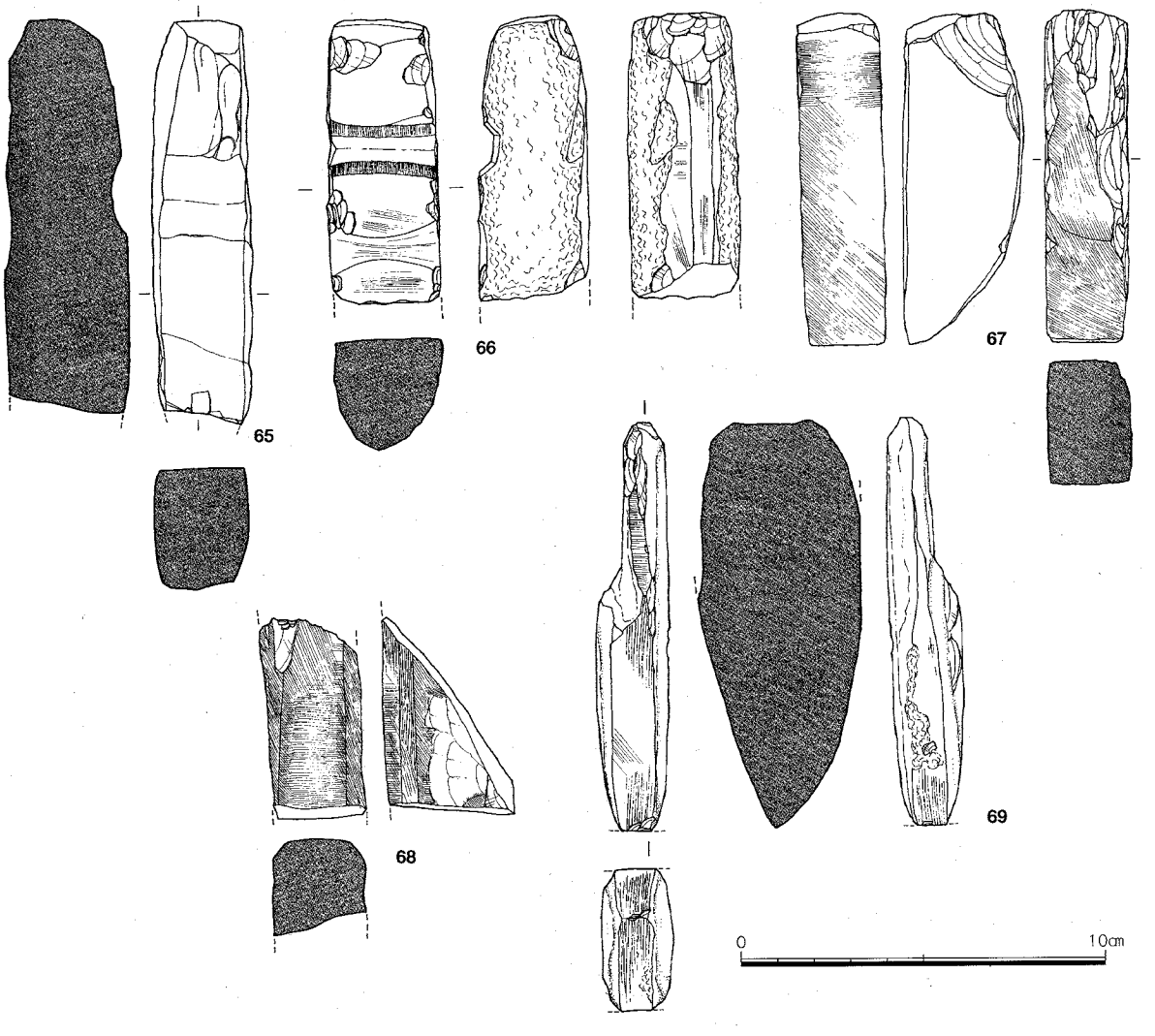


Fig.146　第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺1/2）

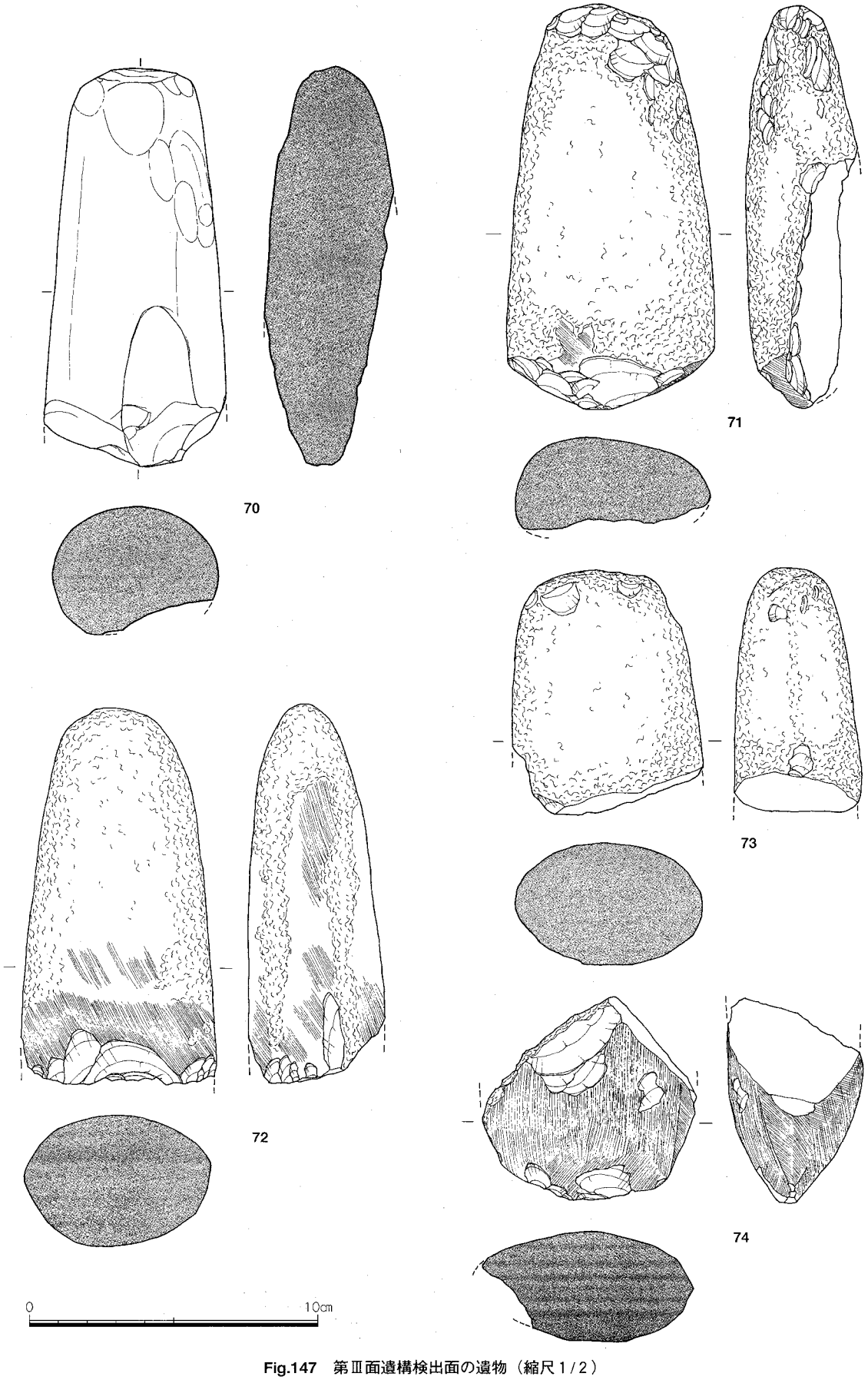
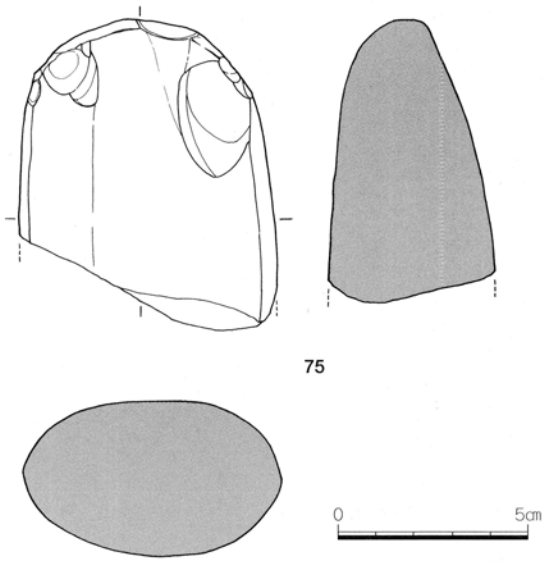


Fig.147 第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺1/2）



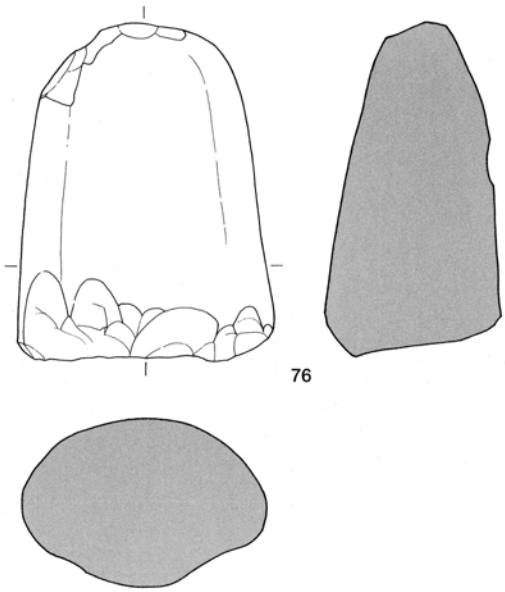
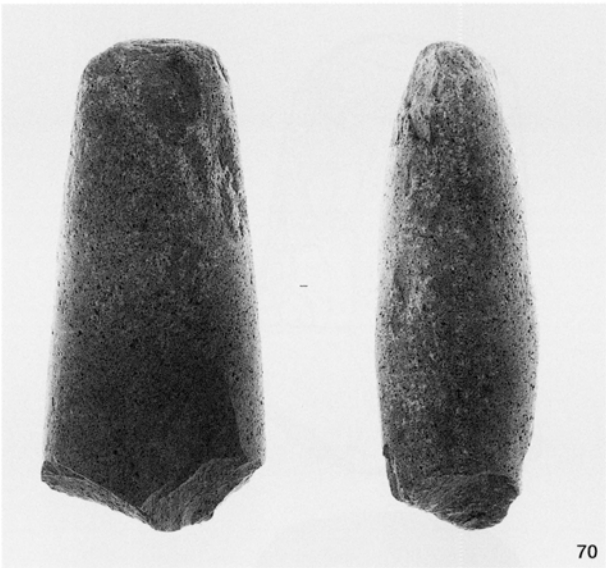
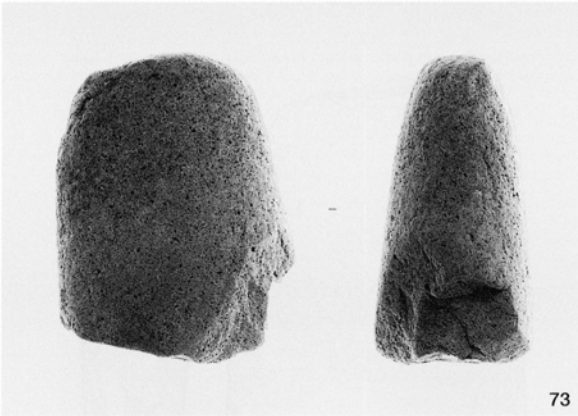


Fig.148　第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺 1 / 2 ）





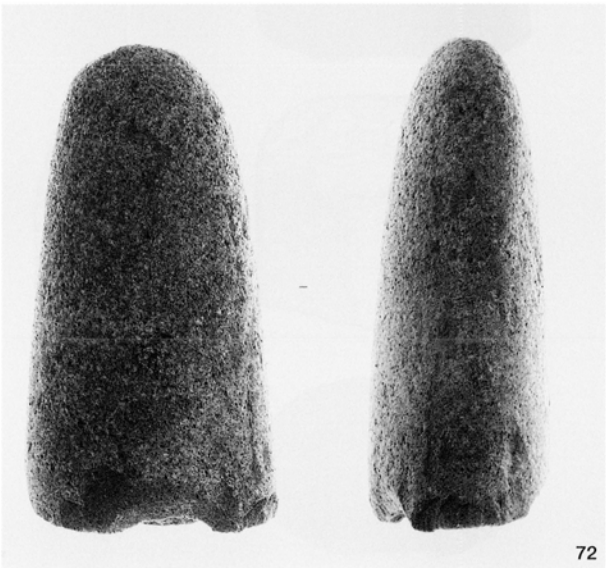


Fig.149　第Ⅲ面遺構検出面の遺物

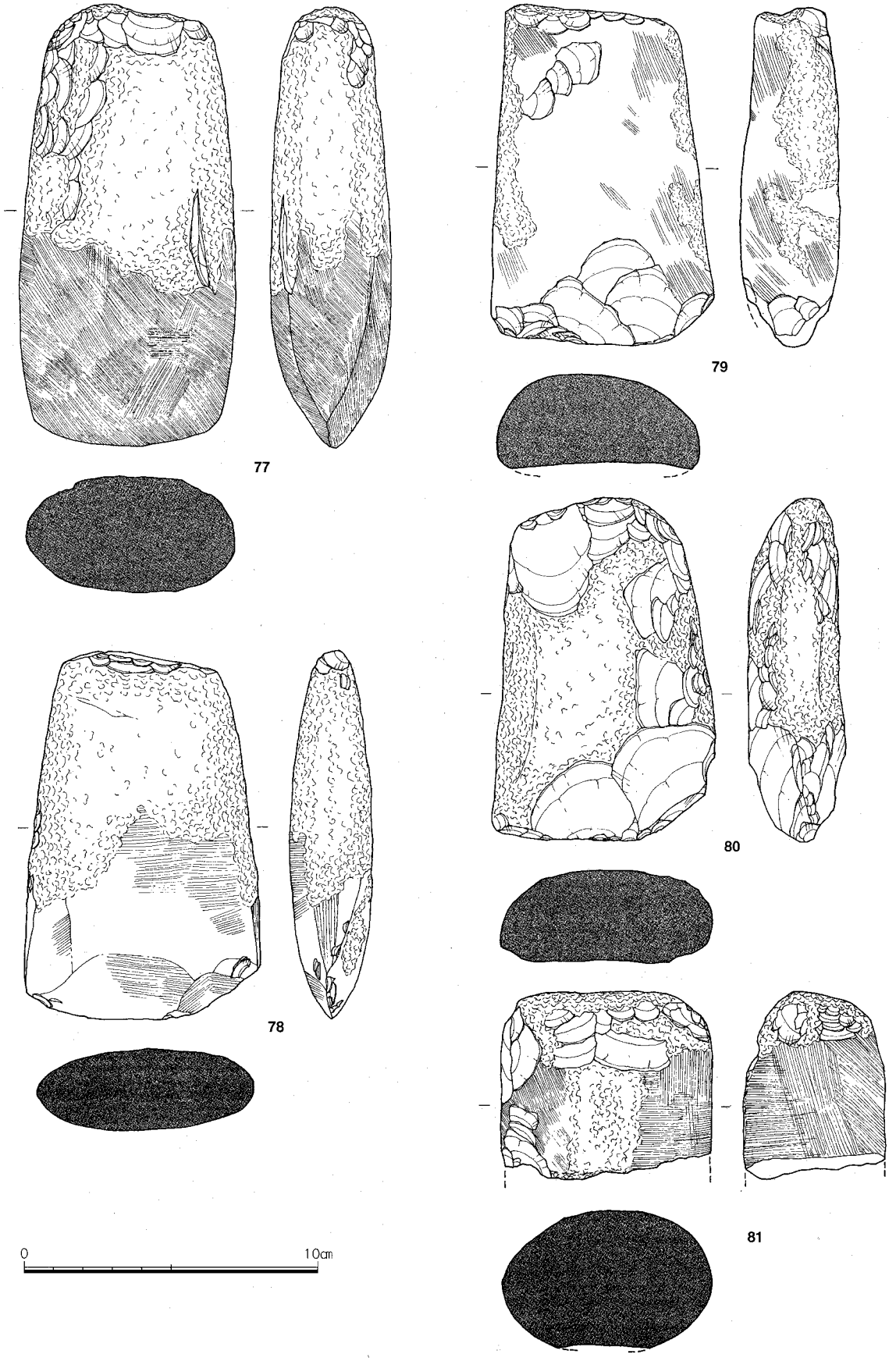


Fig.150 第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺1/2）

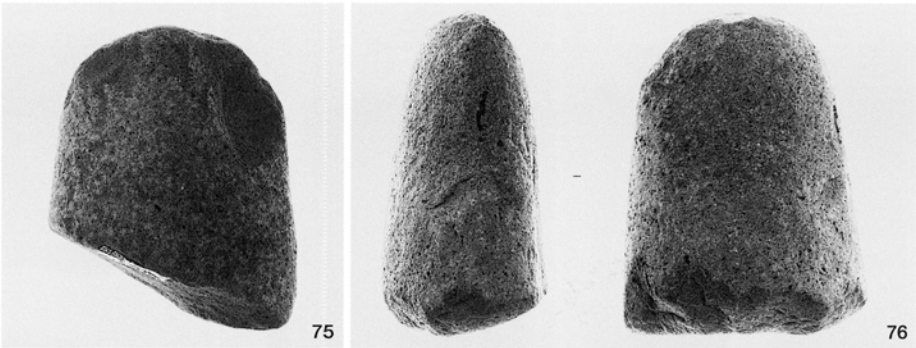


Fig.151　第Ⅲ面遺構検出面の遺物

の破片。側縁は並行ぎみで極端な長台形にはならないだろう。表面は風化が進んでいる。**76**は玄武岩質。丸みのある頭部はやや尖り気味。断面はより厚みがある。

77～**81**は頭部が直線的でより台形状となるもの。横断面の厚みが少なくなる。**77**は完形品。長さ15.0㎝、最大幅7.45㎝、厚さ4.1㎝。身の1/3が刃部として研磨され残りは敲打痕のまま残る。その境当たりが最大幅となっている。**78**は完形品。現在長12.5㎝、刃部は左右対称ではなく、側縁には鈍い稜がつく。横断面は8.0㎝×2.9㎝。厚みがなく、また刃部の細かな研磨で鋭利な切れ味だっただろう。**79**の図裏面は剥離している。前後の主面は凹凸あり。**80**は大きく剥離している箇所が多い。縦、横断面とも凹凸が目立つ。現在長11.7㎝。横断面は7.6㎝×3.3㎝。楕円形というよりも隅丸長方形に近い。**81**の頭部は水平に近いが横断面は7.15㎝×4.7㎝と厚い楕円形。同じ特徴を持つ石斧はこの１点だけである。

82、**83**の形状は長方形で、横断面は方形か長方形で、側縁ではなく側面を持つ。**82**の横断面は4.8㎝×4.2㎝で方形に近い。全体に敲打痕が残り研磨は部分的である。**83**は両面から研ぎ出した刃部だが、敲打痕が残る。使用による潰れとも思われるが、研磨が十分でなかったか。

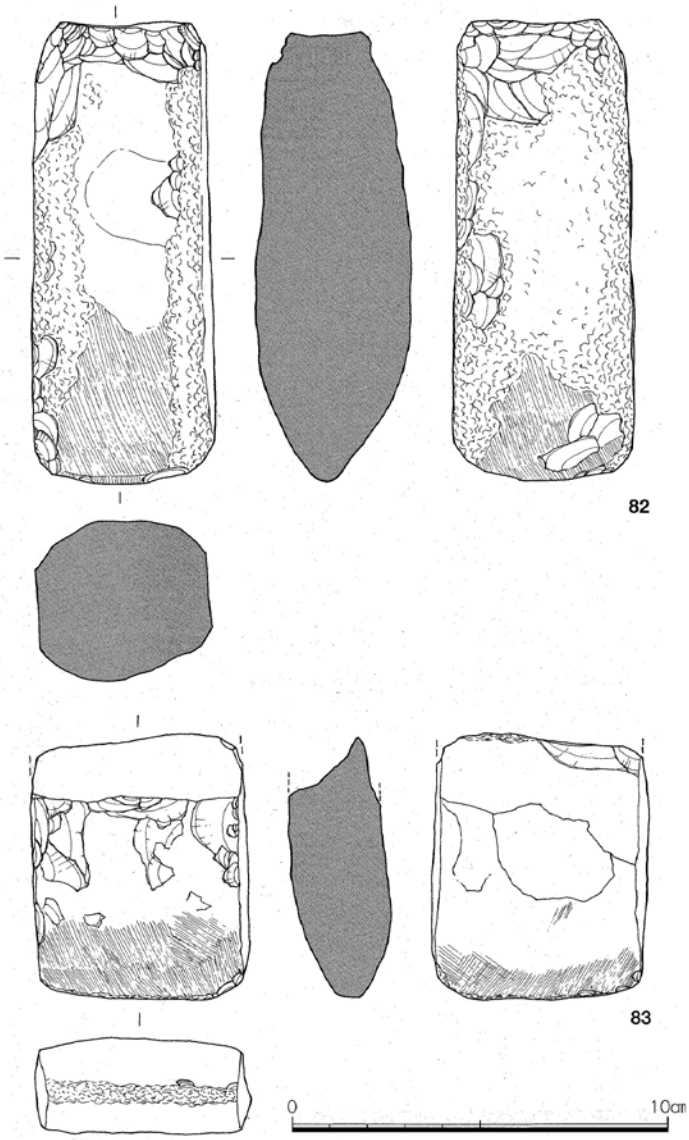
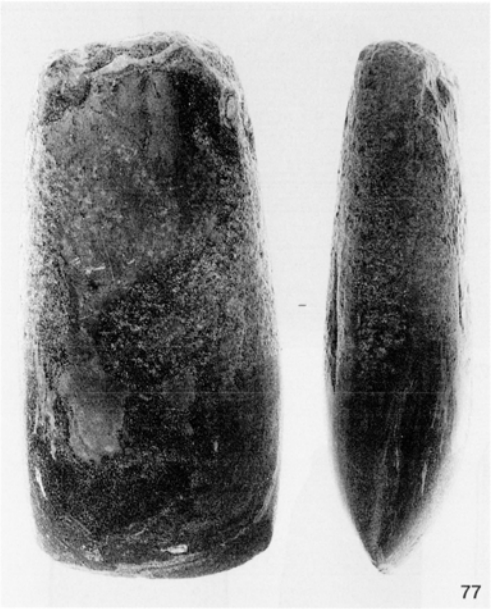
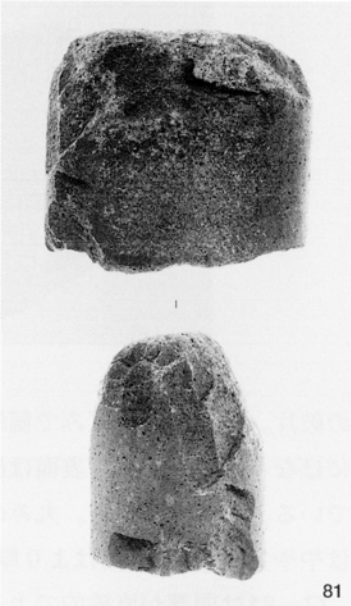
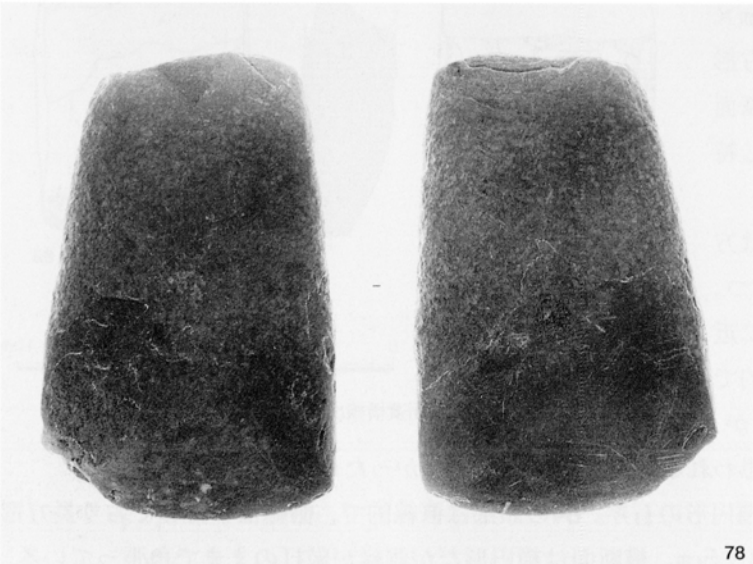


Fig.152　第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺１/２）

84～**90**は長方形で横断面が扁平な楕円形の石斧。**84**の頭部は直線的で、側縁は平行しており長方形の主面となるのだろう。**85**は現在長13.5㎝。横断面は楕円形だが側縁が敲打のままで角張っている。







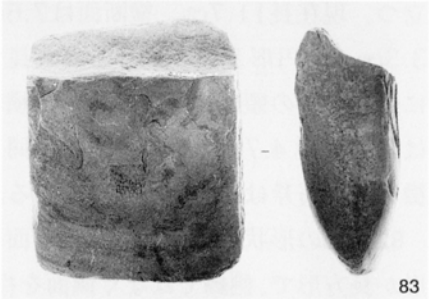


Fig.153　第Ⅲ面遺構検出面の遺物

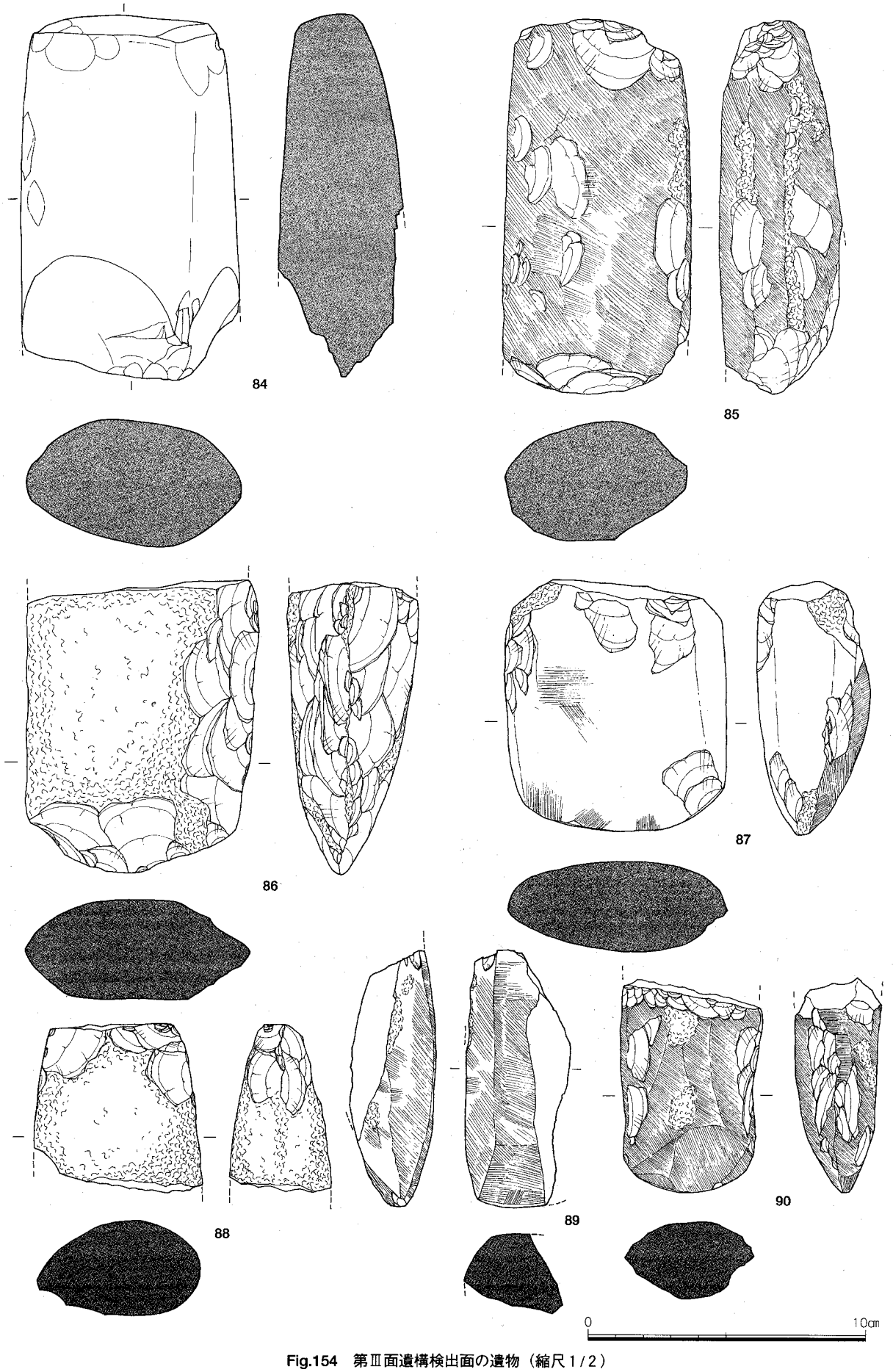


Fig.154 第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺1/2）

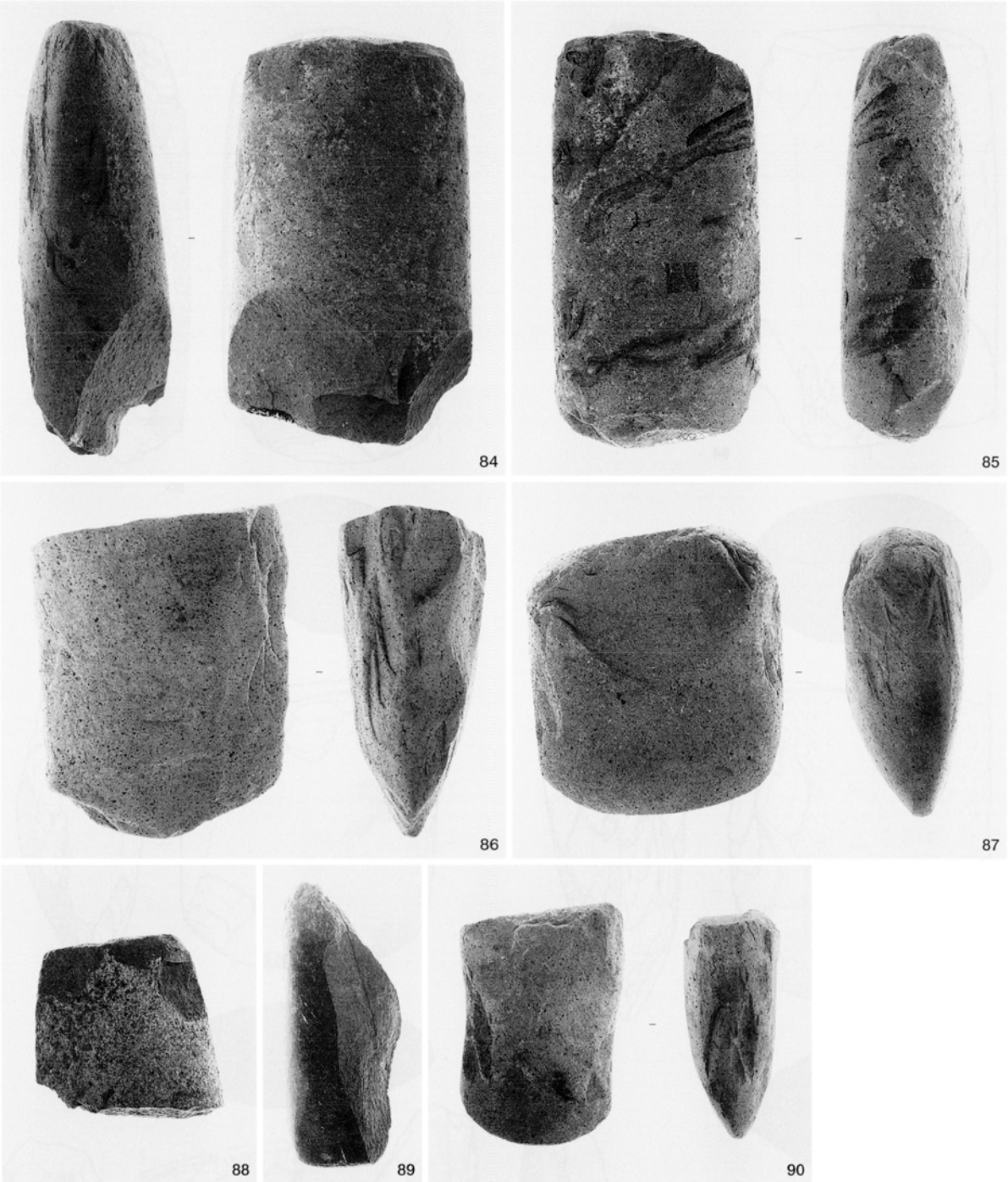


Fig.155 第Ⅲ面遺構検出面の遺物

側縁の研磨も丁寧で、主面と鈍い稜を作っている。刃部は使用によって潰れている。**86**は全体に風化が激しく摩耗している。剥離も多い。側縁は稜が付く。**87**は横断面は8.0cm×4.0cmの扁平な楕円形。身中程から折れているが、その面には研磨が加えられており、再加工品か。**88**の頭部が水平に作られているのが特徴的である。横断面は一方が厚くなっている。**89**は大きく縦に割れ、刃部と身の一部が残っている。**90**は中央より頭部を欠く。横断面はレンズ状で側縁に稜が付く。

91～**98**は砥石。**91**は粘板岩質の石材。図上端側が厚く、下端に向かって研ぎで薄くなっている。頭部の両側面に浅い沈線が彫り込まれている。紐を結び携帯したのか。**92**は幅0.8cm、厚さ0.6cm、長さ7.5cmの細い柱状をしている。下端はやや幅広くして基部のような加工をしている。４面に斜行する

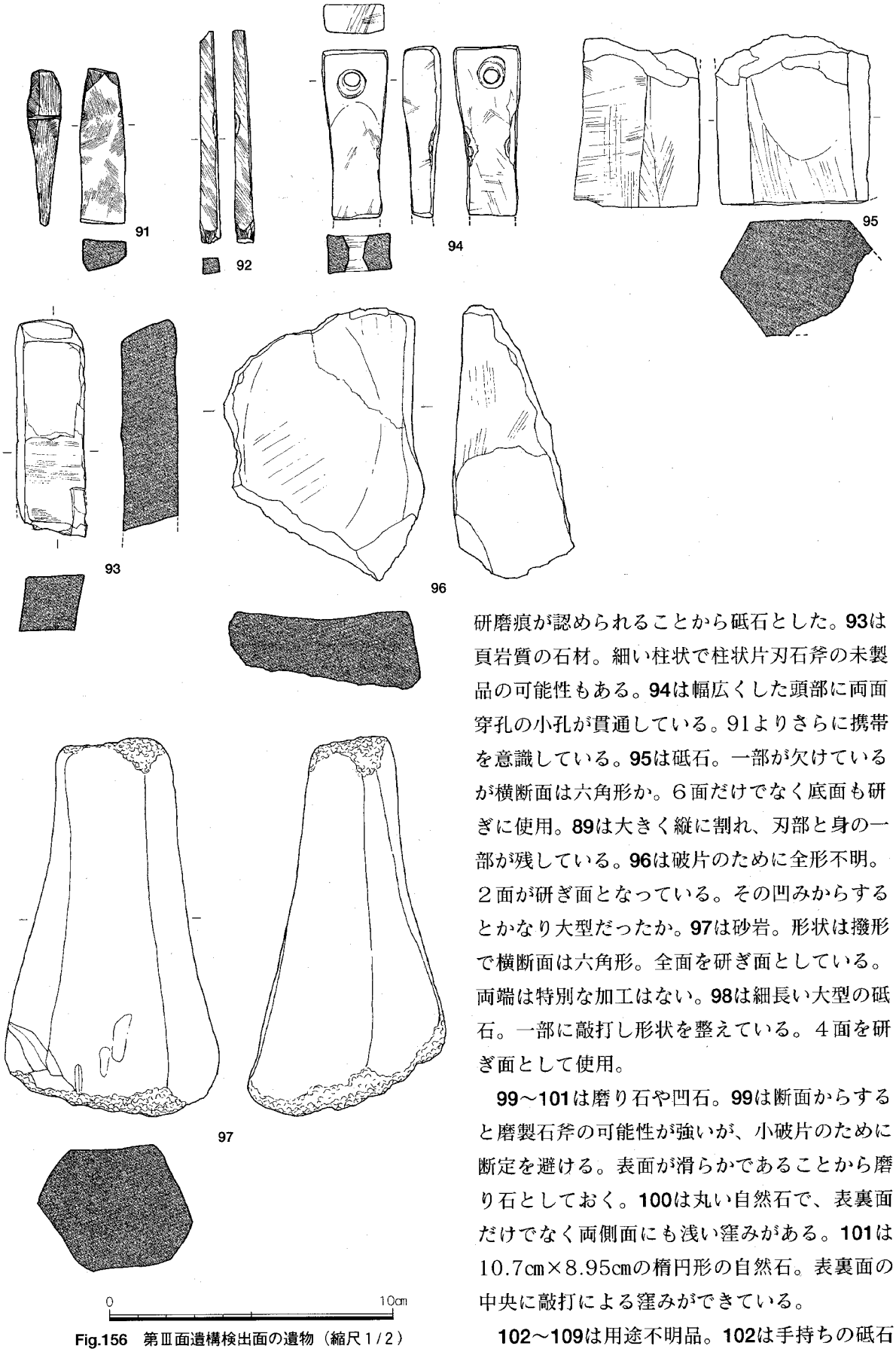


Fig.156 第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺1/2）

研磨痕が認められることから砥石とした。**93**は頁岩質の石材。細い柱状で柱状片刃石斧の未製品の可能性もある。**94**は幅広くした頭部に両面穿孔の小孔が貫通している。91よりさらに携帯を意識している。**95**は砥石。一部が欠けているが横断面は六角形か。６面だけでなく底面も研ぎに使用。**89**は大きく縦に割れ、刃部と身の一部が残している。**96**は破片のために全形不明。２面が研ぎ面となっている。その凹みからするとかなり大型だったか。**97**は砂岩。形状は撥形で横断面は六角形。全面を研ぎ面としている。両端は特別な加工はない。**98**は細長い大型の砥石。一部に敲打し形状を整えている。４面を研ぎ面として使用。

99～**101**は磨り石や凹石。**99**は断面からすると磨製石斧の可能性が強いが、小破片のために断定を避ける。表面が滑らかであることから磨り石としておく。**100**は丸い自然石で、表裏面だけでなく両側面にも浅い窪みがある。**101**は10.7cm×8.95cmの楕円形の自然石。表裏面の中央に敲打による窪みができている。

102～**109**は用途不明品。**102**は手持ちの砥石

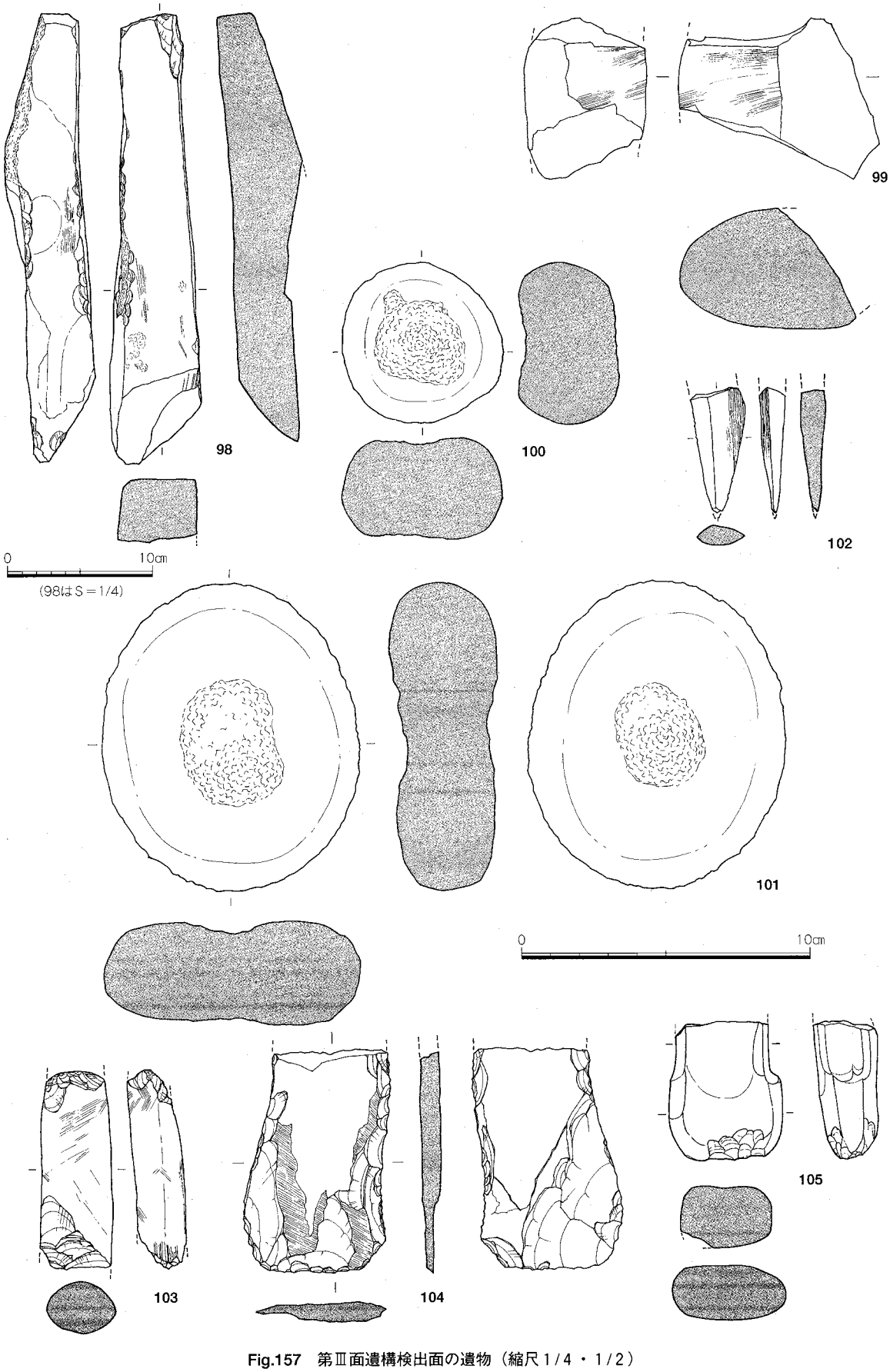


Fig.157 第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺1/4・1/2）

を推定したが、図下端が尖り、断面もいびつであることから砥石とするのは無理か。**103**は細い棒状の石材をよく磨いているが用途不明。**104**は周縁を剥離し、図表面の一部に研磨を加えている。使用法が特定できない。**105**の石材は砂岩質。側面に段があり図下端が基部のような形状をしている。砥石か。**106**は全形不明。薄い皿状で、両面が滑らかになっている。石皿か。**107**は厚さ約1㎝の石材

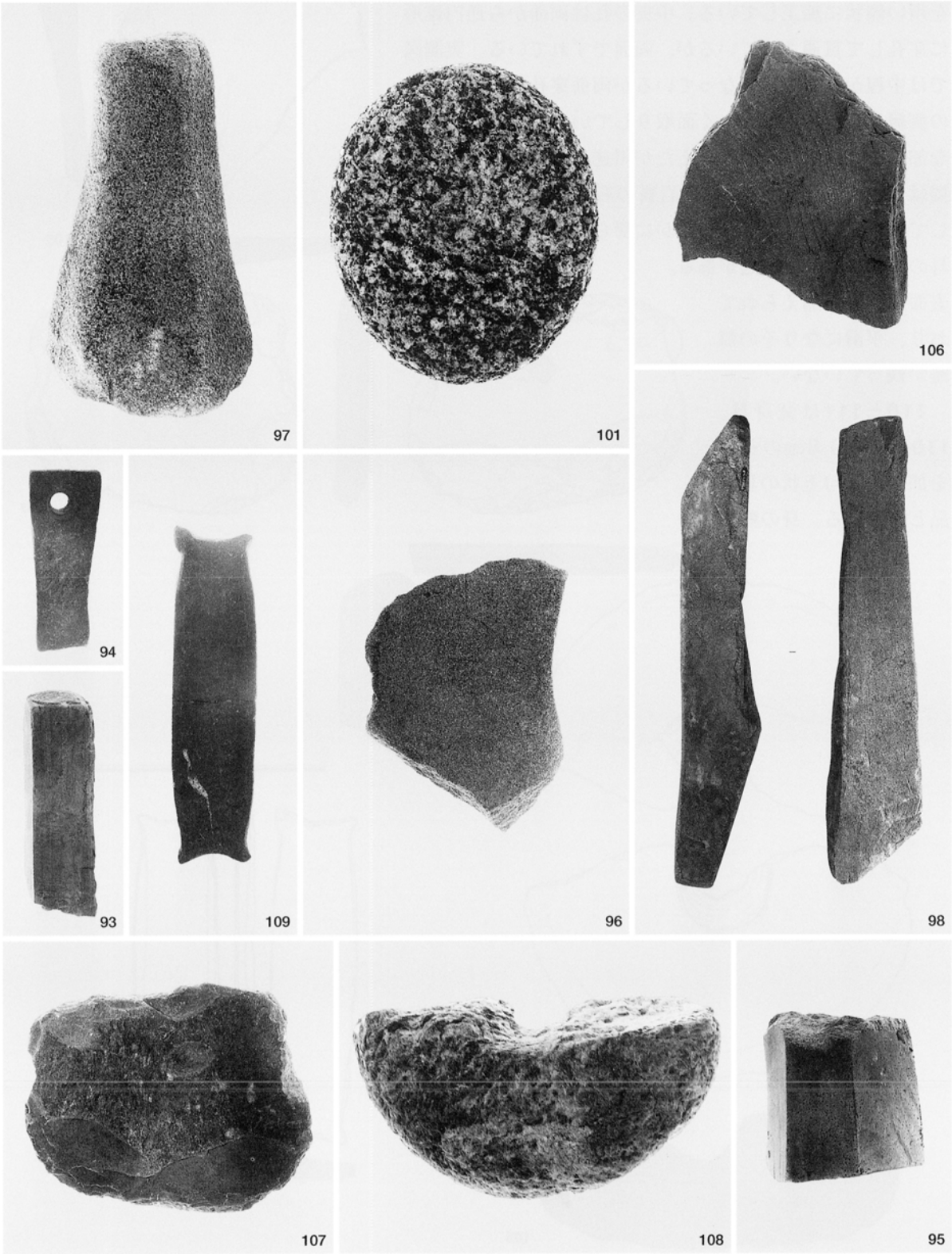


Fig.158 第Ⅲ面遺構検出面の遺物

に剥離し、周囲を両面から剥離している。中央には穿孔途中のような窪みがあるが、未製品か断定できない。両端に浅い抉りがあり、紐を結ぶなどの機能か。**108**は1/2が欠けているが、直径は12.9cmに復元できる。滑石質の石材を用い環状に加工している。中央の孔は両面から逆円錐形に穿孔して貫通させているが、両面でずれている。実測図では中程から直の壁になっているが両面穿孔である。環状の側縁は敲打を加えて丸く面取りしている。全体的に丁寧な加工ではない。石錘と考えたが用途を漁具に限定する必要はないだろう。**109**は粘板岩質の石材を薄く板状に加工している。身の中央部はわずかに膨らみを持たせ、両端は耳のような小さな突起がある。表面の研磨が加えられており、平滑になりその痕跡が残っていない。

110と**111**は装身具。**110**は厚さ0.8cmの石材を加工し、勾玉状の垂飾品としている。身の断面

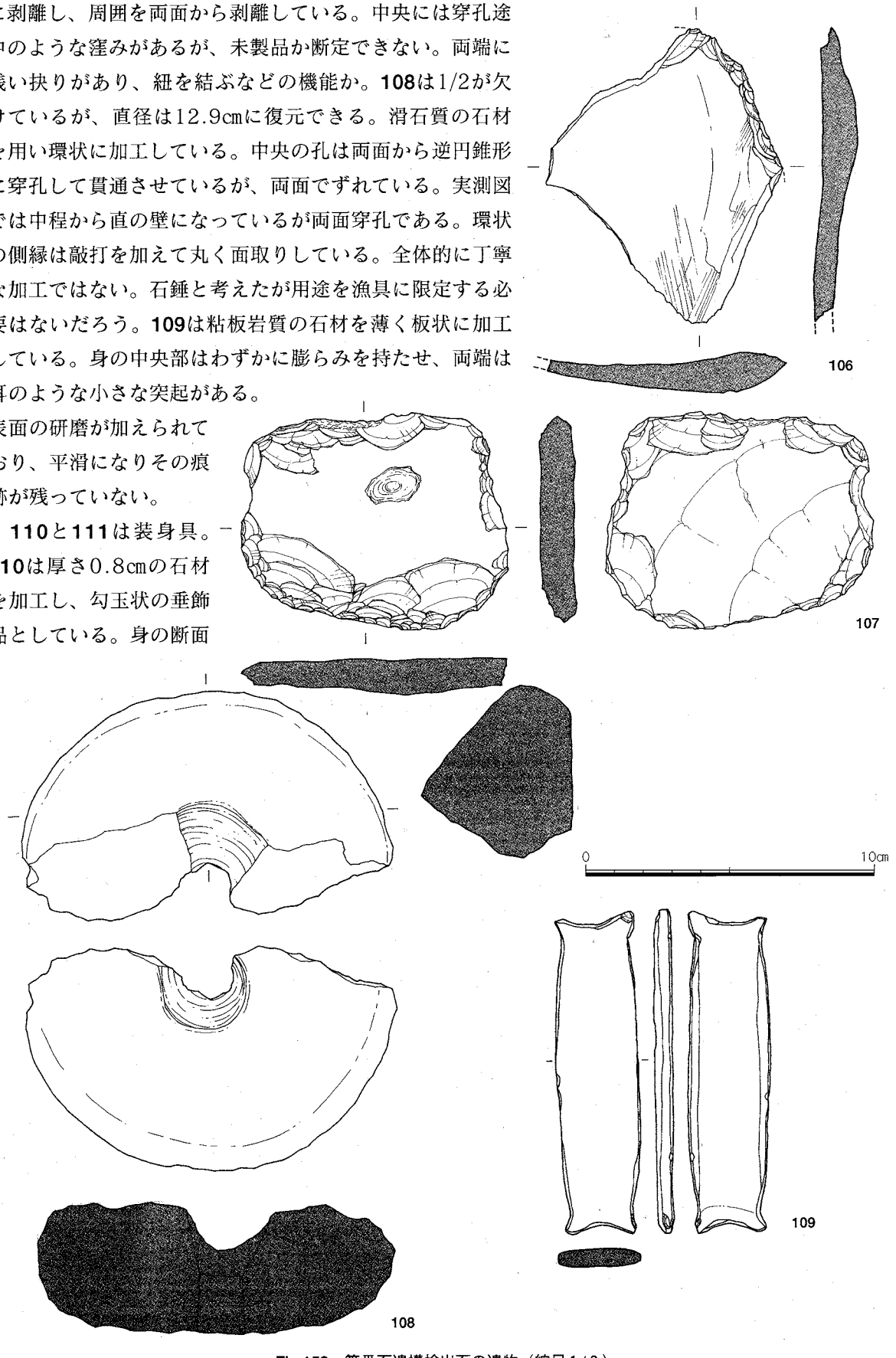


Fig.159 第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺1/2）

は板状で勾玉のように丸くない。頭部の小孔は両面穿孔で、貫通後に円筒状に調整していない。**111**は滑石製の装身具。側縁に小孔の一部が残っていることから垂飾品とした。もう片側には切り込みがあり５つの山形となっている。

112～**117**は紡錘車とその未製品。**112**はちょうど半分で割れている。直径5.7㎝。**113**は約1/2の破片。厚みは均一で周縁は滑らかな面取り。**114**は中央部をやや厚みを持たせている。全体を研磨しているが、中央に小孔はない。**115**は直径5.4㎝、厚さ0.65㎝。全面に丁寧な研磨が施されているが、図表面の中央付近に傷状の沈線がある。文様ではないだろう。**116**は一部欠損。やや厚みを持たせて仕上げている。身の厚さは均一ではなく周縁部をわずかに薄く作っている。その周縁部は研磨が十分でない。**117**は薄手の作りであるが通常の紡錘車とほぼ同じ大きさに仕上げている。全面に丁寧な研磨が施されてるが、側縁が細かく角張り、整った円形にはなっていない。また紡茎を挿入する孔もないことから未製品とした。

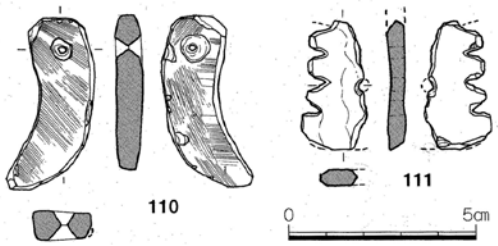


Fig.160　第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺１/２）

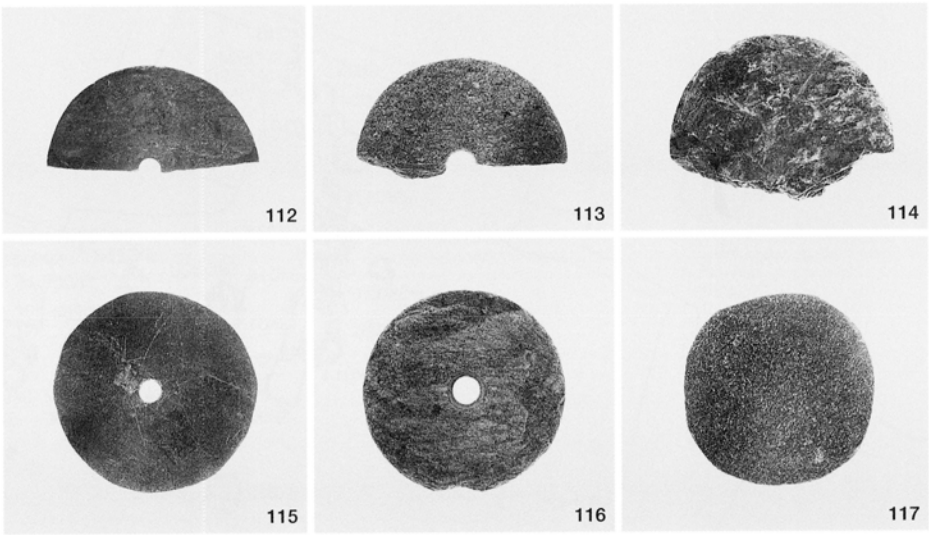


Fig.161　第Ⅲ面遺構検出面の遺物

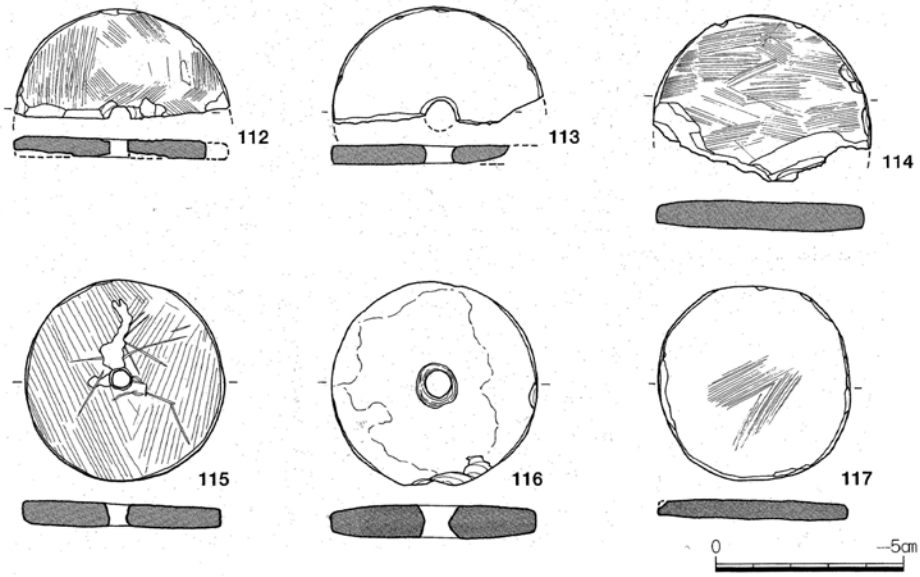


Fig.162　第Ⅲ面遺構検出面の遺物（縮尺１/２）

3．土 壙（SK）・ピット（SP）

土壙も他の遺構と同じように調査区の北東側に偏って分布するが、南西側にも数基が点在している。南西側の土壙は、凹地状ではあるが、完形の土器や漆製品など重要な遺物が出土した。これらは弥生時代前期に遡るもので、当時の生活空間の広がりを示している。

Fig.163 SK001

Fig.164 土壙分布図（縮尺1/500）

第1号土壙SK001 P29グリッドにありSC01に切られている。不整楕円形のプランで底面は小ピットなどで凹凸が目立つ。遺物の大半は埋め土の中程より上部で出土した。弥生時代前期の遺物も混じるが、中期前半の遺物が主となる。**1**は丹塗り壺。口縁部は頸部から段を付けずにそのまま湾曲する。内外面ともハケ目の後にナデを加えて調整している。
2は如意形口縁の甕で口縁下に断面三角形の突帯を巡らす。**3**は口径24.7cm、底径7.5cm、器高33.8cm。体部最大径は口径よりも大きいがその位置は中位にあり、倒卵形の器形にはなっていない。口縁下には突帯ではなく沈線が巡る。内底に炭化物が付着。**4**は口径37.0cm。**5**も同じL字形口縁。**6**は甕底部。厚みがあり体部との括れも強い。

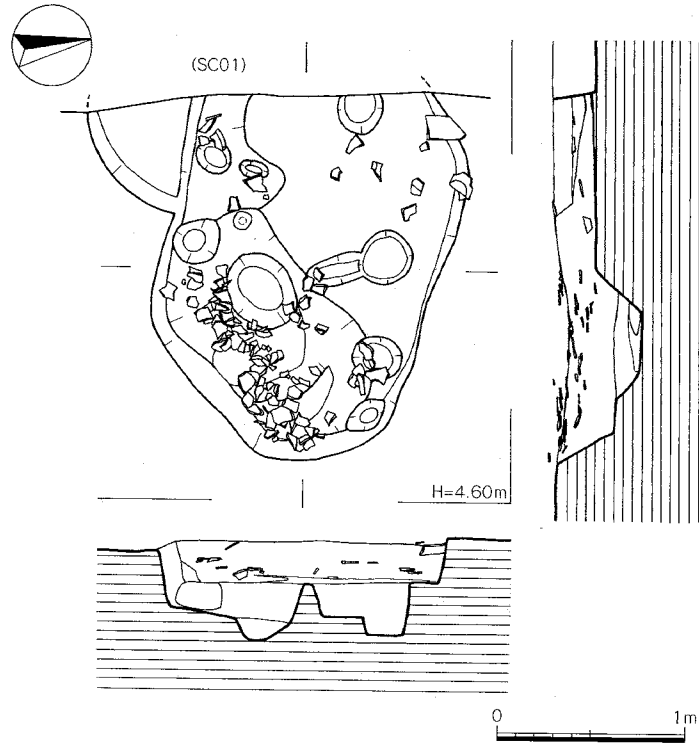


Fig.165 SK001土壙（縮尺1/40）

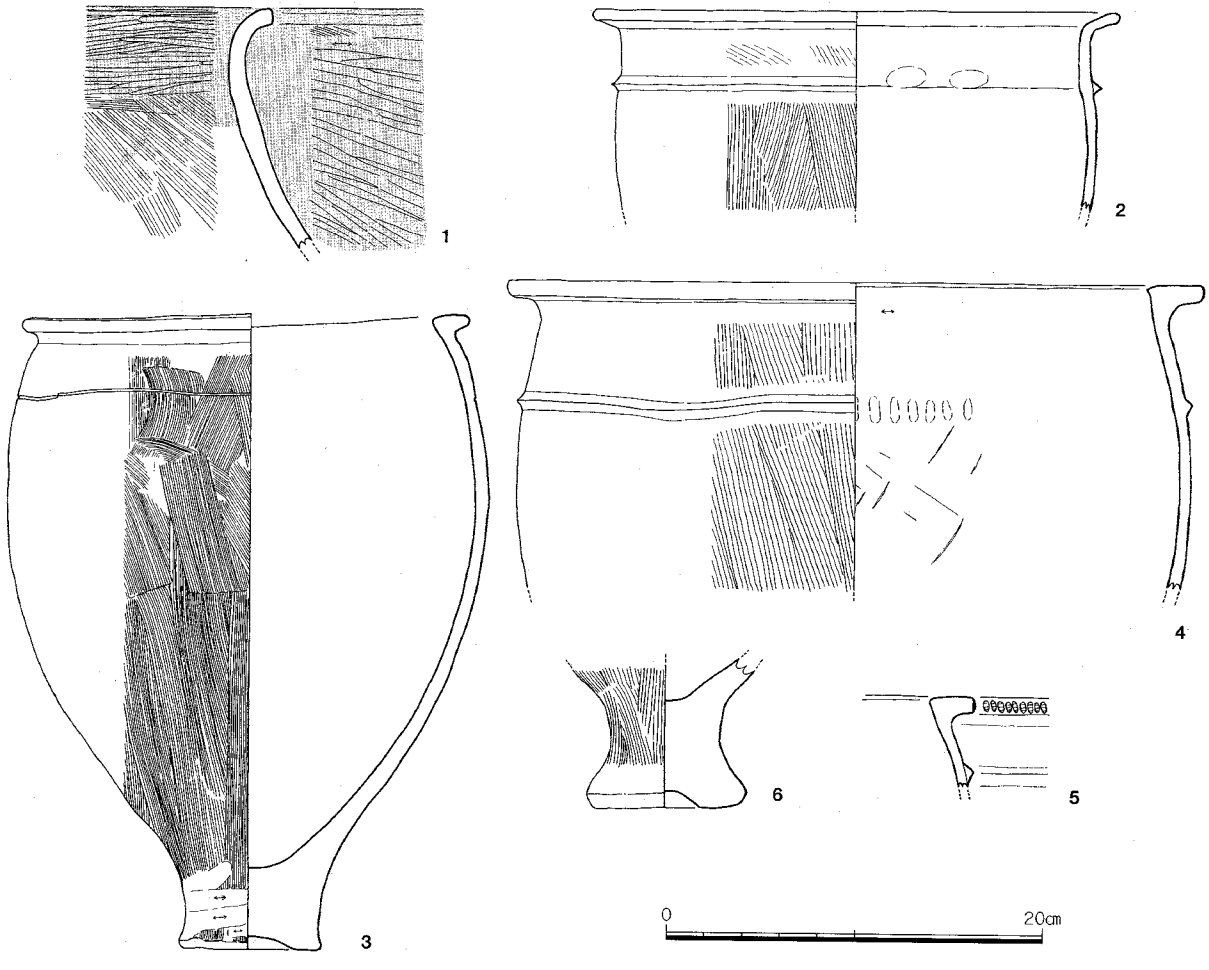


Fig.166 SK001の遺物（縮尺1/4）

第２号土壙SK002 Q29グリッド南隅に位置する。長軸149㎝、短軸131㎝の楕円形プラン。SP0760を切る。斜めの壁からそのまま丸みのある壙底となる。弥生時代早期～前期の遺物を含み、前期後半から中期前半頃までの遺物が出土。**1**の甕口縁部は如意形で、湾曲は弱い。刻み目は口縁下端のみで板状工具の木目痕が付く。体部外面と口縁部内面は細かなハケ目調整。**2**はＬ字形口縁。上面の幅は狭い。**3**、**4**は壺の口縁部。ともに細かな横ミガキ調整を施している。**4**は口径22.0㎝、頸部は直に近く立っており口縁部との境には段を付けない。**5**はハ字形に開く鉢。口縁部でさらに小さく外反し、先細い端部となる。**6**は鉢口縁部の小片。口縁下で屈曲し、鈍い稜となっている。**7**の壺胴部上端はよく締まり球形の胴部となる。胴部の最大径は35.0㎝。頸部との境には３本の沈線を巡らしているがきれいな平行線になっていない。胴部外面から頸部内面にかけての調整はハケ目の後に横ミガキを加えている。**8**は黒曜石製の打製石鏃。長い三角形で基部はわずかに凹んでいる。

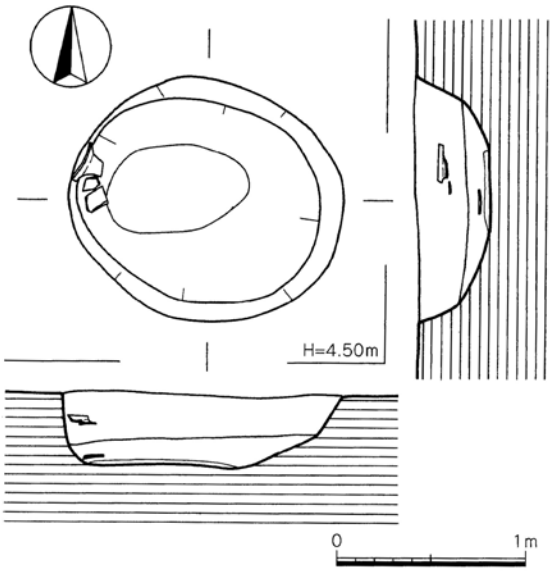


Fig.167 SK002実測図（縮尺１/40）

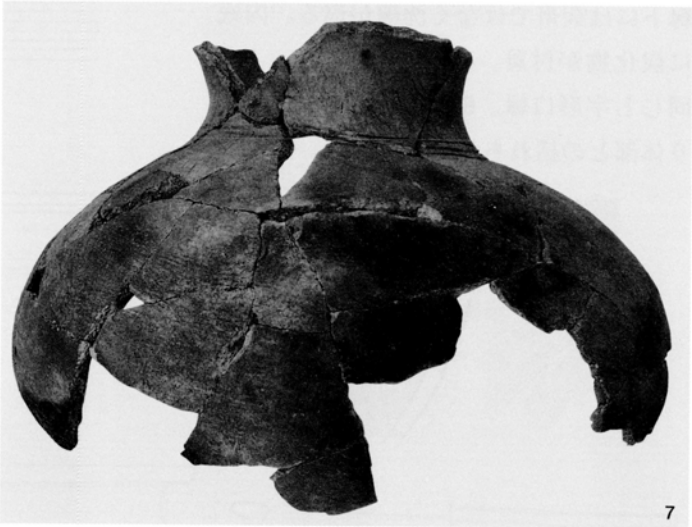


Fig.168 SK002の遺物

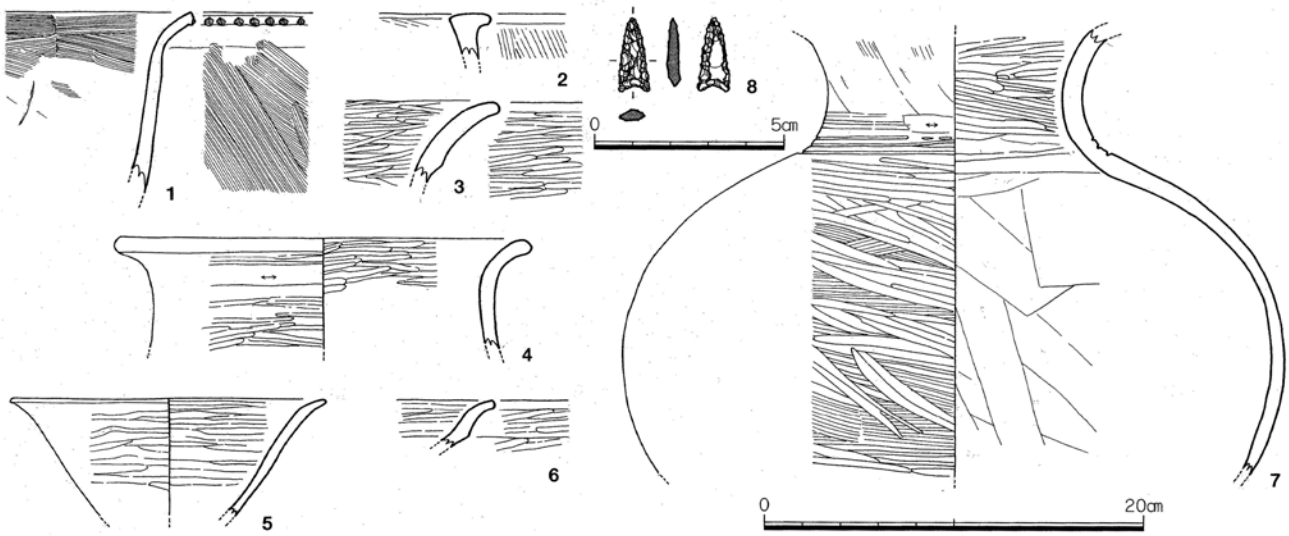


Fig.169 SK002の遺物（縮尺１/４・１/２）

第３号土壙SK003 SC01の南側、R29グリッドに位置する。長軸305cm、短軸175cmの隅丸長方形。長辺側がやや湾曲している。壁は斜めに掘り込まれ、壙底で段を付けてさらに深くなっている。遺物の大半は埋め土の上部でほぼ水平に分散するような状況で出土している。南隅でSK004に切られているが、出土遺物の時期に著しい差はない。また東壁ではSP0260を切っている。

1は壺胴部から口縁部の1/2大の破片。胴部上端はよく締まっており、上位に張りのある倒卵形の器形になるのだろう。頸部は朝顔状に大きく開き幅広の水平な口縁部が乗る。胎土には３mm大の砂粒を含み、わずかながら雲母が混入している。良好な焼成で全体が明るい茶褐色を呈している。径32.0cmの口縁部は、内側に粘土紐を貼り付け、上面は微妙に盛り上がる。頸部外面は工具のナデ上げで口縁部下にその傷が残る。頸部内面と胴部外面は横ミガキ調整。胴部上半内面には指頭圧痕が多く残る。**2**は口径22.0cmの無頸壺。胴部の大半を欠いているが球形になるのだろう。口縁部は小さく外反し、胴部との境に２条の沈線を巡らし、その下方に３本沈線で山形文を連続させている。その施文は逆時計回りに左から右への順である。**3**は広口壺の口縁部。外端部の上下に左斜行の刻み目を入れているが、工具の木目が残っている。**4**はL字形口縁で、上面はわずかに内傾する。内端部の突出はない。通常のように外面は縦ハケ目調整後に断面三角形の突帯を貼り付けている。**5**は器台。底径9.5cm。外面は粗い縦ハケ目。内面にはシボリ痕が見られる。胎土には２mm大の砂粒を含むが粗くない。

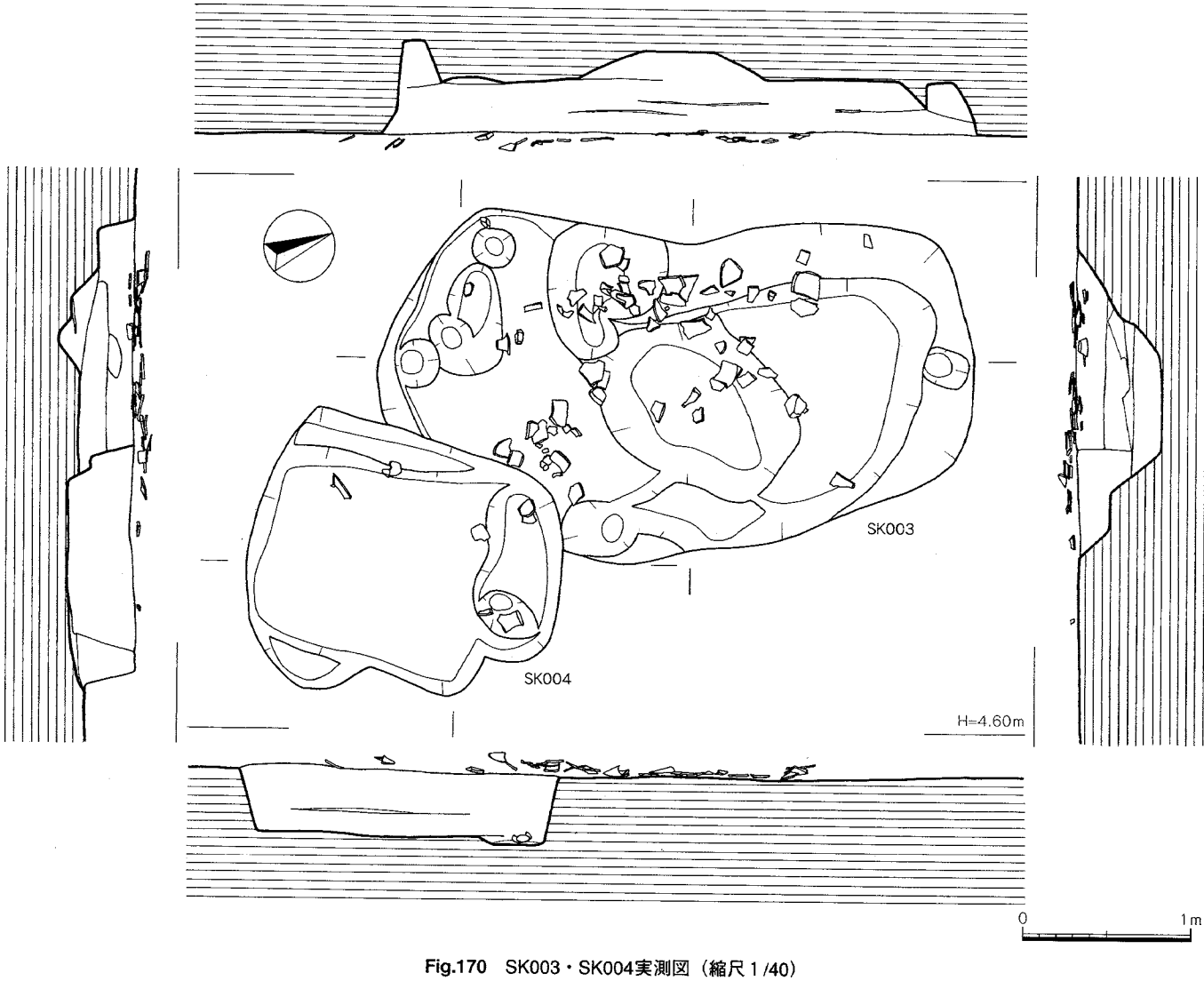


Fig.170 SK003・SK004実測図（縮尺１/40）

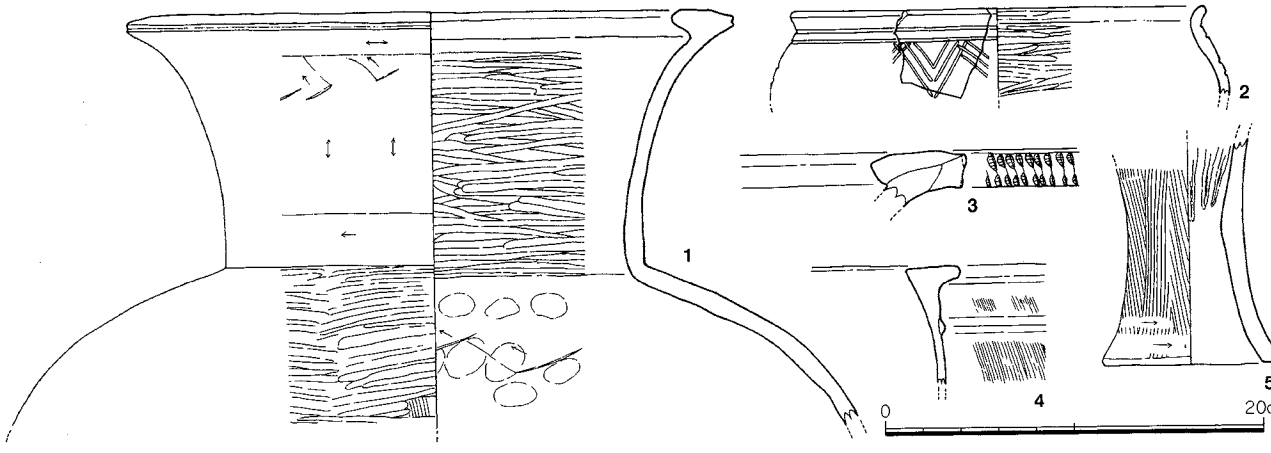


Fig.171 SK003の遺物（縮尺1/4）

第4号土壙SK004 先に記したがSK003を切っている。長側辺187cm、短側辺140cmの隅丸長方形のプラン。深さは42cmで、ほぼ平坦な壙底となっている。遺物は壙底からも出土し、7点を図示した。

1のL字形口縁は上面が水平で内側への突出が大きいのでT字形に近くなる。また厚みがあるので内傾したような器形となっている。口縁下の断面三角形突帯は小さく背も低い。

2は口径24.0cmの広口壺。口縁部は水平に幅広くなっている。口縁外端は横ナデで断面口唇状となる。頸部外面の縦ミガキは暗文風な効果が出ている。**3**は二重口縁壺。口径17.2cm、口縁部下端の屈曲部は外面に三角形状に突出している。頸部から口縁部にかけて黒斑がある。上部からの混入であろう。

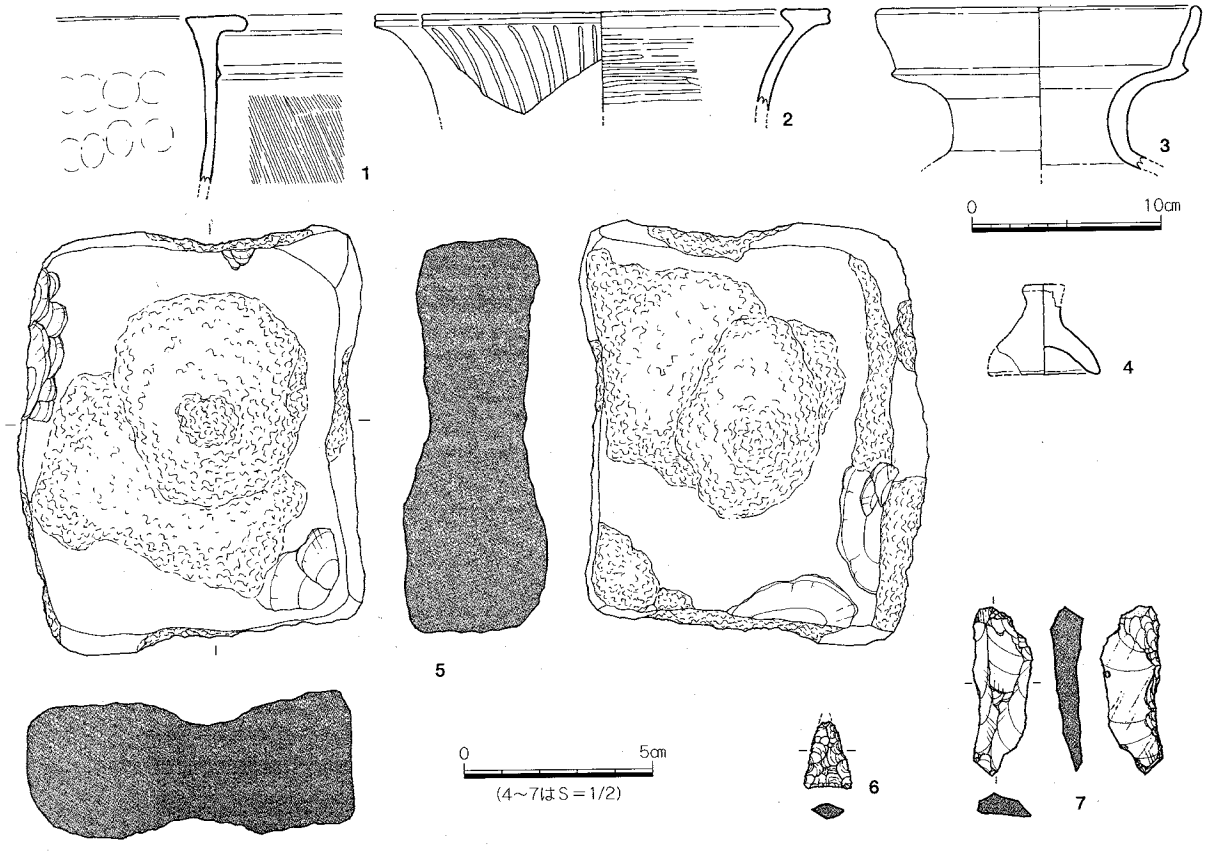


Fig.172 SK004の遺物（縮尺1/4・1/2）

4は小型の手捏ね土器。蓋状に図示したが台付きの坏か。**5**は凹石。厚さ3.8cmの自然石の図の表裏、上下の短側面中央を敲打し凹ませている。用途不明。**6**は黒曜石の打製石鏃。基部はほぼ水平。**7**は黒曜石の剥片。

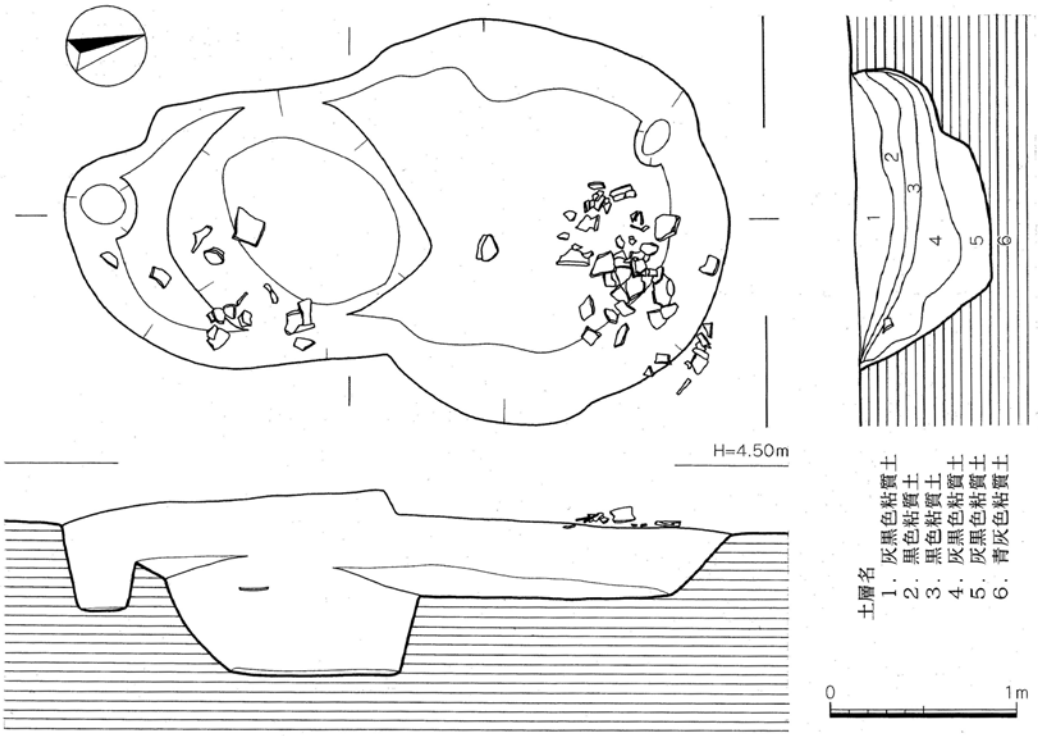


Fig.173 SK005実測図（縮尺1/40）

Fig.174 発掘作業風景

第5号土壙SK005 Q・R29グリッドに位置する長軸351cm、短軸150cmの楕円形。SC01に切られ、北側半分が床面下に入っている。深さがSC01の壁を境にして極端に異なり、またプランの形状も8字形であることから2基の土壙が接続していることも考えられる。ただ埋め土に変化がなかった。北側部の埋め土はレンズ状に5層が堆積している。遺物の大部分は中程から上部で出土する。弥生時代中期前半が主である。**1**の倒卵形体部は張りが弱く体部最大径は口径32.2cmを超さない。L字形口縁部は上面はわずかに凹む。口縁下の突帯は2条。**2**は体部の張りが強く口径26.5cmより1cm大きい。**3**、**4**は甕底部。ともに中央部が深く凹んでおり、**4**は括れが弱く粘土が剥離したのか底部端が尖り気味。底径7.2cm。**5**～**7**は広口壺。3点とも水平な口縁部を乗せる。**5**は器壁が厚く口縁部の幅も狭い。口径38.0cm、頸部内面のナデは粗く凹凸となる。外面は縦ハケ目の後に1cm間隔の縦ミガキを加えている。きれいな暗文ではない。**6**は口径39.8cm。口縁部は横ナデの後にミガキを加えるが、余った粘土を下方へ押してつけている。内端部への突出は小さく丸み

Fig.175 SK005の遺物（縮尺1/4）

がある。頸部外面の調整はヘラナデの後に縦方向のミガキ。密ではない。**7**は口径35.6cm。口縁内端部への突出強く、その先端は尖り気味で鋤先状に近い。**8**は壺底部。径7.8cmの底部が外縁を残しわずかに凹む。外面は丹塗りか。**9**は支脚。精良土が用いられ、粘土を貼り付けながら成形しており、全面に指頭圧痕が残る。上端部に浅い溝。表面に文様のような傷がいくつもある。**10**は円筒状の器台で、器高15.9cm。外面は縦方向のヘラナデ調整。

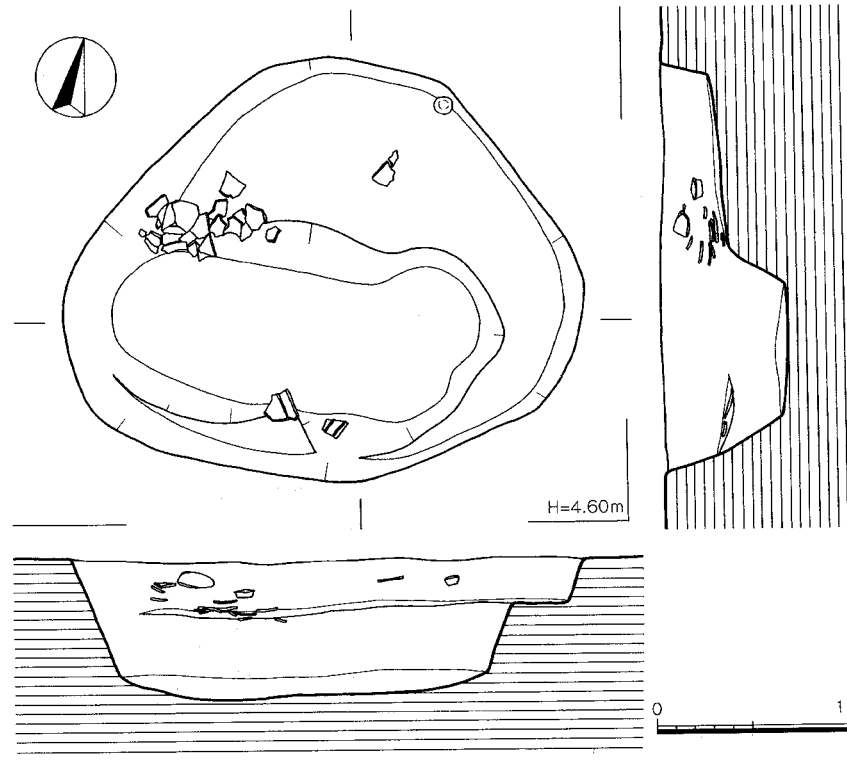


Fig.176 SK006実測図（縮尺1/40）

第6号土壙SK006 S·T25·26グリッドに位置する。長軸274cm、短軸224cmの楕円形プランで北側に張り出している。壙底の中央にさらに長楕円形に深く掘り込んでいる。遺物は主にその段の縁に大きな破片がまとまって出土した。古墳時代の土師器が混入しているが、弥生時代中期前半が主である。

1は口径32.5cmの甕。倒卵形の体部は突帯部で微かに屈曲し直線的に延び口縁部となる。断面三角形突帯の貼り付けは水平ではない。**2**は口径43.0cm、体部の最大径が口径よりも大きい。2条の突帯には刻み目を入れる。**3**は体部に比べ底部は極端に小さく底径9.6cmしかない。外底も深く凹んでいる。**4**は大型壺の口縁部。口縁外端の上下に小さな刻み目。上面から内面にかけて横ミガキ。**5**～**8**は古式土師器。**5**は半球状の椀。口径12.7cm。精良土の胎土。内外面ともナデ調整。**6**は甕の口頸部破

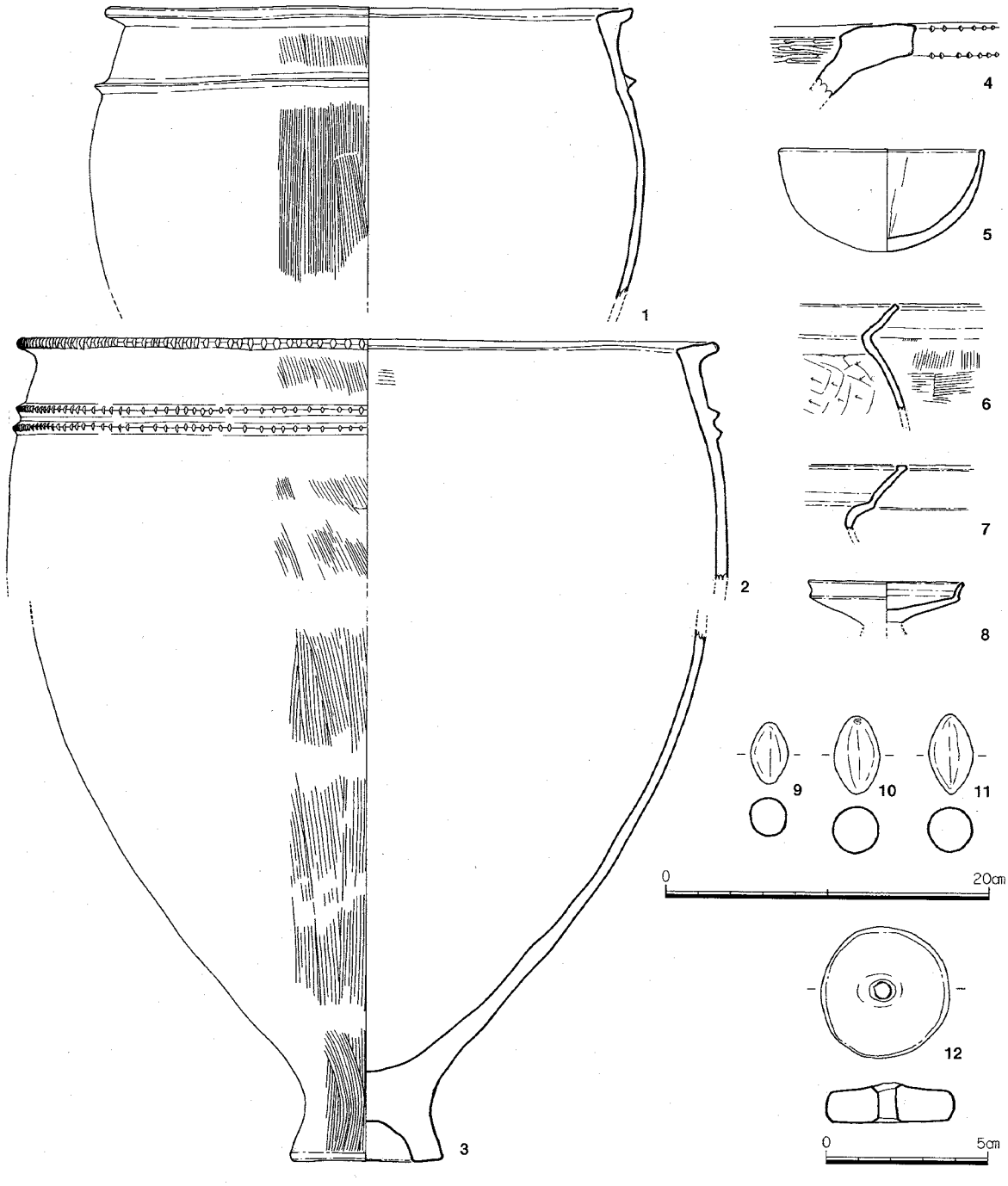


Fig.177 SK006の遺物（縮尺1/4・1/2）

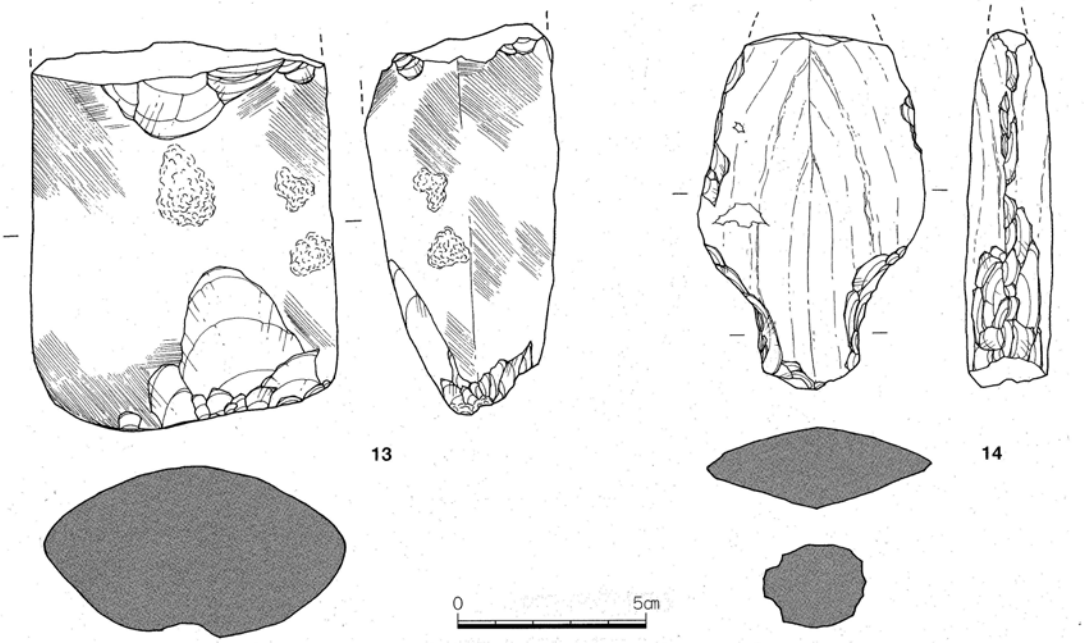


Fig.178 SK006の遺物（縮尺1/2）

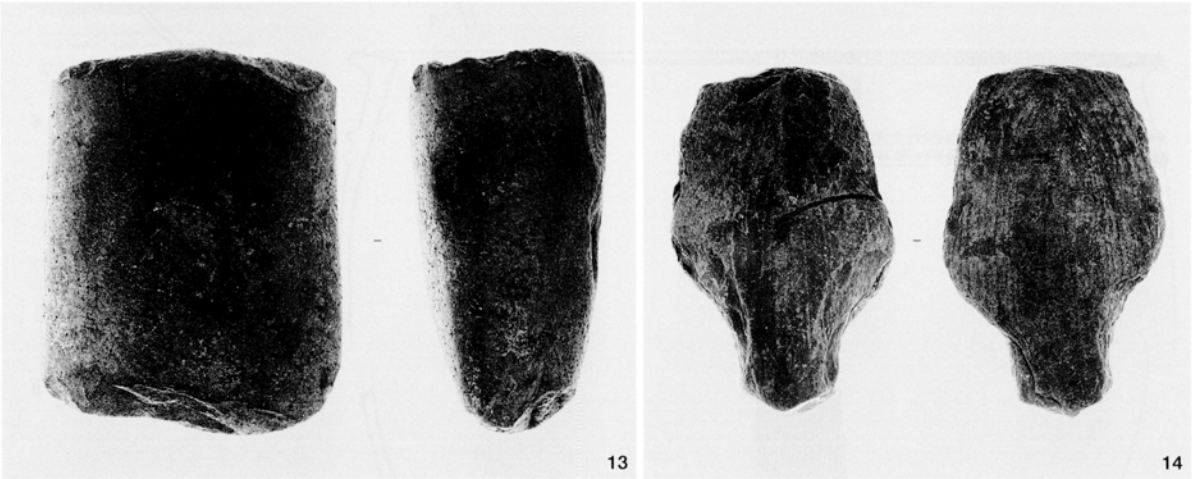


Fig.179 SK006の遺物

片。口縁内端部の突出は弱い。内面はヘラ削り、外面はハケ目調整。**7**は壺の二重口縁部、屈曲部外面は鈍い稜となり、口縁部は直線的に開き、端部は水平となる。**8**は小型器台。脚部の接合部から脱落している。受け部の口径は9.7㎝。立ち上がりは短く、中位でわずかに外反し端部を丸くおさめている。**9**〜**11**は投弾。**11**は長さ4.8㎝、中央部の径2.9㎝。**12**は直径4.1㎝の土製紡錘車。中央の孔周縁がわずかに盛り上がっている。

13は磨製石斧。身の中央部より頭部を欠いている。身の形状は側縁が幅8.1㎝で平行する長方形。側縁に稜は付かないがやや尖り気味でレンズ状の横断面となっている。厚さは5.0㎝。全面に研磨を加えている。その研磨痕は刃部に対し左斜行。刃部は使用で潰れ、剥離している。**14**は有茎式の磨製石剣。切っ先部が折れており、現在長9.45㎝。身の断面は菱形で幅6.1㎝、厚さ2.2㎝。表面がやや剥離しているがに鈍い鎬が茎まで通っている。身は三角形状で切っ先まで短く、石剣というよりも石槍に近い。関は斜めに切り込み茎となる。茎の横断面は円形に近いが全体に未調整のようである。

第７号土壙SK007 SC01の東壁に沿って床面の下で検出した。長軸233cm、短軸138cmの隅丸長方形プラン。壙底にいくつかの小ピットがあるがほぼ平坦。壙底で出土した甕を実測、図示した。

1は突帯文土器の甕。口径18.2cm、底径6.4cm、器高23.6cm。底部より2/3当たりで屈曲し直線的に内傾し、口縁部になる。突帯は口縁外端と体部屈曲部に貼り付けている。外面の調整は横条痕。底部には木葉痕があり、さらに焼成後に穿孔して甑として使用している。

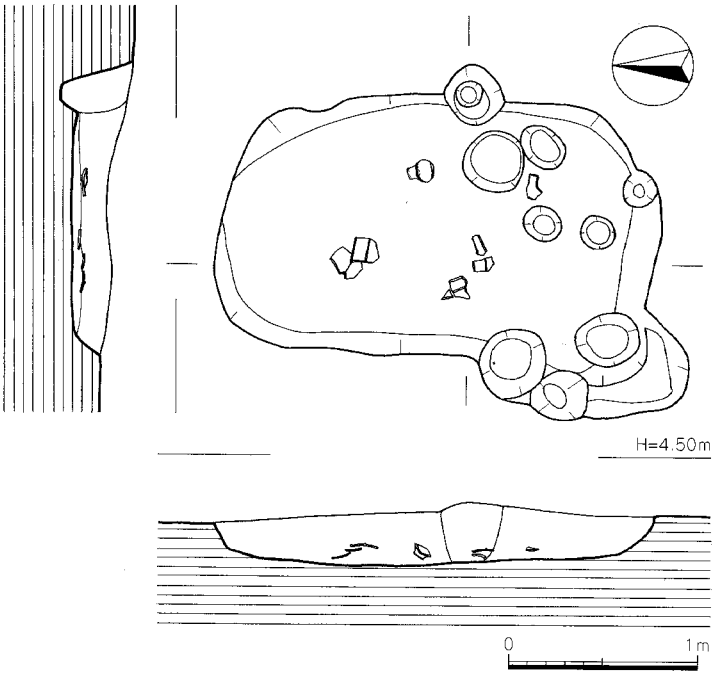


Fig.180 SK007実測図（縮尺１/40）

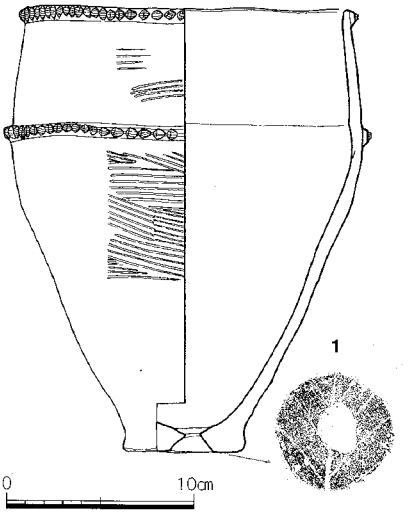


Fig.181 SK007の遺物（縮尺１/４）

第８号土壙SK008 T30グリッドの北寄りに位置する。長軸169cm、短軸172cmの隅丸方形の土壙。北側に偏って二段掘りしている。遺物は壙底直上で出土している。

1は広口壺の肥厚した口縁部。外端の断面は横ナデ調整で口唇状となる。その上下に右方向から刻み面を入れている。**2**は石製の紡錘車。直径5.2cm、表裏面の中央部に無数の傷。とても文様には見えない。

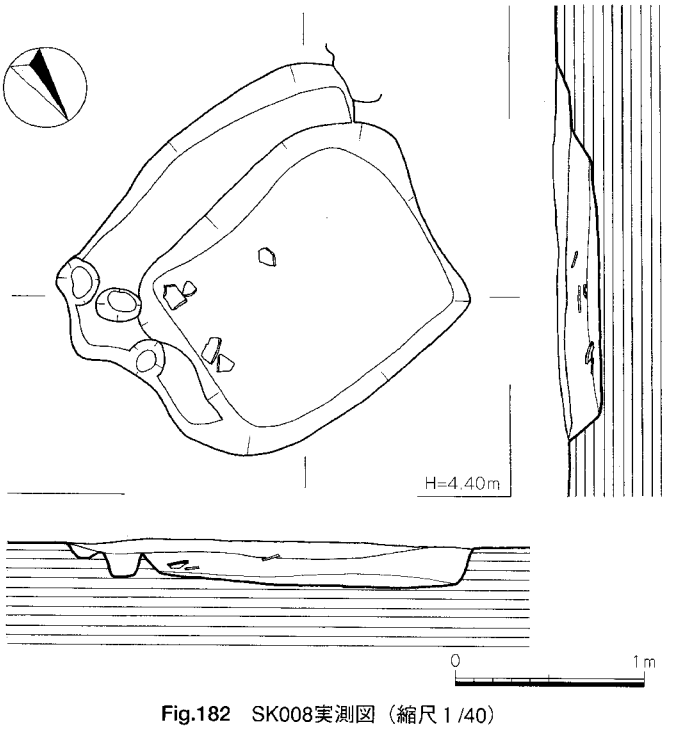


Fig.182 SK008実測図（縮尺１/40）

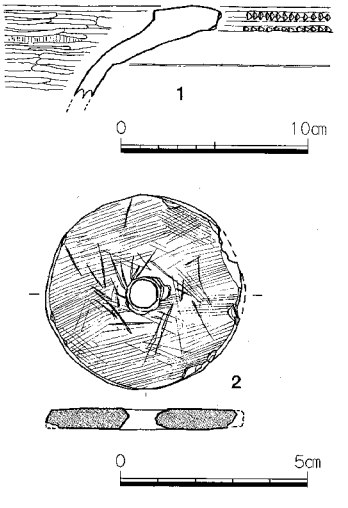


Fig.183 SK008の遺物（縮尺１/４・１/２）

第９号土壙SK009 T30グリッド、SK007の南側に位置している。長軸228㎝、短軸153㎝の楕円形プラン。壙底は西側に傾斜し、最も深い西端で44㎝を測る。遺物は埋め土の底部から中程で出土。

1は如意形口縁の甕で湾曲は小さい。口縁下端に細かな刻み目を右方向から入れている。外面は縦ハケ目で煤が付着している。**2**は断面三角形の水平な口縁部。外端部に細い刻み目。口縁部下方の突帯は小さな三角形。**3**の口縁部は水平に外側に長く延び、内側にも突出して断面L字形となる。**4**は古墳時代土師器の小型丸底壺。上部からの混入か。

5は磨製石斧の刃部破片。現存部の幅は8.0㎝で、横断面はレンズ状、厚さは3.5㎝前後。これらから長方形の身が復元できる。丁寧な研磨痕が残る。**6**は黒曜石製で石錐か。**7**は全体が風化、摩耗しているが２孔があることから石包丁とした。

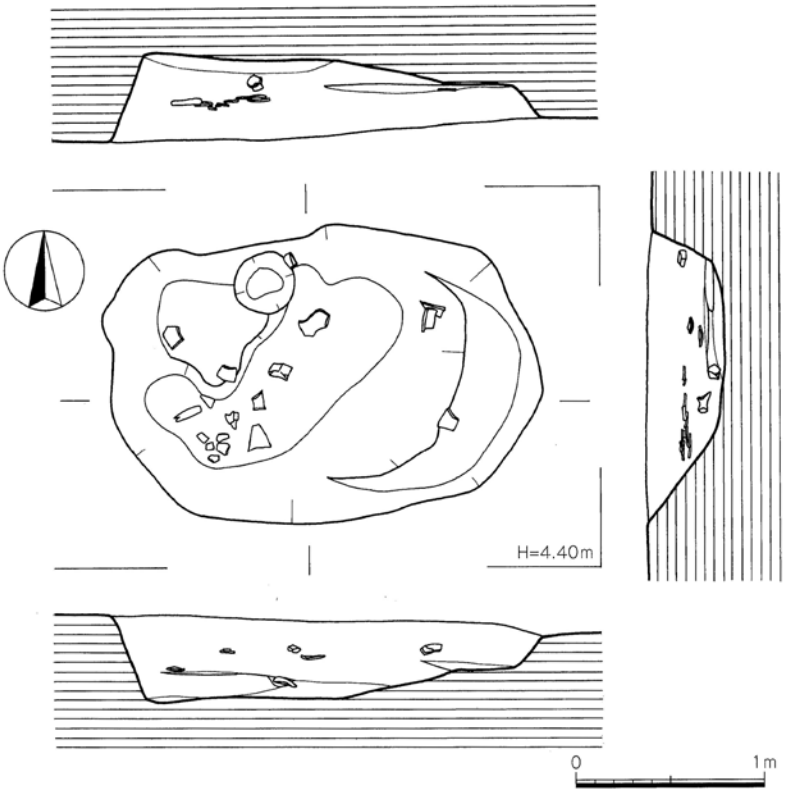


Fig.184 SK009実測図（縮尺１/40）

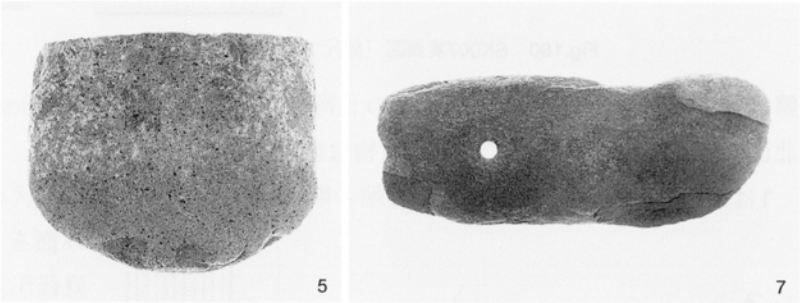


Fig.185 SK009の遺物

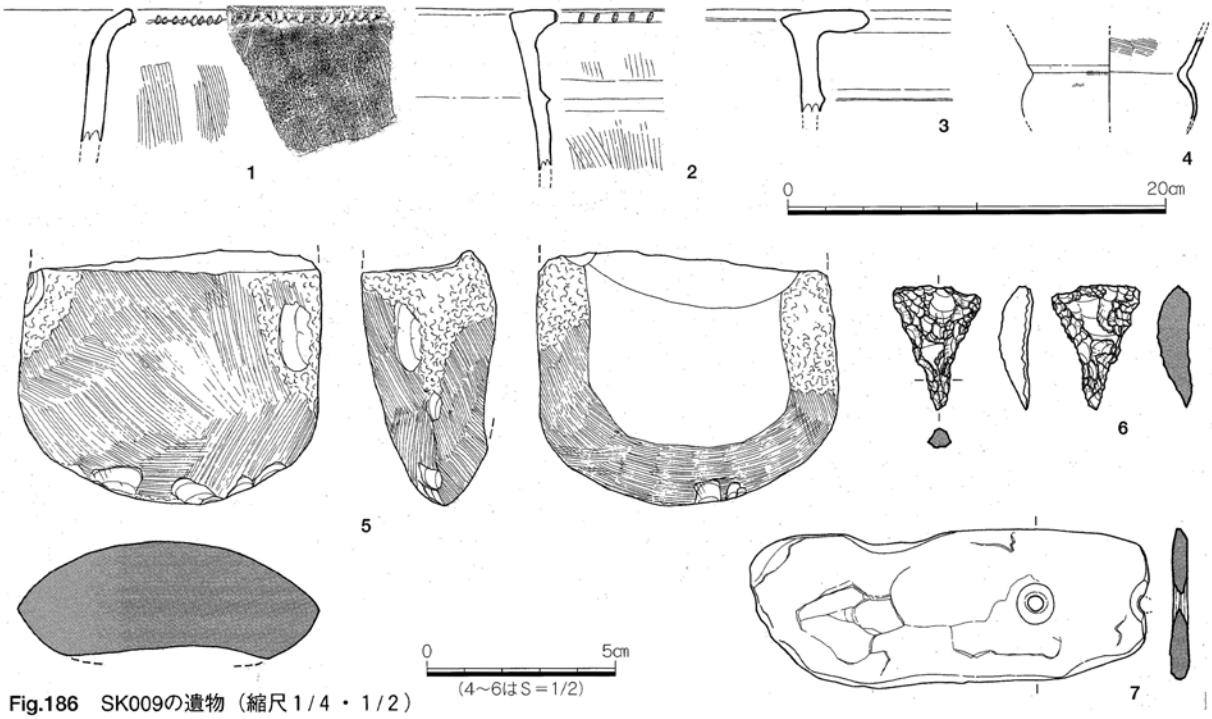


Fig.186 SK009の遺物（縮尺１/４・１/２）

第11号土壙SK011　S30グリッド北寄りに位置する。長軸183cm、短軸114cmの不整楕円形プラン。中央で円形に２段掘りしている。中央部での深さは58cm。弥生時代中期前半の土器を２点実測した。

1は甕の底部。体部との境の括れは弱く、外底は平底に近い。**2**は断面三角形の口縁。上面に黒斑あり。

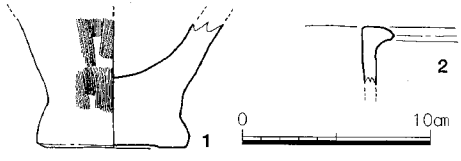


Fig.188　SK011の遺物（縮尺１/４）

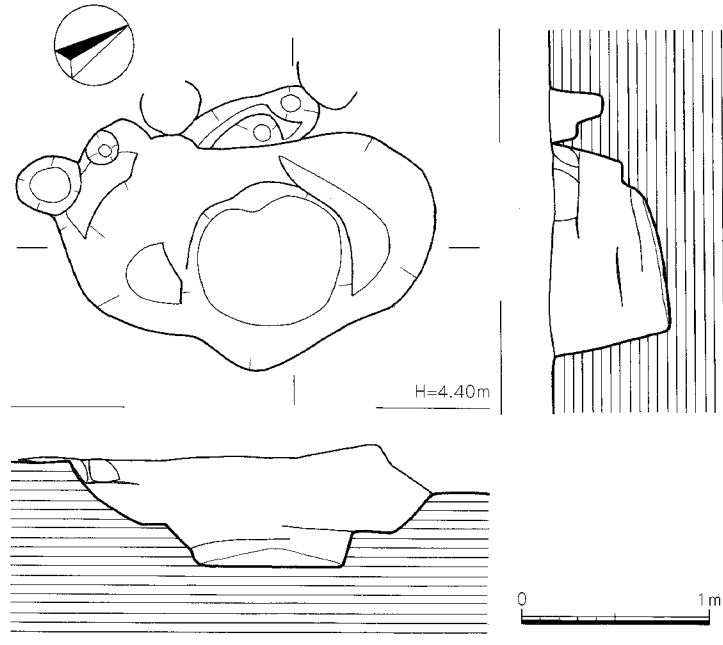


Fig.187　SK011実測図（縮尺１/40）

第12号土壙SK012　U30グリッドにあり、長軸208cm、短軸153cm、深さ23cmの隅丸の土壙。埋め土上部出土の遺物を図示する。

1は壺の底部。底径は12.5cm、平底から大きく開いて胴部と続く。内外面とも剥離し、調整痕不明。胎土には２mm大の砂粒を多めに含んでいる。

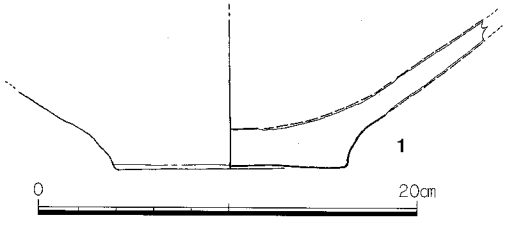


Fig.190　SK012の遺物（縮尺１/４）

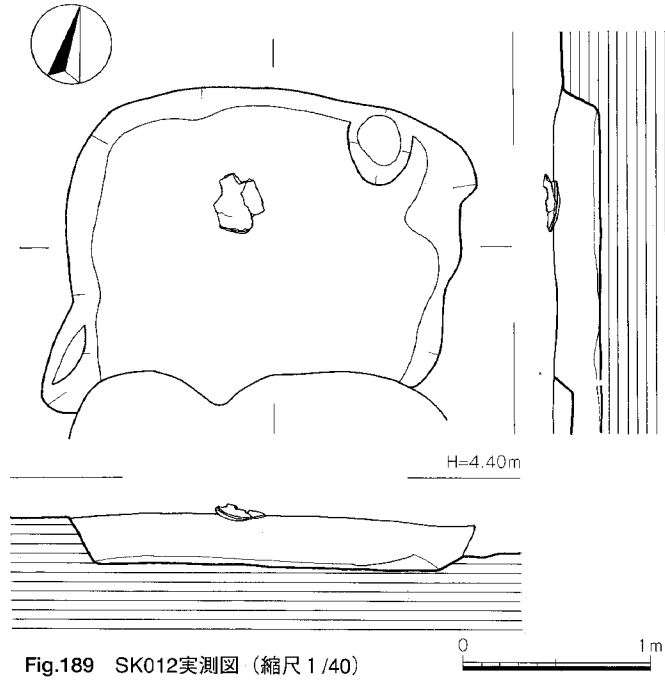


Fig.189　SK012実測図（縮尺１/40）

第13号土壙SK013　T32グリッドの中央部に位置する。遺構図は図示していない。SK014の東側に接している不整楕円形の土壙で、残存長軸446cm、短軸240cm、深さ20cm。

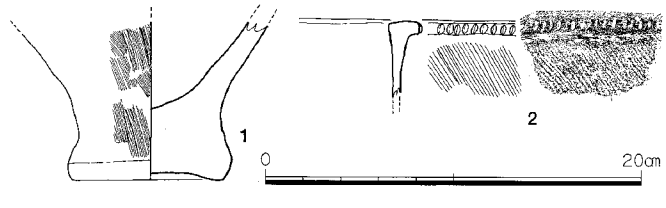


Fig.191　SK013の遺物（縮尺１/４）

SK011のような土器の組合せ。**1**は底部との境でわずかに括れ、外底もわずかに凹む。底径8.6cm。**2**は短いＬ字形口縁、外端部に右方向からの刻み目を入れている。外面は左斜行のハケ目調整。内面は剥離している。

第14号土壙SK014 隅丸方形状プランの土壙。壙底はほぼ平坦であるが、南側に寄って楕円形の落ち込みがある。遺物はこの上部に集中している。図示した点数は5点のみだが、台付き鉢は雀居遺跡では珍しい。**1**は突帯文土器の甕。断面蒲鉾形の突帯は、口縁端よりやや下方に貼り付けられており、菱形の刻み目はほぼ等間隔に巡っている。**2**、**3**は鉢。**3**は背の低い台が付いた鉢。鉢自体も小さく、全面に細かな横ミガキが施されている。**4**の甕は断面三角形の粘土紐を貼り付けて口縁部とする。**5**は広口壺の口縁部。外端は強く横ナデし沈線状となる。

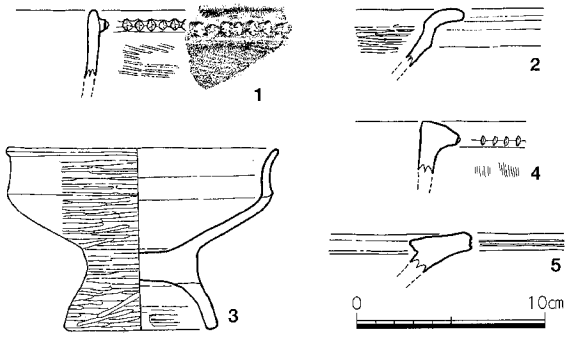


Fig.193 SK014の遺物（縮尺1/4）

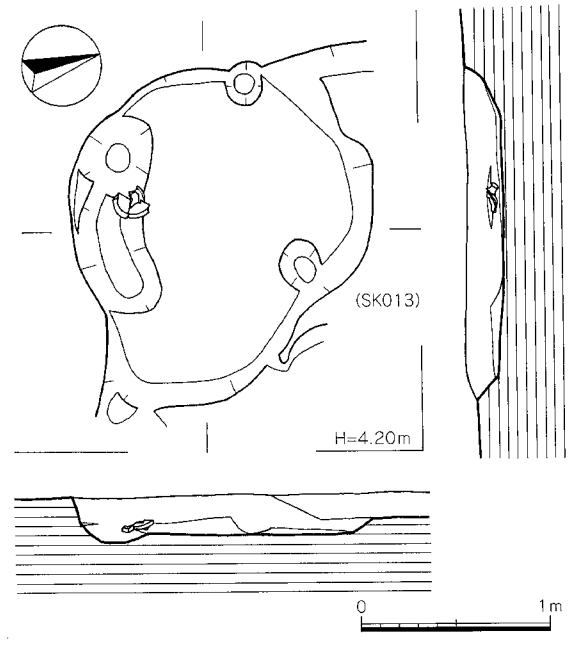


Fig.192 SK014実測図（縮尺1/40）

第16号土壙SK016 S34グリッドの楕円形プランの土壙。**1**は突帯文土器の甕。小破片のために傾きは不正確だが、体部から直線的に伸び、背の低い断面台形の突帯を貼り付けている。刻み目は横長の菱形で大きさは不揃いである。外面は横条痕。傾きからすると体部で屈曲する甕である。

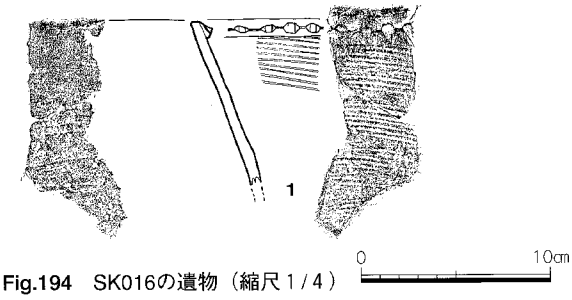


Fig.194 SK016の遺物（縮尺1/4）

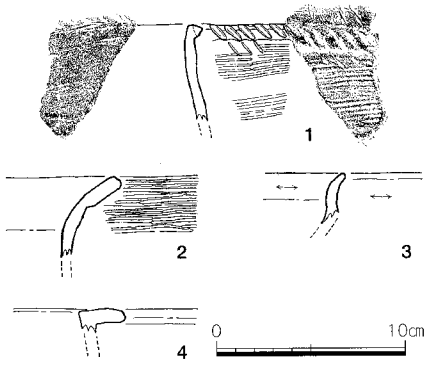


Fig.195 SK017の遺物（縮尺1/4）

第17号土壙SK017 遺構図は示していないが、S34・35グリッドにある楕円形プランの土壙。**1**は突帯文土器の甕。口縁外端に接して断面三角形の突帯を貼り付けている。刻み目は左斜行の溝状をなす。**2**は壺の口縁部。頸部との境にかすかな段が見られる。外面は細かな横ミガキ、内面はナデ。**3**は鉢の口縁部。体部上部に屈曲部を持つ。横ミガキと思われるがその痕跡は不明瞭。**4**はL字形の口縁部を持つ甕。口縁上面はわずかに盛り上がっている。

第18号土壙SK018 S34グリッドに位置する。2点とも小破片で傾きが不正確である。**1**は口縁外端に刻み目。湾曲は弱い。体部外面は縦ハケ目。**2**は壺胴部。

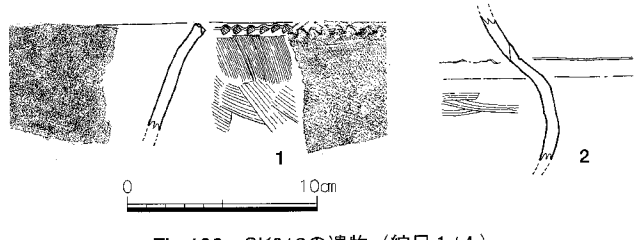


Fig.196 SK018の遺物（縮尺1/4）

第19号土壙SK019

T31から32グリッドにまたがっている。長軸365cm、短軸222cmの隅丸方形。北西隅が外に張り出している。壙底は中央部がやや盛り上がっている。

1は口径49.7cmの甕。体部に張りがあり鉢に近い器形となっている。体部上半から口縁部にかけて器壁を厚くしている。**2**の如意形口縁は短く、刻み目は上下に達している。口径26.2cm、内面に炭化物、外面に煤付着している。

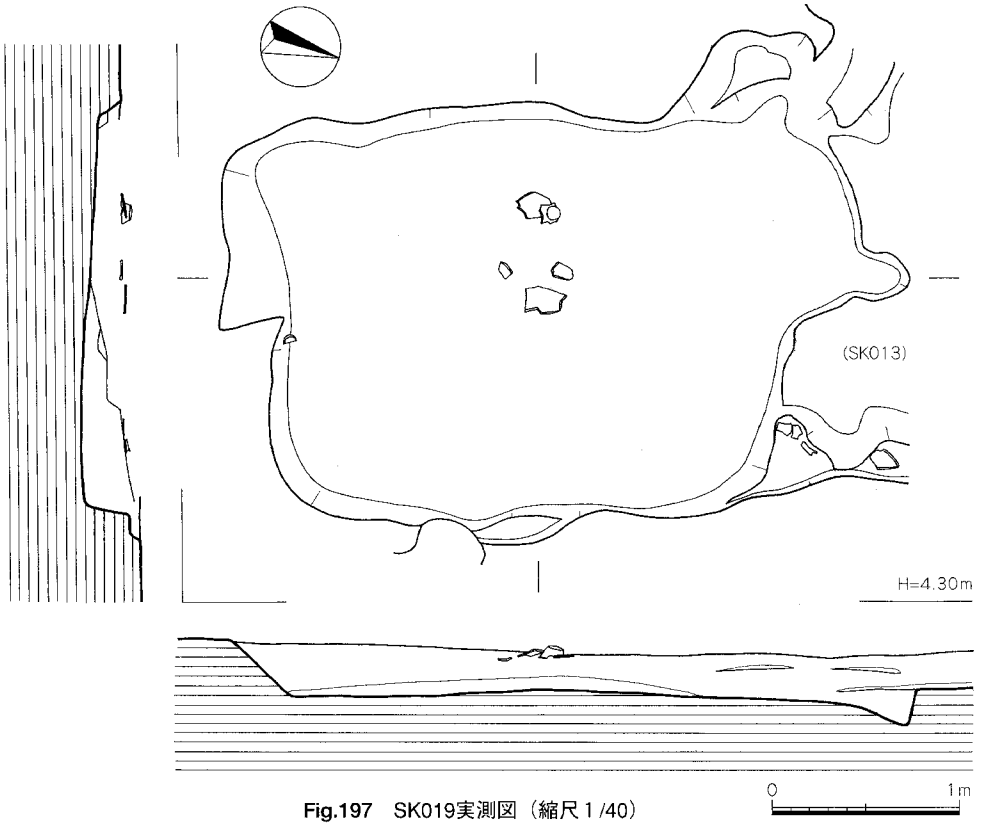


Fig.197 SK019実測図（縮尺1/40）

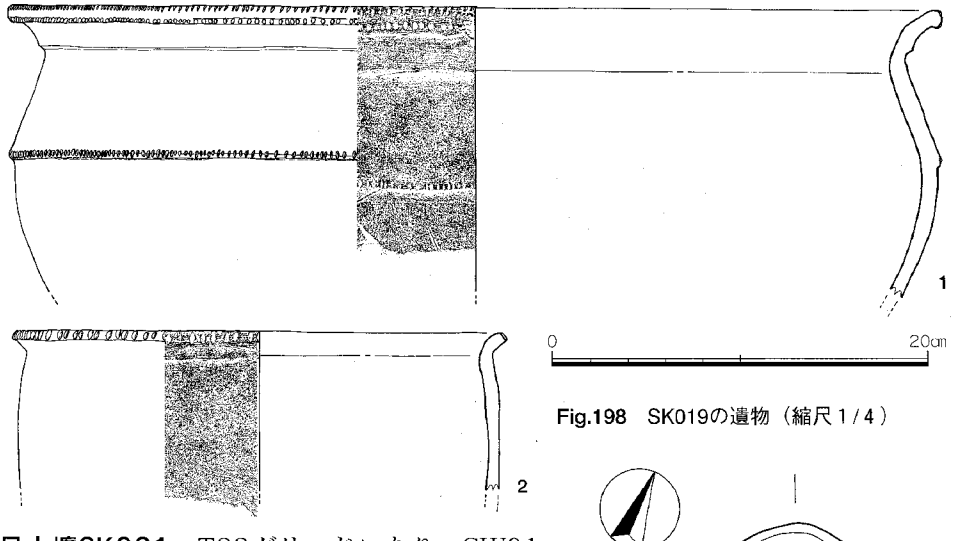


Fig.198 SK019の遺物（縮尺1/4）

第21号土壙SK021 T33グリッドにあり、SW01の東側に当たる。図のように不整形のプランである。壙底は南寄りで2段掘りされている。

1は広口壺の口縁部破片。口縁外端の断面は口唇状。上面は微妙な凹凸があるが、ほぼ水平面を作る。ここに細い沈線で斜格子文を描いている。線描きの順序は図の右斜行が先で、左斜行が続く。**2**は古墳時代の土師器。口径16.2cmの甕。屈曲部内面には稜が付く。内面は削り。外面に煤が付着している。

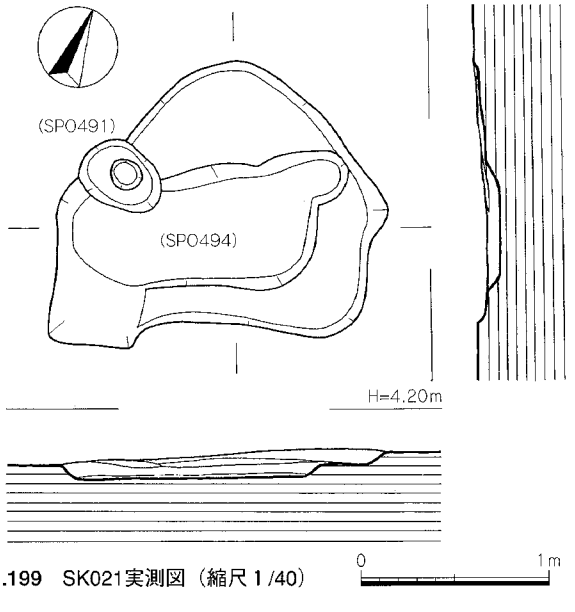


Fig.199 SK021実測図（縮尺1/40）

Fig.200 SK021の遺物

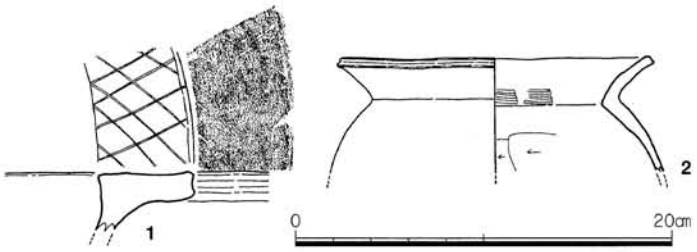


Fig.201 SK021の遺物（縮尺1/4）

第24号土壙SK024 Z30グリッドにあり、長軸を東西方向に取る。後述するSK035とはずれているが方向をほぼ等しくする。平面プランが長楕円形で、長軸640cm、短軸436cmを測る大型土壙。埋め土は他の土壙と同じようにわずかに灰色を帯びた黒色粘質土であるが、やや砂質気味となる。遺物は上下２層に分かれて出土するが、遺物自体に時期差は認められない。弥生時代早期から前期中頃にかけて埋没している。発掘区の西寄りに位置していることから生活領域や土地利用を解明する上で重要な意味を持つと考え出土遺物はできる限り実測に努めた。

土　器　**1**～**15**は突帯文土器の甕。**1**は口径15.4cmでやや細身の甕。屈曲部の粘土接合は通常のように内側に貼り付けて口縁部に延びている。この上半部は内外面とも横ナデで横条痕は外面下半のみである。突帯の刻み目は右方向から深く切り込んでいる。**2**は直線的な体部でそのまま口縁部となり、端部断面は方形。突帯は低い断面三角形。**3**は口径30.0cm、高温焼成で堅い。成形は雑で口縁部は波

Fig.202 SK024

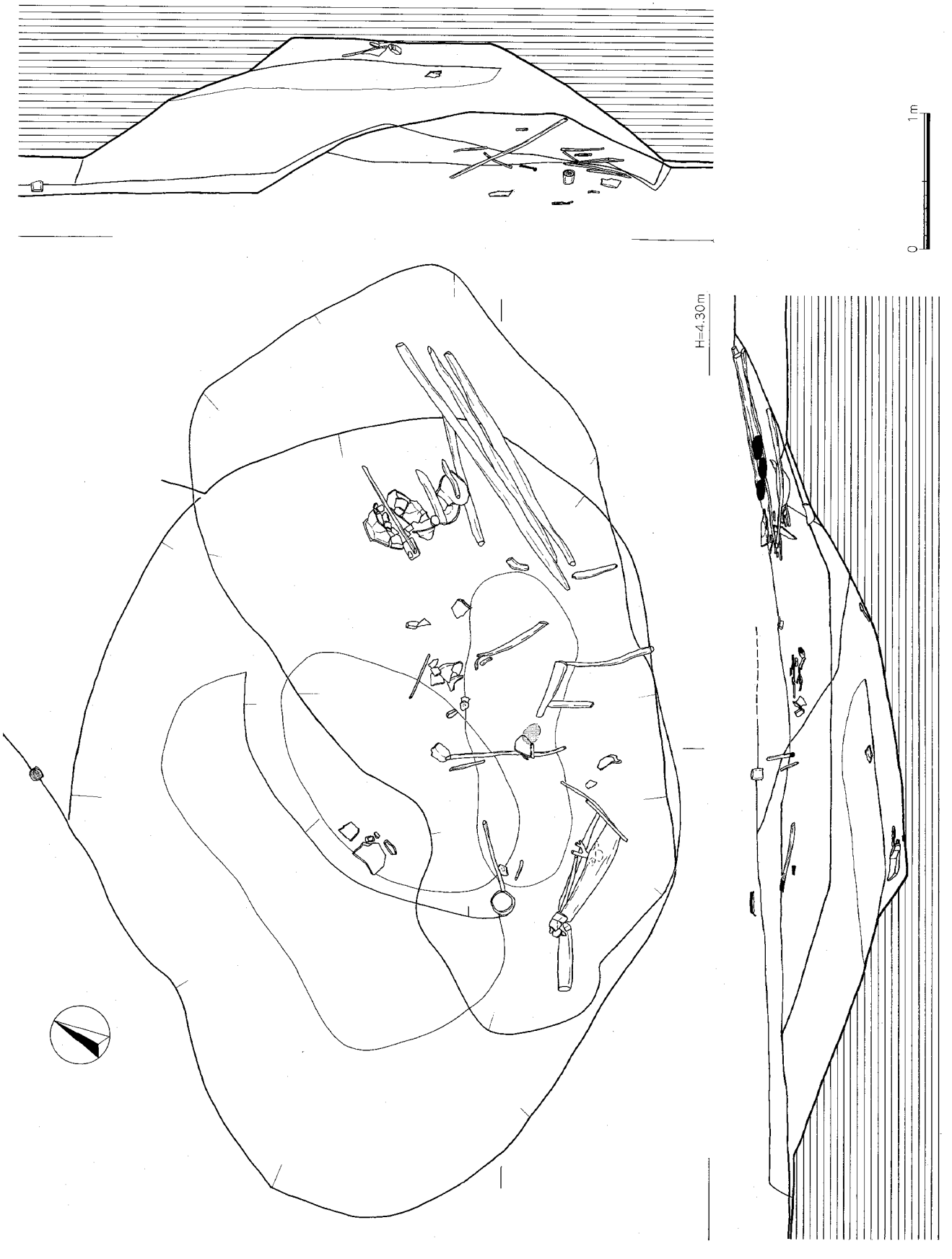


Fig.203　SK024実測図（縮尺1/40）

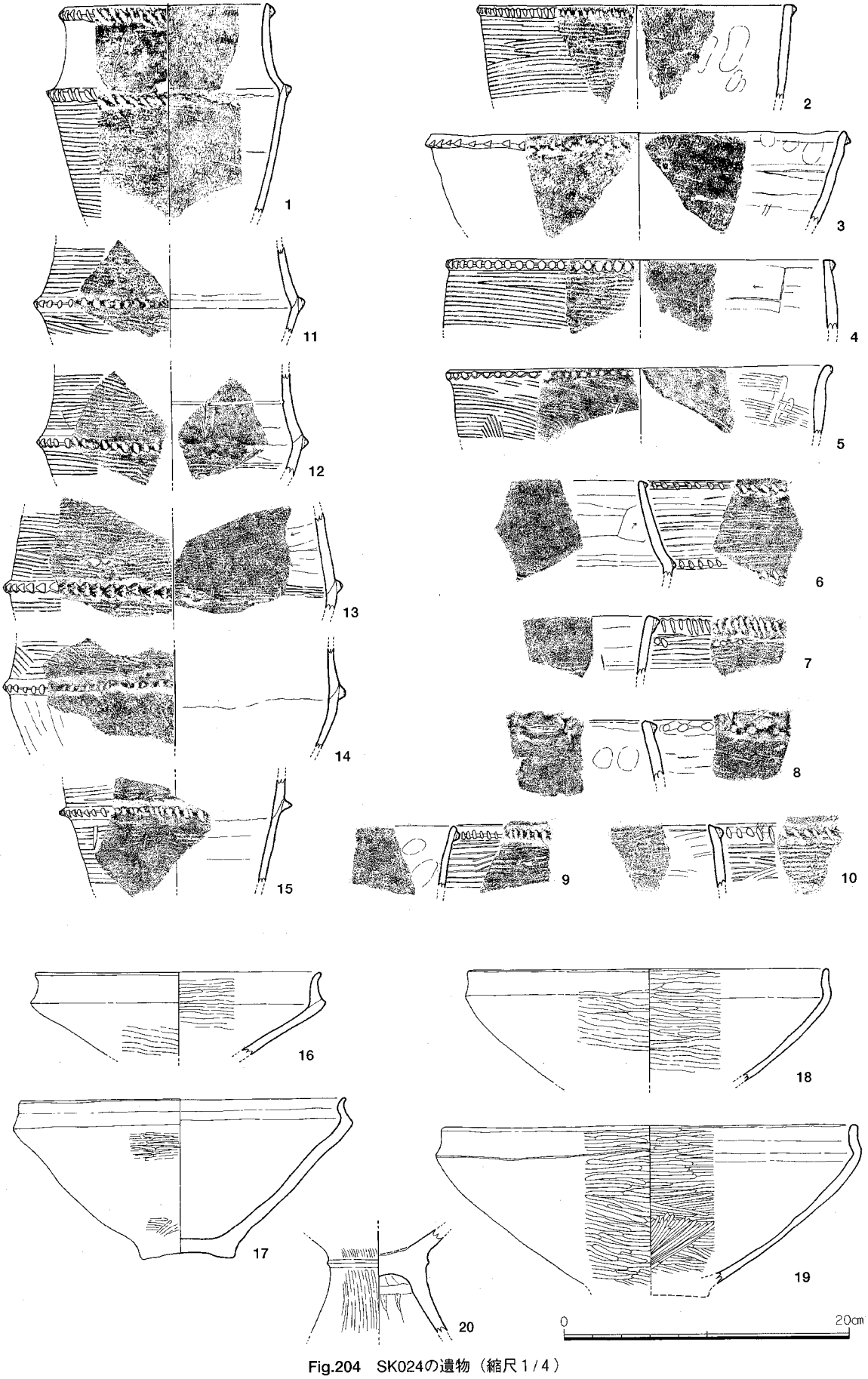


Fig.204 SK024の遺物（縮尺1/4）

打っている。断面三角形突帯は垂れ気味。刻み目は左方向から。**4**の口縁部はほぼ直立する。端部の断面は方形で、断面三角形突帯の刻み目は円形で等間隔に入れている。**5**は口径20.0㎝、口縁部は小さく外湾し、端部上面は平坦となる。その下端に横楕円形の刻み目。外面は粗い横ハケ目、下半は縦ハケ目か。内面は横ハケ目をナデ消している。**6**は体部で屈強し、内傾して口縁部となる。断面三角形突帯は小さく、刻み目は真上から鋭く刻んでいる。外面は横条痕、内面は板状工具のナデは弱く擦刷痕にはなっていない。**7**の突帯は幅広く、刻み目も長く切り込む。**8**の口縁端部は内面に粘土を折り返している。外面は擦刷痕。**9**の口縁端部は断面が丸みがあるので突帯が垂れ気味に見える。薄手の器壁になっている。**10**の口縁部は先端で小さく内傾する。左から入れた刻み目は不規則。

11～**15**は甕の体部屈曲部。**11**の突帯は断面蒲鉾形で刻み目は細い棒状工具を真上から押している。外面は横条痕。**12**の突帯部径は19.2㎝、外面下半に煤付着。**13**の屈曲は弱く、内傾して口縁部へ延びる。屈曲部の粘土接合部には横条痕。**14**は突帯の上部は横条痕、下半は左上がりの擦刷痕。突帯部の径は22.2㎝。**15**は屈曲しないで直線的に口縁部へ延びる。突帯は背の高い三角形。

16～**19**は鉢。**16**は口径20.2㎝。逆ハ字形に大きく開く体部端の内側に粘土板を乗せ口縁部とする。端部で小さく外湾し先端は細丸くおさめている。外面は灰黒色、内面は黒色。**17**は口径23.0㎝。屈曲して内傾する口縁部は先端で強く外反し尖り気味に終わる。底部はやや上げ底。**18**の口径は25.4㎝。屈曲部から口縁部の立ち上がりはわずかに外湾しながら直に延びる。屈曲部外面の稜は鈍く丸みがある。口縁部外面を横ナデした後に体部下半と内面に横ミガキを加えている。堅緻な焼成だが、成形にシャープさを欠く。内外面とも黒色。**19**の口径は29.2㎝。内外面とも細かな横ミガキ、黒褐色で光沢がある。

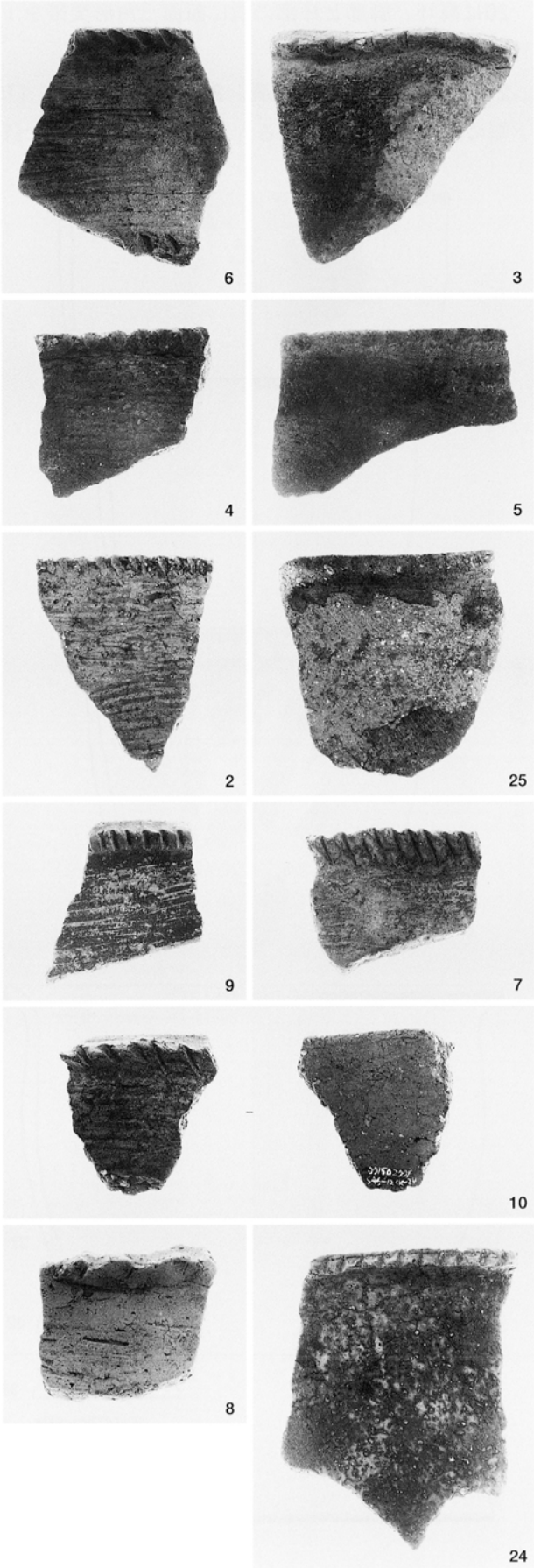


Fig.205　SK024の遺物

20は高坏。脚部と坏部の境に断面三角形突帯を１条貼り付ける。脚部は柱状ではなく開いている。外面は縦ハケ目。

21～**28**は如意形口縁の甕。**21**は口径24.0cm、口縁部の外湾はほとんどなく、斜めに切り落とした下端に鋭い刻み目を入れる。口縁部内面は横ハケ目、他はナデ調整。内面下半に炭化物付着。**22**の口

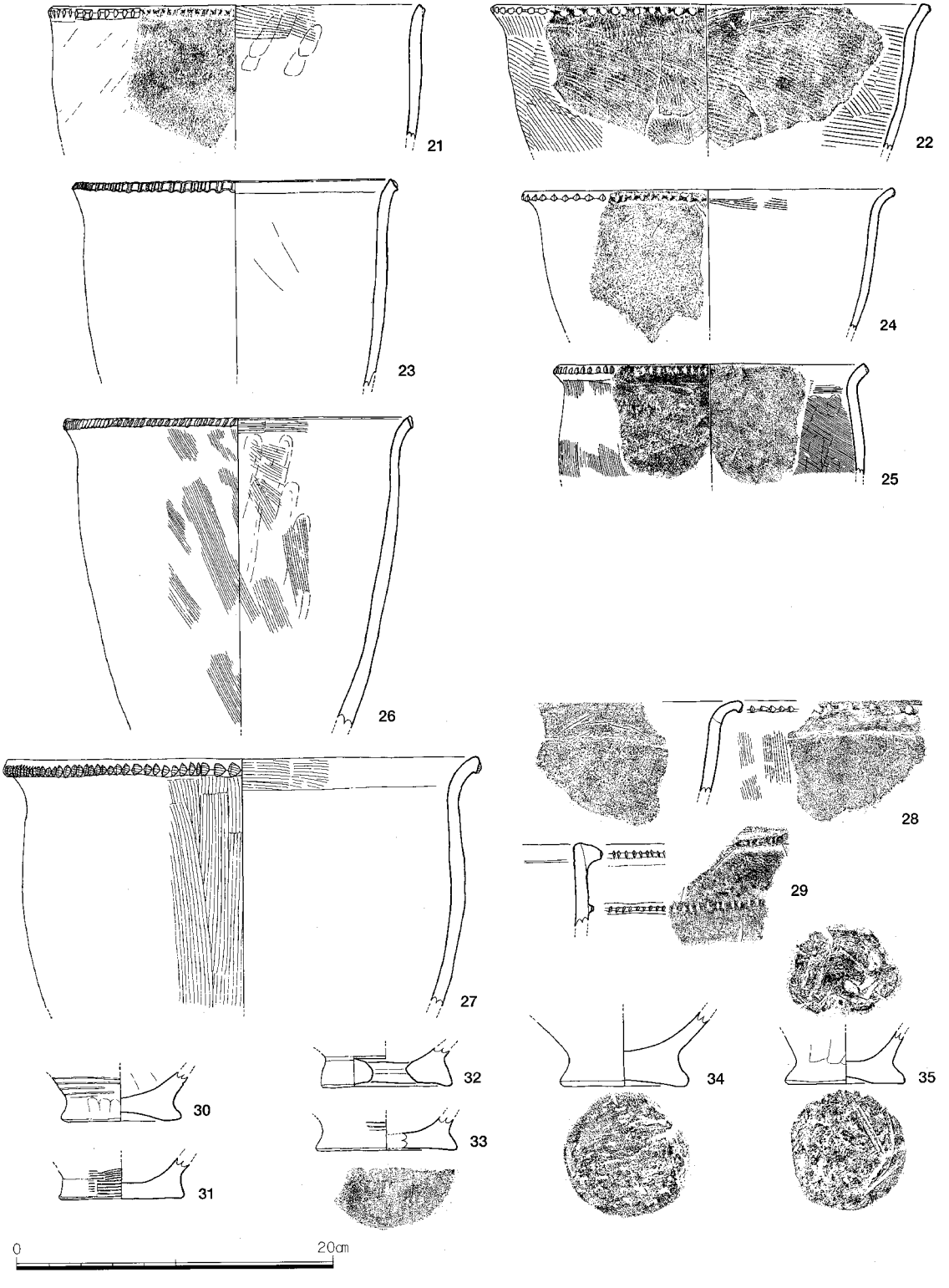


Fig.206 SK024の遺物（縮尺１/４）

径は27.8㎝。口縁部は小さく外反し、直線的に延び断面方形に近い端部となる。その下端に右方向から浅い刻み目を入れている。内外面とも板状工具による粗いハケ目調整。胎土は精良土に近くきめが細かい。外面は黒色、内面は茶色。**23**の口径は20.8㎝、微かに湾曲し端部全面に刻み目を入れる。**24**は口径23.6㎝、口縁部は小さく外湾して如意形となる。刻み目は下端のみ。**25**は如意形の口縁で、体部にわずかながら張りがある。内外面とも細かなハケ目調整。

26は口径22.2㎝、内面に炭化物、外面に煤付着。**27**は体部上方にわずかながら張りがある。口縁部の刻み目は下端のみ、工具の木目が残る。外面は縦ハケ目調整。**28**の口縁部は強く湾曲し、その端部は垂れ気味。**29**は直立する口縁端部に断面三角形の粘土紐を貼り付けている。口縁端部と突帯に右方向からの小さな刻み目。弥生時代中期前半の土器で、本土壙の中では最も新しい。

30～**35**は突帯文土器甕の底部。**30**は底径7.6㎝、外端の張り出しは強い。**31**は平底で外縁の張り出しはない。底径8.0㎝。**32**は底径8.4㎝で、焼成後の穿孔がある。**33**は底径9.0㎝、

Fig.207　遺物出土状況

Fig.208　SK024の遺物

拓影がうまく出ていないが外底はヘラ状工具で削りのように強くナデている。外縁部への張り出し強い。**34**は底径8.1cm。同じように外縁部への張り出し強く、外底も削りでわずかながら凹む。**35**は底径7.4cm、外底の凹みは中央からずれている。

36～**44**は壺。**36**は口径7.2cmの壺、胴部の最大径は14.1cm。胴部は球形ではなく玉葱状で、頸部は厚みを持たせ内傾して延び、口縁部は小さく外湾する。胴部との境には沈線が巡る。丹塗りはこの沈線部だけに残っており、全面に塗布されていたのだろう。**37**は口径12.6cm。頸部、口縁部ともに

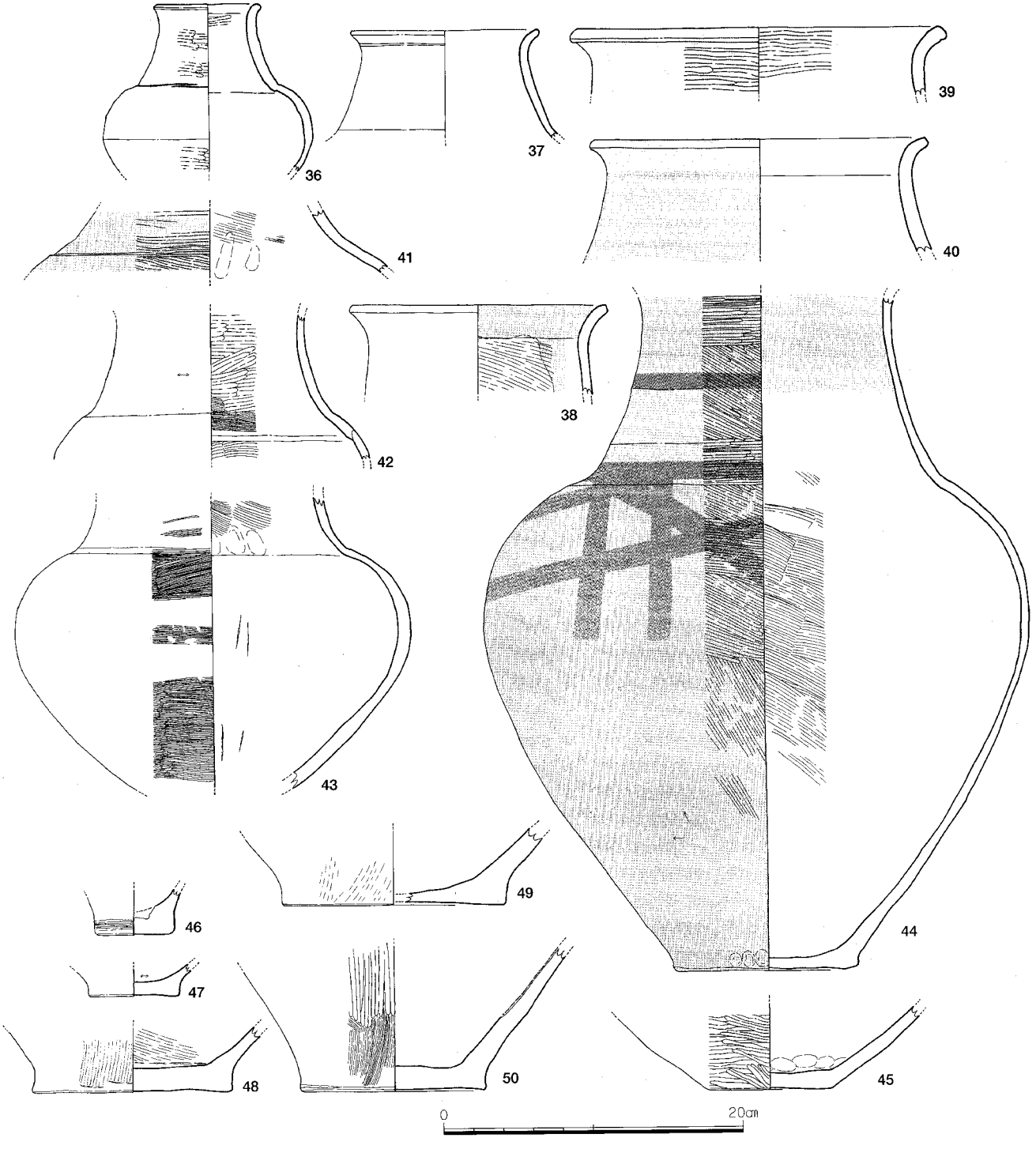


Fig.209 SK024の遺物（縮尺1/4）

明瞭な段や沈線がなく緩やかなカーブを描く。**38**は口径17.4㎝。頸部が立ち口縁部の湾曲も長い。壺にしては胎土が粗い。丹が内面にも垂れている。**39**の口径は25.2㎝。頸部が強く内傾しない器形。胎土は精良土で薄い茶色。外面から口縁部内面に丹塗り。**40**は口径22.6㎝、精良土に近い胎土で口縁部内面から外面は丹塗り。口縁部と頸部とは明瞭な段や境を付けていない。**41**は口径に比べ胴部の径が大きい器形となろう。胴部から頸部への遺構は鈍い稜がある。外面は左斜行の細かいミガキ。外面は丹塗り。**42**は長めの頸部で、内面は横ハケ目の後に横ミガキ。外面は摩滅。黒褐色。**43**は口縁部と底部を欠く。胴部は上位に張りがあり最大径は26.7㎝。外面は細かな横ミガキで黒褐色の光沢がある。頸部内面はハケ目。**44**は丸太材の間に割れた状態で出土した。惜しいことに口縁部を欠く。長めの胴部は上位に張りがあり倒卵形となる。底部は平底で胴部と同じような厚さ。胴部外面に網かごの痕跡が付いている。同じような土器は雀居遺跡第４次調査SD03溝から出土している。

45～**50**は壺の底部。**45**は底径8.2㎝。円盤状ではなく平底からそのまま大きく開く。精良土で内外とも薄い茶色。外面の横ミガキは逆時計方向で細かく丁寧である。**46**は上部が失われ器形不明。精良土が用いられ、器面調整も丁寧であることから壺の底部とした。底部外面だけ輪状に細かな横ミガキ。**47**の平底の径は5.95㎝、円盤状に近い。**48**は径13.3㎝の平底。外底部は細いヘラ状工具でナデている。外面は粗いハケ目。**49**は底径14.8㎝、砂粒の少ない胎土で、内外面は薄い灰茶色。外面の調整は細かいハケ目の後にナデを加えている。**50**は底径12.5㎝、底部から上部へ細かな縦ハケ目で、この上部は縦のミガキ。内面はナデ調整。

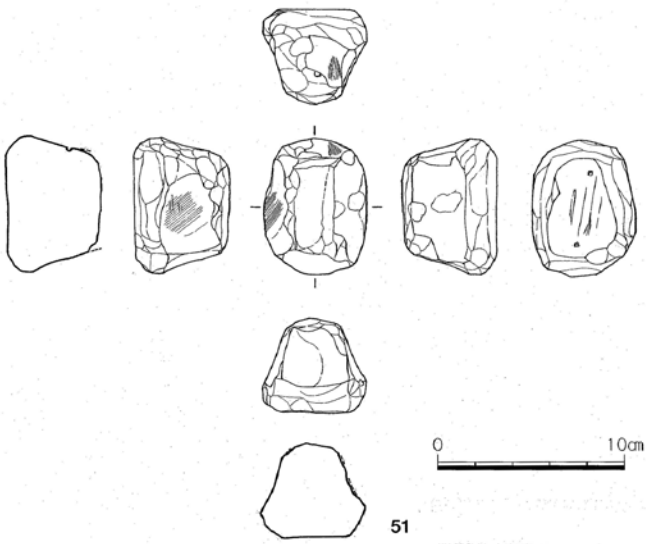


Fig.210　SK024の遺物（縮尺１/４）

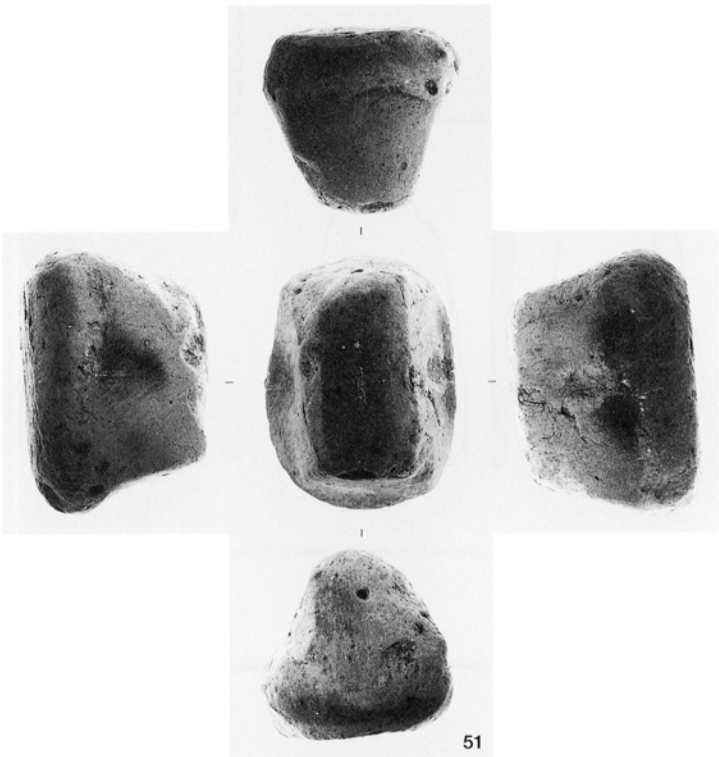


Fig.211　SK024の遺物

土製品 **51**は家型土製品。胎土に1㎜大の砂粒が含まれるが精良土に近い。焼成はよく表面は薄い灰褐色をしている。基部は5.5㎝×7.2㎝、高さ5.0㎝。長台形で頂部と底部周辺がやや摩耗していることから、頂部に棟、基部に台座などの部品が組み合うことも考えられる。

石製品 **52**は方柱状抉入片刃石斧。完形品、長さ13.8㎝、前後の主面、左右の側面とも敲打痕がよく残る。前主面は刃部以外は平坦であるが後主面は平坦でなく抉入部から刃部に向かって傾いている。前主面の抉入は敲打して幅広く浅い落ち込みを作る。またその一端は突出し紐掛けが確実にできるような細工を施している。**53**は頭部が折れているが、刃部の成形、研ぎ出しが十分でなく方柱状片刃石

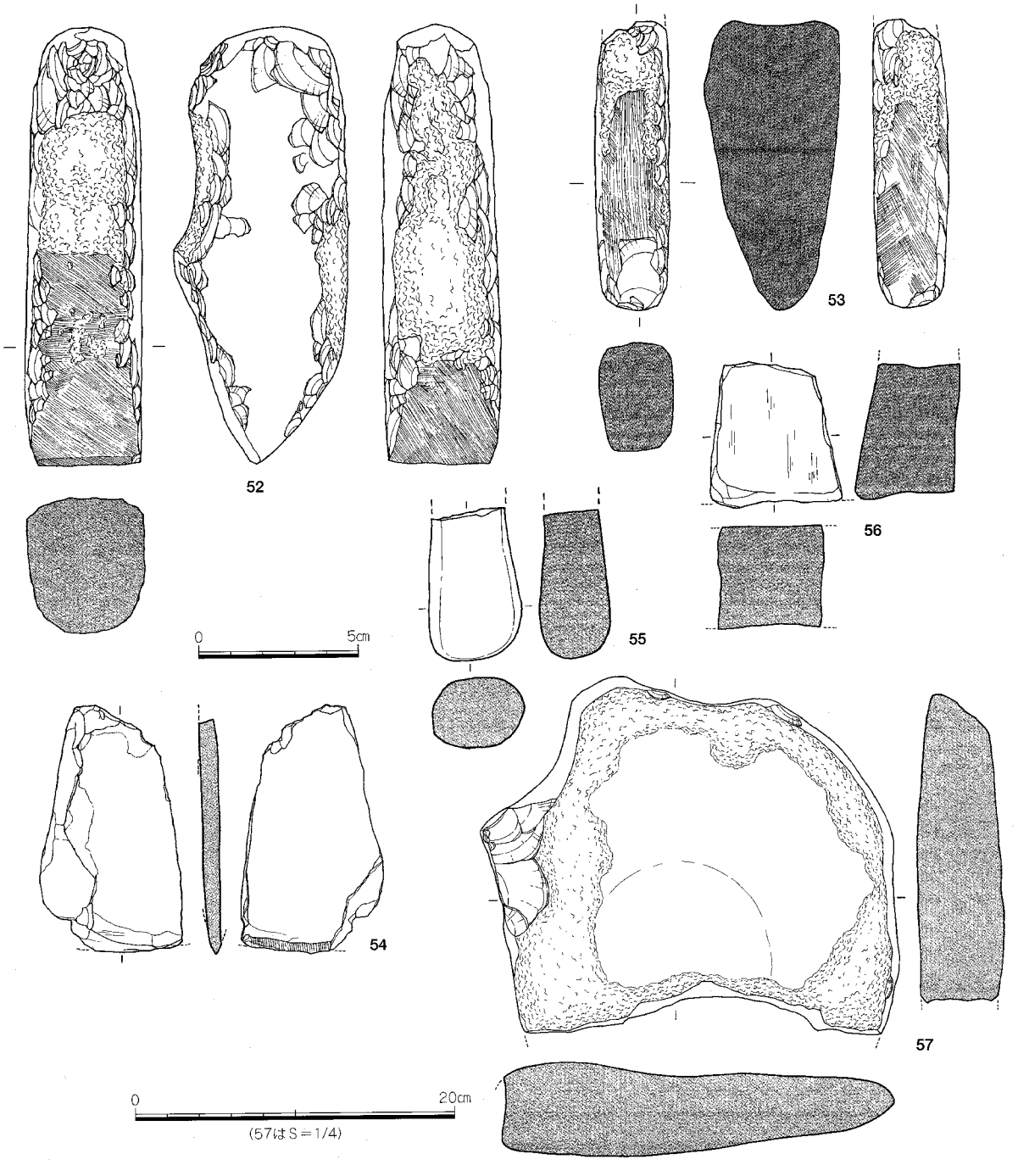
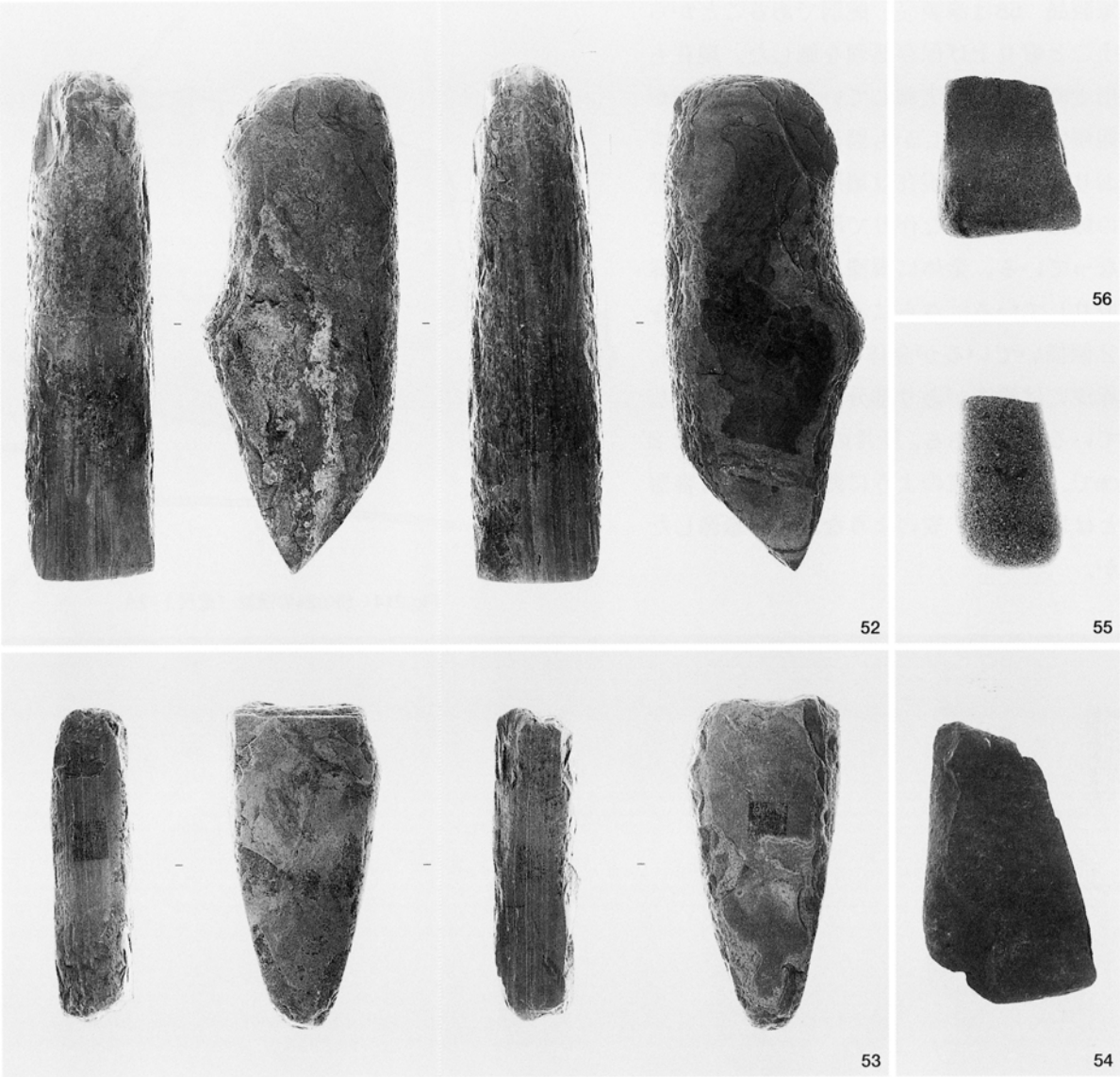


Fig.212 SK024の遺物（縮尺1/4・1/2）



斧とするには躊躇する。あるいは別の用途だったか。**54**は玄武岩質の石材。両面から研ぎ出した刃部があることから石包丁とした。この破片には紐を通す小孔の痕跡はない。**55**は棒状の自然石で全面が滑らかになっていることから磨り石とした。**56**は砂岩を用いた砥石。１面だけが研ぎ面として使用されている。**57**は最下層で出土した。図左端が欠けているが、中央部が使用で凹み滑らかになっていることから石皿とした。

Fig.213　SK024の遺物

漆製品 58は漆製品。脆弱であることから土ごと取り上げ保存処理を施した。現在も出土時のままで実測しているので、裏面が観察できない。しかも図の左側が欠損しており原形不明。現在は扇形である。弧状部の縁はシャープな作りで厚みを付けた段となっている。全体に黒漆を塗り、赤漆で縁取りしている。さらに赤漆で輪状の文様を２個描いているが全体の文様構成は不明。赤漆には濃淡があり部分的に重ね塗りをしているようである。断片の厚さは2.2～2.8㎝で、胎は樹皮のように薄いことから容器とは思えない。笠のような用途を想像したが。

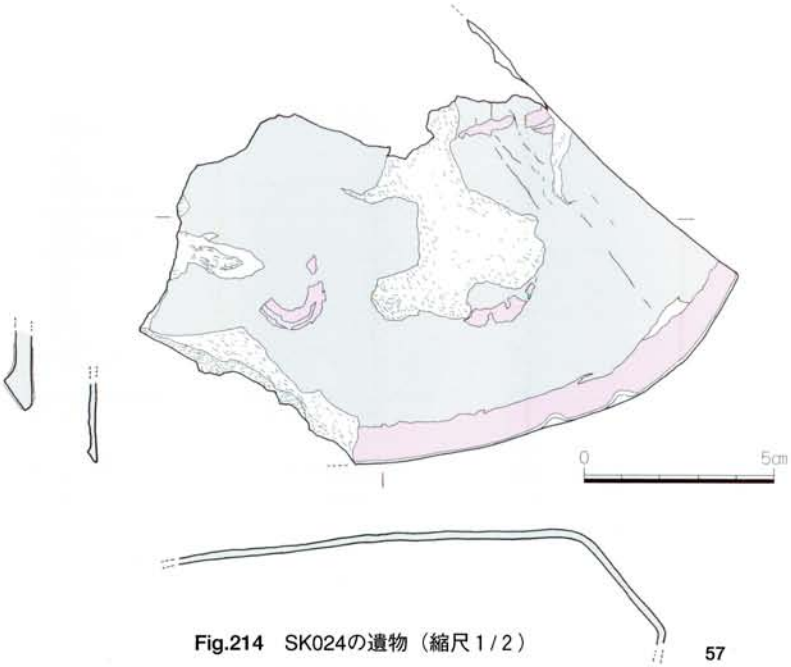


Fig.214 SK024の遺物（縮尺１/２） 57

Fig.215 SK024遺物出土状況

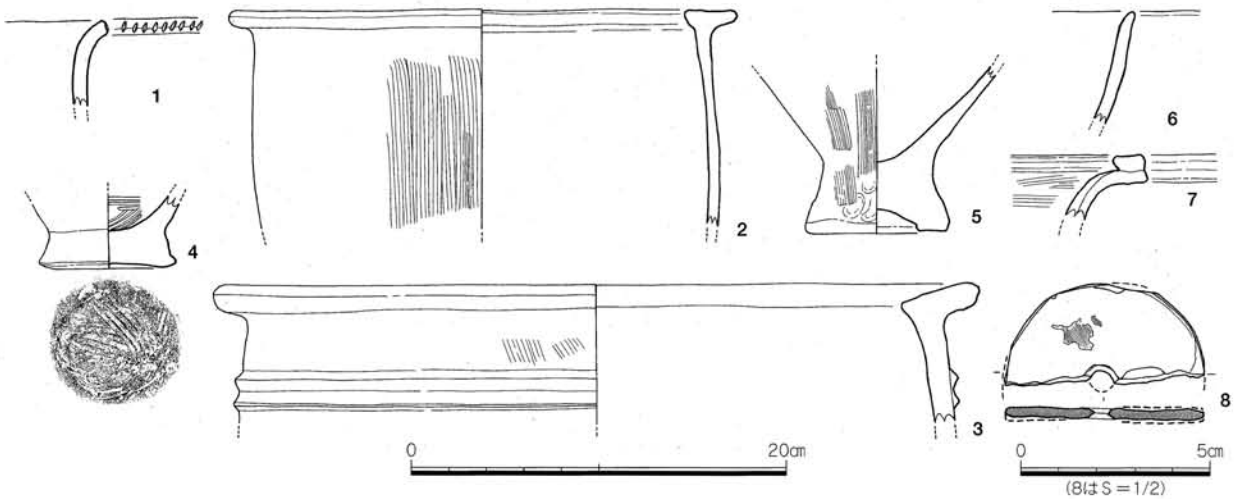


Fig.216 SK026の遺物（縮尺１/４・１/２）

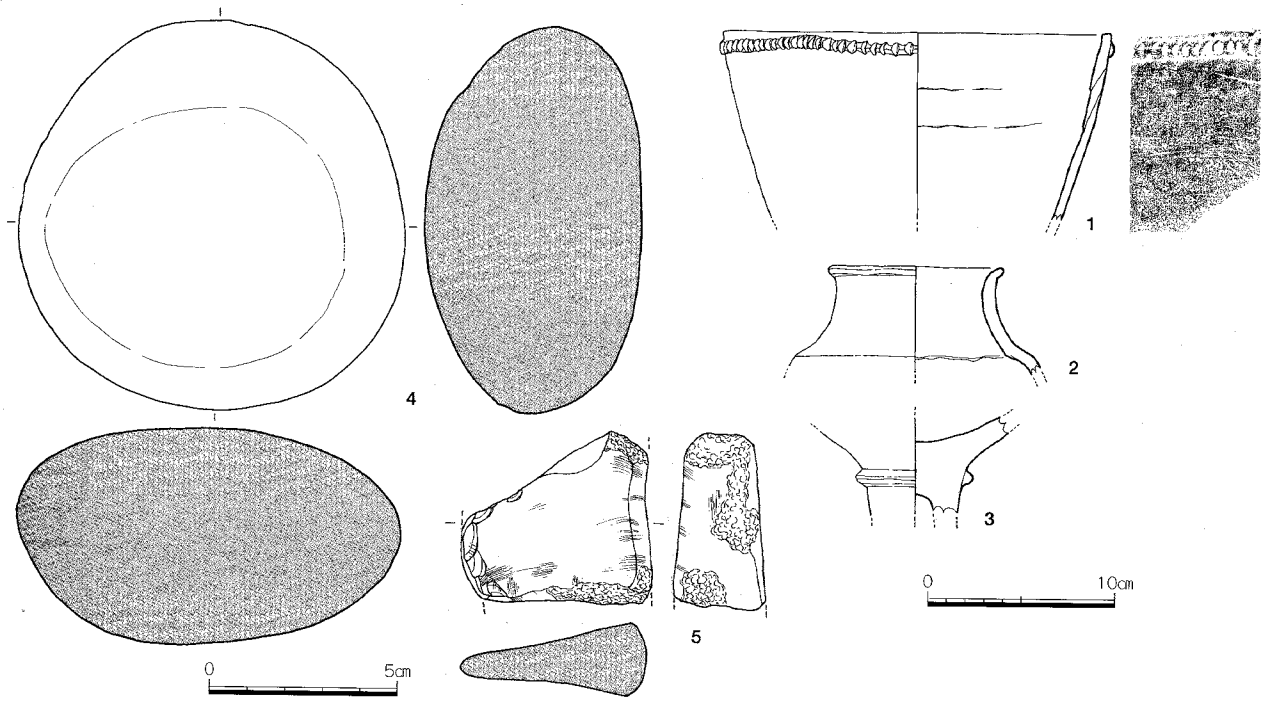


Fig.217 SK028の遺物（縮尺1/4・1/2）

第26号土壙SK026 1は甕の如意形口縁部破片。刻み目は口縁下端のみ。内外面はナデ調整。2は口径27.0cm、L字形口縁の内端は太く突出している。外面は縦ハケ目調整。内面はナデ。外縁には煤付着。口縁部に黒斑がある。3のL字形口縁上面は内傾する。口縁下方の断面三角形突帯は2条が接しM形となる。4は突帯文土器甕の底部。わすかに凹む外底は細いヘラ状工具でナデて筋状になっている。5は甕の底部。括れは強く、外底の中央は凹み外縁は輪状になる。体部外面は縦ハケ目調整。括れ部には指頭圧痕が見られる。内底には炭化物が薄く付着している。6は体部から緩やかに外湾しながら延び、端部で微かに外反し細丸断面の口縁部となる。器形は鉢か。7は壺の口縁部。強く外湾して水平になった端部の上に細い粘土紐を乗せ厚みのある口縁部を作っている。端部は口唇状となる。8は石製の紡錘車。表面の剥離が進み、一部に研磨痕が残るのみ。中央の小孔は両面穿孔。直径5.3cm。

第28号土壙SK028 1は突帯文土器の甕。口径20.6cm、胎土に2mm大の砂粒を多めに含む。焼成良好で全体の色調は薄い褐色。体部は器壁の厚みを増しながら開き、口縁端部は水平となる。突帯は口縁端より下がって貼り付けておりその断面は低いアーチ形。刻み目は左方向から密に切り込んでいる。内面には粘土紐の繋ぎ目が観察できる。外面は風化、摩耗しているが横条痕か。内面には炭化物付着。2は口径9.4cmの小壺。口縁端部は細く丸みを持たせている。内面には頸部と胴部の繋ぎ目がよく残っている。色調は暗褐色。3は高坏。坏部と脚柱部の境には断面三角形突帯を1条貼り付けている。赤褐色を呈する。4は磨り石。10.3cm×10.2cm、厚さ5.8cmの自然石の全面が消らかになっている。5は砥石。側面以外の3面が研ぎ面として使用されている。

第29号土壙SK029 1の体部は中位で屈曲して直に延び口縁部となる。突帯は口縁外端に接して貼り付け、右方向から刻み目を入れている。屈曲部の突帯も同様である。外面は横条痕、内面はナデ調整。この甕の特徴は口縁部が2か所で欠けており、ここにも煤が付着していることから当時欠けたままで使用した、あるいは片口のような目的で意図的に打ち欠いたと推測されることである。口径23.3cm。

2は口径19.1cm、口縁部は微かに外湾し、外端に断面U形の刻み目を入れる。内外面とも雑なハケ目調整。**3**の口縁部は強く外湾している。刻み目は口縁端の下端から中位に及ぶ。外面には煤、内面下半には炭化物が付着している。口径26.4cm。**4**はさらに口縁部の外湾が強い。口径24.7cm、口縁端部は丸く、刻み目はない。**5**はL字形口縁。上面はわずかに内傾し、内側に小さく突出している。**6**は小さなL字形口縁の甕。外端部はやや垂れ気味。この口縁に接するようにハケ目調整。**7**は平底の底部で強く括れている。底径7.8cm。**8**は小壺。厚い底部に扁球状の胴部が付く。胴部最大径7.5cm。**9**は口縁部だけ器壁を厚くし砂段を付けている。細かな横ミガキで丹塗り。**10**は底径12.2cm、外面には細かな縦ハケ目の調整後に丹塗りを施す。**11**は椀形の器形で口径16.8cm。底部は円盤状で径6.6cm。内外面とも細かな横ミガキ。**12**は如意形の口縁部を厚くした鉢。口径33.8cm。厚くした部分は三角

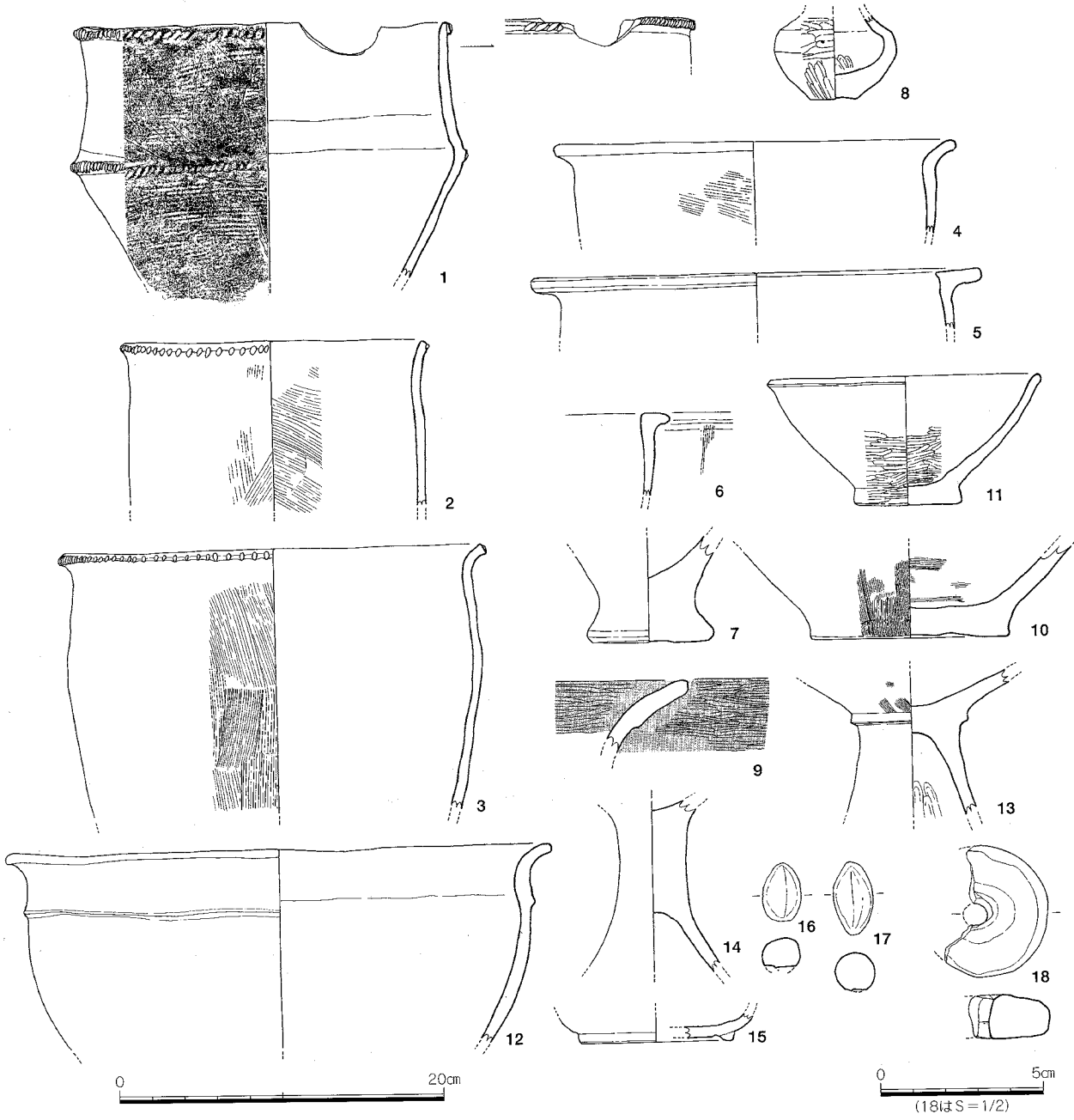


Fig.218 SK029の遺物（縮尺1/4・1/2）

形状に突出した形状となる。 **13**は高坏。坏部と脚柱部の境に１条の断面三角形突帯。**14**も高坏脚柱部。時期的に新しいか。**15**は上部からの混入。高台付きの坏身。高台は断面逆台形。**16**、**17**は投弾。**16**は一端が丸くなり尖っていない。**18**は土製紡錘車。直径4.1㎝。

第31号土壙SK031 Q34グリッドの西寄りに位置する。隅丸長方形に近い楕円形で長軸をほぼ南北方向に取る。長軸276㎝、短軸167㎝、壙底はほぼ平坦で深さは17㎝を測る。

1は突帯文土器の甕。突帯は断面三角形で細い棒状工具で真上から押さえている。外面は横条痕。**2**は如意形口縁の甕。口径20.4㎝、刻み目は口縁端部の中央に右側から入れている。外面の調整は口縁直下が縦のハケ目、その下方は左斜行のハケ目。内面も上半はハケ目。下半はナデ。外面に煤付着。**3**の如意形口縁は器壁が薄く、口縁端部は断面方形となる。刻み目は下端に間隔を開けて入れる。内外面ともナデ調整。**4**の湾曲はほとんどなく直線的な口縁部となる。端部下端に小さな刻み目。外面は縦の細いハケ目調整。**5**は平底の底部。外面は縦ハケ目。

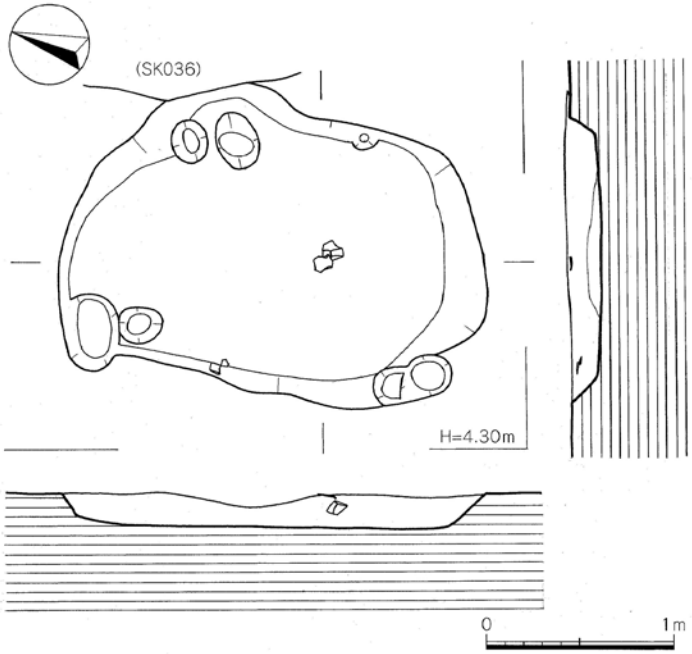


Fig.219 SK031実測図（縮尺１/40）

Fig.220 発掘作業風景（北拡張区）

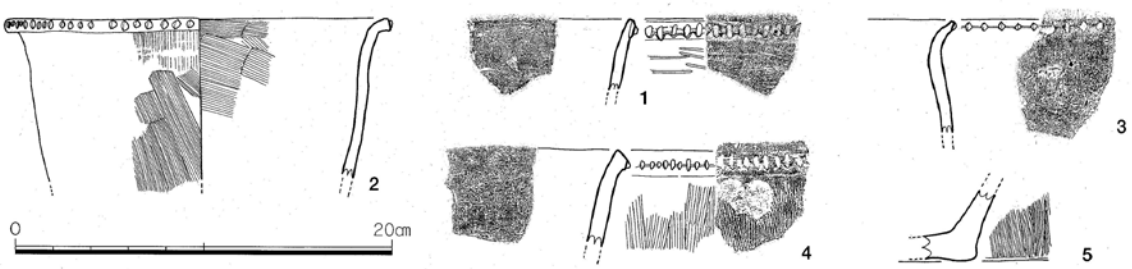


Fig.221 SK031の遺物（縮尺１/４）

第32号土壙SK032 R34グリッド、SK031の南西側に隣接し、長軸の方向をほぼ同じくする。長軸167㎝、短軸91㎝の楕円形で東側が凹んでいる。壙底は凹凸があり中央部が最も深い。遺物は壙底近くと埋め土の上部から出土している。

1は突帯文土器の甕。体部はほとんど湾曲しないで延び口縁部となる。突帯は口縁端から下がって貼り付けている。刻み目は横楕円形で間隔なく連続する。外面は横条痕。内面はナデ。

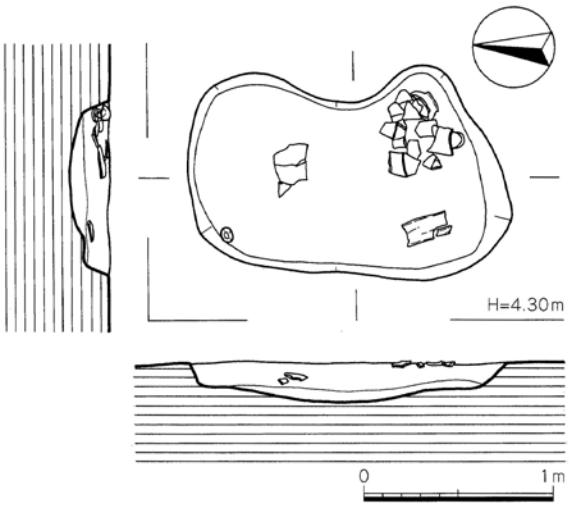
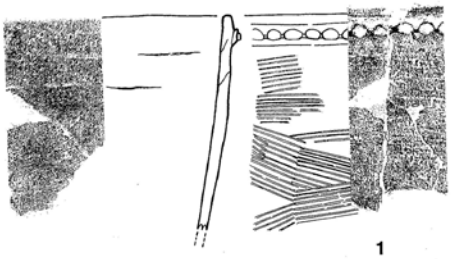


Fig.222 SK032実測図（縮尺1/40）



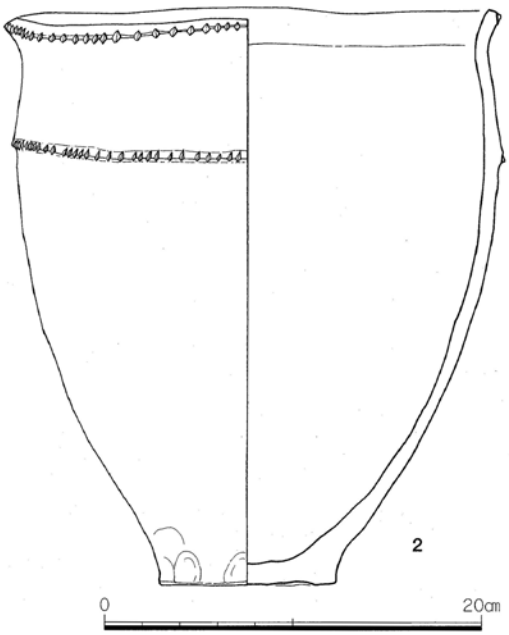


Fig.223 SK032の遺物（縮尺1/4）

Fig.224 SK032の遺物

2は土壙の南東隅に潰れた状況で出土。接合してほぼ完形品となった。口径26.2㎝、底径9.2㎝、器高30.6㎝。体部の上半で器壁を厚く段を作り口縁部へと続く。口縁部は小さく外湾し、端部断面は方形となる。刻み目は下端のみで、間隔、大きさとも不揃い。体部の刻み目も同じように左方向から切り込んでいる。内外面ともナデ調整。外面に煤付着。内面は黒色に変色している。炭化物か。

第35号土壙SK035 Z30グリッドの中央に位置する。長軸が東西方向で、すぐ東にはSK024がずれているが方向を同じくして並んでいる。平面プランは長楕円形で長軸492㎝、短軸164㎝、中央がやや折れ曲がっている。埋め土はやや灰色を帯びた黒色粘質土で、遺物は埋め土の中程から上部にかけて包含され、2個の完形の甕も出土した。突帯文土器から弥生時代前期後半までの時期を示している。SK024と同じように木材が出土しており、砂層にできた落ち込みに遺物が堆積したと思われる。

1～**10**は突帯文土器の甕。**1**は口径21.8㎝、体部端部は微かに摘み出したようにして口縁部としている。突帯の貼り付けはなく外面は横条痕で埋めている。**7**は口径20.0㎝、屈曲部は体部の中位にあり、上部は直に立ち、端部でわずかに外湾している。突帯は幅広で刻み目は深い。外面の横条痕は口縁下から逆時計回り方向で２段付け、下方に移動して器面調整している。**8**は同じように屈曲部より上半が長く延びており、湾曲が強い。口径21.6㎝、口縁下の突帯は小さく、屈曲部には突帯の貼り付けはない。下半は横条痕の後にさらに左斜行の条痕を重ねている。**11**、**12**は突帯文土器甕の底部。

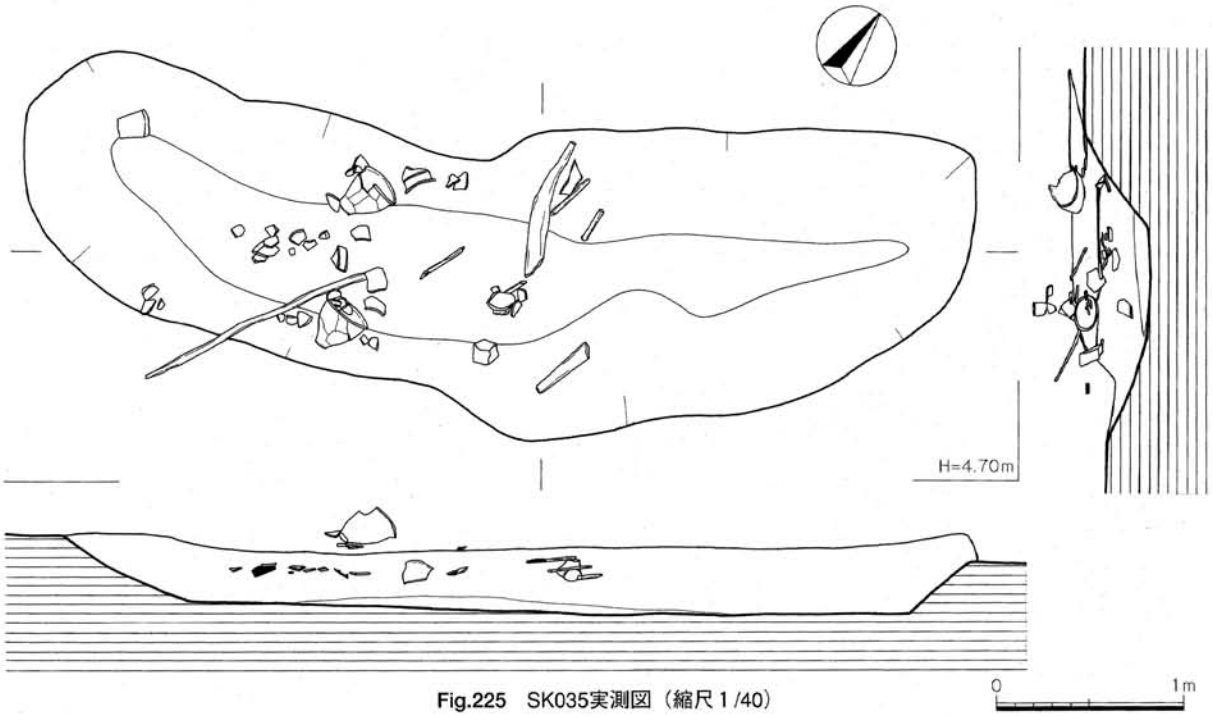


Fig.225 SK035実測図（縮尺１/40）

Fig.226 SK035の遺物出土状況

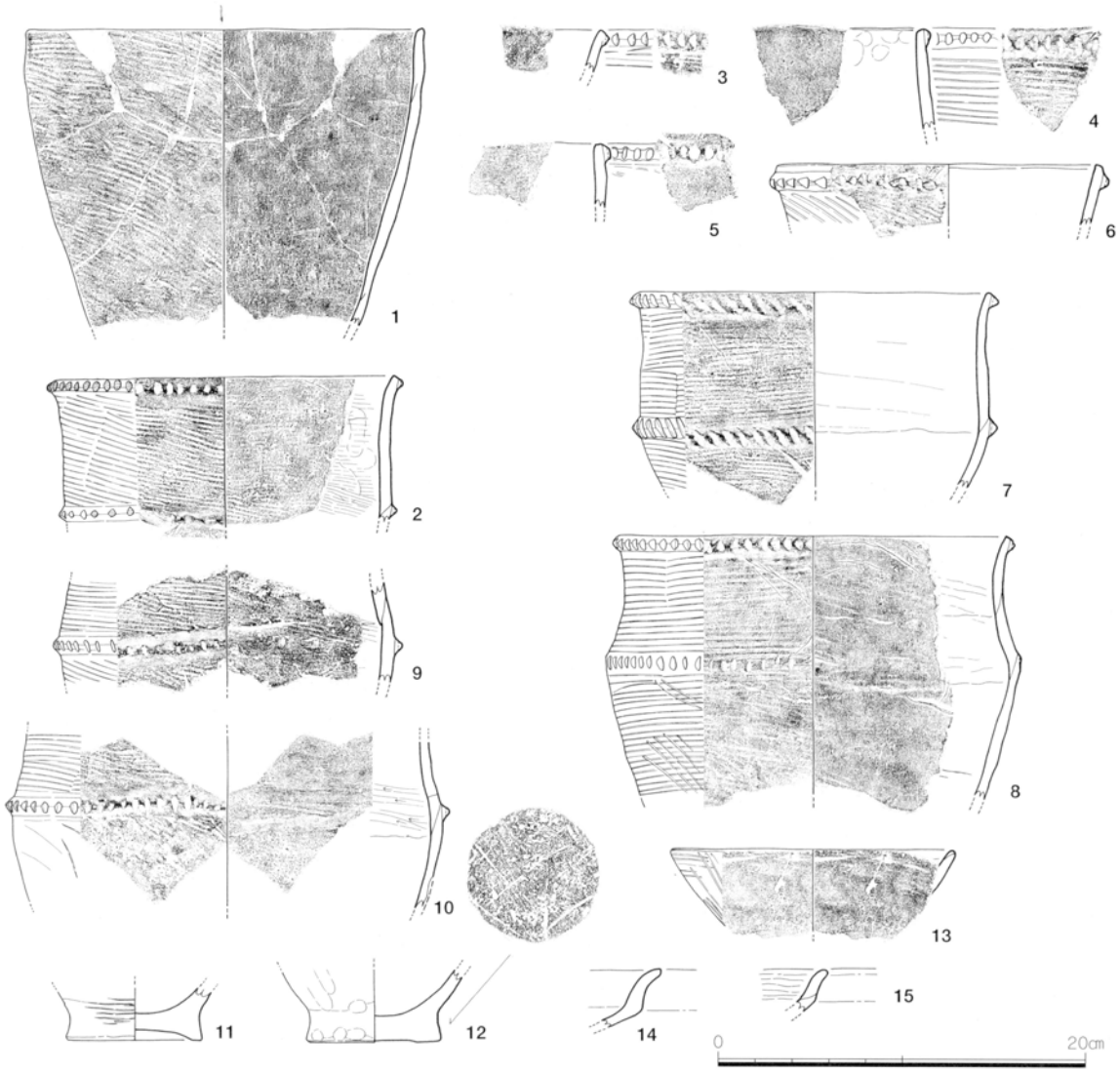


Fig.227　SK035の遺物（縮尺 1 / 4 ）

Fig.228　SK035の遺物

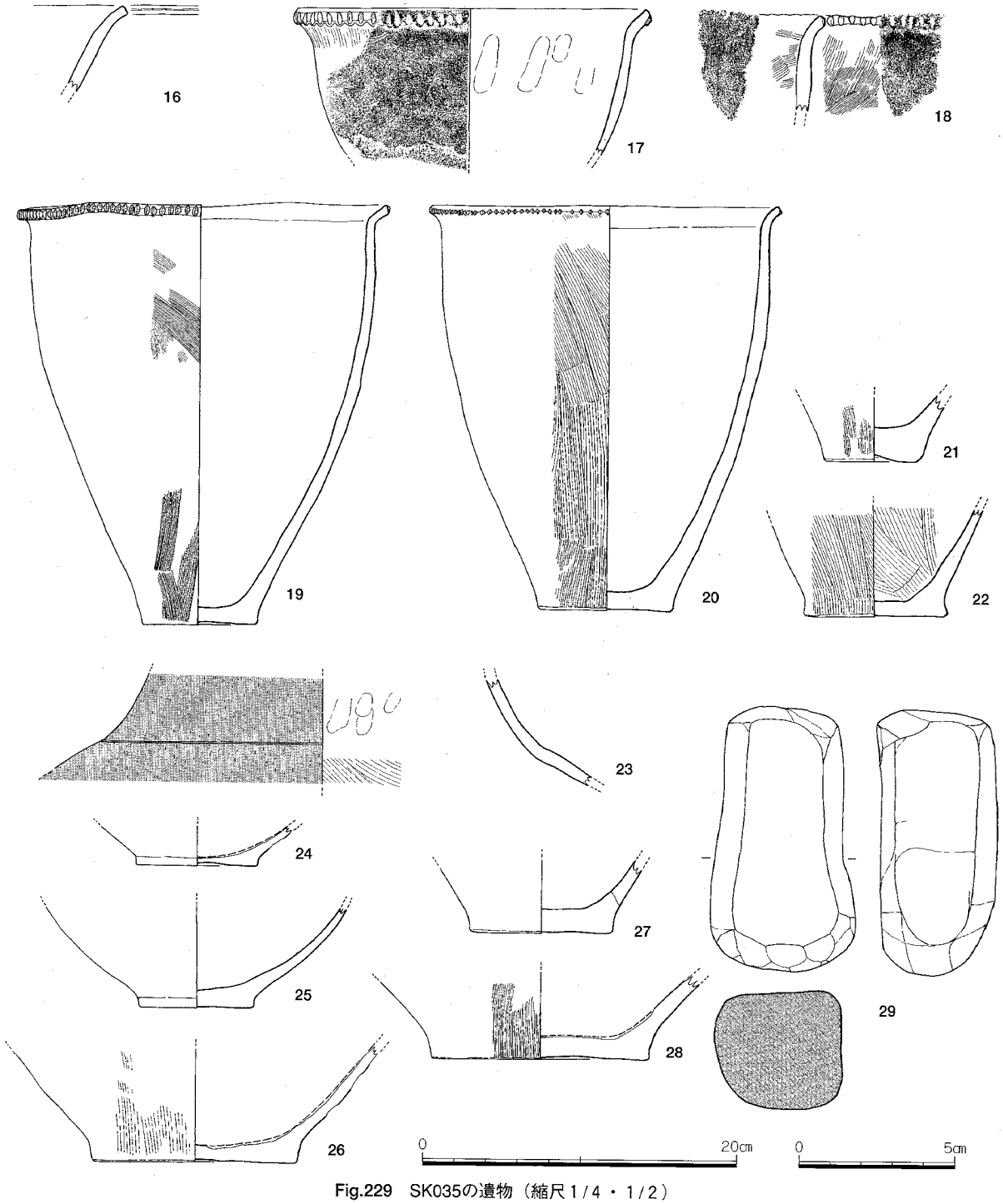


Fig.229 SK035の遺物（縮尺1/4・1/2）

12は底径7.4cm、平底で木葉痕が残る。**13**～**17**は鉢。**13**は口径15.4cm、小型の鉢。外面は甕と同じような横条痕調整。精良土が用いられている。**14**、**15**は体部上位で屈曲し外湾する短い口縁部が付く浅鉢。**17**は口径22.8cm、球状の体部上端が外反し端部をわずかに内側に曲げて口縁部とする。外面に断面台形の突帯を貼り付け細い棒状工具で刻み目を左より入れている。**18**～**20**は弥生時代前期の如意形口縁の甕。**19**は口径23.7cm、器高27.0cm。体部に張りはほとんどなく、上半はわずかに内に倒れ、口縁部は強く屈曲する。刻み目は口縁端部の上端近くまで達している。**20**は口径22.4cm、器高25.9cm。**19**に比べ器壁が厚い作りで、口縁部の湾曲は弱く短い。刻み目は下端のみに入れ細かい。２点とも外面底部より1/4程には煤は付着していない。火熱の穂先が当たらない据え方だったのだろう。**21**、**22**は甕底部。**23**～**28**は壺の胴部と底部。**29**は小型の砥石。

第36号土壙SK036

Q34グリッド、溝状の長楕円形で北端部は発掘区外に出ている。完形土器など弥生時代中期前半の遺物が出土。**1**は壺、口径9.2㎝、器高17.5㎝。胴部は円球形。**2**は広口壺で分厚い器壁。**3**は扁平片刃石斧。斜行の研磨痕がよく残っている。

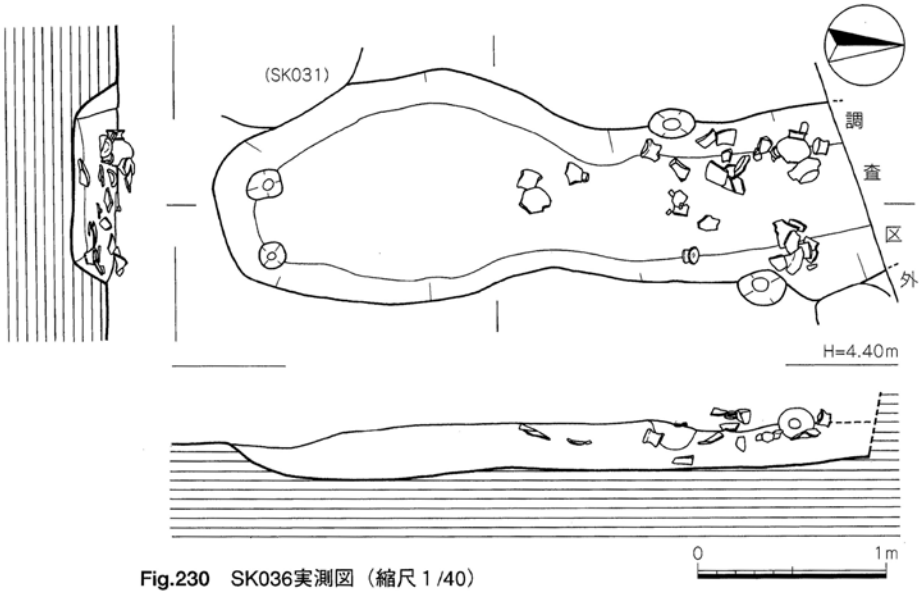


Fig.230 SK036実測図（縮尺1/40）

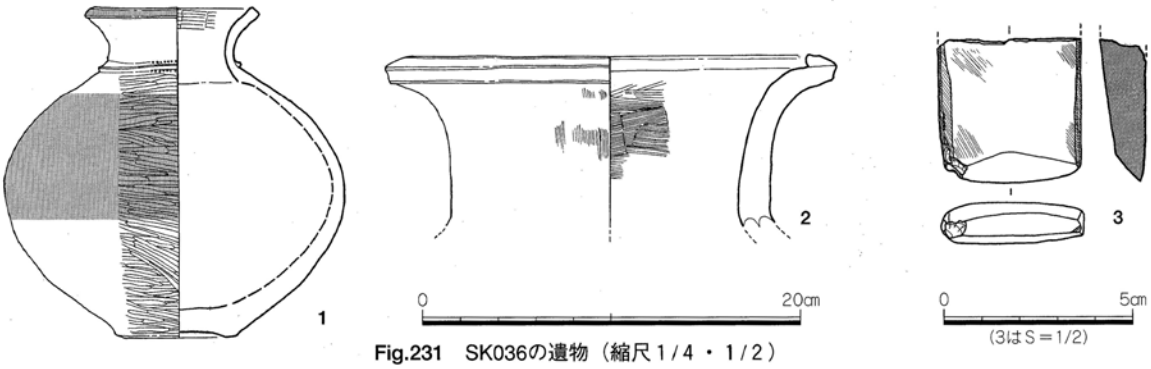


Fig.231 SK036の遺物（縮尺1/4・1/2）

Fig.232 SK036の遺物

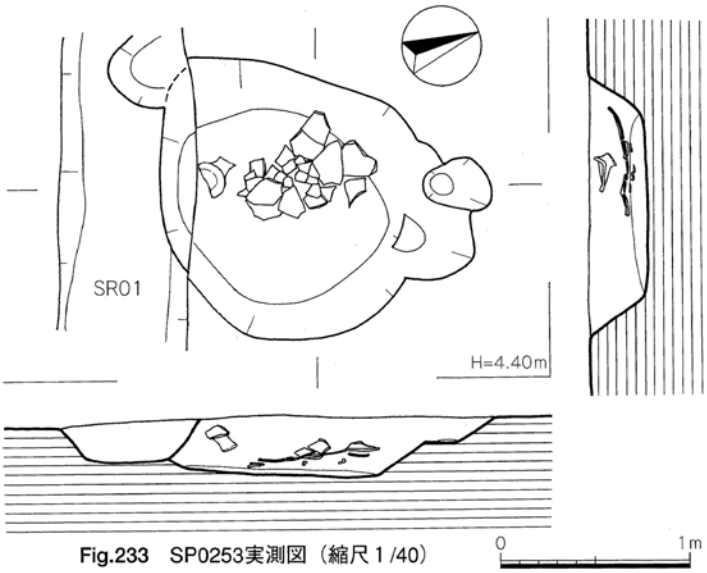


Fig.233 SP0253実測図（縮尺1/40）

第253号ピットSP0253 R31グリッドにあり方形周溝SR01に切られている。長軸164㎝、短軸140㎝の楕円形プラン。壙底近くで大きめの壺が潰れた状況で出土した。**1**は壺の胴部だけで、出土時には頸部より上半と底部は失われている。最大径が上位にあり無花果状の器形である。最大径は43.8㎝。2㎜大の砂粒を多く含み精良土ではない。焼成は良く薄い褐色を呈する。黒斑が外面の半分を占める。**2**は弥生時代中期前半の甕底部。括れは強く、外底中央は深く凹む。外面の縦ハケ目は、強く押さえながら調整している外面が薄い褐色、内面は黒褐色。

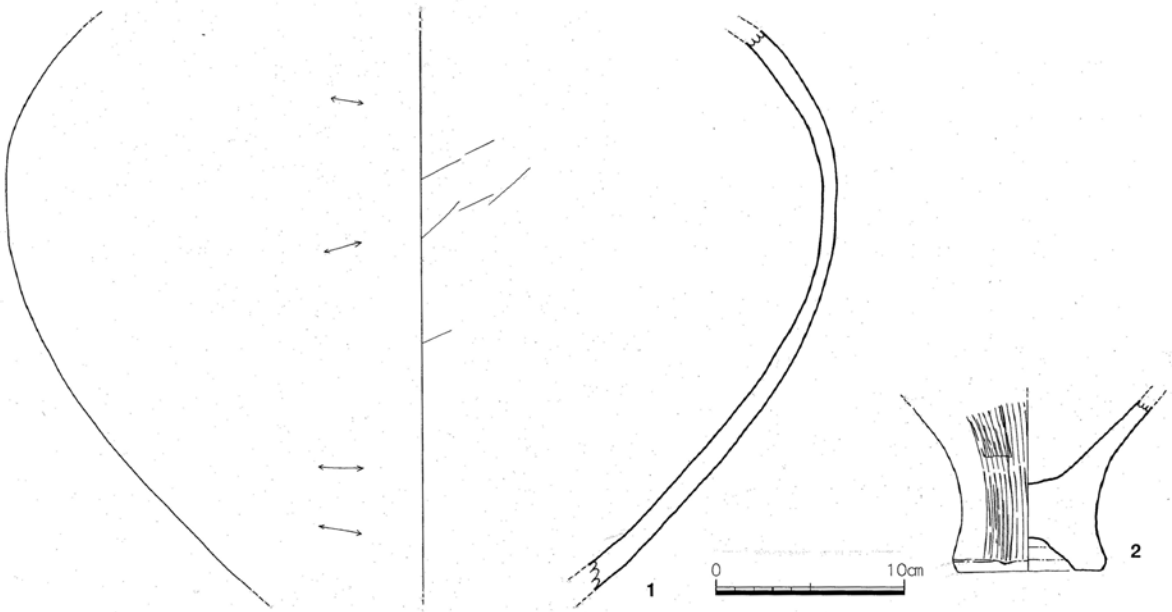
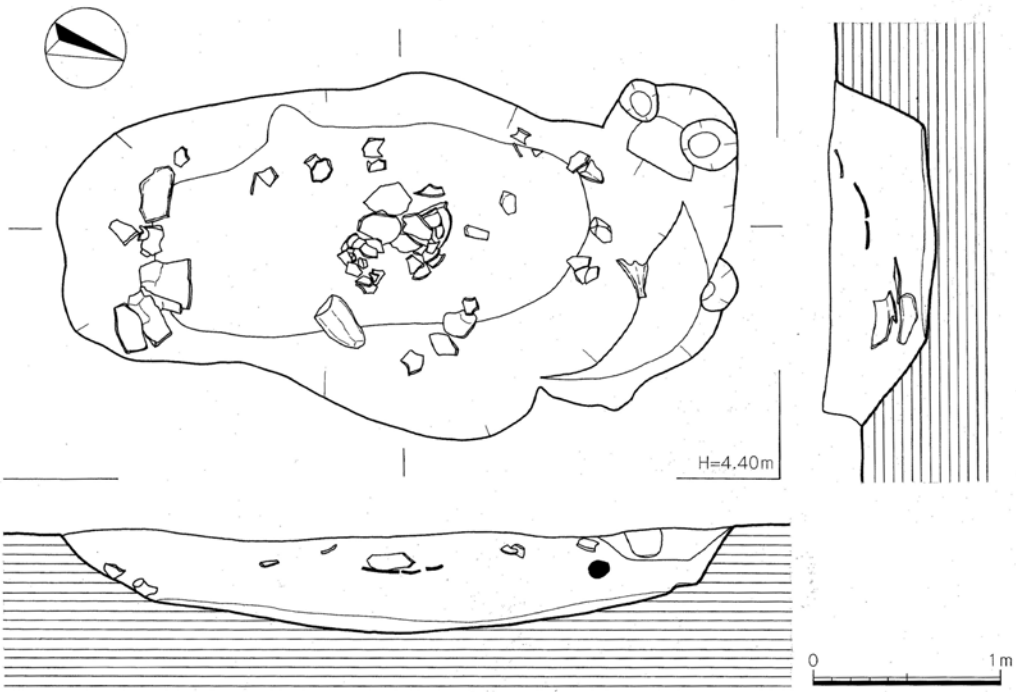


Fig.234 SP0253の遺物（縮尺1/4）



▲Fig.235 SP0264実測図（縮尺1/40）

Fig.236 SP0264

第264号ピットSP0264 R24グリッドの西寄りにあり、SC01の西側約2mに位置する。長軸が南北方向の長楕円形プラン。長軸3.6m、短軸1.8m、深さ62cmを測る。壙底は中央部に向かって緩やかに深さを増す。遺物は埋め土の上下に分散して出土し、弥生時代前期後半から中期前半の土器の他に動物骨がある。

1は口径23.6cm、やや細身の体部で上位に張りがある。全体に厚みの器壁で、上半から口縁部にかけてさ

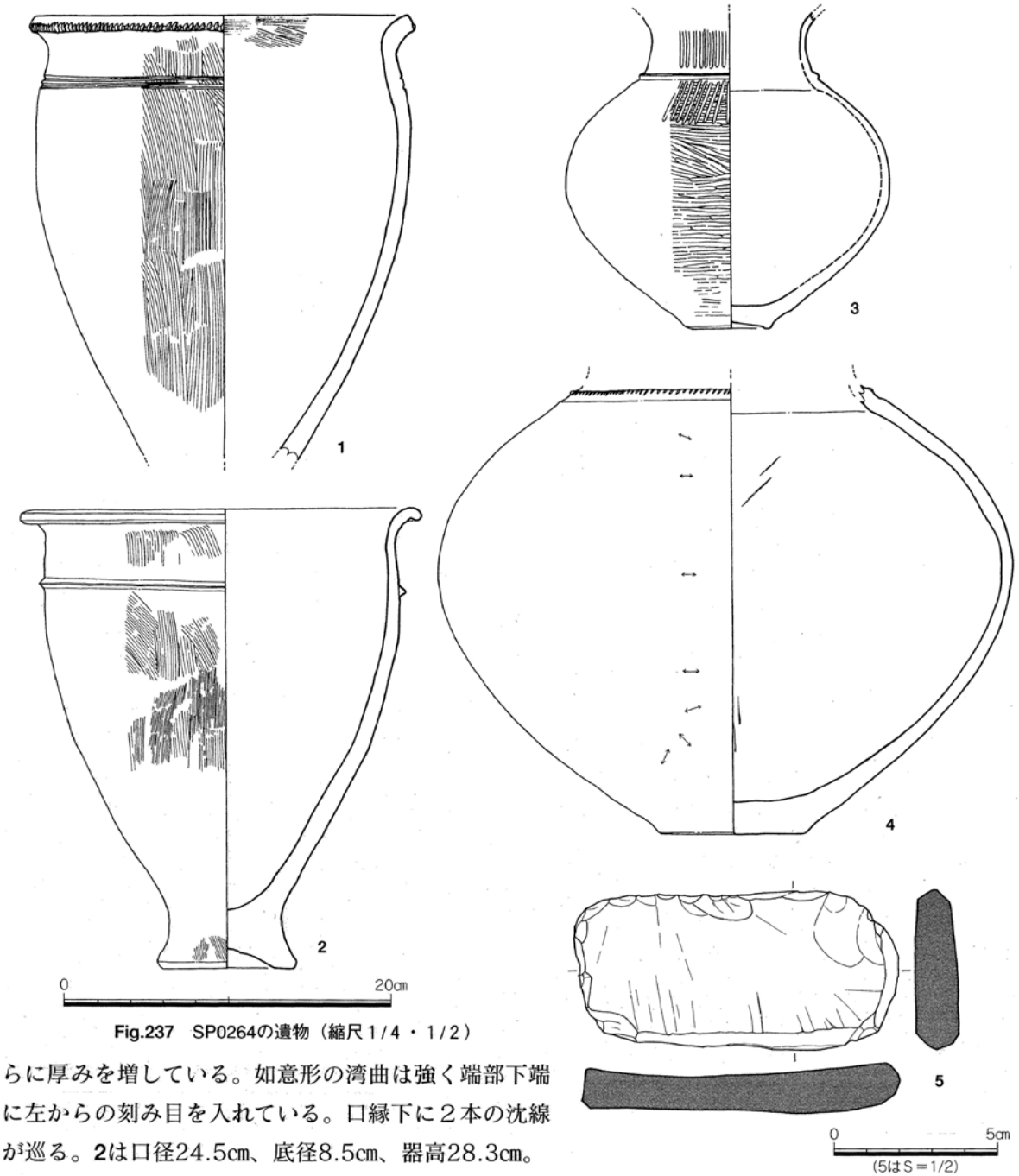


Fig.237 SP0264の遺物（縮尺1/4・1/2）

らに厚みを増している。如意形の湾曲は強く端部下端に左からの刻み目を入れている。口縁下に２本の沈線が巡る。**2**は口径24.5cm、底径8.5cm、器高28.3cm。最大径は体部上位にあり、これより上方は内傾せず口縁部へ延びる。口縁部は強く外湾し、端部でさらに下方に小さく湾曲している。体部外面の縦ハケ目調整後に断面三角形突帯を１条貼り付けている。底部の括れは強く、外縁の張り出しも大きい。**3**は半球状の胴部に頸部が緩やかに伸びている。頸部との境には小さな断面三角形突帯。胴部外面は細かな横ミガキ、頸部から胴部上半にかけて暗文風の縦ミガキ。丹塗り痕が一部に残る。**4**は**3**の壺を大きくしたような器形。胴部はやや扁球状となり34.9cmの最大径は胴部のちょうど中位にくる。**5**は長方形の板状で、図表面を研磨しているだけで特別な加工はない。用途不明。

Fig.238 SP0264の遺物

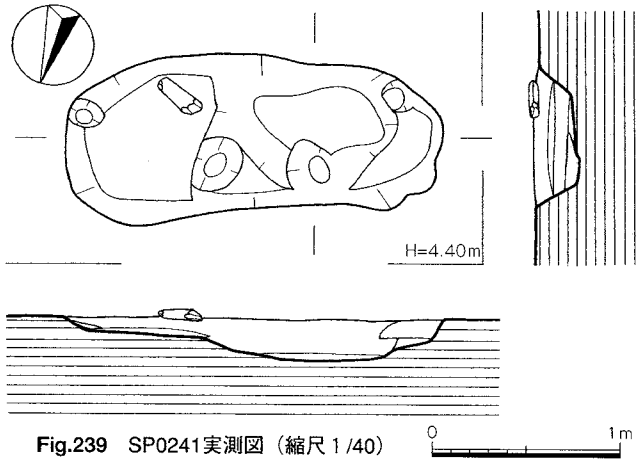


Fig.239 SP0241実測図（縮尺1/40）

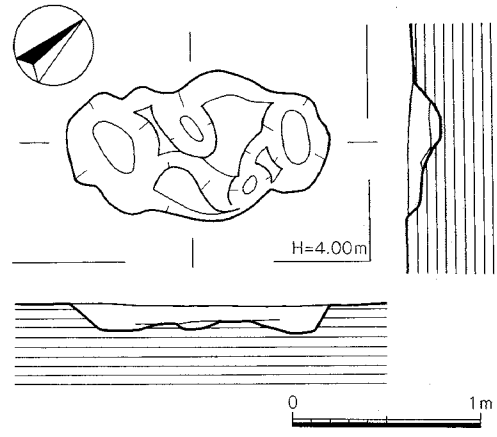


Fig.240 SP542実測図（縮尺1/40）

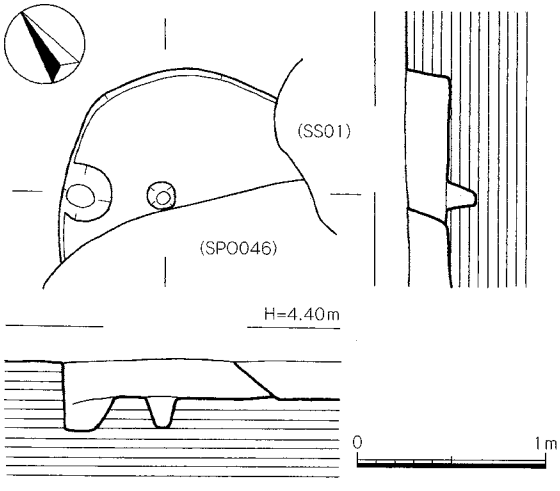


Fig.241 SP0038実測図（縮尺1/40）

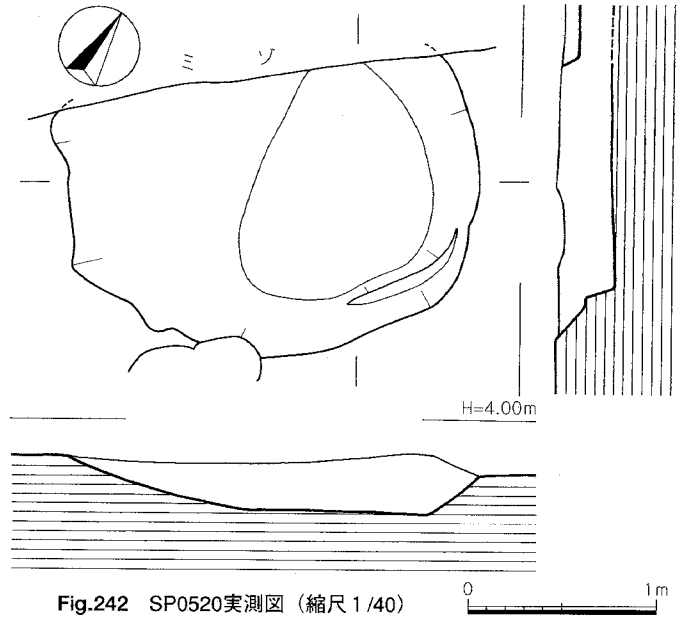


Fig.242 SP0520実測図（縮尺1/40）

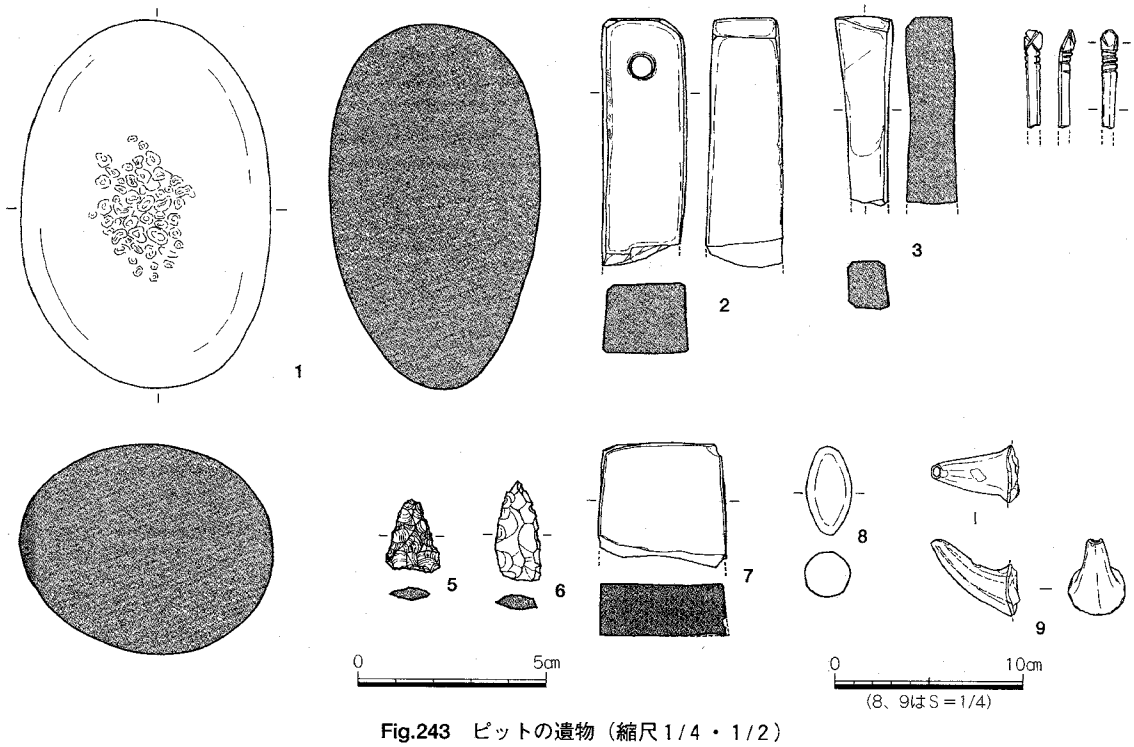
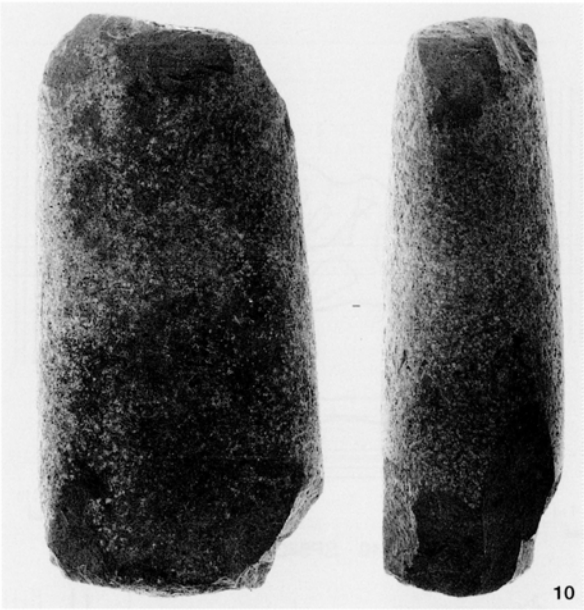


Fig.243 ピットの遺物（縮尺1/4・1/2）



ピット　土器や動物骨などの遺物が数点出土した土壙、ピットと実測した遺物についてまとめた。ここでは骨角器と木製品について記述する。なおすべての遺構図は掲載していないので、裏表紙に折り込んでいる全体図を参照していただきたい。

4はピットSP0058より出土。国立歴史民俗博物館西本豊弘教授によると鹿角製で、断面円形の棒状に加工し、図上端は内側を平坦にし反らせている。右図には縦３条、横４条の沈線を彫り込んでいる。平坦にした裏面には×字の溝がある。被熱

◀Fig.244　ピットの遺物

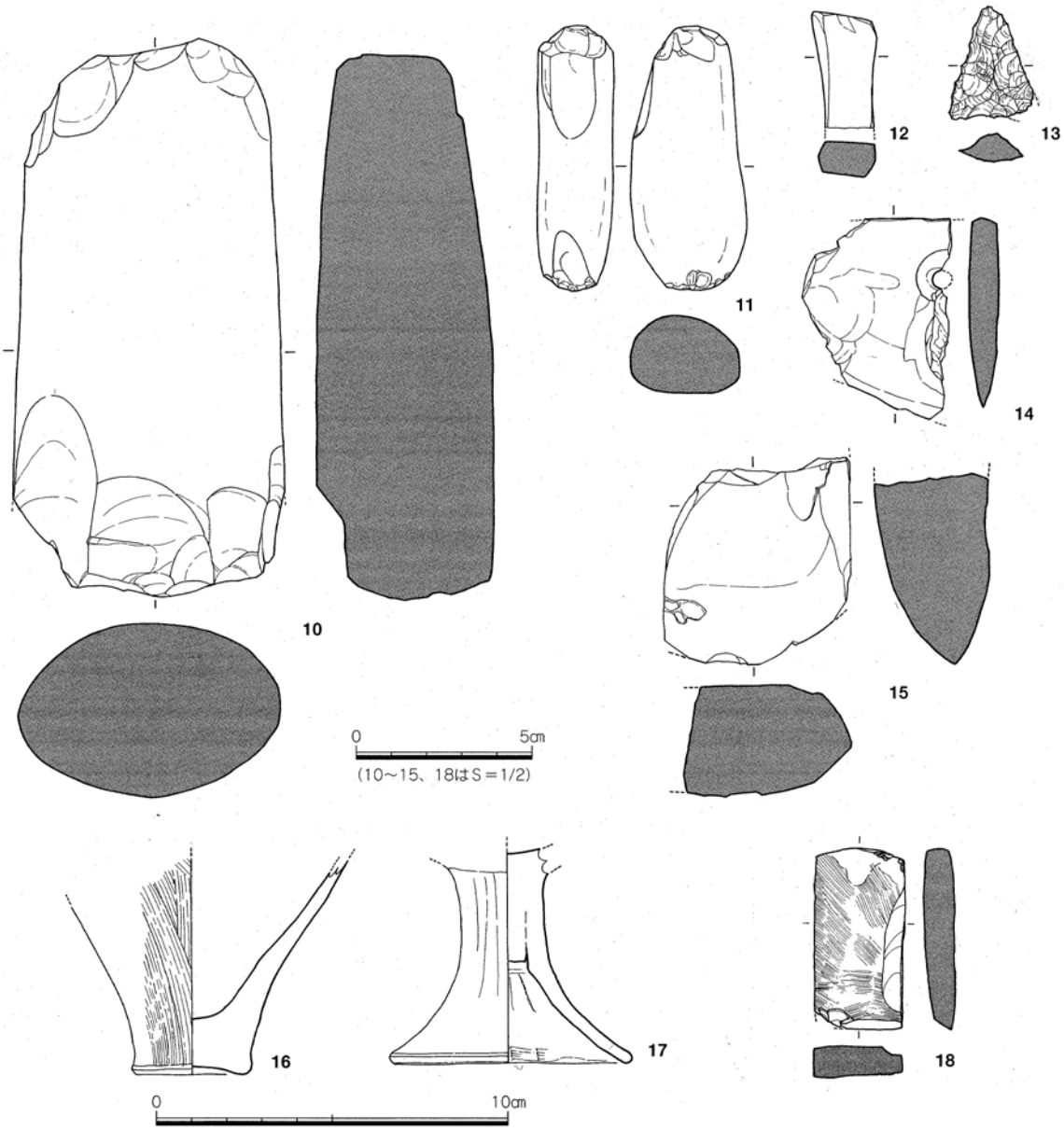


Fig.245　ピットの遺物（縮尺1/4・1/2）

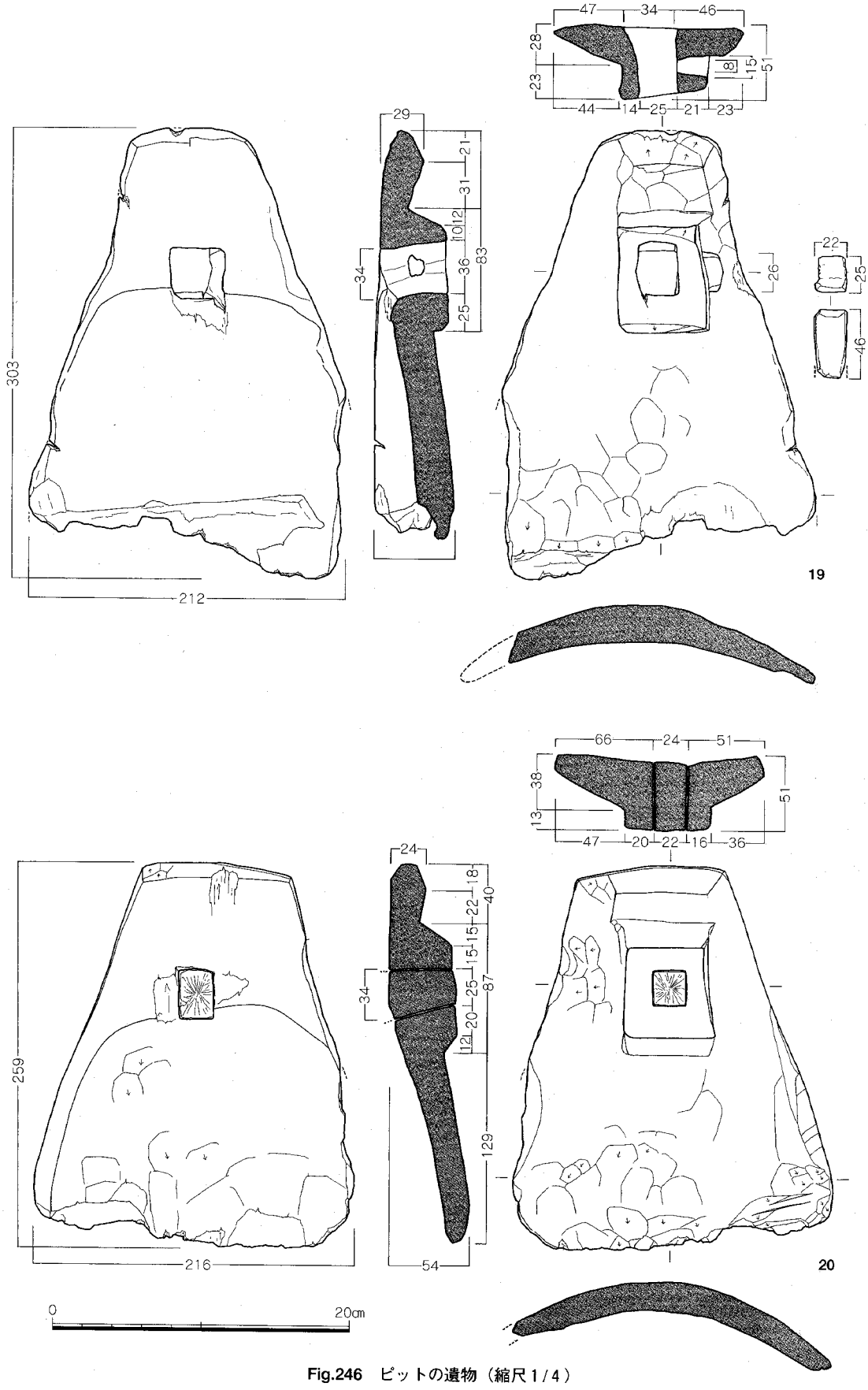


Fig.246 ピットの遺物（縮尺1/4）

のために白色化している。図下端を欠いており原形不明だが骨針とかヘアピンなどの用途が考えられる。

19、**20**はSP0046より２枚が折り重なって出土した。SP0046はR29グリッドに位置し、径340㎝×330㎝、深さ13㎝の大きさである。２つの平鍬の形状、作りともにいかにも鈍重な印象を受ける。身の形状は背の高い台形。横断面は手前側に湾曲している。身上位に縦長方形の柄孔隆起部を削り出し、その中央には身に対してほぼ直角に方形柄孔を穿っている。柄が挿入されたまま残っていた。また左図に示しているようにこの隆起部の右長辺側から柄に対して直角に小孔がある。ここに楔を打ち込み柄を固定するのか。この他に通常の身の削り加工痕は明瞭に残り、刃部の欠損も使用によると思われるが、柄孔が身の中心線に位置していないこと。身が相当に厚いことなど、実際の農、土木作業に当たってはけっして使い勝手のいい鍬だたとは思えない。**20**はほぼ完形品の平鍬。**19**とほぼ同じような形状だが次のように細部において異なる点が多い。身頭部は水平に近く幅が広くなっている。刃部幅はほぼ一致するので、頭部の幅分、側縁の傾斜、開きが弱い。柄孔の隆起はより方形に近い。隆起部側面からの小孔はない。本例も柄が柄孔にきっちり装着されている。柄の断面は手前（後面）側が太さがあり、通常の柄としては解せない。身表裏面の加工は粗野な削り痕ではあるが乱暴な工作ということではない。２例とも柄が挿入されたままであり、作業で折れたのではなくピットに折り重ねるために、柄を切断したようである。柄を抜くことは簡単であったはずだが、あえて柄を残すことに目的があったということだろう。凹地などの出土木製品とは意味を区別したい。

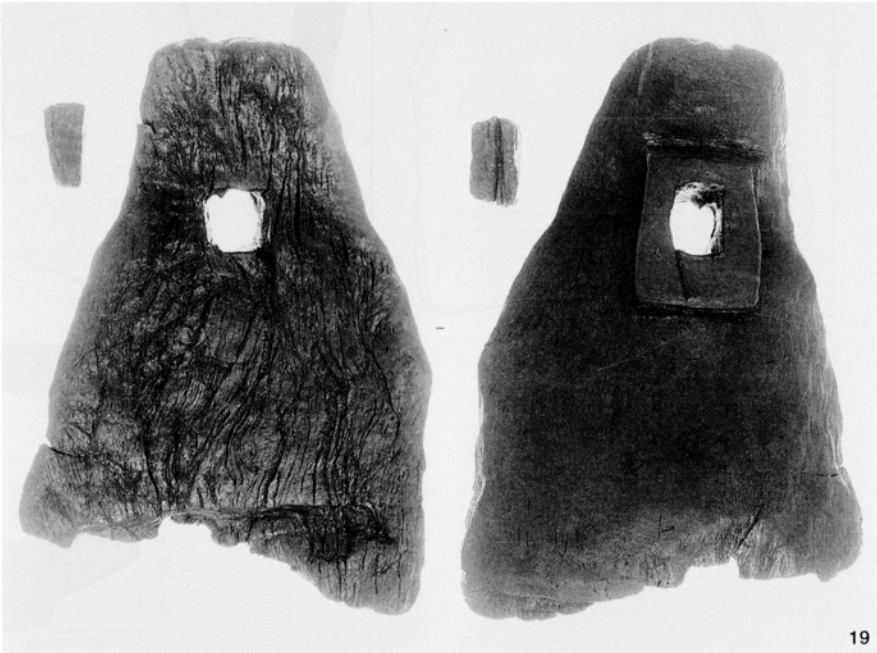


Fig.247 ピットの遺物

4．土壙墓（SH）

第10次調査区では弥生時代前期中ごろから後半の土壙墓、木棺墓、甕棺墓各１基、弥生時代中期の甕棺墓１基、弥生時代後期の甕棺墓１基を検出した。この他に埋葬施設を確認していないので墓とは断定できないが方形周溝１基がある。これらは竪穴住居跡や土壙、井戸などの生活遺構と混在しており、墓地は集落の一角を専用的に占めるというあり方ではない。第10、12次調査区の西地点に対し、東地点と仮称した第７、９次調査区では、集落南東隅の60㎡という狭い範囲ながら、弥生時代前期後半の甕棺墓８基、土壙墓９基で構成した墓地が形成されていた。東西両地点で甕棺墓の土壙墓の時期が大きくずれないことから、雀居遺跡における墓地のあり方は大規模共同墓地へ変化を遂げる以前の様子を知る上で重要な資料という事ができよう。このような意味で今回の第12次調査では墓地の広がり確認が発掘目的の一つであったが、先述した方形周溝の再確認と土壙墓１基の検出にとどまった。

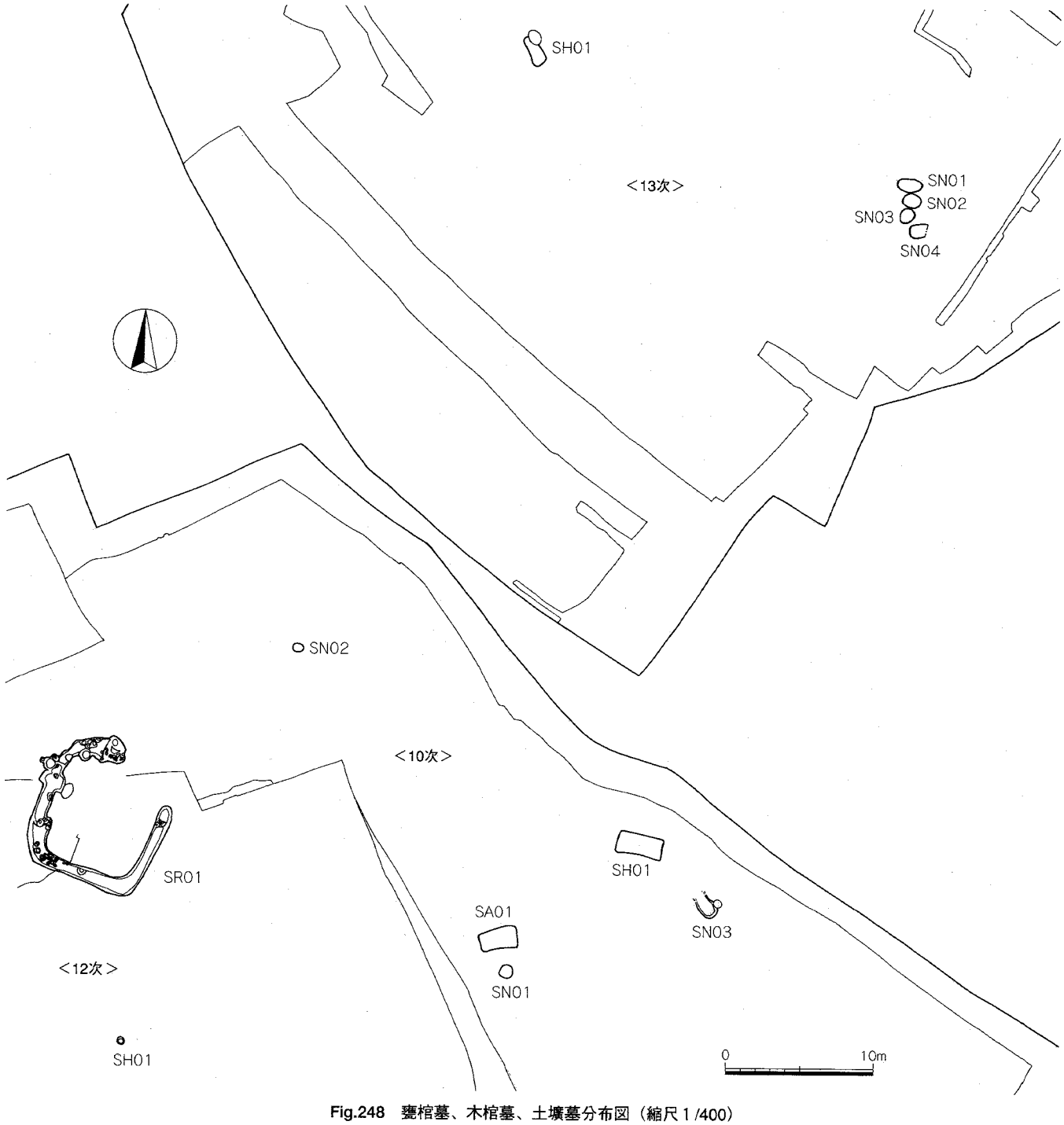


Fig.248　甕棺墓、木棺墓、土壙墓分布図（縮尺１/400）

第１号土壙墓SH01　SR01と遺構番号を与えたピットから人骨を発見した。ピットの大きさは35.0㎝×30.5㎝の不整円形で人骨は数㎝の深さに埋葬されている。このピットはT30グリッドにあり、最も近いのは第10次調査の第１号木棺墓SA01で、その距離は約22ｍである。第Ⅲ面遺構検出時には墓地の把握を意気込んでいたが、なかなか現れず最初に掴んだのが本例である。

今回も九州大学の金賢宰助手と大学院の大森円さんに実測と取り上げを依頼し、その後の研究を中橋孝博教授にお願いした。その結果については別冊に収録している。

図のように人骨は屈葬の状態で顔を西に向けて横になっている。頭骨は土圧で潰れたよう、いくつかの四肢骨と左肋骨が痕跡を留めている。歯牙はなく、肋骨の大きさなどから乳児期の遺体と推定された。第10次調査第18号土壙SK018に乳児の例があり、弥生時代前期における乳幼児の埋葬を知ることができる好資料である。

Fig.250　人骨の検出作業

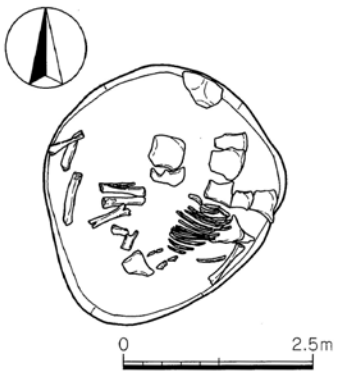


Fig.249　SH01実測図（縮尺１/10）

Fig.251　SH01人骨出土状況

5．凹地（SW）

第Ⅱ面には凹地としてSW01～03の３基があったが、これらはグリッド31ラインよりも北側に位置していた。このさらに南側にも弥生時代の遺物を出土する落ち込みがあり、このうちSW04～07の４基を第Ⅲ面の遺構として認定した。

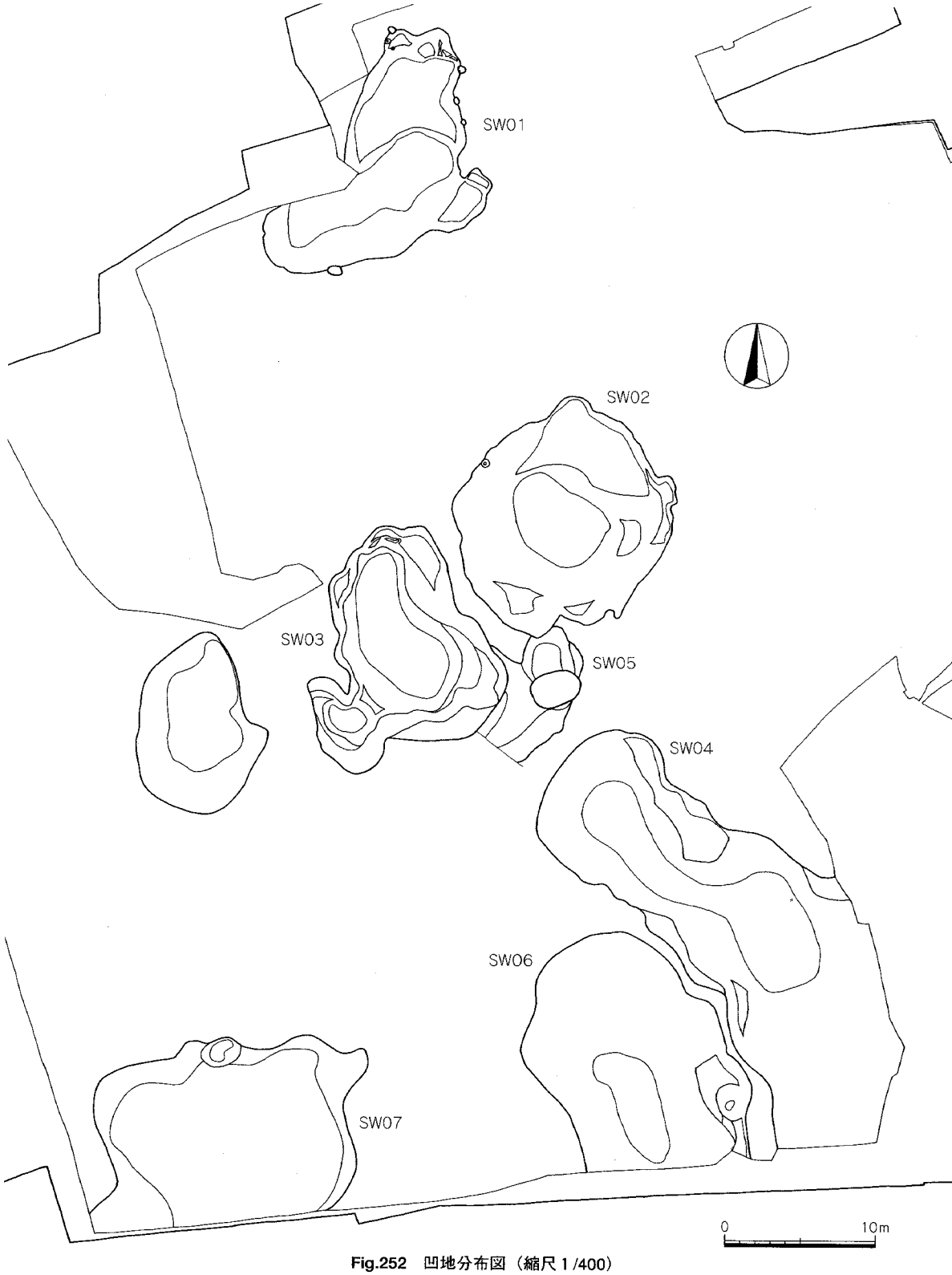


Fig.252　凹地分布図（縮尺１/400）

Fig.253 SW04実測図（縮尺1/100）

Fig.254　SW04（北西から）

Fig.255　SW04（北西から）

第4号凹地SW04　X30グリッドから南東方向に延びる凹地。南東端部のY27グリッドでは発掘区外に出ていることからこれまで記述してきた楕円形の凹地ではない。このまま南東方向に開くのであろう。平面プランで輪郭を追うと、北西端のX30グリッドでは幅7.7mを測り、X29グリッド付近でややや窄まり、Y28グリッドで大きく開いている。長さは約21m。基盤は砂層で黒色粘質土が埋め土となっており、湧水が激しく絶えずポンプアップしながらの発掘作業となった。長軸の底面を見るとX29付近で約82cmと深くなっており、いくつかの小さな凹地が湧水などで繋がり浅い谷状の凹地になったとも推測される。遺物は埋め土の上部から下部まで片寄ることなく、また平面的にも分散して出土する。このため上下2面の遺物出土状況図を作成した。出土遺物はパンコンテナ218箱分にも及んでおり、これらの大部分は弥生時代前期後半から中期前半の遺物が占め、他の時期の混入品はきわめて少ない。他の遺構が時期の異なる遺物を混在するケースが多いだけに注目された。検出当初は自然作用でできた凹地を廃棄物の処理場として利用していたと思っていたが、土器の中には完形の土器や岸辺でわざと潰したような大型土器もあり、すべてが不用品として投棄されたとは考えがたい。特に北西端では丸太材や板材が折り重なっており、その下から鍬や弓、竪杵などの木製品が集中して出土した。明らかにSW02のように岸辺に打ち寄せられたような状況ではない。また折り重なった木材には、縄紐などで結び固定した形跡はないものの、直交、平行するものが多く、手すりや護岸など岸辺の構築物の可能性もある。これらは凹地に対する意図的な何らかの行為を連想させる。もちろん投棄自体も捨てるという目的行為そのものであるのだが。

上層の遺物　SW04の埋め土より出土した遺物の前に検出作業で取り上げた遺物を先に記述する。**1**は如意形口縁の甕。**2**～**4**は甕底部。**3**、**4**は焼成後に孔を開けて甑としている。**5**は台付きの甕か。**6**～**8**は壺胴上半部で、斜格子、羽状文、連弧文を施文している。**9**は小壺。長めの胴部には貝殻

Fig.256　実測作業

Fig.257　西岸土層断面

Fig.258　遺物取り上げ作業

Fig.259　南端の遺物出土状況

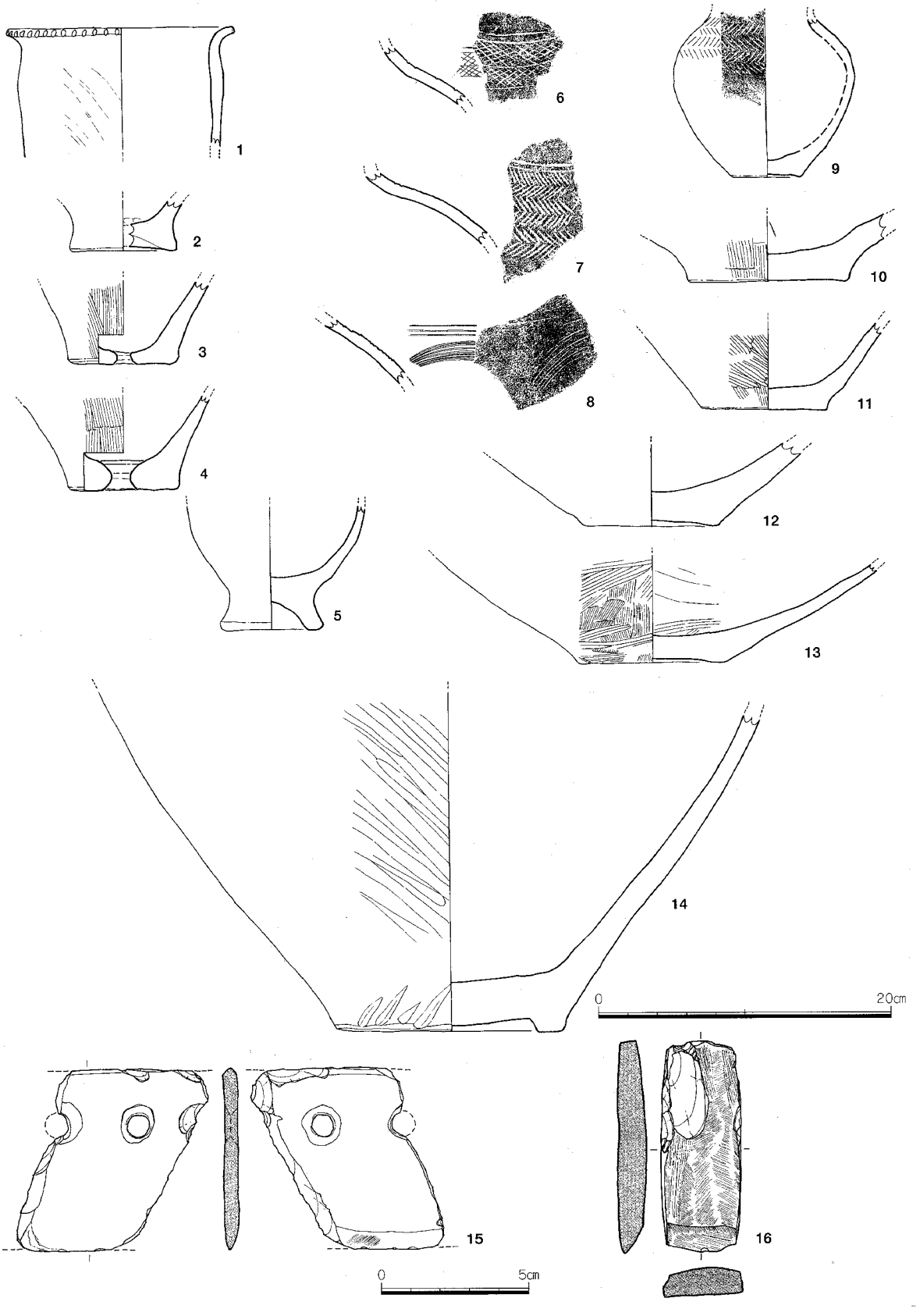


Fig.260 SW04上部の遺物（縮尺1/4・1/2）

で羽状文を描く。**10**～**14**は壺の底部。**12**、**13**は円盤状の底部ではなく大きく開く。**15**は石包丁、両面穿孔の小孔が２個。刃部は両面から研ぎ出す。**16**は扁平片刃石斧の完形品。研磨丁寧。

埋め土の遺物　土器・土製品　**1**～**23**は同じように如意形の口縁部を作っているが、体部の形状、沈線や突帯の有無、如意形口縁の湾曲、さらに器面の調整などでいくつかに分類が可能である。

1～**4**は口縁下に沈線がない甕。**1**は口径17.1㎝、底部の括れがなく、また体部にも張りがない。口縁部の刻み目は下端のみ。**3**は口縁部はく字形に強く屈曲している。体部には張りがほとんどなく長手の体部を作る。口径21.5㎝。**5**～**16**は口縁下に沈線を巡らせた甕で口縁部に刻み目を入れることは少ない。**5**はいびつな器形で口縁部、沈線とも波打っている。口縁下に１条の沈線。**6**は体部に張りがあり、最大径は口径30.4㎝と一致する。口縁は緩やかに外湾する。**7**は口縁端部が肥厚し下端に刻み目、湾曲部に２条の沈線。**8**は口径20.6㎝。体部からそのまま湾曲し、口縁部となる。口縁下端に刻み目を雑に入れる。沈線は３条。**9**は体部上半で窄まり強く外湾して口縁部となる。体部中位から底部への移行部もよく締まった器形となる。口縁下沈線は平行していない。**12**も器高に比べ幅広の体部となっている。口縁部は厚みがあり端部は断面方形ではなく口唇状に近い。**14**の外面は口縁部まで煤が付着。体部に比べ口縁部の器壁は厚みを増している。**15**は体部の最大径が32.9㎝と大きく、口縁部湾曲は短い。口縁部内面は横ミガキ。外面の沈線は通常のように縦ハケ目の後に入れている。**16**は体部の最大径よりも口径が大きい器形。体部外面は細い工具によるナデ。口縁下沈線も弧状になり条線になっていない。**17**～**23**は沈線ではなく断面三角形突帯を貼り付けている。

口縁と突帯の両方に刻み目を入れるもの、口縁だけにいれるもの、どちらも入れないものがある。**17**の刻み目は口縁部と突帯で異なっている。口縁下端の刻み目はシャープにＶ字形に切り込んでいるが口縁下突帯は細い棒状の工具で押さえ楕円形の刻み目となっている。口径21.0㎝。**19**は口縁部の湾曲は短く、その直下に断面三角形突帯を貼り付けている。口縁端部の断面は口唇状。体部下半内面は細い工具で縦のナデ、ミガキのような痕跡となっている。**21**は口径が53.2㎝。口縁の湾曲は強い。

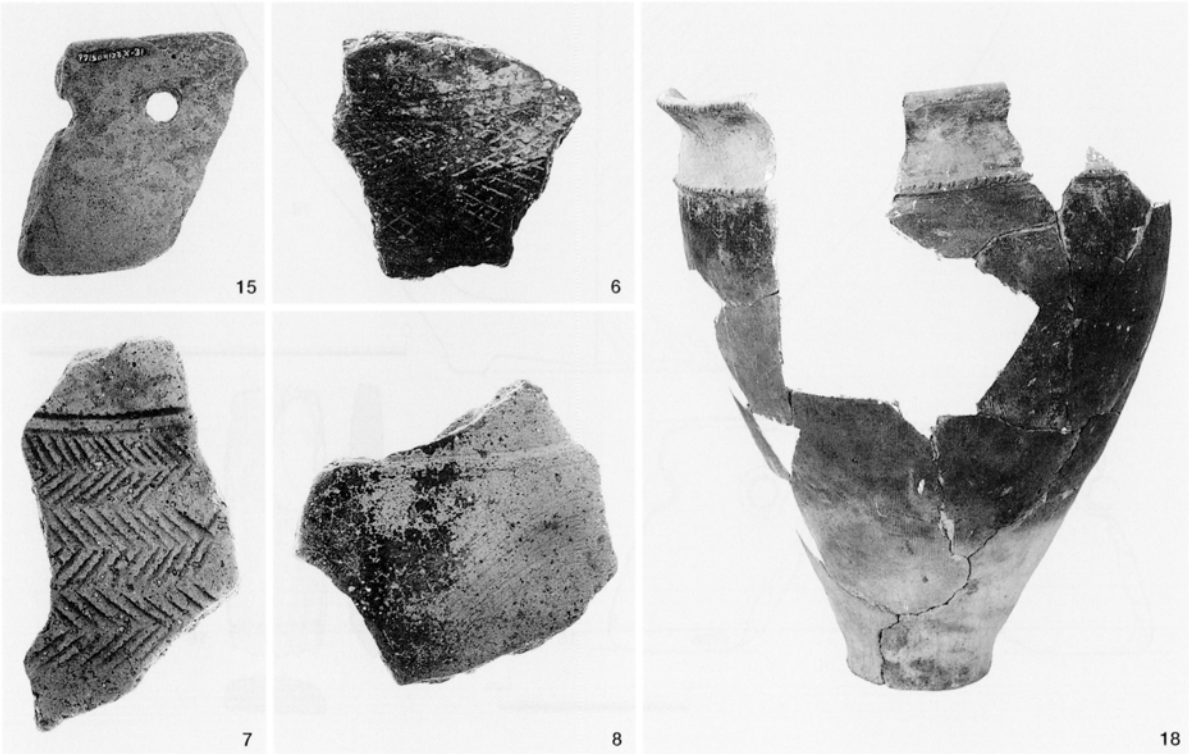


Fig.261　SW04上部の遺物

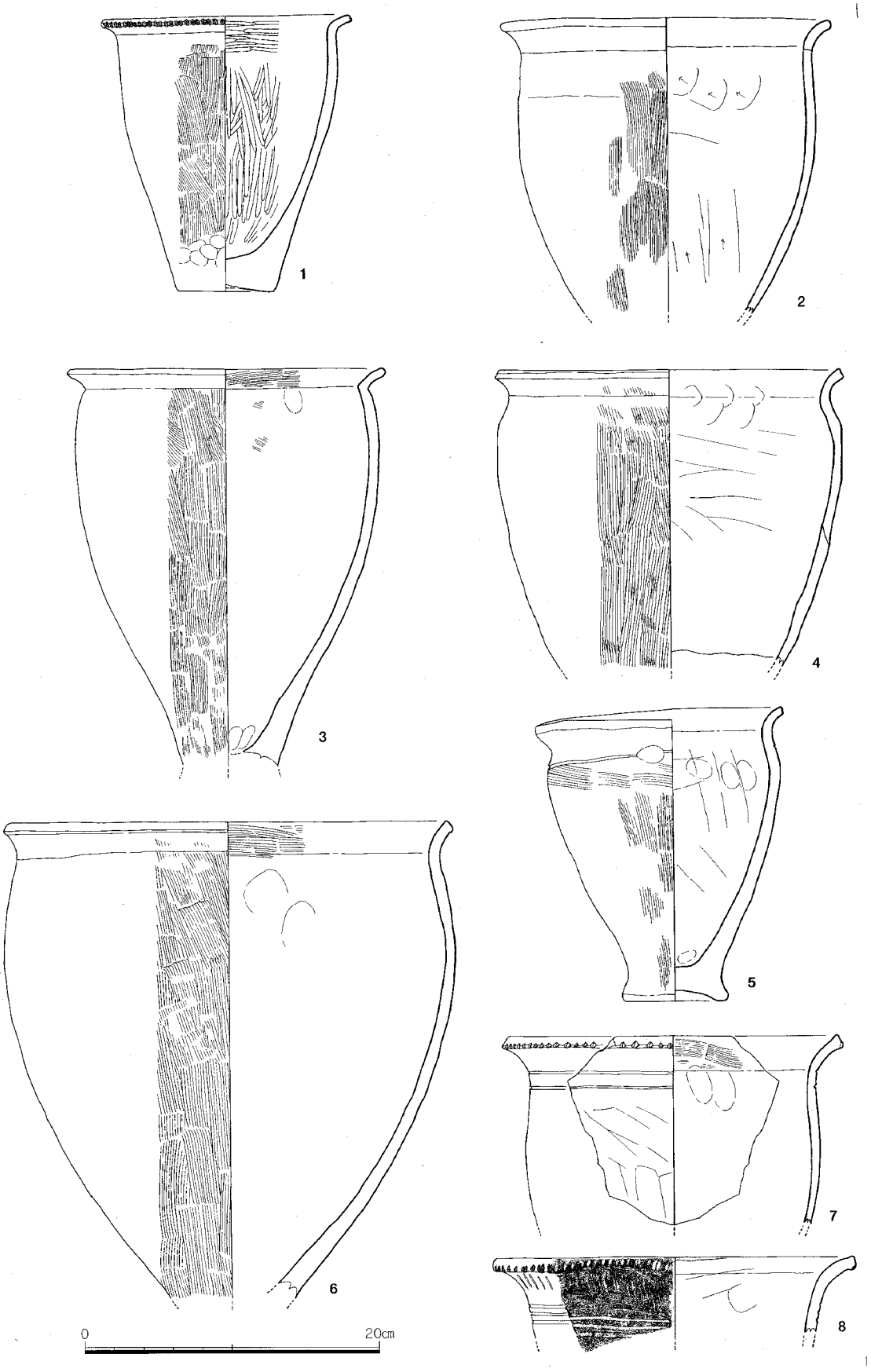


Fig.262 SW04の遺物（縮尺1/4）

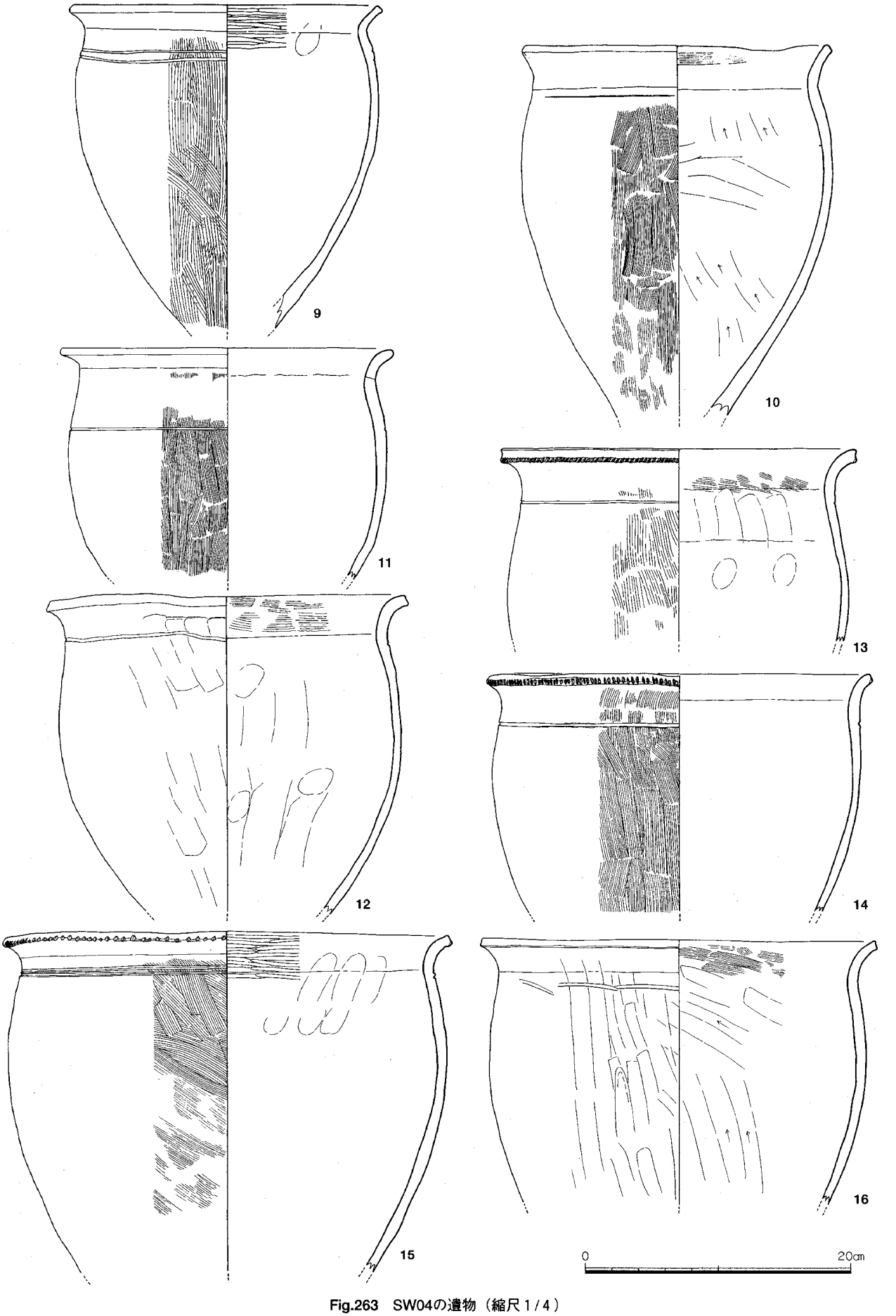


Fig.263 SW04の遺物（縮尺1/4）

22、**23**は口径が50cmを超す甕。**23**は口径57.0cm、底径14.0cm、器高67.6cm。凹地の西斜面で写真のように潰れた状況で出土した。接合してほぼ完全に復元できた。口縁部は緩やかに湾曲し、口縁端部断面は口唇状、その上下端に刻み目を入れる。口縁下の２本の断面三角形突帯は口縁と同じような刻み目が入り、一巡して連結しないで両端が円形を描いて終わっている。目のようにも、相対する鉤のようにも見え、不思議な雰囲気である。体部外面は煤が付着し煮炊きに使用されたことを示す。

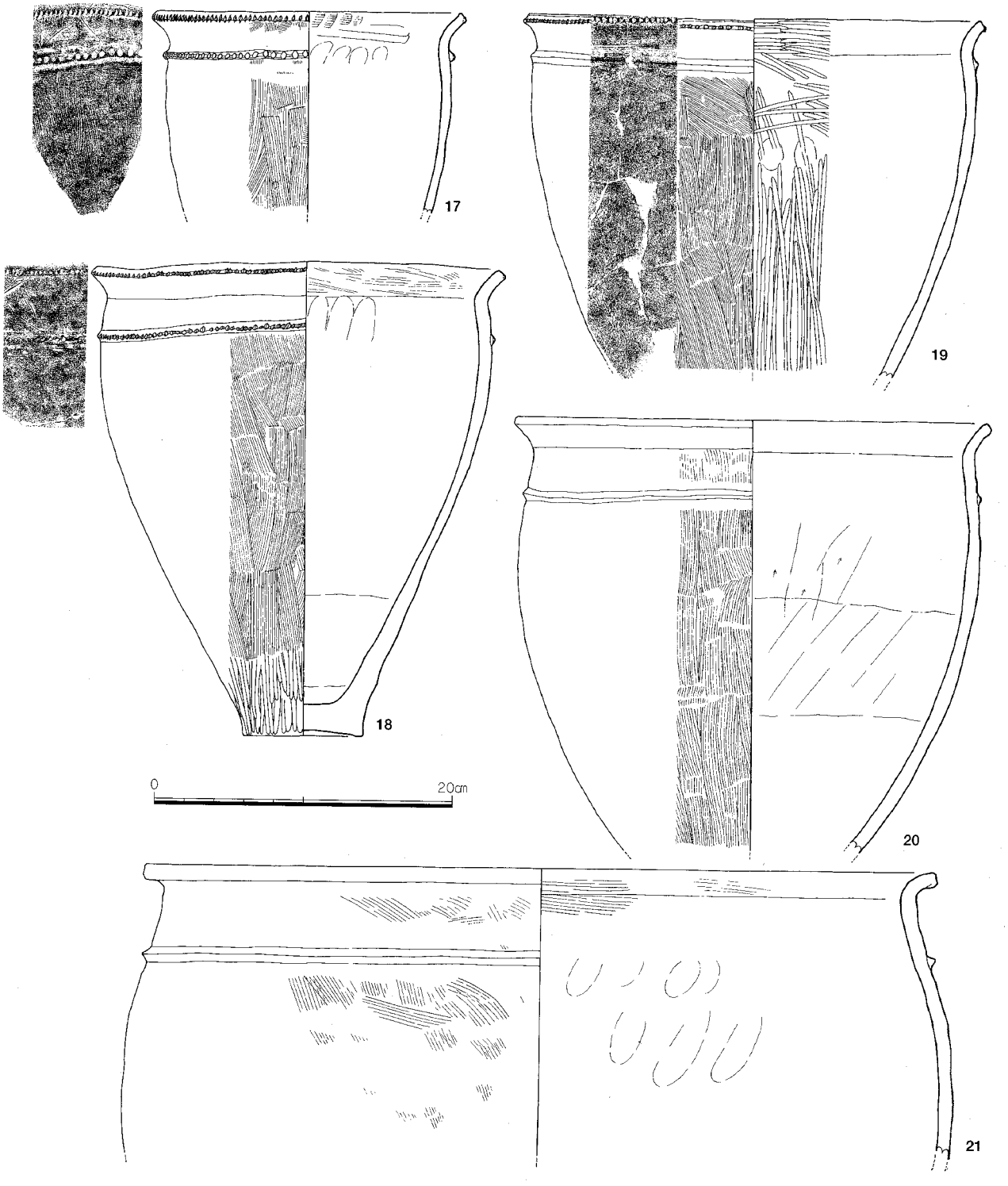


Fig.264　SW04の遺物（縮尺１/４）

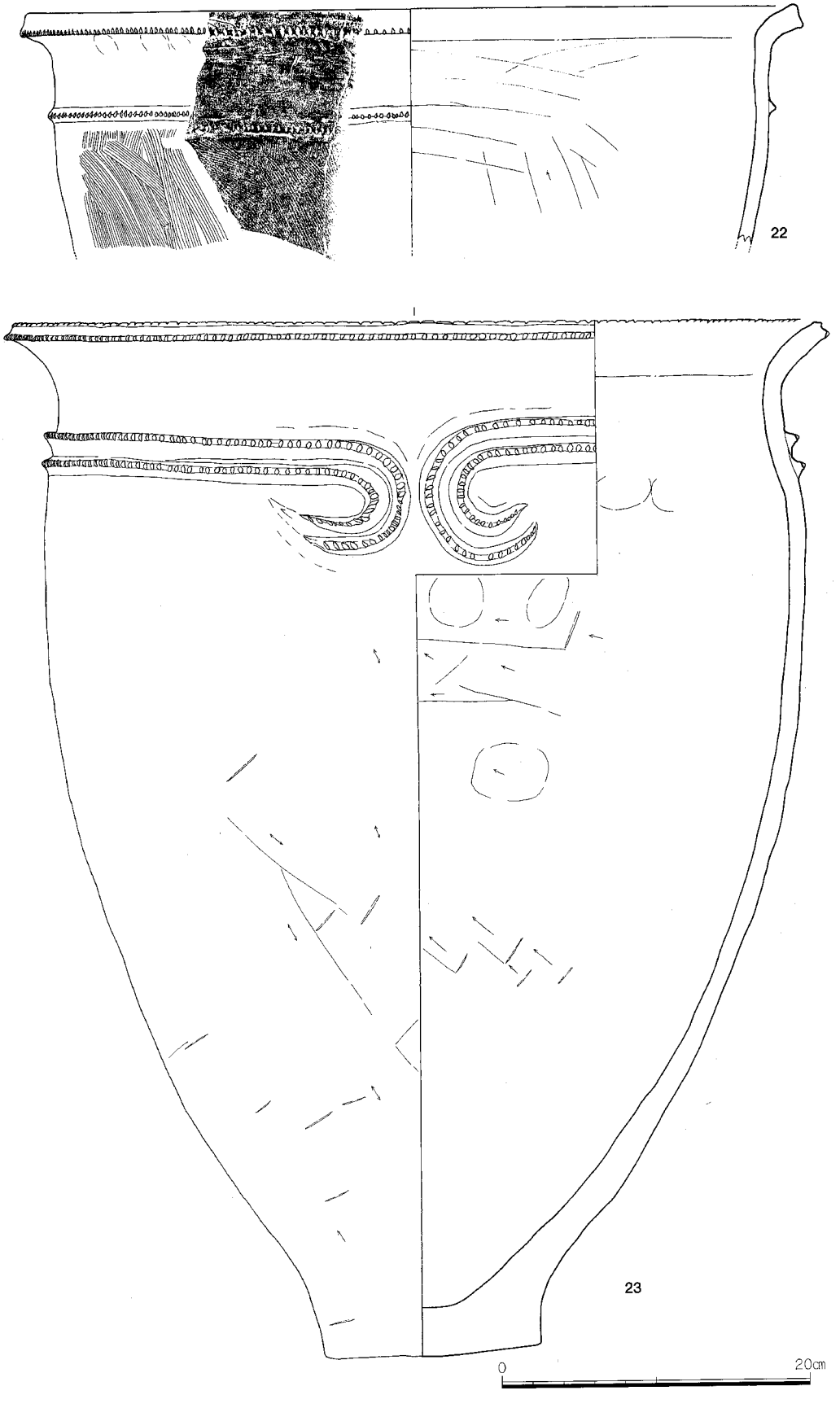


Fig.265 SW04の遺物（縮尺 1 / 4 ）

Fig.266 遺物出土状況

23

Fig.267 SW04の遺物

24～36は口縁外端に粘土紐を貼り付け、断面三角形となる甕。口縁下に沈線も突帯もないもの、沈線を巡らせるもの、断面三角形突帯を貼り付けるものなどに分類できる。また口縁部上面が上向き、下向き、水平など多様である。**25**の口縁部はわずかだが上を向く。口径21.3cm、底径7.1cm、器高25.1cm。底部が締まり無花果形の器形となる。外底はわずかに凹んでいる。**27**の口縁部は雑な横ナ

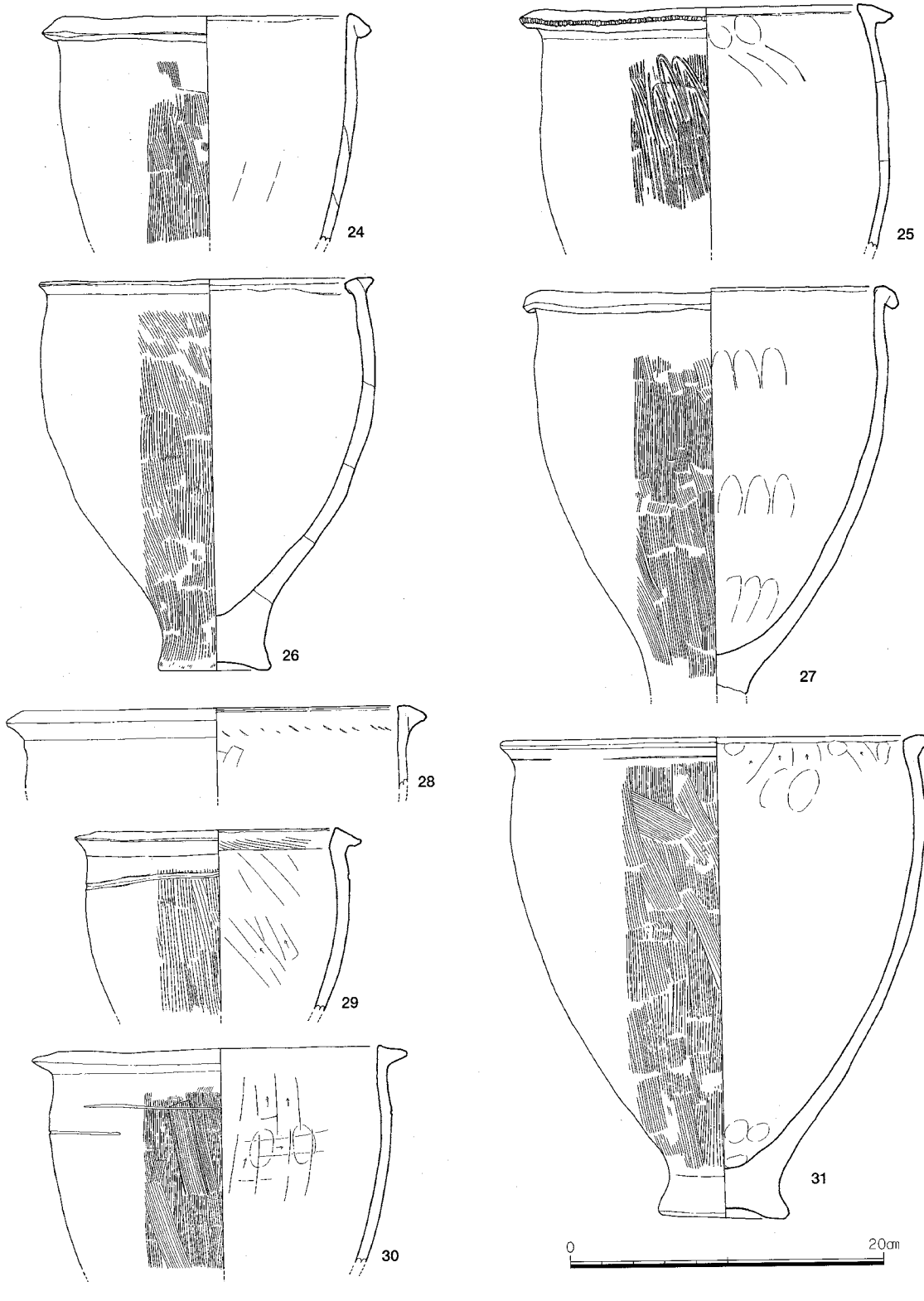


Fig.268 SW04の遺物（縮尺1/4）

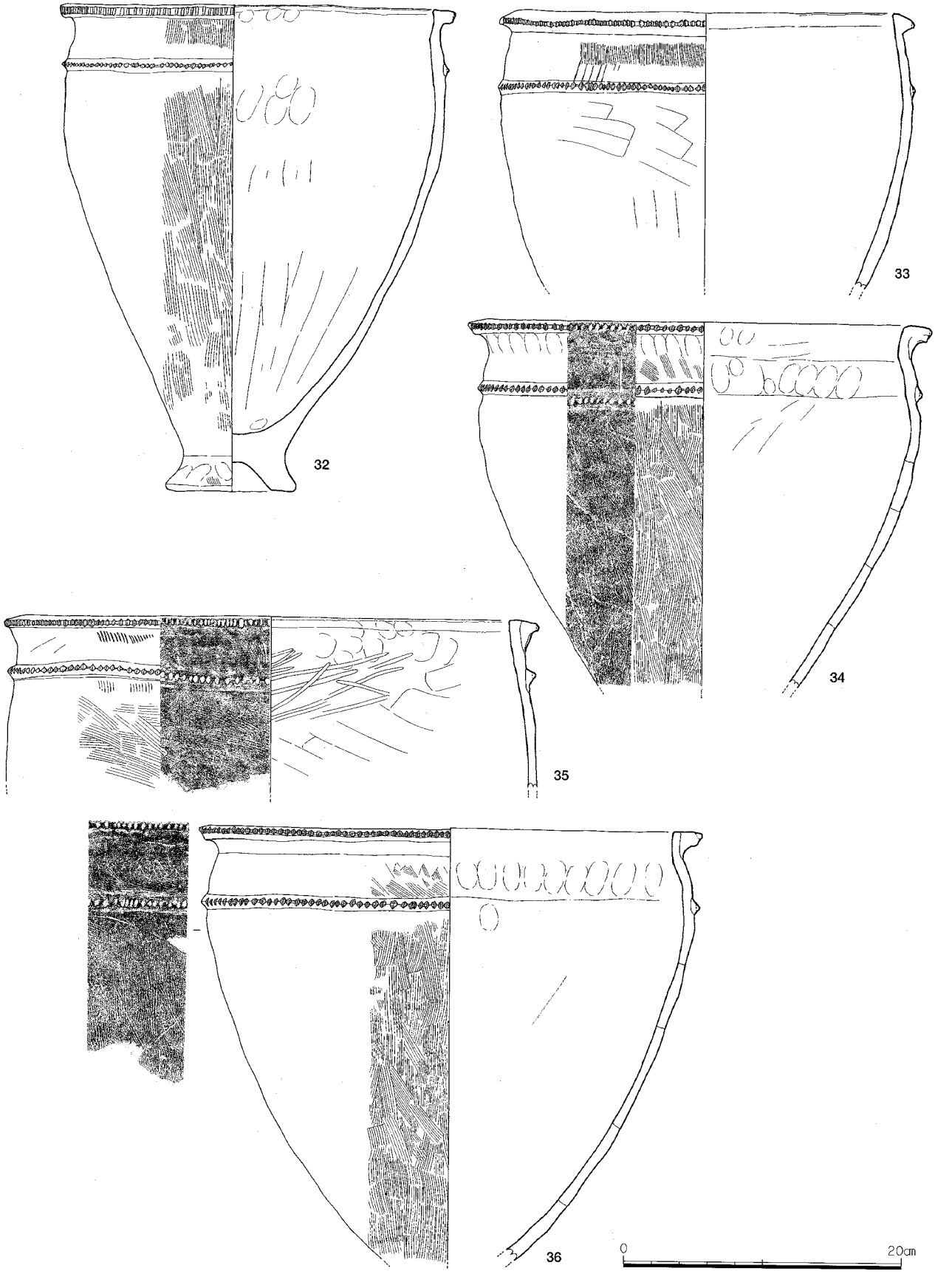


Fig.269 SW04の遺物（縮尺1/4）

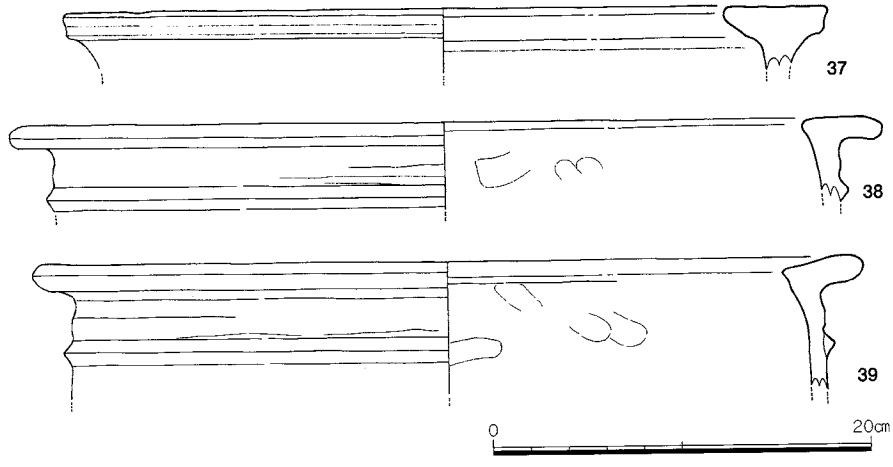


Fig.270 SW04の遺物（縮尺1/4）

デ調整で異様に垂れている。底部は粘土接合部で剥離している。**32**は口径28.3cm、底径9.4cm、器高35.1cm。体部上位に貼り付けた突帯からさらに小さく外湾して口縁部を作る。この器形の特徴は**34**、**36**にも共通している。3点とも口縁部の断面は厚みがあり水平で短い口縁部となっている。外端部に縦長の刻み目。突帯にも雑に刻み目を加えている。**37**～**39**はT、L字形口縁の甕。**37**は口径40.4cm。口縁内端は内側に粘土紐を貼り付け、上面を水平としているのでT字形となっている。**39**の口縁部はわずかに内傾し、内端部は小さく突出する。**40**～**61**は甕の底部。**47**までは平底で、**48**からは中央部が凹み、体部への移行が括れているものがある。どちらにも焼成後に体部中央を穿孔し甑に使用した甕がある。**56**の内底には炭化物が厚く付着している。**57**の底部は外端に張り出さず円柱状になっている。**62**～**64**は蓋。上部摘み部が凹むものと平坦なものがある。**62**は笠状の開きが弱く、ややいびつな作りだが、内面がナデの後に横ミガキ調整であることから蓋とした。

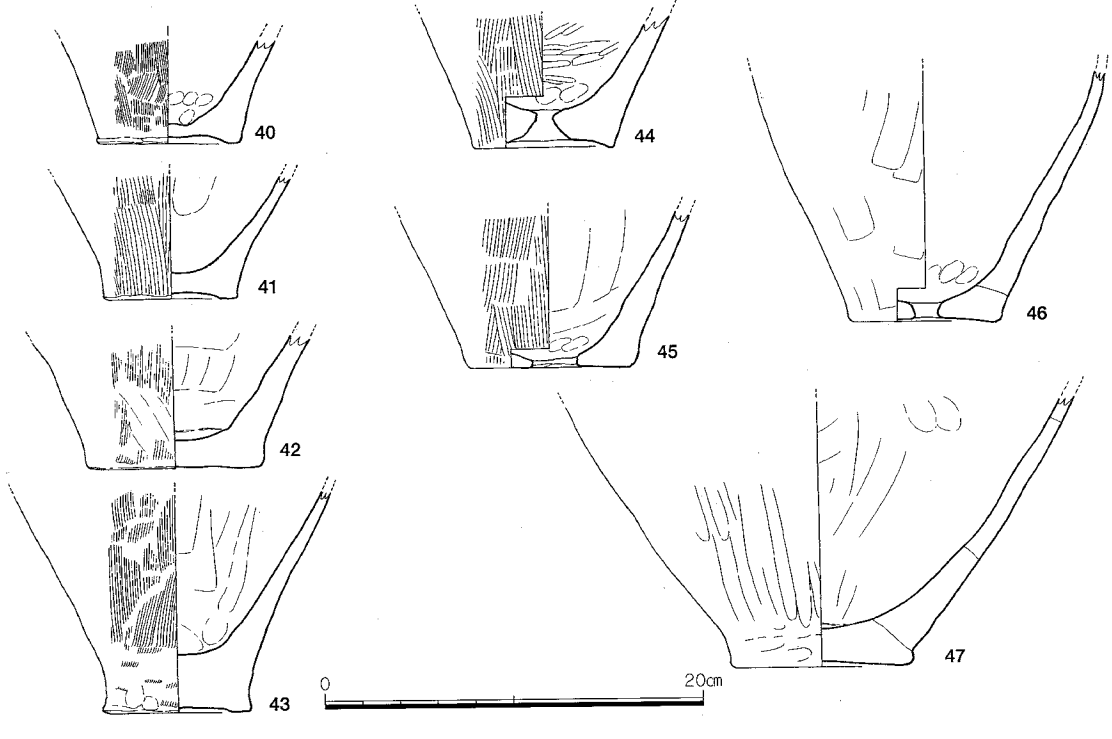


Fig.271 SW04の遺物（縮尺1/4）

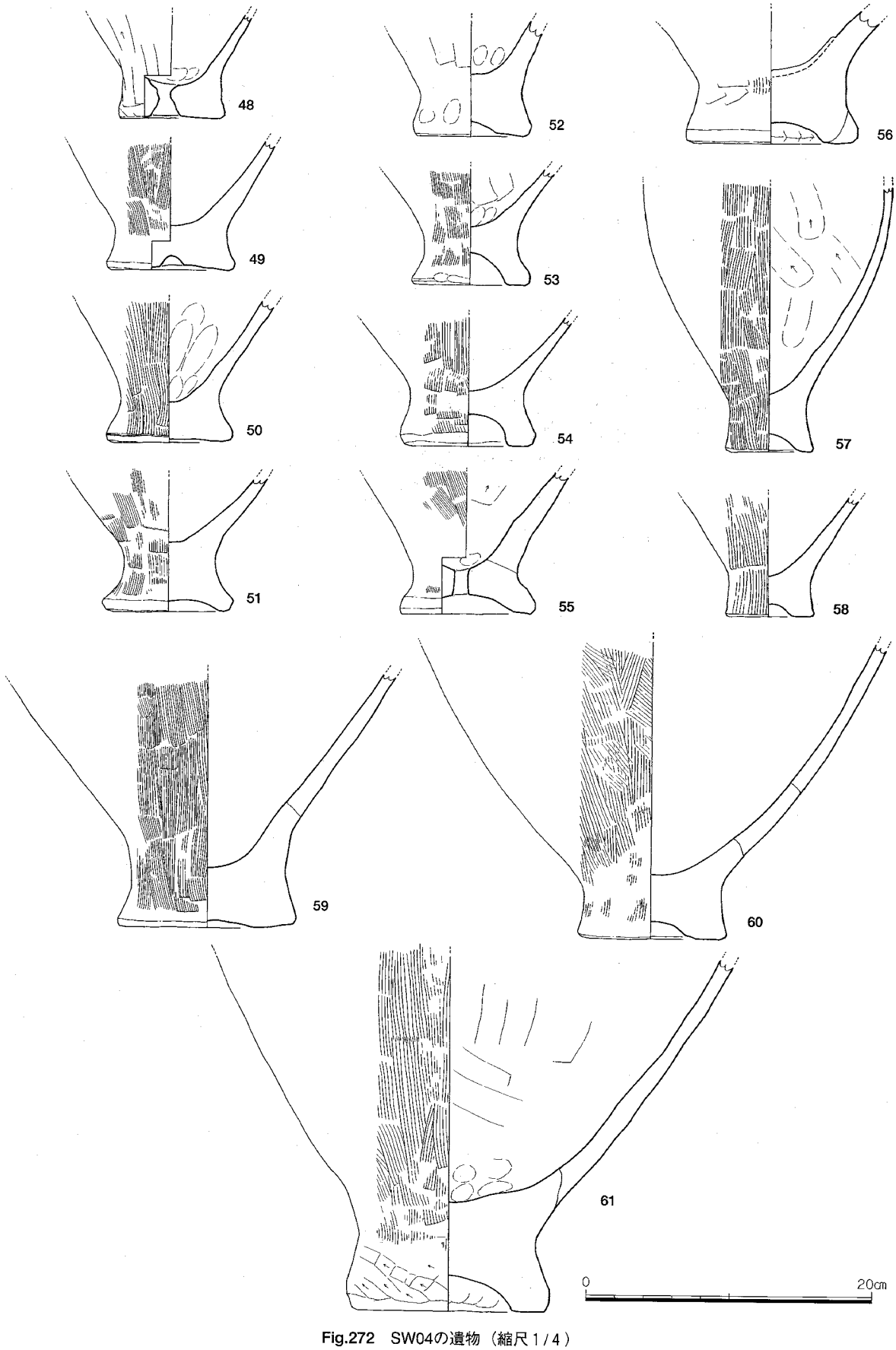


Fig.272 SW04の遺物（縮尺1/4）

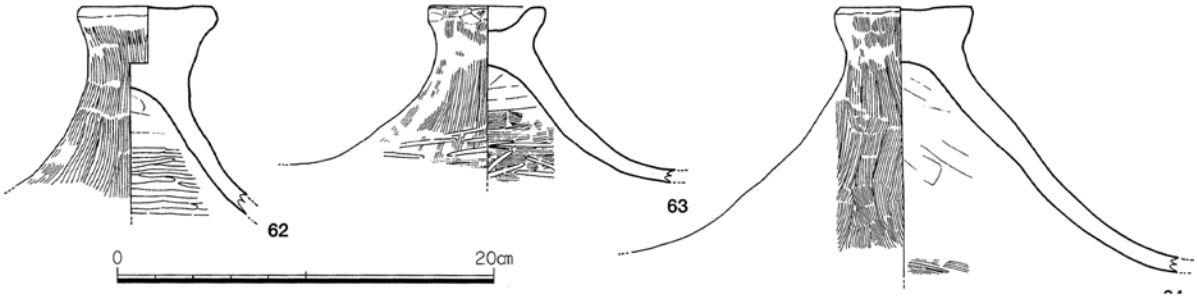


Fig.273　SW04の遺物（縮尺1/4）

65～113は壺。甕と同じように弥生時代前期後半から中期前半。**65～71**は小壺。底部、胴部、頸部。口縁部の境が明確なものと境がなく緩やかに湾曲するものとがある。また**69～71**のように頸部が短く、あるいは略したものもある。**72～75**は器高が15cm前後。胴部と頸部の境には沈線を巡らせるものがあるが突帯はない。**76～84**は口径が15cmを超す。同じように頸部が一気に湾曲し口縁部となる。**78**は口径17.4cm、頸部は直線的に内傾して延びている。胴部との境は小さな断面三角形突帯が貼り付いていることで境と分かる。**87**は口径27.0cm。口縁部と頸部との境に断面三角形突帯があり、口縁部内面に沈線で多

Fig.274　SW04の遺物

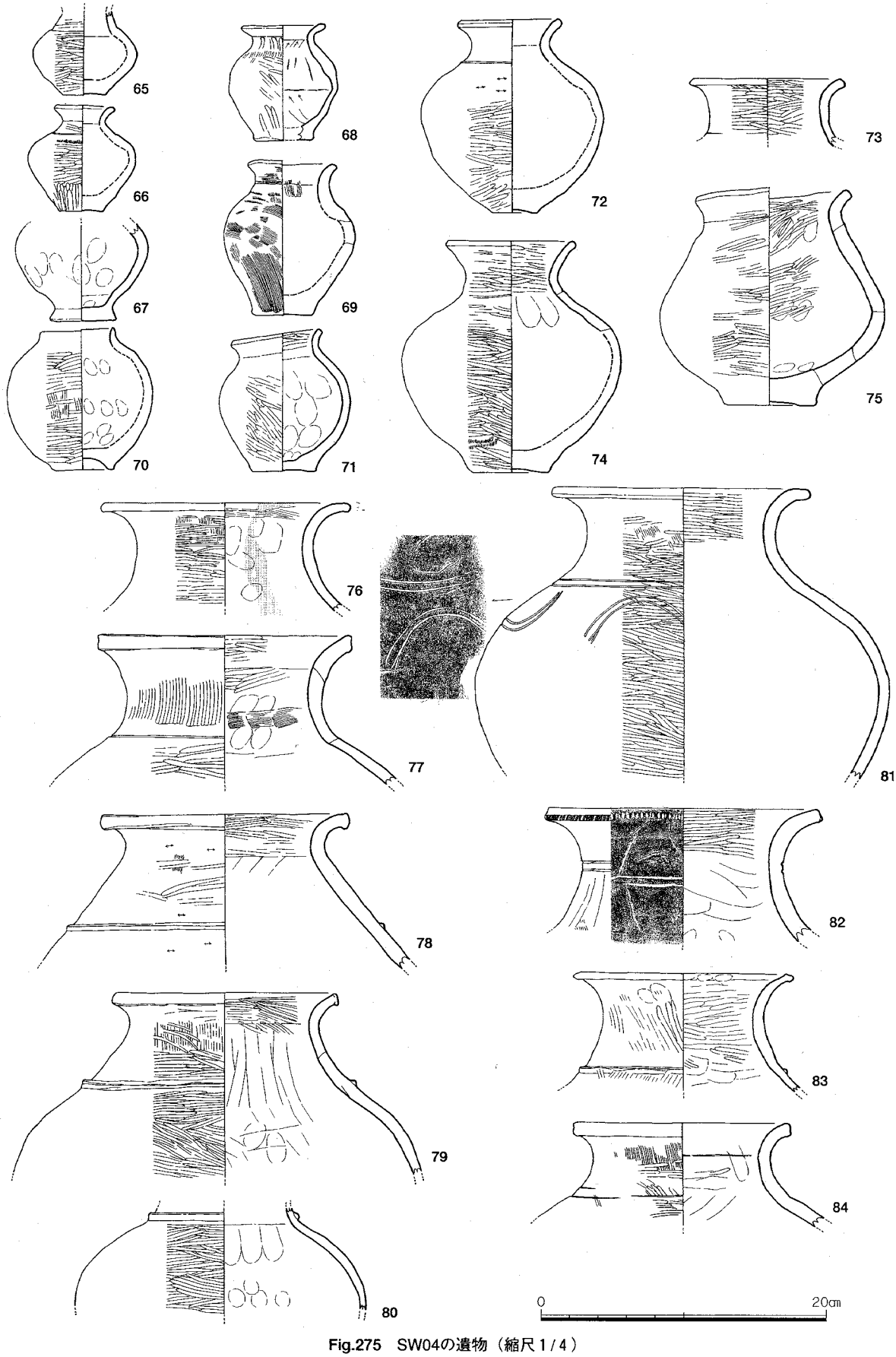


Fig.275 SW04の遺物（縮尺1/4）

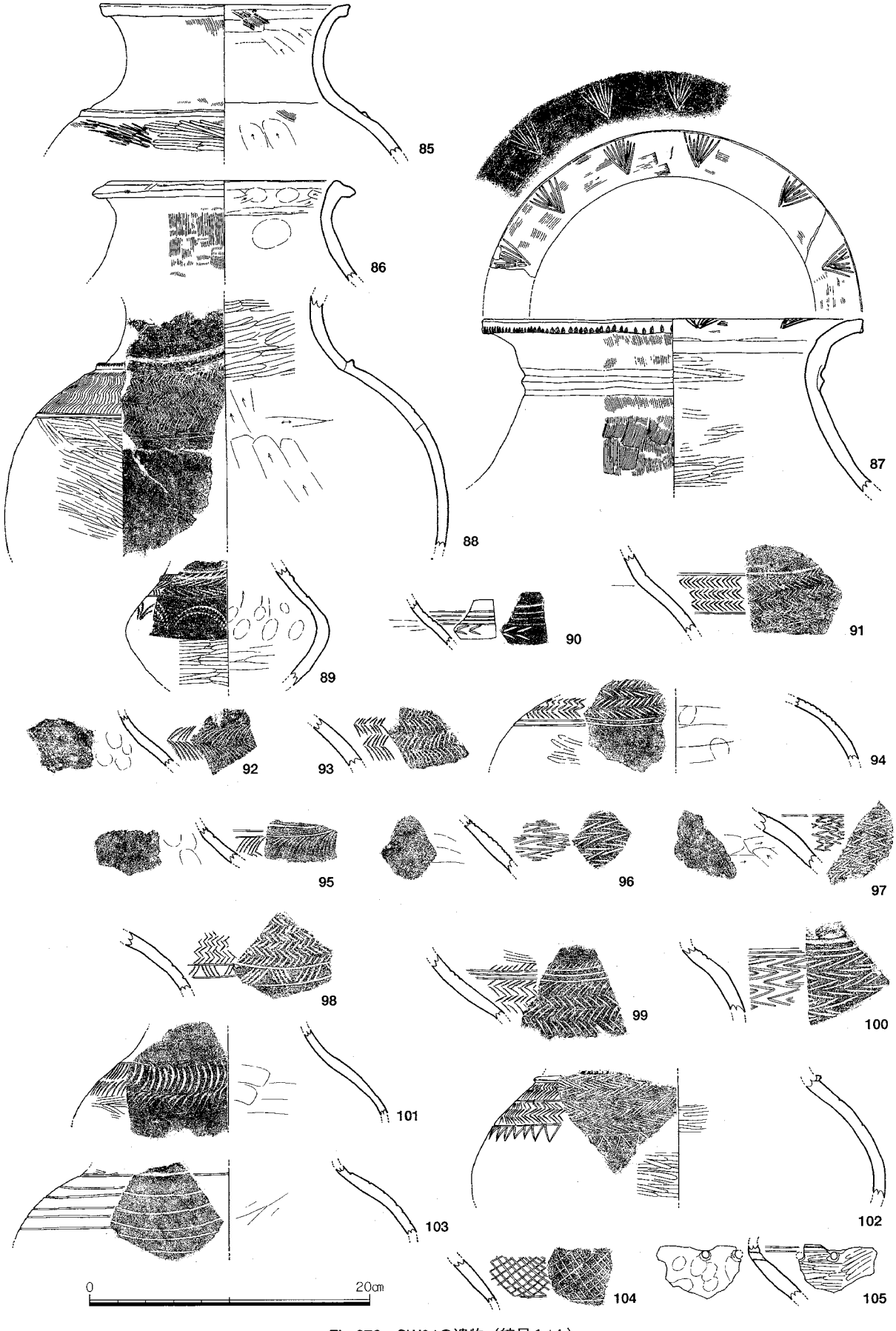
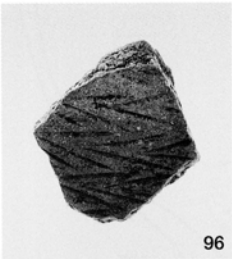
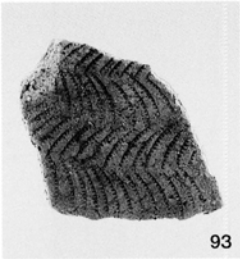
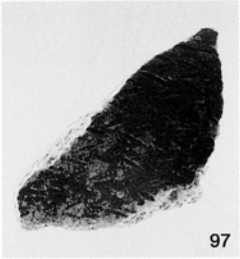


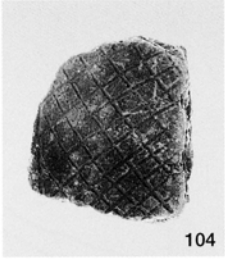
Fig.276　SW04の遺物（縮尺1/4）

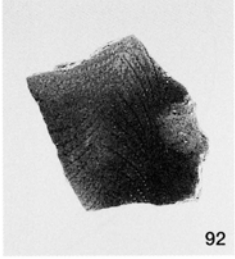
茎植物のような文様を等間隔で配置している。**88**～**104**は胴部上半の文様。**89**は貝殻による羽状文と二重の連弧文。他の大半は羽状文で軸が通るものはない。**102**は２段の羽状文でさらに下方に連続山形文。**103**は沈線５本を巡らしているが、意図的なのか平行線になっていない。**104**は斜格子文。**105**は頸部沈線の下に２個の小孔がある。

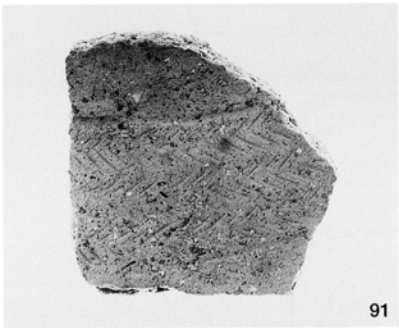


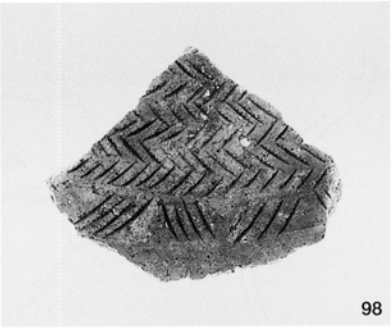


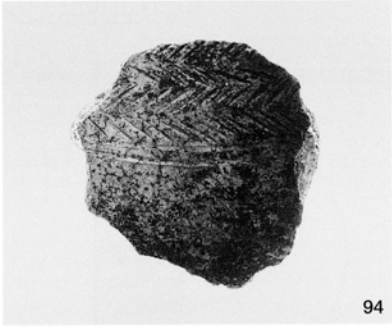


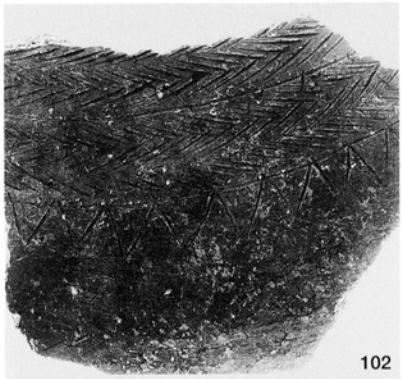


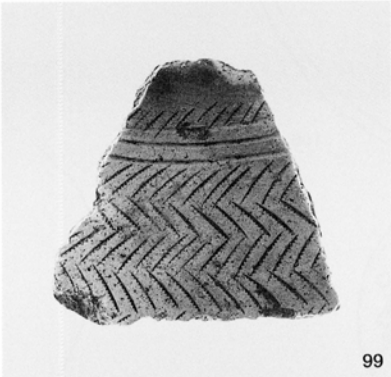


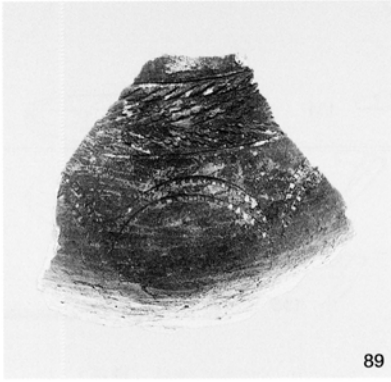












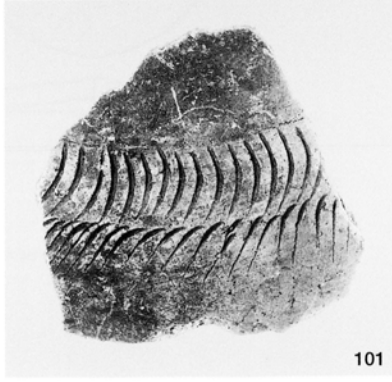


Fig.277　SW04の遺物

106～**109**は壺の胴部。最大径の位置がそれぞれ異なり、扁球状、球状、無花果状などさまざまな器形となっている。いずれも外面には粗密の違いはあるが横ミガキを加えている。**109**は底径8.3cm、胴部の最大径の位置は上位にあり、無花果状の張りの強い器形となっている。頸部との境の断面三角形突帯は水平ではなく揺れながら巡り、最後は両端が下方に湾曲し連結していない。器面の調整、胎土、そして成形など通常の土器と同じで特に変わったことはない。**110**～**113**は無茎壺とその蓋。**110**

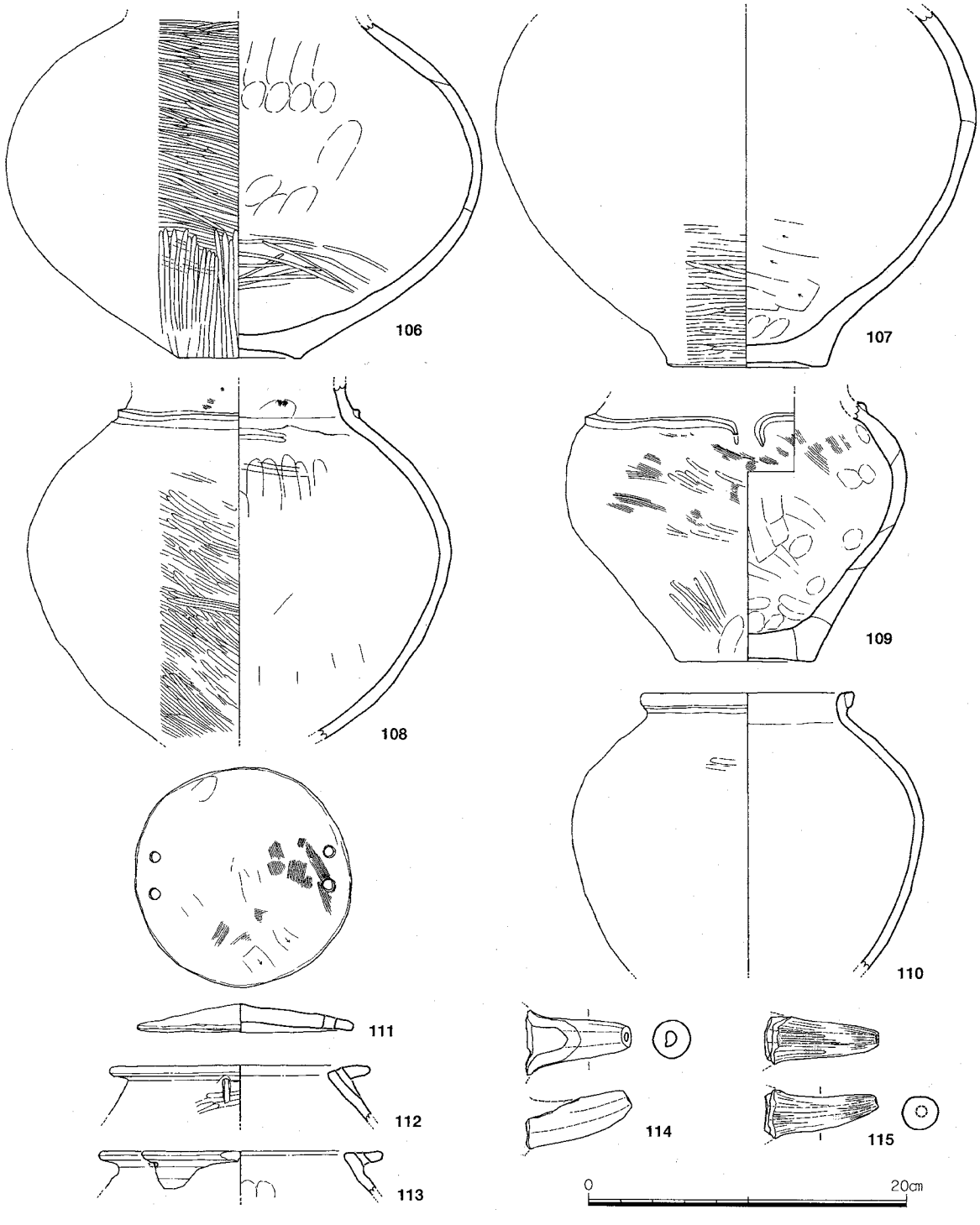


Fig.278 SW04の遺物（縮尺1/4）

は球形の胴部に頸部がほぼ直に立ち、外側に粘土紐を貼り付け丸みのある帯状の口縁部となっている。折り返しではない。胴部外面の調整は強く押さえたようなナデ調整、大きな黒斑が付く。内面は摩耗し砂粒が露出している。胴部の張り、口縁部の作りなど独特の器形をしている。**112**の無頸壺は口縁部に焼成前の小孔を開け、蓋と紐などで繋ぐ細工をしているが、その位置が胴部に片寄ったために体部まで溝が付いている。**114**、**115**は注口。雀居遺跡西地区では注口の出土は10点を超しているが、接合していた元の土器が確認できていない。**116**～**122**は口径50㎝前後の大型の壺。**116**の頸部は胴部との境に沈線を巡らして区切り、長く延びる。外湾する口縁部はやや厚みを加え、内側に幅広の沈線を入れている。内外面ともハケ目調整の後に細かい横、斜めのミガキを施している。口縁外端の上下には刻み目を入れる。口径39.2㎝。**117**の頸部は**116**に比べると短く、湾曲も強い。胴部との境

Fig.279　SW04の遺物

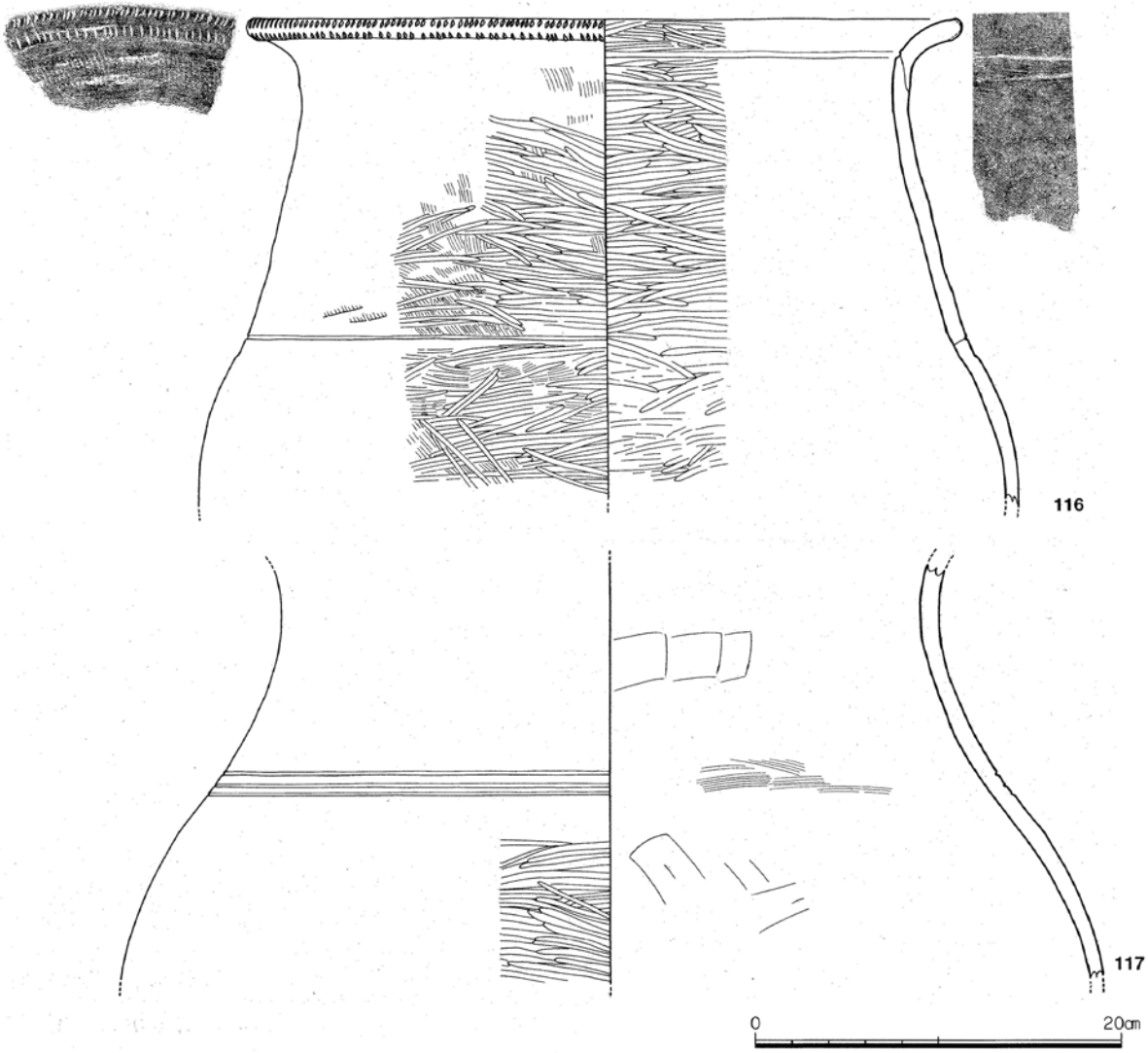


Fig.280　SW04の遺物（縮尺1/4）

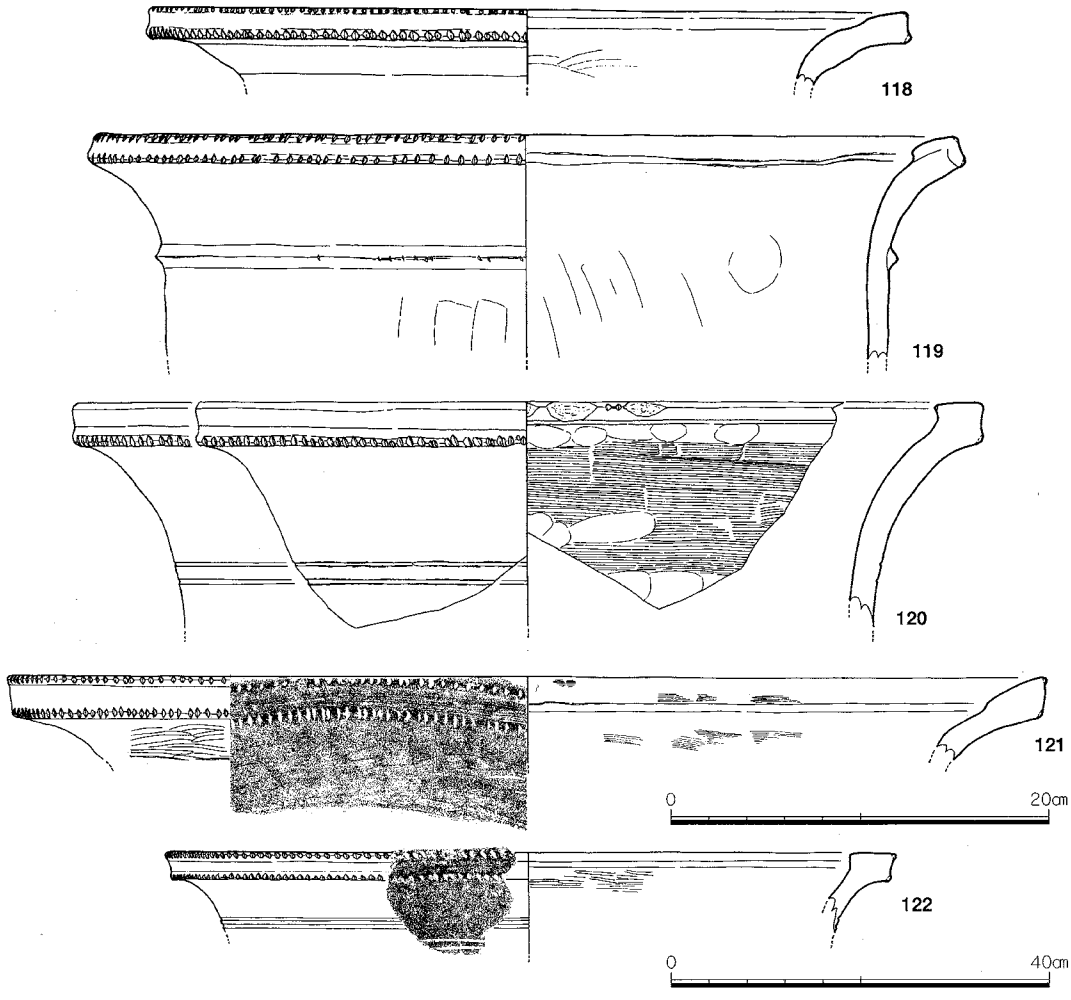


Fig.281 SW04の遺物（縮尺1/4・1/8）

には3本の平行沈線が入る。胴部外面の一部に煤が付着している。**118**、**119**も口縁外端の上下に刻み目。**120**は口縁下端のみで、内端には部分的に刻み目が付いている。**119**～**122**は口縁内側に粘土紐を貼り付け段を作っている。**119**の頸部は立ち、口縁部下に沈線ではなく断面三角形突帯1条を貼り付けている。**121**は口径54.8cm。刻み目は鋭い。**122**は口径が77.2cmに及ぶ大型品。

123～**132**は壺の底部。**123**は底径4.7cm、円盤状ではなくわずかに外縁に張り出している。外面は黒色で横ミガキか。**124**は底径6.9cm、厚みのある円盤状で外底に木葉痕。壺ではなく鉢の底部か。**128**～**130**は**116**～**122**のような大型壺の底部となるのだろう。**128**は特に胴部への開きが大きい。内底には指頭圧痕が円周状に並んでいる。外底はナデ、煤が付着している。底径12.2cm。**130**は底径15.3cm、ナデ調整した底部はほぼ平坦で円盤状に近い。外面は底部近くを横ミガキし、その上部をハケ目の後にミガキを加えている。内面も丁寧なナデ調整。

133～**139**は鉢。体部が大きく開き、口縁部が小さく外湾することは共通しているが、体部の延びが直線的なものと、やや張りを持たせて丸い器形のものとがある。**133**は口径10.4cmでもっとも小さい。口縁部上面は水平な平坦面があり、鋭い線刻が放射線状に刻んでいる。**135**は口縁下に低い断面台形の突帯がある。内面は横ミガキ、外面は摩耗し調整痕は明瞭でないが、器面は滑らか。小型でありながら整った器形である。**136**は口径17.2cm、底径8.4、器高11.3cm。甕の底部と同じような器形

Fig.282 SW04の遺物（縮尺1/4）

Fig.283 SW04の遺物

で口縁部だけが小さく外反する。口縁部内面は横ハケ目を短く引く。**137**の底部は正円ではなく6.0cm×6.7cmといびつな作りで、体部は丸く外湾する。外面に厚く煤が付着している。**138**の底部は円盤状で厚みがあり浅い皿状の体部が付く。口径は21.7cm。**140**は甕の器形によく似ているが小型であり、体部湾曲から器高が低いと予想され鉢とした。口縁下に浅く微かな沈線が巡る。**141**の口縁断面は三角形で、外端はやや垂れ気味。口縁下の突帯は水平ではなく、その両端が鉤状になるか。外面は縦ハケ目の後に強いミガキ。内面のミガキともリズムのある調整を施している。

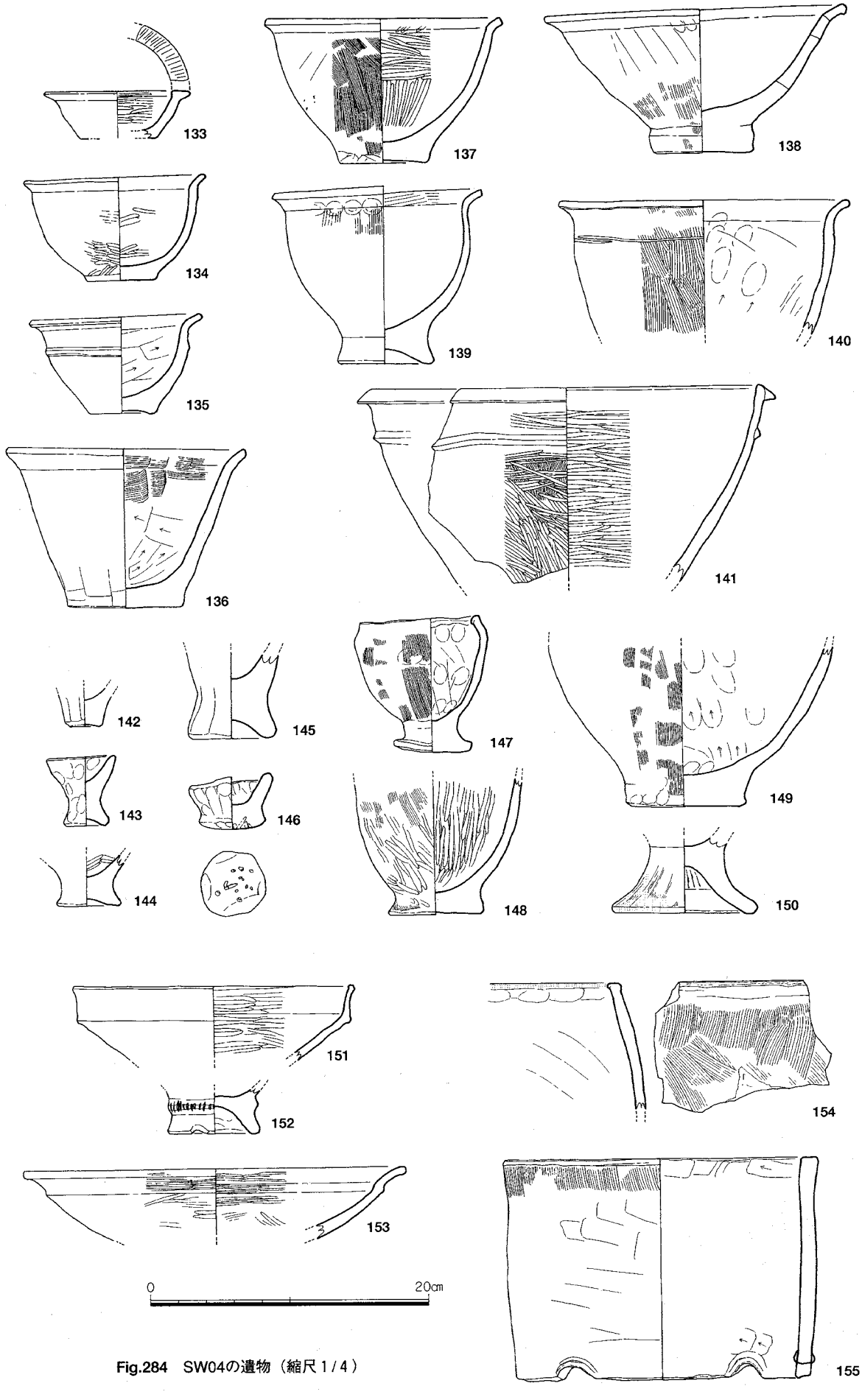


Fig.284 SW04の遺物（縮尺1/4）

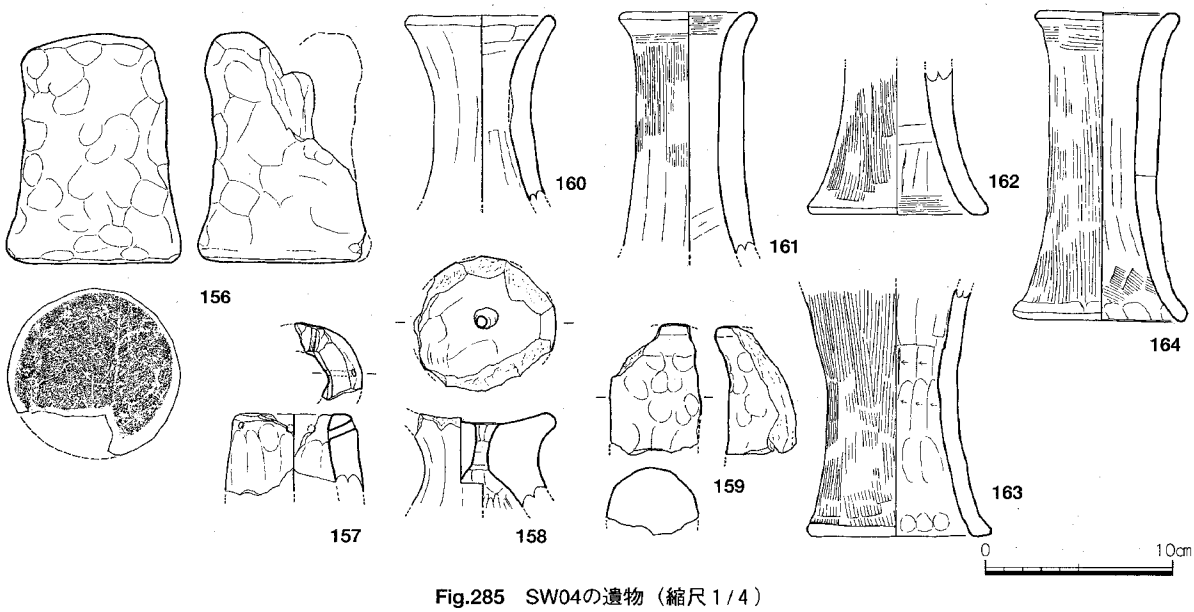


Fig.285 SW04の遺物（縮尺1/4）

142～**146**は手捏ね土器。平底と外縁がハ字形に張り出すものがある。**146**の外底には竹串のような道具を突き刺している。**147**～**150**は台付きの土器。**148**、**149**は台状の厚みのある底部。**148**は内面が縦のミガキで滑らか。**151**、**152**は鉢と台部。**152**は体部との境に粗雑な突帯を貼り付け刻み目を入れている。底部縁には小さなアーチ状の凹みが3か所にある。装飾なのだろう。**153**は高坏。口径27.4㎝、内外面とも灰茶色。調整は横ミガキで丁寧とは言えない。**154**、**155**は用途不明の土器。**154**は破片の湾曲からの推定では径は60㎝を超す。口縁端は内側に小さく摘み出しており、ここにわずかながら丹塗りが認められる。**155**は上径22.6㎝、下径21.0㎝の土管状の器形。器面の調整などから図の上下を決めたが、下端には径3㎝程の半円の抉りがある。内面は下半ほど黒色化しており、煮沸に関わる土器かと思われるが、上端には丹塗り痕もあり、用途を明らかにできない。**156**～**164**は支脚と器台。**165**～**172**は土製、石製の紡錘車。**170**は厚みがあり、未穿孔である。焼成後に成形、穿孔するとは思えず、失敗品まで焼成したのだろう。**173**～**176**は投弾。**176**は長さ3.2㎝、径1.7㎝と小さい。

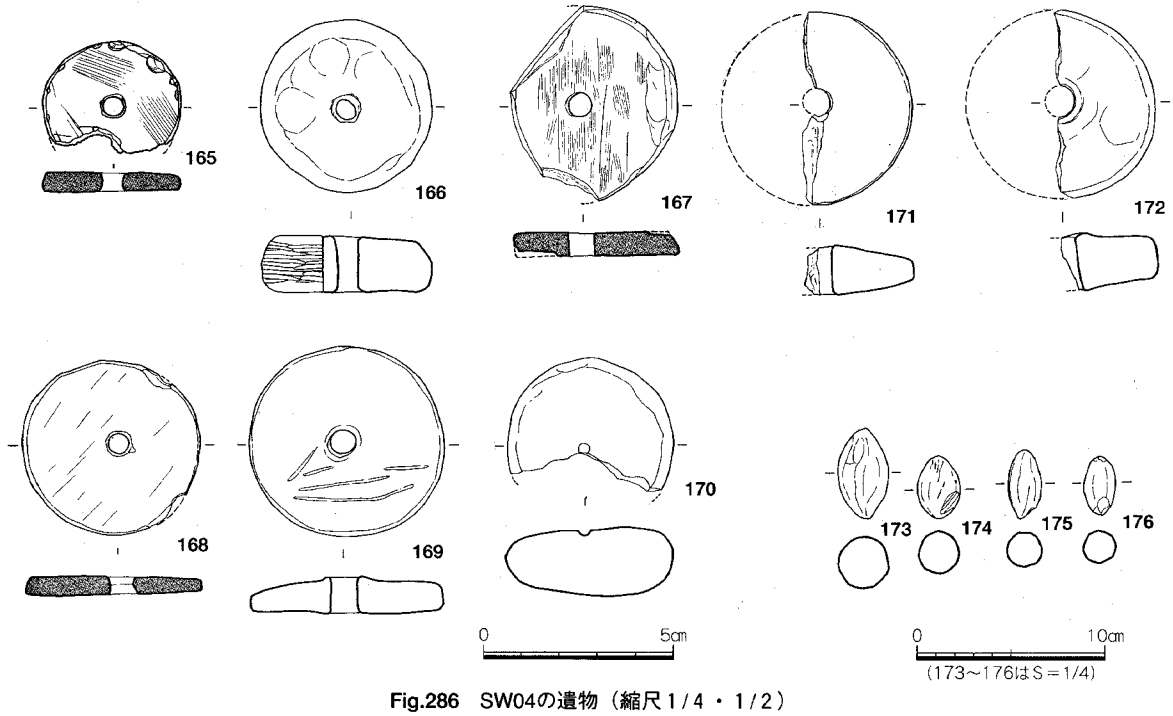


Fig.286 SW04の遺物（縮尺1/4・1/2）

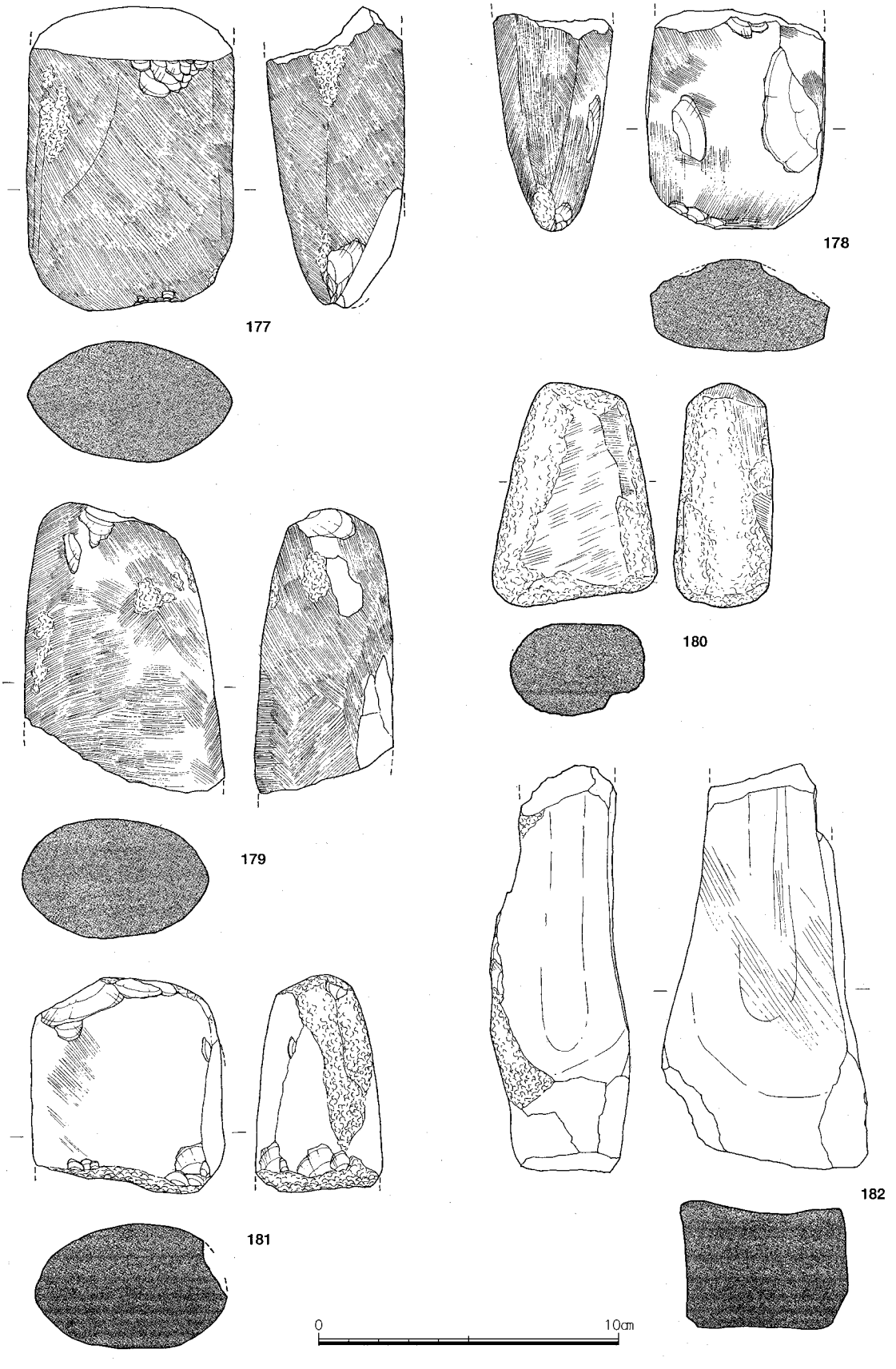


Fig.287　SW04の遺物（縮尺1/2）

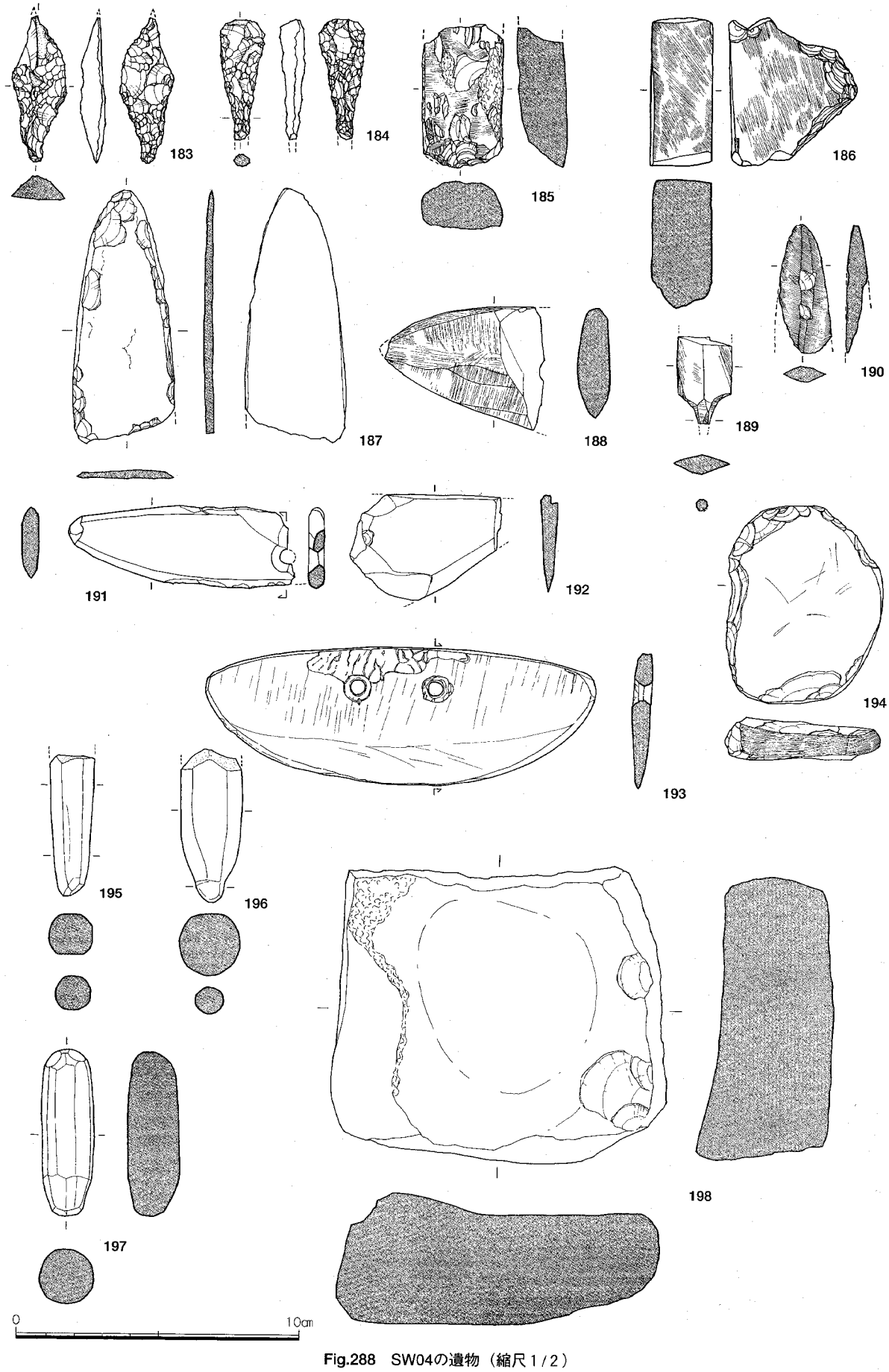


Fig.288 SW04の遺物（縮尺1/2）

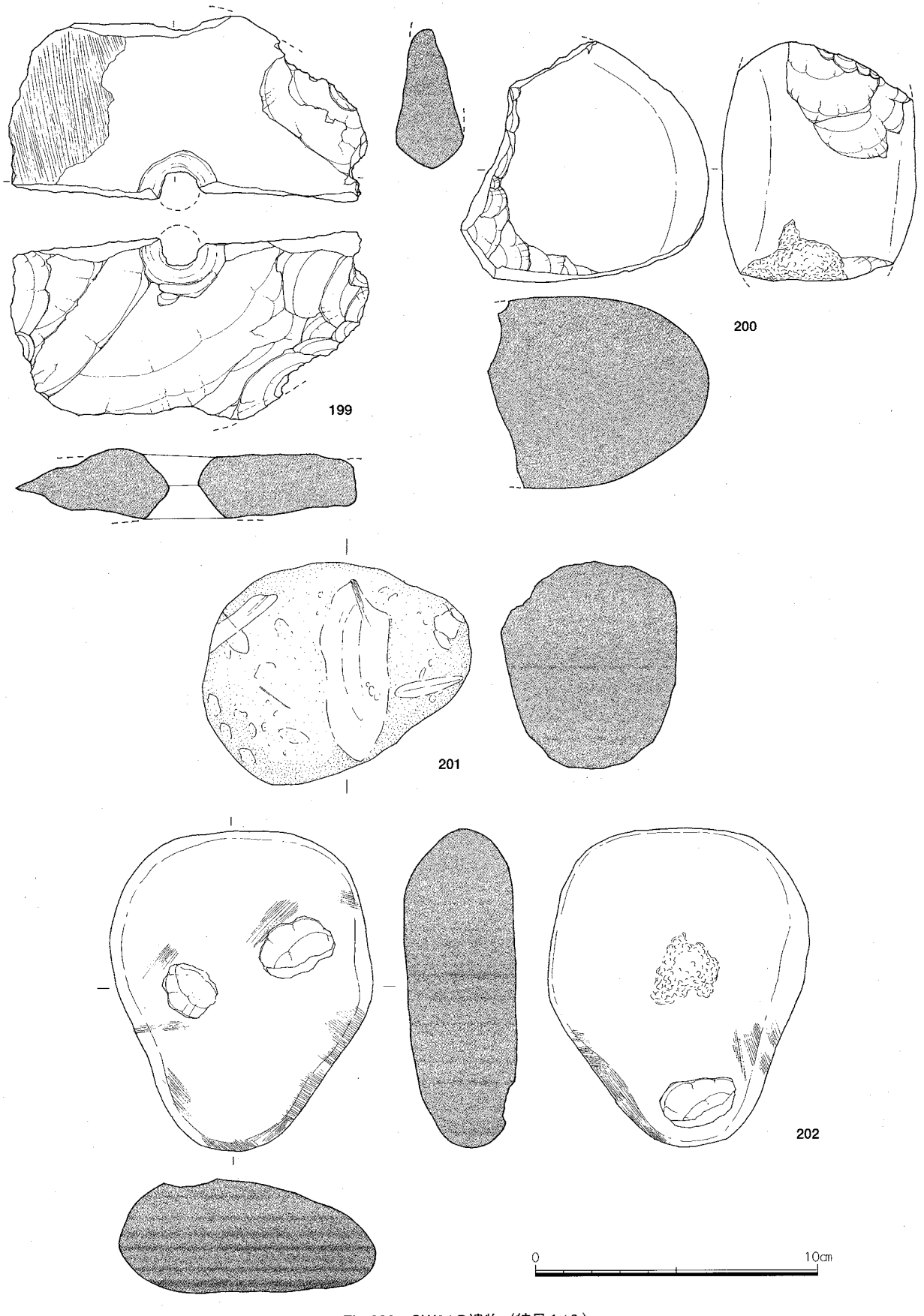
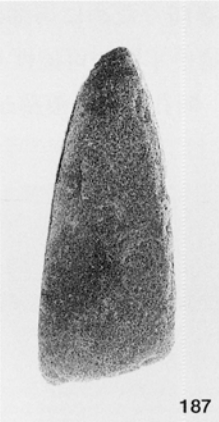
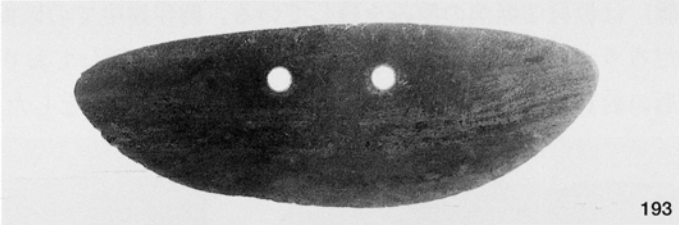
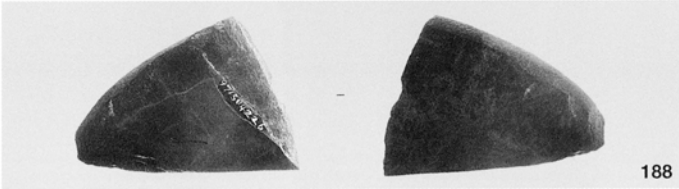


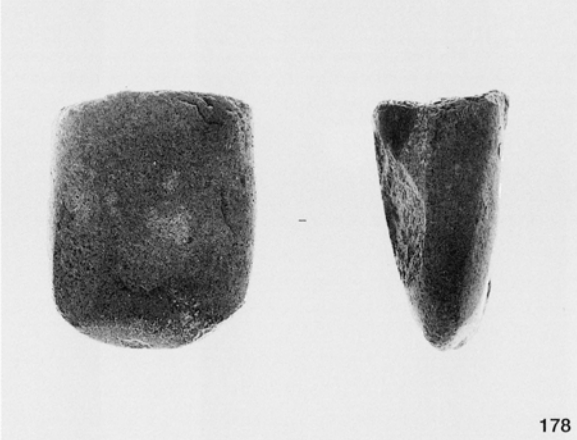
Fig.289 SW04の遺物（縮尺1/2）

石製品 177～179は磨製石斧。177、178は側縁が平行し、横断面は薄くはない。179は側縁が台形状となり、頭部は丸みがある。３点とも全面に研磨痕がよく残っている。180、181は磨り石。182は砥石。183、184は黒曜石製。184は石錐か。185、186は片刃石斧の破片。研磨痕がよく残っている。187は石剣の形状をしているが、剥離していることもあって薄く、刃部の研ぎ出しも十分でない。188は石鎌の先端部。刃部だけでなく身全体がよく研磨されている。189、190は磨製石鏃。189は茎があるが関は左右対象ではない。鏃は茎まで通っていない。190も細長い身で、断面はシャープな菱形ではない。191～193は石包丁。193は外湾刃であるが、背は直線ではない。小孔上部に敲打痕があり、研磨は完全でない。194は周縁を研磨しているが用途不明。195は砥石、196、197は穿孔具。198は砥石。199は円盤状で、中央に両面穿孔の孔があることから石錘とした。200は円形の磨り石の破片。残存部は使い込まれて滑らかとなっている。201は軽石。雀居遺跡に持ち込まれた遺物だが、特別な加工痕はなく。使用目的が判然としない。202は楕円形の自然石の表裏を一部敲打剥離している。石の輪郭が人の顔に似ているために敲打痕が両目と口のようにも見える。









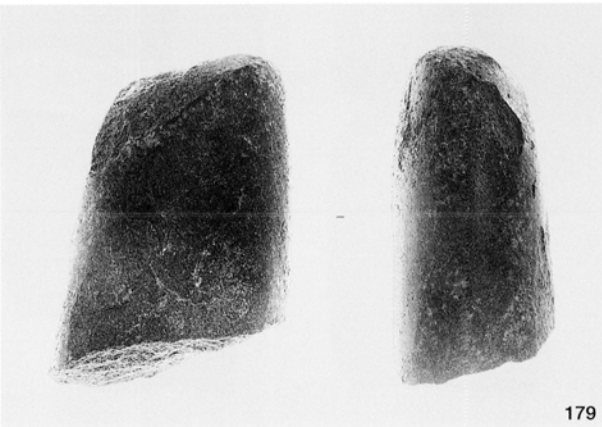
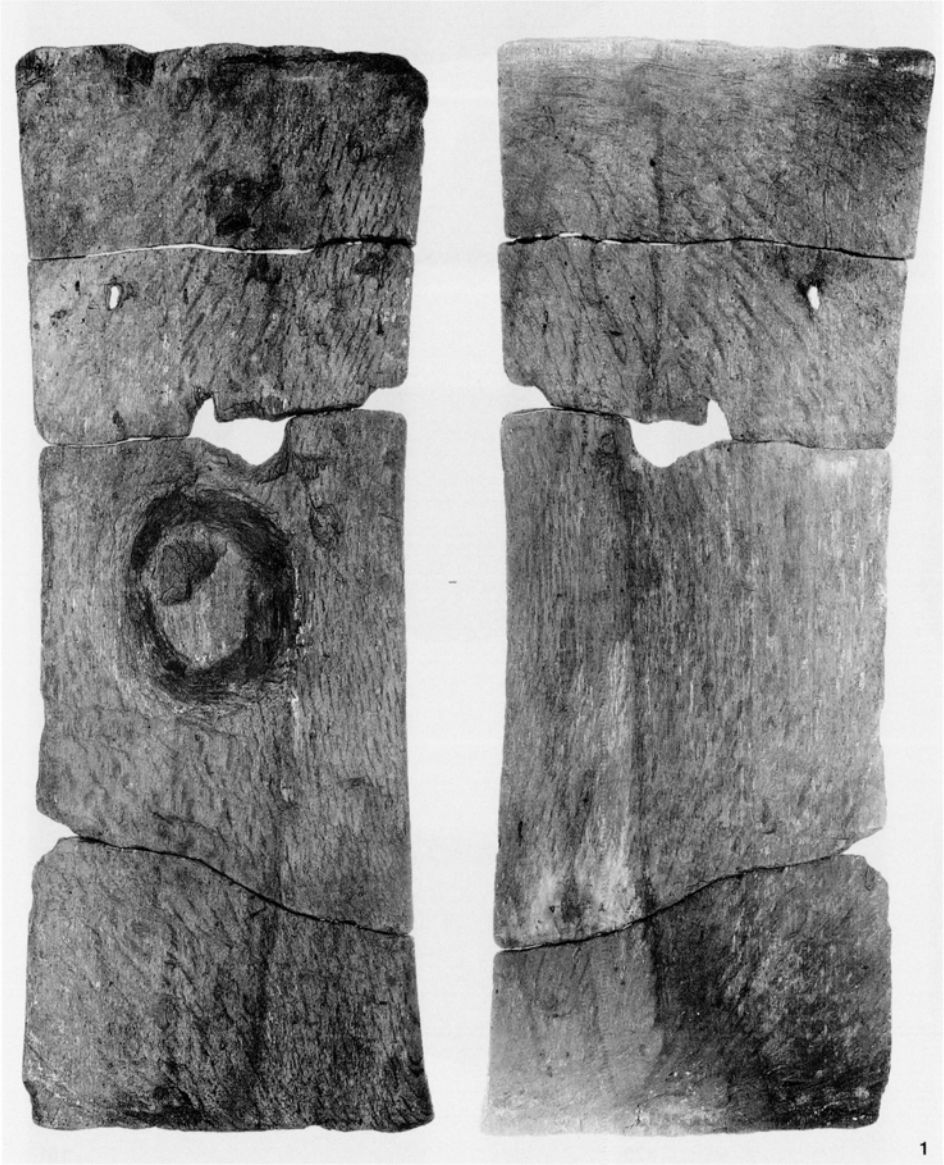


Fig.290 SW04の遺物

木製品　多様な木製品が出土したが、その出土状況から、X30グリッドの折り重なった木材の下から出土したものと、これ以外の埋め土中から出土したものに大別することができよう。前者は短時間に埋没した可能性があり木製品の組合せ、共伴関係を知る上で興味深い。一方埋め土出土の木製品は、土器と同じように上下に渡って出土しており、木製品の時期もこれらの土器と同じと考えている。ただ凹地が開口しているY27グリッド付近ではやや新しい時期の遺物が混在していた。

1～**4**は平鍬とその未製品。**1**はX31グリッド出土の諸手平鍬の未製品。いま４片に折れているがほぼ完形品である。長方形の身は両端刃部は同じような幅で中央がわずかに狭くなり、縦断面では鍬前面（手元側、左図）側に沿っている。中央に縦長楕円形の隆起部が削り出されているが、柄孔はまだ穿たれていない。隆起部の加工は、身に向かって約40度の角度で放射状に削り取っている。身の削り痕は残っていないが、すでにほぼ完成品の厚さであろう。むしろ薄すぎる程である。両端の刃部（刃縁）は板材切断前の厚みを残している。製作途中での破損を防ぐために刃部の加工を最後に残したのだろう。**2**は隆起部周辺の破片。身の側縁は平行しており諸手平鍬の可能性もあるが、隆起部は楕円形の約1/3がカットされU字形であることから平鍬とした。柄孔穿孔の痕跡がなく、未製品である。



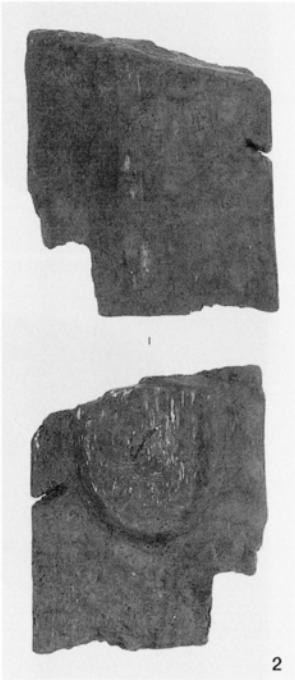


Fig.291　SW04の遺物

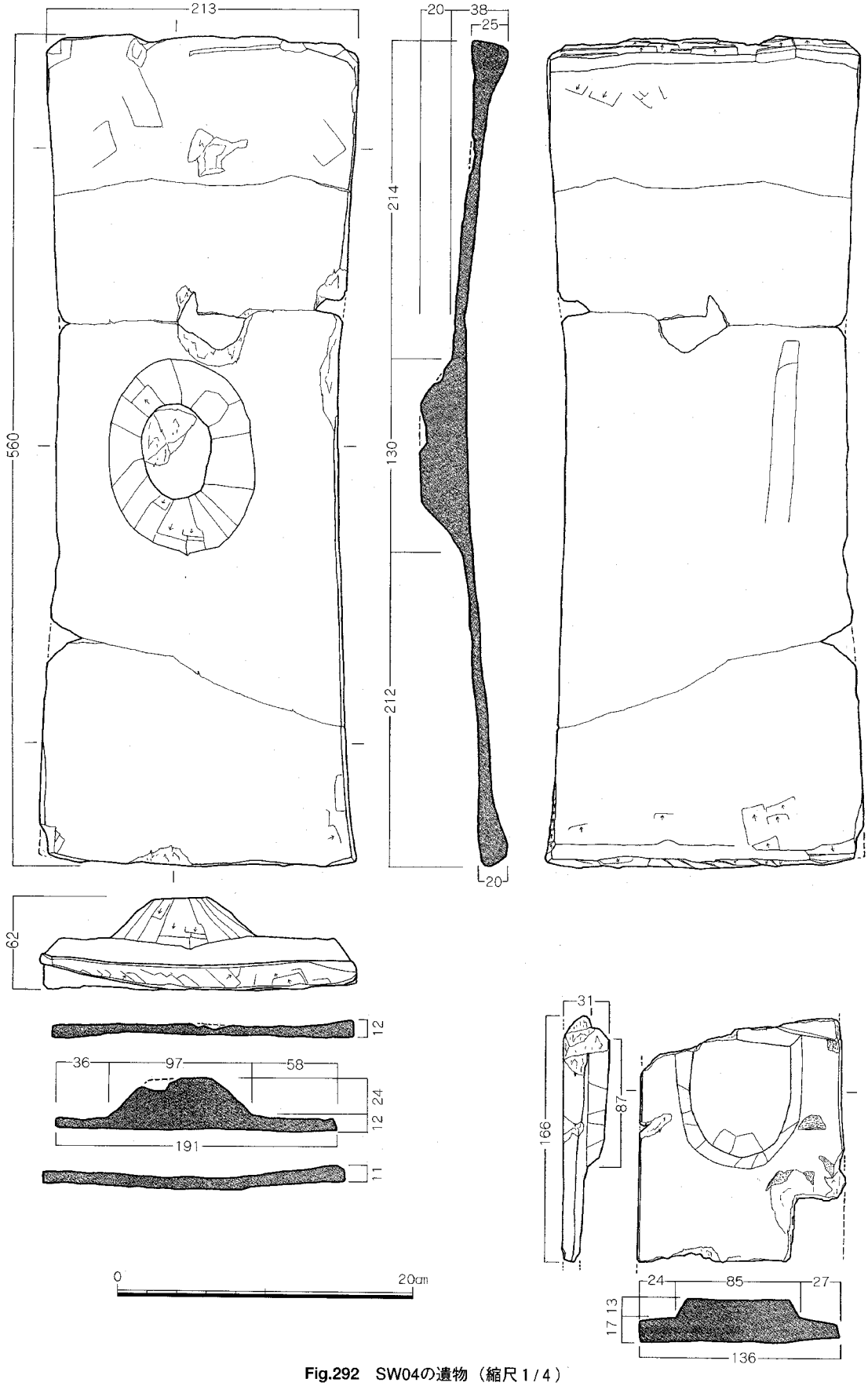
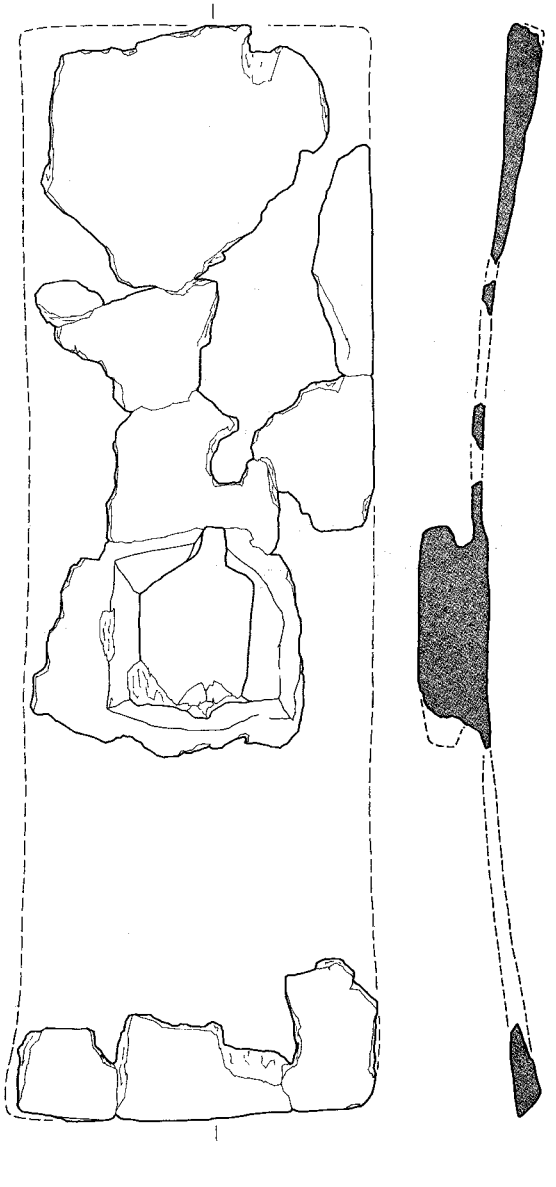
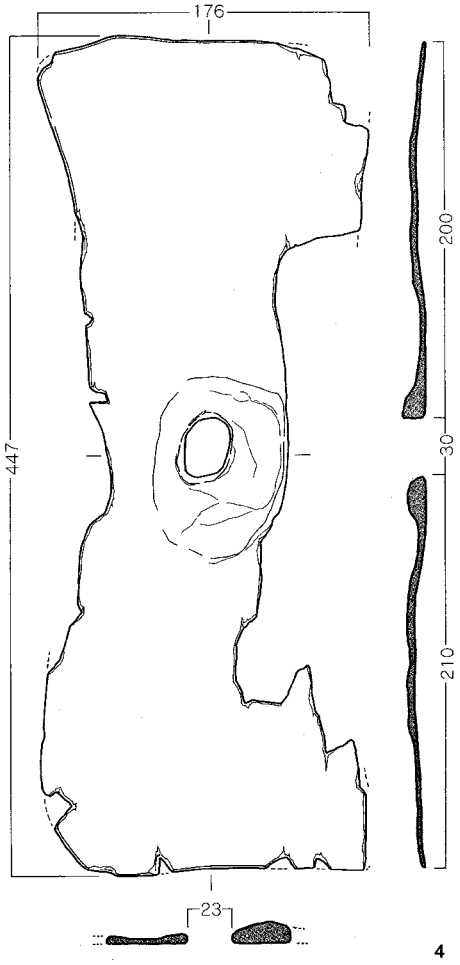


Fig.292 SW04の遺物（縮尺1/4）

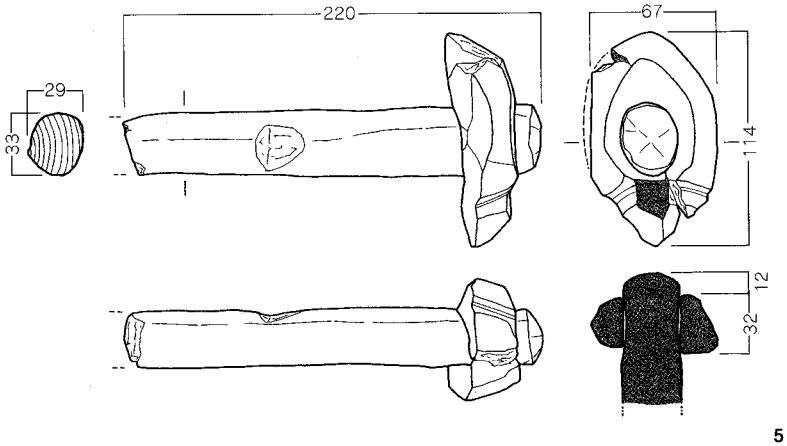


3



4

0 20cm



5

Fig.293 SW04の遺物（縮尺1/4）

同じように3、4は諸手の平鍬。3は残りがたいへん悪いが図のような大きさに復元できる。身は両刃縁の幅が等しい長方形で中央部がやや狭くなっている。中央に隆起部は、楕円形ではなく方形で、その平坦な頂部の両端には長さ約２㎝程の小さな突起が削り出されているのが特徴的である。後面側に反りがあるが、復元のために図は正確ではない。両刃縁は厚みを残しており未製品であることを示している。4は諸手平鍬の完成品であるが、全体に腐食が激しく取り上げ困難と思われたので現地で実測を行った。掲載した図は、取り上げ後水洗を済ませ再度実測、修正したものである。刃縁は身に対して直角で、側縁は中央部が狭まる形状である。中央の隆起部は楕円形で柄孔も同じように楕円形である。5は柄が柄孔に直角に挿入されたままで出土した。身は隆起部だけが残っており、両端が尖り気味の楕円形。紐で結んだような摩耗痕がある。柄は芯無し材。

Fig.294　SW04の遺物

Fig.295　木製品の出土状況

6は細長い身に丸く尖った刃縁が付く諸手狭鍬。全体的に腐食が進み、また埋没中に土圧などでかなり変形を受けている。図下端部が欠けていることから全長不明だが、柄孔が中央に穿たれていたとすると、66cmを超す長さとなる。身の前面側に緩やかに反っており、そのカーブからも柄孔が身の中央にあったことが推測できる。柄孔の隆起部は円形や船形にその部分だけが隆起するA型ではなく、次第に厚みを増すB型である。柄孔も腐食しているが縦長の楕円形をしている。

7～**9**は又鍬。**7**は長方形の板材から3本歯の又鍬としている。頭部の一部が欠けているが、身の他の部分と同じように滑らかになっており、使用時にすでに欠落していたようである。身全体に占める歯の長さは約6割を占め、3本の歯は平行に削り出されている。その横断面は長方形で、前面側は稜線が鋭いのに対し、後面側は鈍い稜となっている。使用による摩耗か。身の反りは前面側にあり、歯部はほぼ直線であるが、その上半だけが強く反っている。柄孔の隆起はB型で中央に向かって厚くなっている。柄孔は円形に近い。形状、加工ともにきわめて堅実な作りと言えよう。

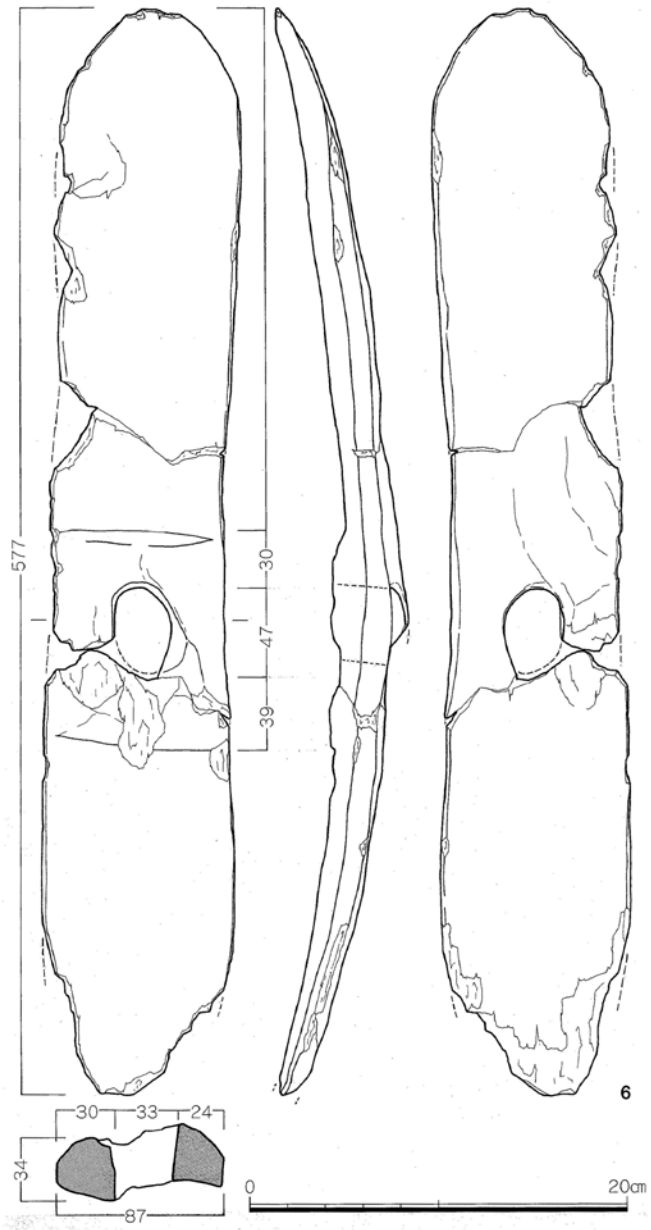


Fig.296　SW04の遺物（縮尺1/4）

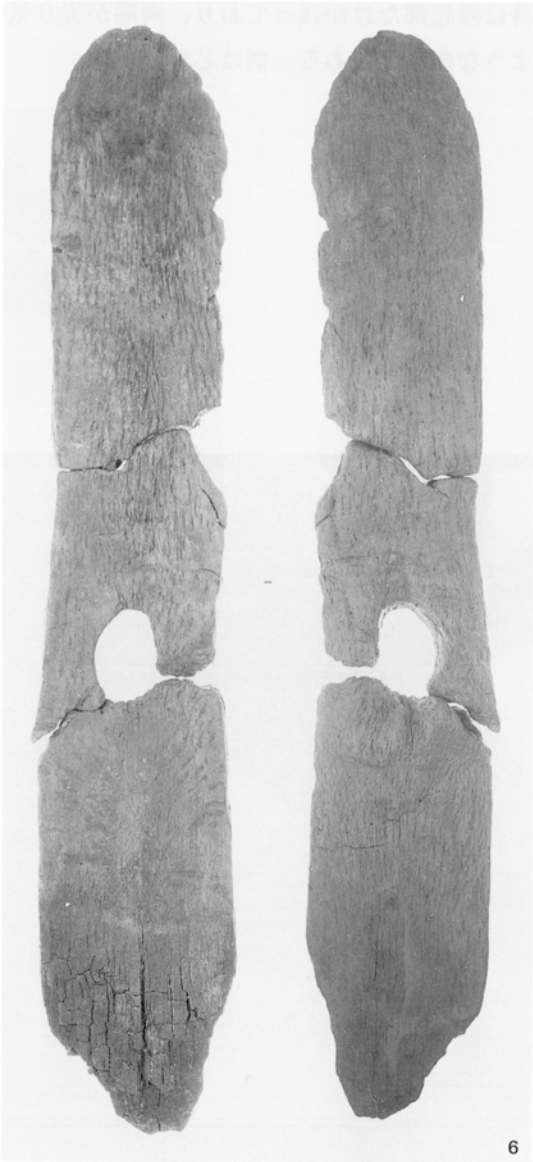


Fig.297　SW04の遺物

Fig.298　木製品の出土状況

Fig.299　木製品の出土状況

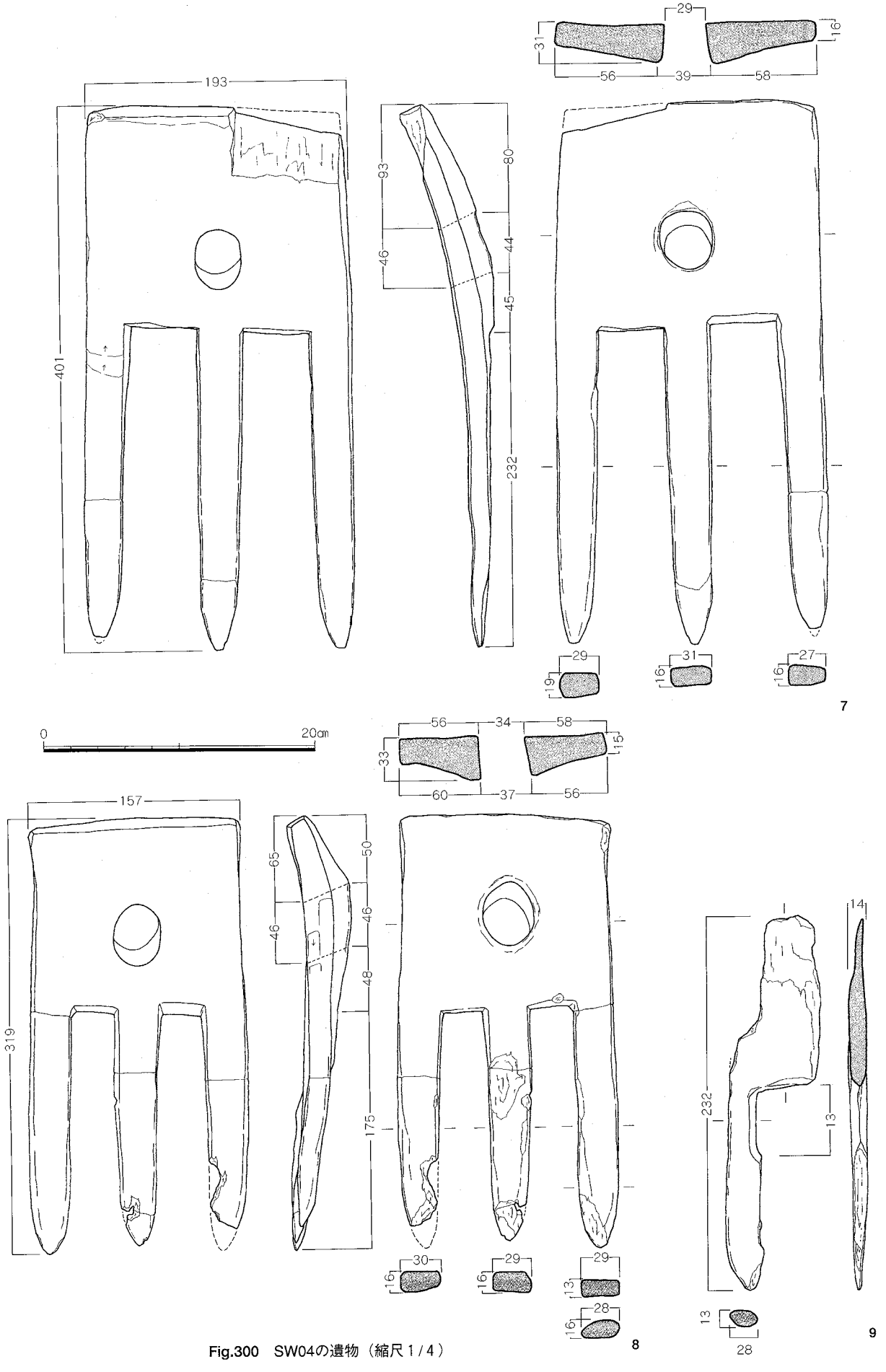
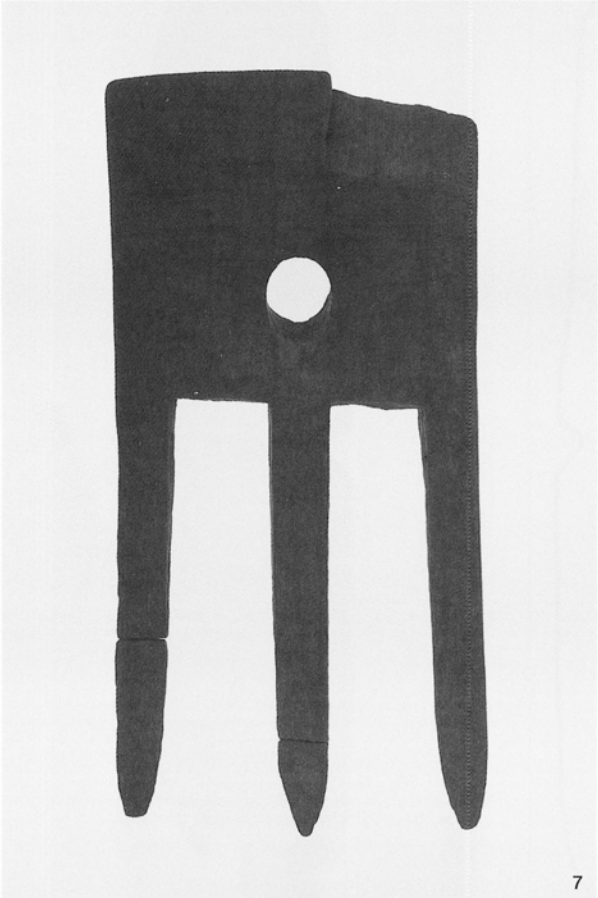


Fig.300 SW04の遺物（縮尺1/4）

8も同じような形状の又鍬。**7**より一回り小型だが身に厚みがあり、一層頑丈な作りとなっている。平行する３本の歯の横断面は長方形で、刃部側に向かって次第に稜が丸みを帯び、先端部では楕円形となっている。柄孔は縦長の楕円形で後面側の孔縁がやや摩耗し、径が大きいことから柄は後面より挿入し着柄したことを示している。柄孔隆起部はＢ型で**7**よりも分厚くなっている。**9**は身の縦半分を失っている。X29グリッド出土。又鍬として作図したが無理な点が多い。柄孔が大きな方形で頭部が長いことがまず気になる。残存部から中心線を想定し復元すると、柄孔があまりにも大きくなる。歯も２本以上となると間隔が開き過ぎて異様な形状となる。そこでエブリのように横長にしての使用を考えたが、身の加工が刃先に向かって次第に薄くなっていることから肯定できそうもない。そこで柄孔としているものは再加工で、本来は**7**、**8**のような形状だった又鍬が、柄孔から外れて割れたと想定しておく。従って柄孔は図のもう少し右側にあるということになる。**10**はSW04の最南端Y26グリッドで出土した平鍬である。頭部と刃縁の幅に極端な差がないことから狭鍬とした。頭部は丸みがあり、身のほぼ中央側縁に抉りがある。この抉りは笠状ではなく、台形に近い切れ込みになっている。紐擦れのような痕跡はない。刃縁も身に対して直角ではなく、丸みを持たせて



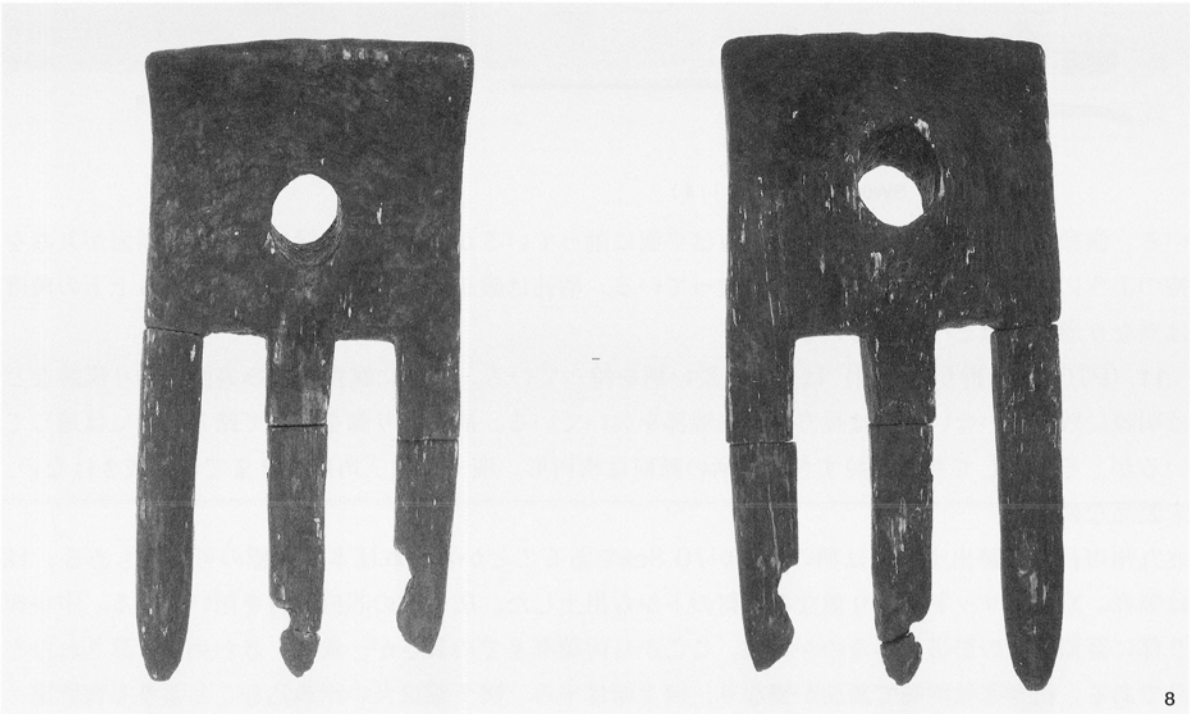


Fig.301　SW04の遺物（縮尺１/４）

Fig.302 SW04の遺物（縮尺1/4）

Fig.303 SW04の遺物

いる。側縁の加工は中央抉りよりも上方は平面に削っているが、下半は刃縁に向かって断面が丸みを持つようになり、刃縁近くでは先細く尖っている。柄孔は縦長の長方形で、柄を挿入する上下の角度は異なり通常の鍬と一致している。

11（P70-71。折り込み図）は異様に長い柄を持っている。全体に腐食が進み表面の削り痕跡などは明瞭に残っていない。身は長方形で先端部を欠いている。肩があり脚をかけて踏み込むには適しているが、それにしても柄が長すぎる。柄の断面は楕円形。取っ手は三角形のままで刳り抜きはない。未製品なのか。

北九州市長行遺跡出土の櫂は柄の長さが70.8cmであることからすれば本例も櫂の可能性もある。**12**は竪杵。X30グリッドの折り重なる木材の下から出土した。広葉樹の芯持ち材を用いている。中央握り部に算盤玉状の節帯があるのが特徴。ここから両端部までの長さが一致し、きわめて計算された作りである。搗き部は両端で断面が異なり、図上端は平ら、図下端は丸い踏み込むことよりも物を遠くに運ぶ、投げ出す目的の道具とすべきだろう。

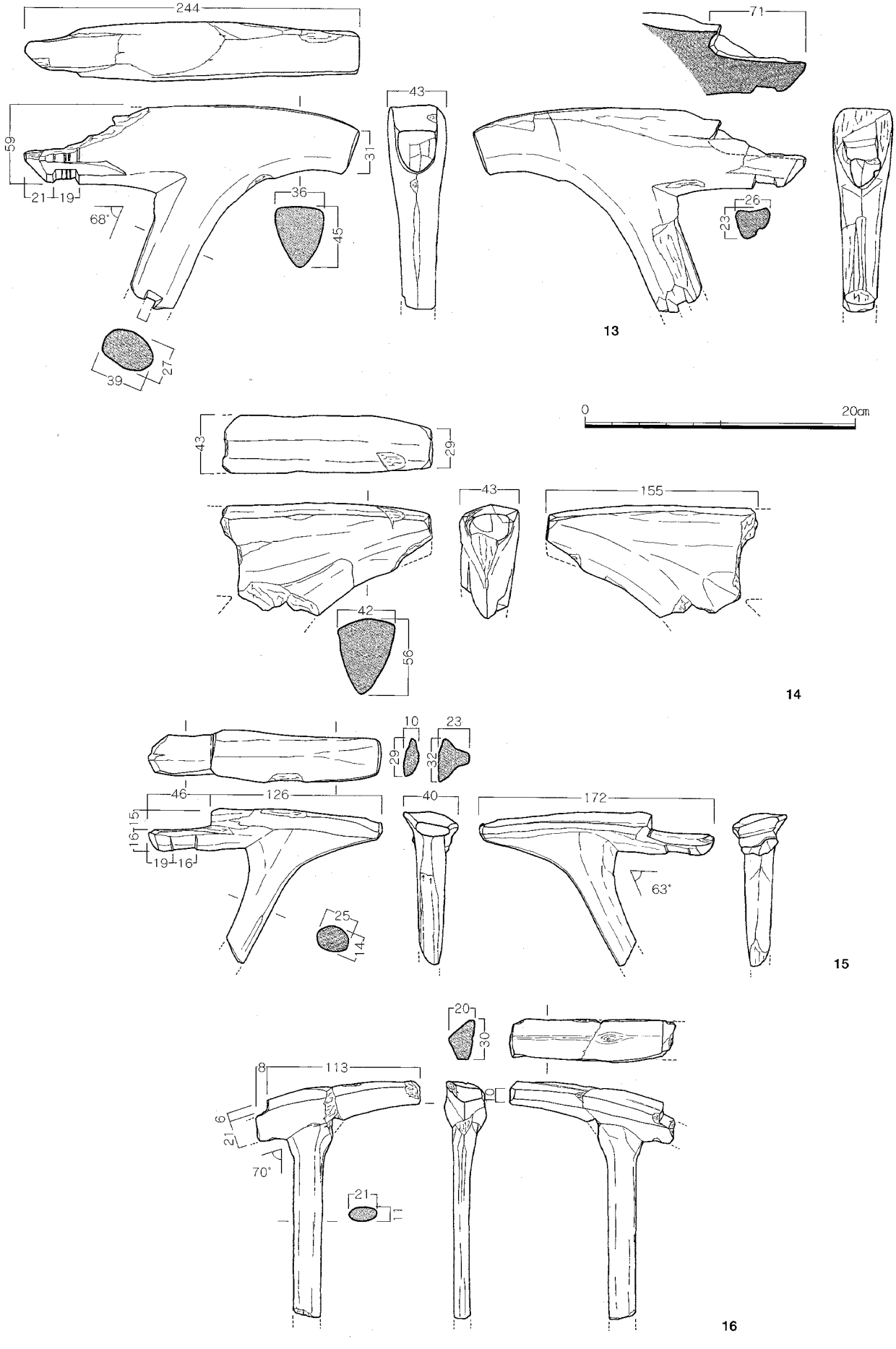
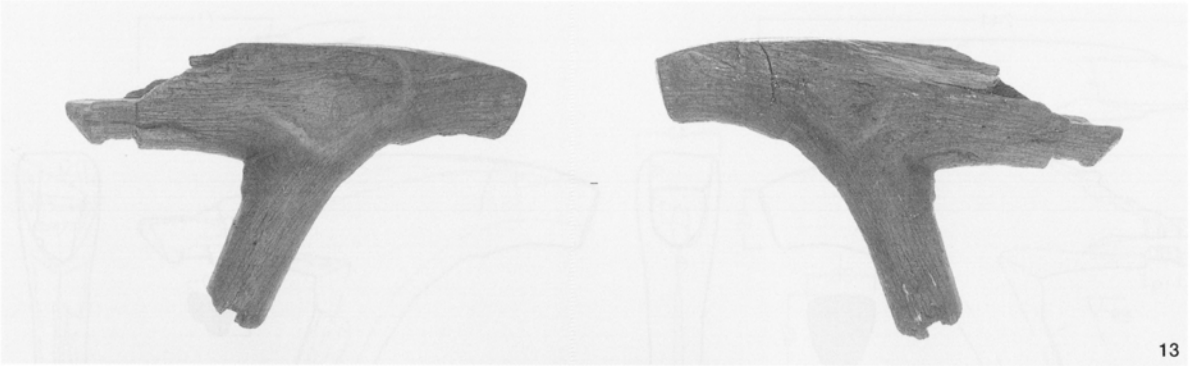
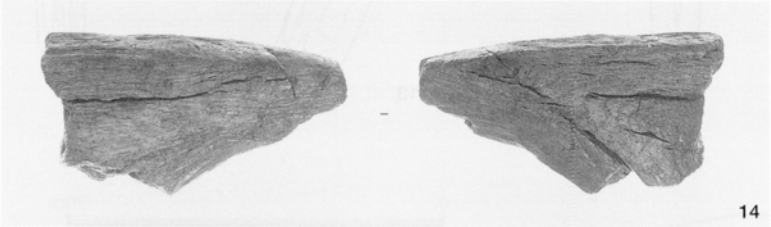
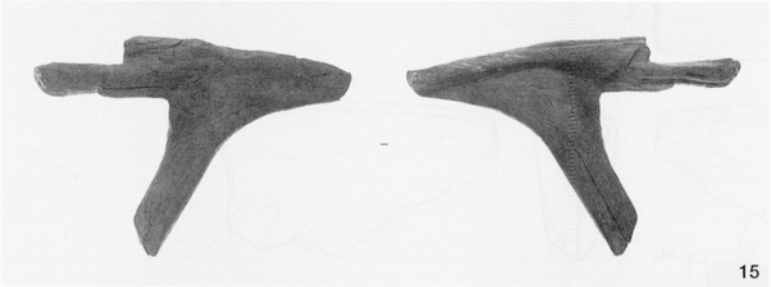


Fig.304 SW04の遺物（縮尺1/4）







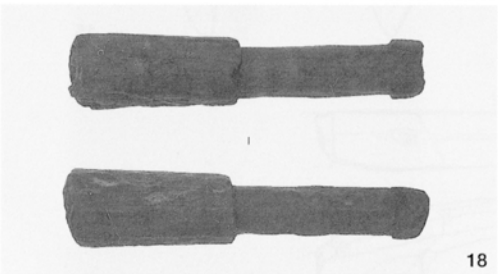


Fig.305　SW04の遺物

13～**16**は斧柄。4点とも曲柄で、斧を直接挿入する直柄は出土していない。**13**は斧台と握り部の一木作りで、斧台後面は平坦ではなく緩やかな弧状となっている。この斧台の先端から71㎝まで装着溝が彫り込まれており、その長さは斧台の約1/3を占める。前面の装着溝下部には紐で結縛するための溝がありその痕跡が残っている。これらの加工から柱状片刃石斧を装着し横斧として使用したことが分かる。握り部には方形の小孔があるが、どのような役目だったのだろうか。**14**は斧台の後方部と握り部の基部だけが残る。斧台の後面は上部に盛り上がり気味で、後端はほぼ直に切り落としている。横断面は逆二等辺三角形。装着溝が分からないが**14**と同じように柱状片刃石斧用であろう。**15**は扁平片刃石斧用の斧柄。斧台後面はほぼ平坦で、先端より46㎝が切り込まれて段となっており、斧台前面に紐結び用の溝を加工している。ここに扁平片刃石斧を乗せ紐で結び固定する。**16**は同じように扁平片刃石斧用。握り部が扁平楕円形で細く、斧台の後方が長い作りである。

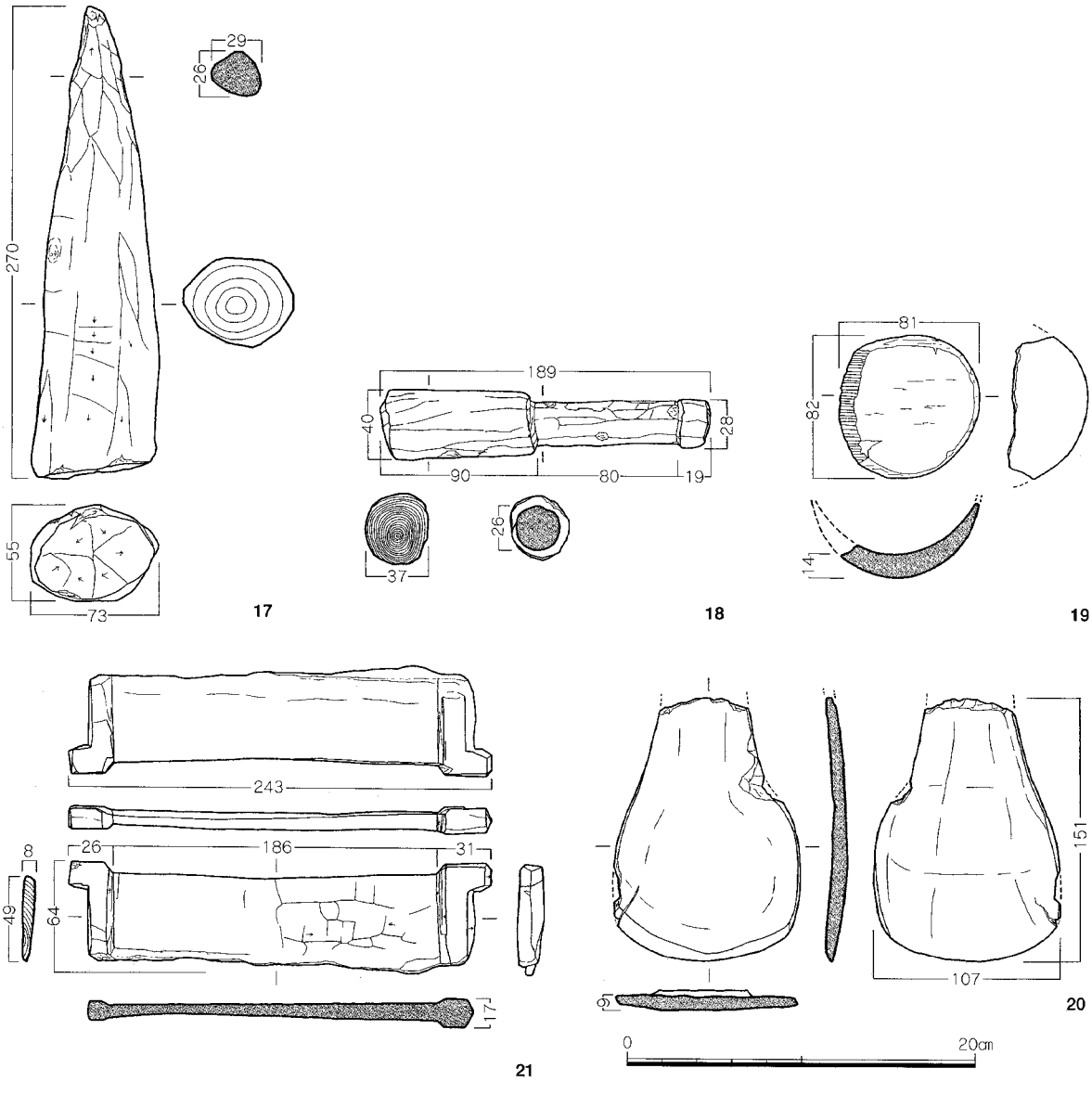


Fig.306 SW04の遺物（縮尺1/4）

17は広葉樹の芯持ち材。図下端は直に削り切断し、図上に向かって尖らせている。全面に削り痕が顕著に残り、竪杵の搗き部のような形状をしている。しかし搗き部の先端は摩耗はなく、竪杵のような上下運動の使われ方ではない。また横槌のような使用を示す痕跡も側面には認められない。楔や栓のような使用か。**18**は横槌。木目の詰まった芯持ち材。握り部が槌部より径が小さくなり、その端部は帯状の頭部を削り出している。ただこれを水平にして使うと手に当たり、厚みのある工作台が必要である。**19**は針葉樹を半円形に加工している。全面きわめて丁寧な削りで滑らかに仕上がっている。椀や杓子などの形状が想定できるが、口縁部が欠けているので断定できない。**20**は板目材で広葉樹か。図上部が欠けているが雨滴状の形状である。縦、横断面ともわずかながら反りがある。図下端は尖っており、杓文字のような使用を想定した。**21**は針葉樹の板目材。長方形の短辺側の両面を帯状に厚くし、さらにその一端をL字形に突出させている。帯状の厚さは両端で異なる。何かの組合せ材と思われるが用途不明。

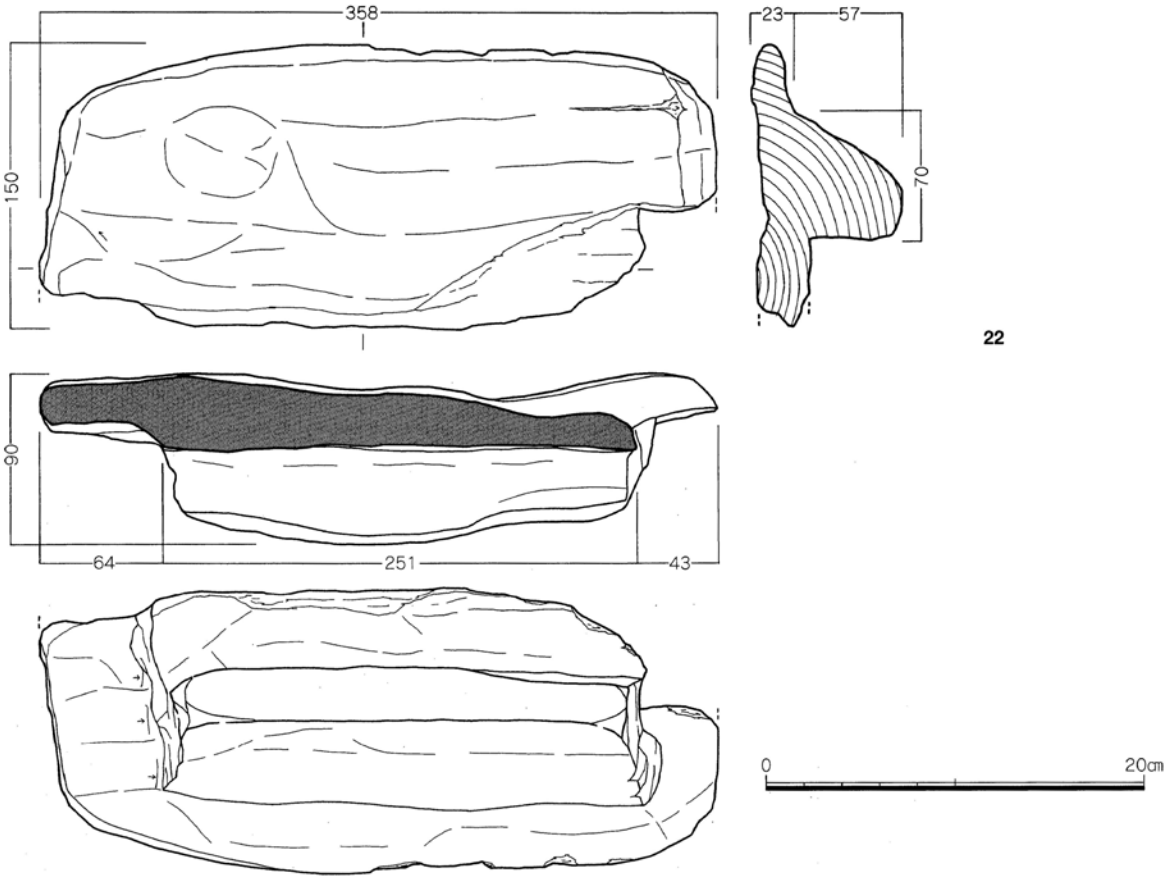


Fig.307　SW04の遺物（縮尺1/4）

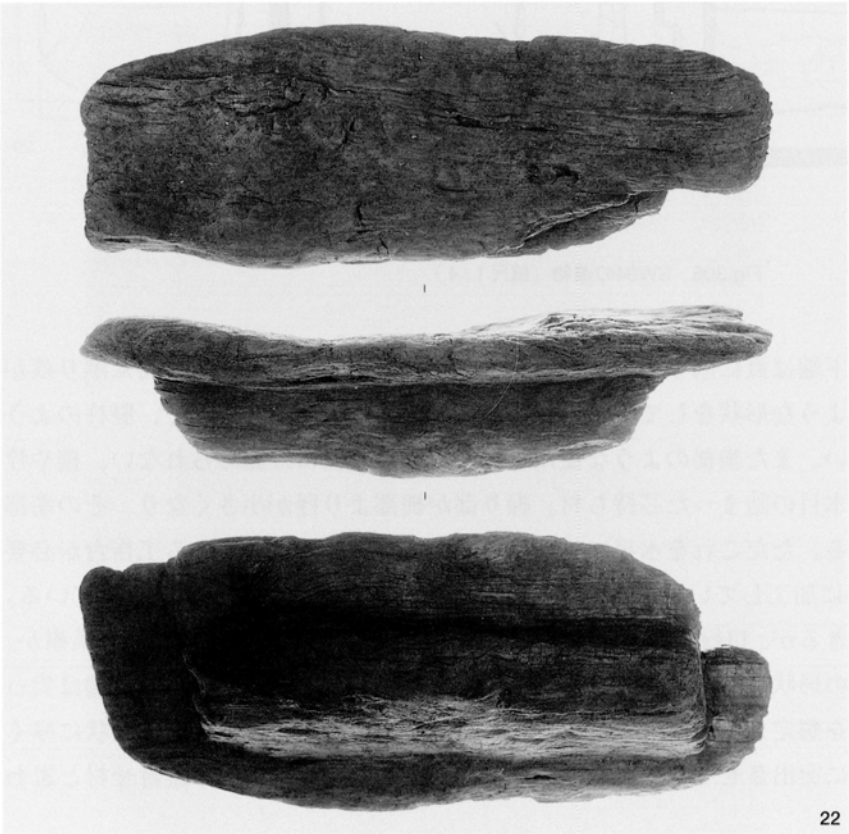


Fig.308　SW04の遺物

22は横木取りした材を刳り抜き座板と脚を作っていることから腰掛とした。座板は中央がわずかに凹んでいるが、反りは強くない。また腐食もあって微妙な凹凸がある。脚は長軸に対して平行しており、外に開くのではなく座板に対し直になっている。腰掛は古墳時代のSW01、02でも出土しており、加工法や形状などを比較検討することが可能になった。３例の中では、最も作りが雑であるが、長い期間に渡って農作業や日常の生活具として不可欠な木製品の一つだったことを知ることができる。

23は広葉樹で、外面に樹皮を剥ぐ削りをしている。木目からすると相当大きな材から横木取りをしている。一面が粗い削りで窪んでいることから槽の未製品としたが、あまりにも大雑把で完成品の槽をイメージするのは容易でない。これ以上の加工がなくても礎板や工作台として使用できる。

Fig.309 SW04の遺物（縮尺1/4）

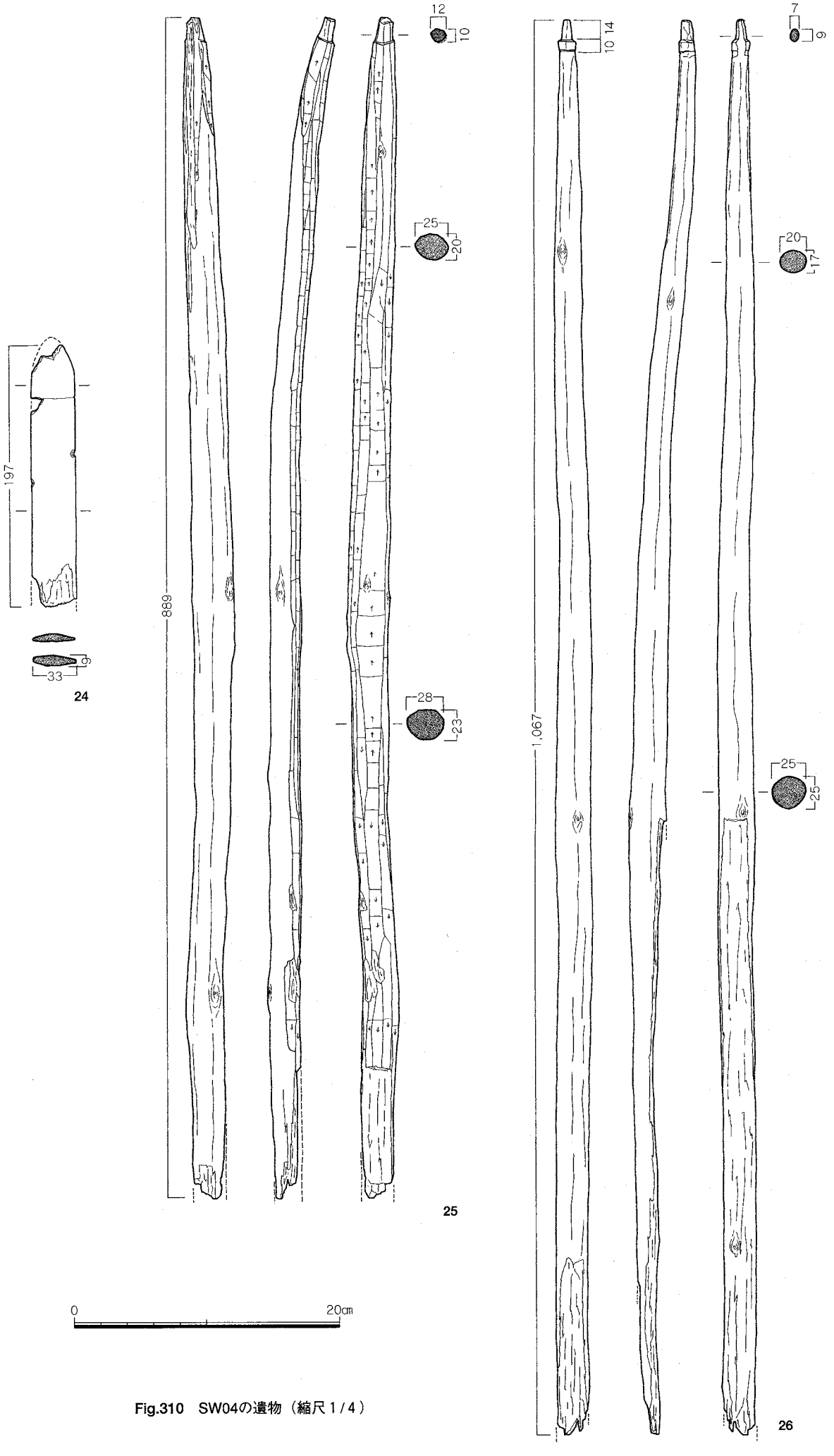
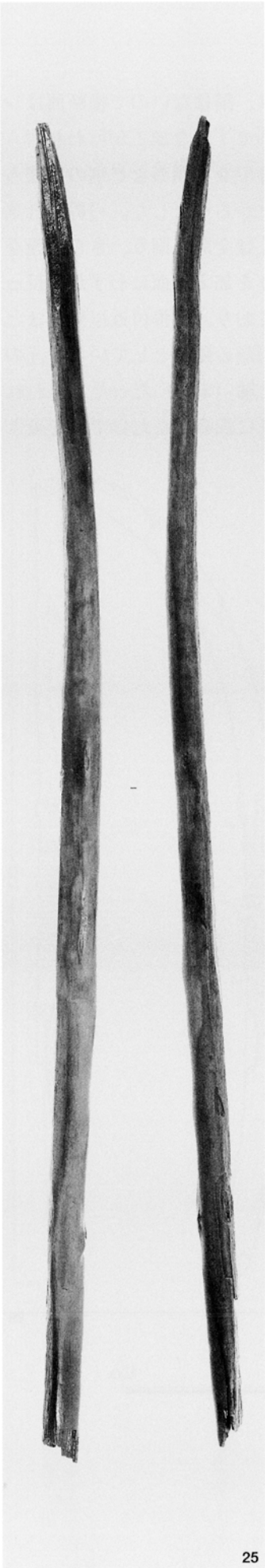
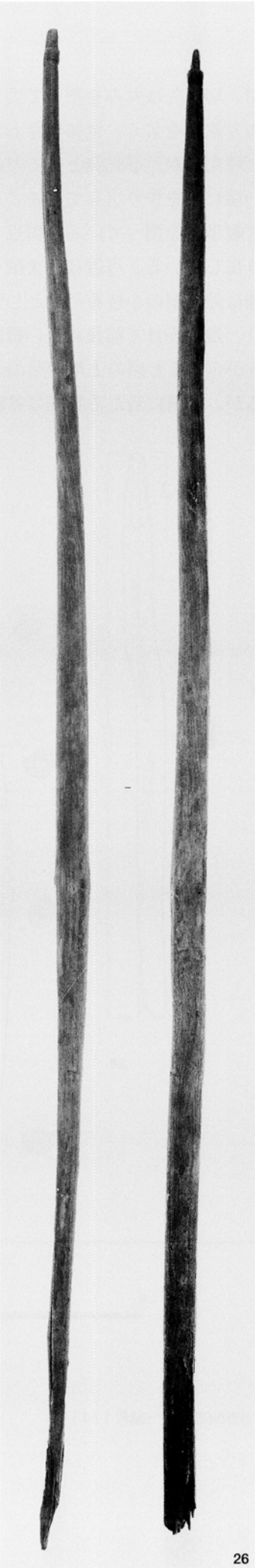


Fig.310 SW04の遺物（縮尺1/4）





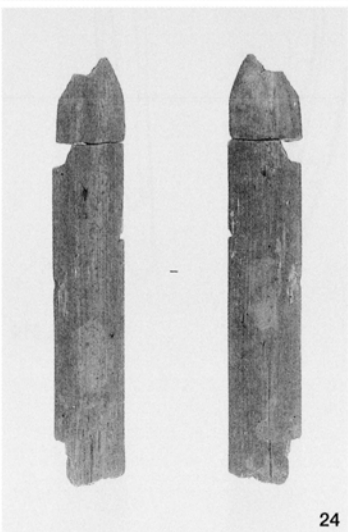


Fig.311　SW04の遺物

24は剣形の木製品。広葉樹の柾目材を使用。切っ先は丸みを持って尖り、鎬はないので横断面はレンズ状をなす。基部近くは側縁に面取りがあり鋭さを欠く。全体にきわめて丁寧な加工が行われ滑らかとなっている。このような形状から剣形と呼んだが、祭祀具としてだけでなく織具など別の用途も考慮する必要があろう。**25**、**26**は弓。**25**は一端に弭を作り出していることから弓とした。弓幹は針葉樹の長さ１ｍ前後の小枝を使い、樹皮を剥ぎ縦半周を削っている。弭近くは全周を削り、さらに段を設け長さ約１㎝、横断面多角形の弓弭を削り出している。弓幹はいま削りを加えた面にわずかに反っているが小枝本来の湾曲であろう。**26**も同様に針葉樹の小枝を弓幹としており、弓弭付近以外はほとんど削りを加えていない。弓弭は節帯を作り、段を設けて前後に長い楕円形の断面としている。元の長さは130㎝前後か。２点とも弓幹の大きさからすると図の上端が弓の上端（末弭）だったと思われる。**27**、**28**も小枝を使って側面を削っているが、弓弭に当たる端部は単純に尖らせただけで弦を巻き

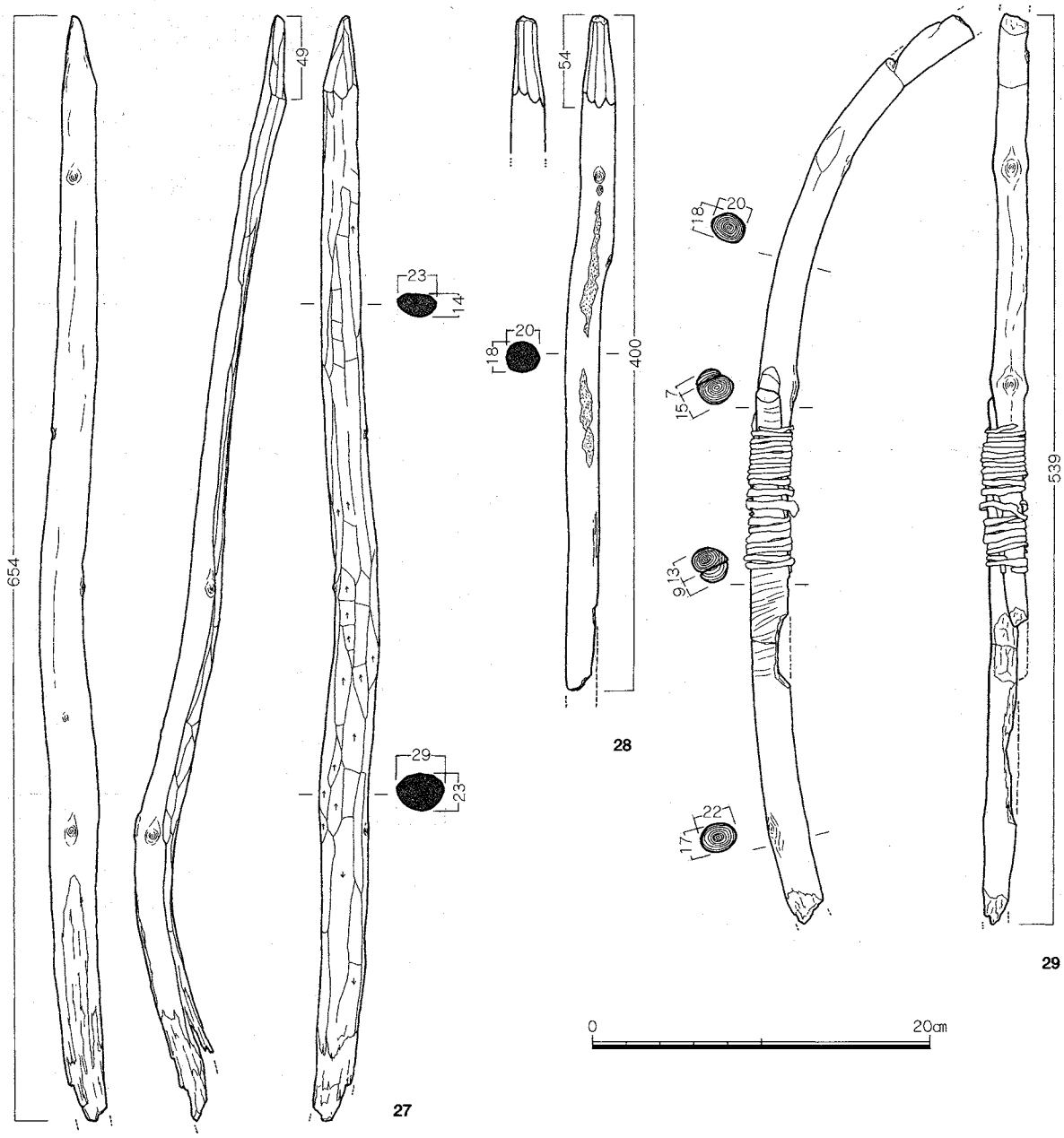


Fig.312　SW04の遺物（縮尺１/４）

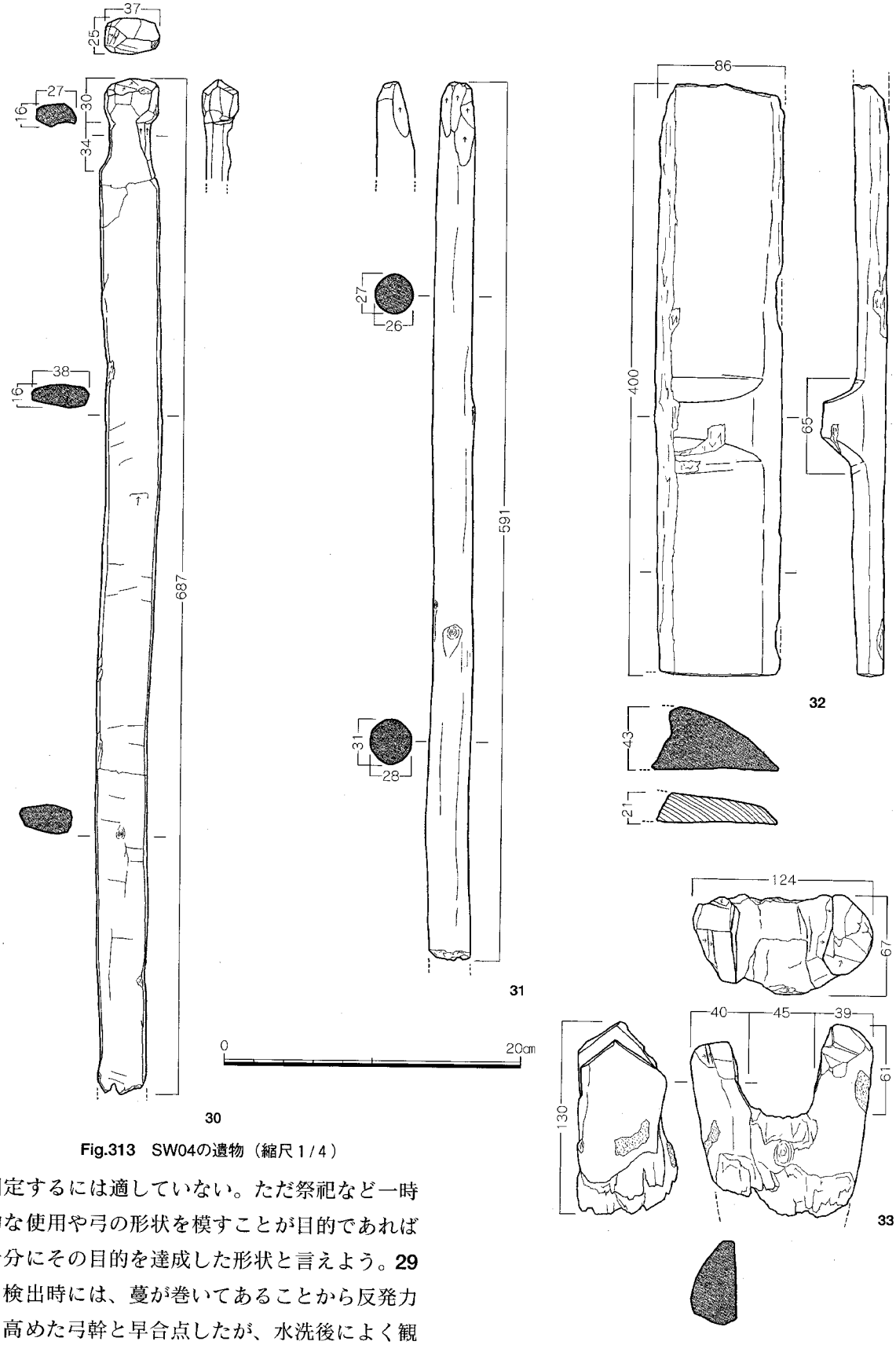
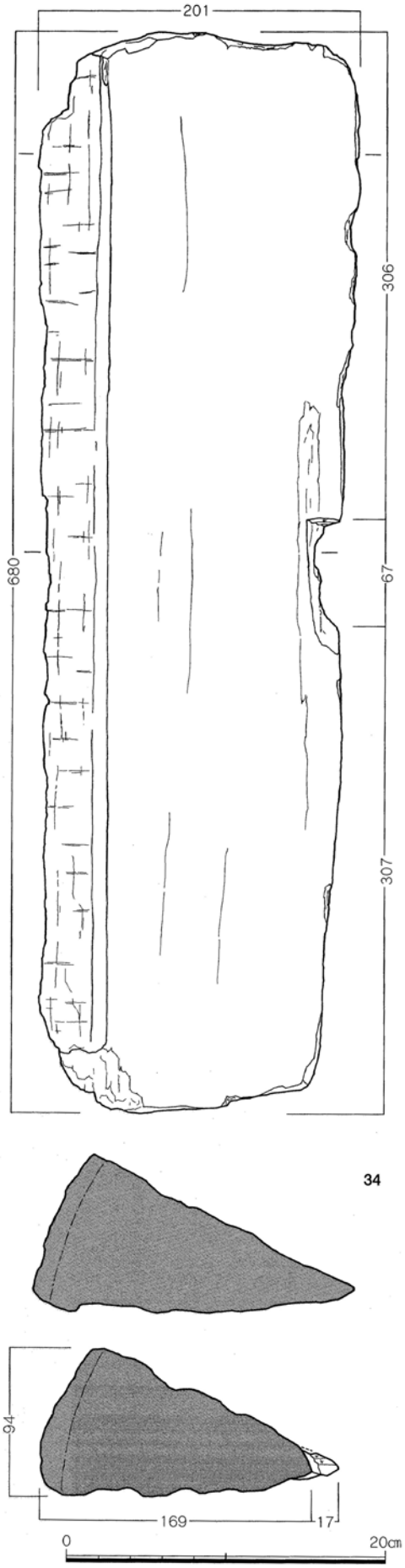
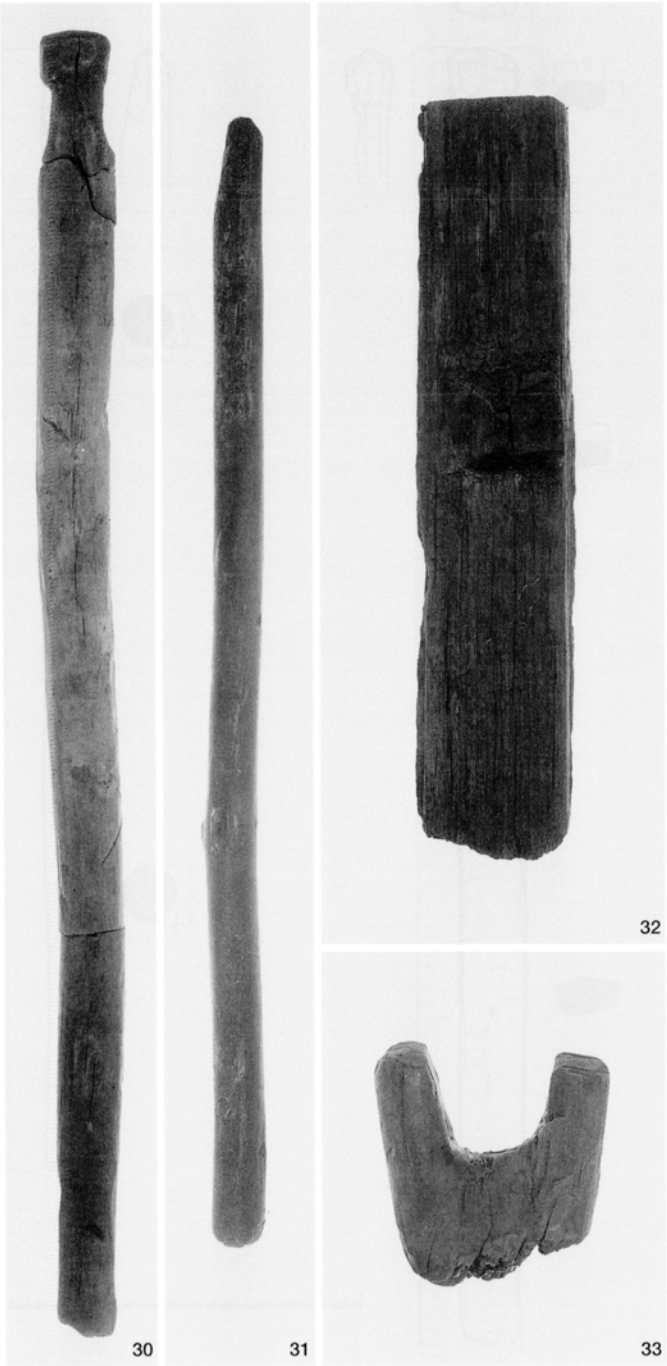


Fig.313 SW04の遺物（縮尺1/4）

固定するには適していない。ただ祭祀など一時的な使用や弓の形状を模すことが目的であれば十分にその目的を達成した形状と言えよう。**29**は検出時には、蔓が巻いてあることから反発力を高めた弓幹と早合点したが、水洗後によく観察すると、２本の小枝を重ねて蔓を巻いた事が分かった。材は広葉樹で同じ樹種の端部を斜めに切り落とし、その面同士を合わせている。漁具の網枠とか田下駄の輪などの可能性が高い。

30は柾目材の板材の端部を抉り頭部を削り出している。用途不明。**31**は細い丸太材の一端を半周だ





▲Fig.315　SW04の遺物

◀Fig.314　SW04の遺物（縮尺1/4）

け削り尖らせている。**32**は半月形断面の材を中央だけ残して板材に加工している。扉、蓋、梯子、あるいは農具未製品など推測したが用途不明。**33**は樹幹の二股部を利用して受け部としている。山形に切断しているが鋭利な刃物を強く打ち込んでいる。建築材や物干し棒など機能は多様だったろう。**34**は広葉樹の樹皮を残したままミカン割りし、尖った側縁の一部に方形の抉りを入れている。**35**、**36**は方形孔があることから建築部材としたが、実際

にどの部分に組み立てられていたのかは不明。**35**は広葉樹の柾目材。板状だが厚さは均一ではなく一方に向かって尖っている。中央の抉りは方形で、その加工痕は残っていない。またこの部分は摩耗して滑らかであることから別材を組合せたのであろう。**36**は全面に腐食が激しく、側面は原形ではない。３個の方形孔があるが等間隔ではなく、板材の厚さも腐食や変形で薄くなっている。

34

35

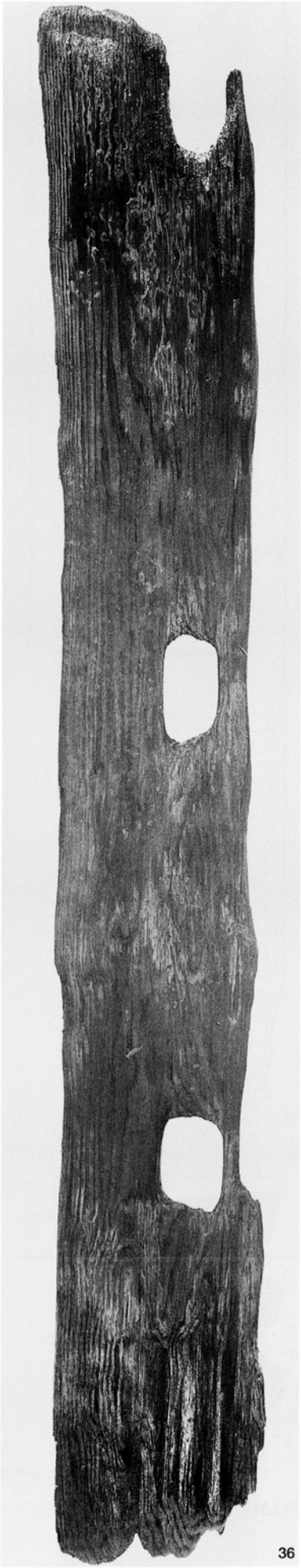

36

Fig.316　SW04の遺物

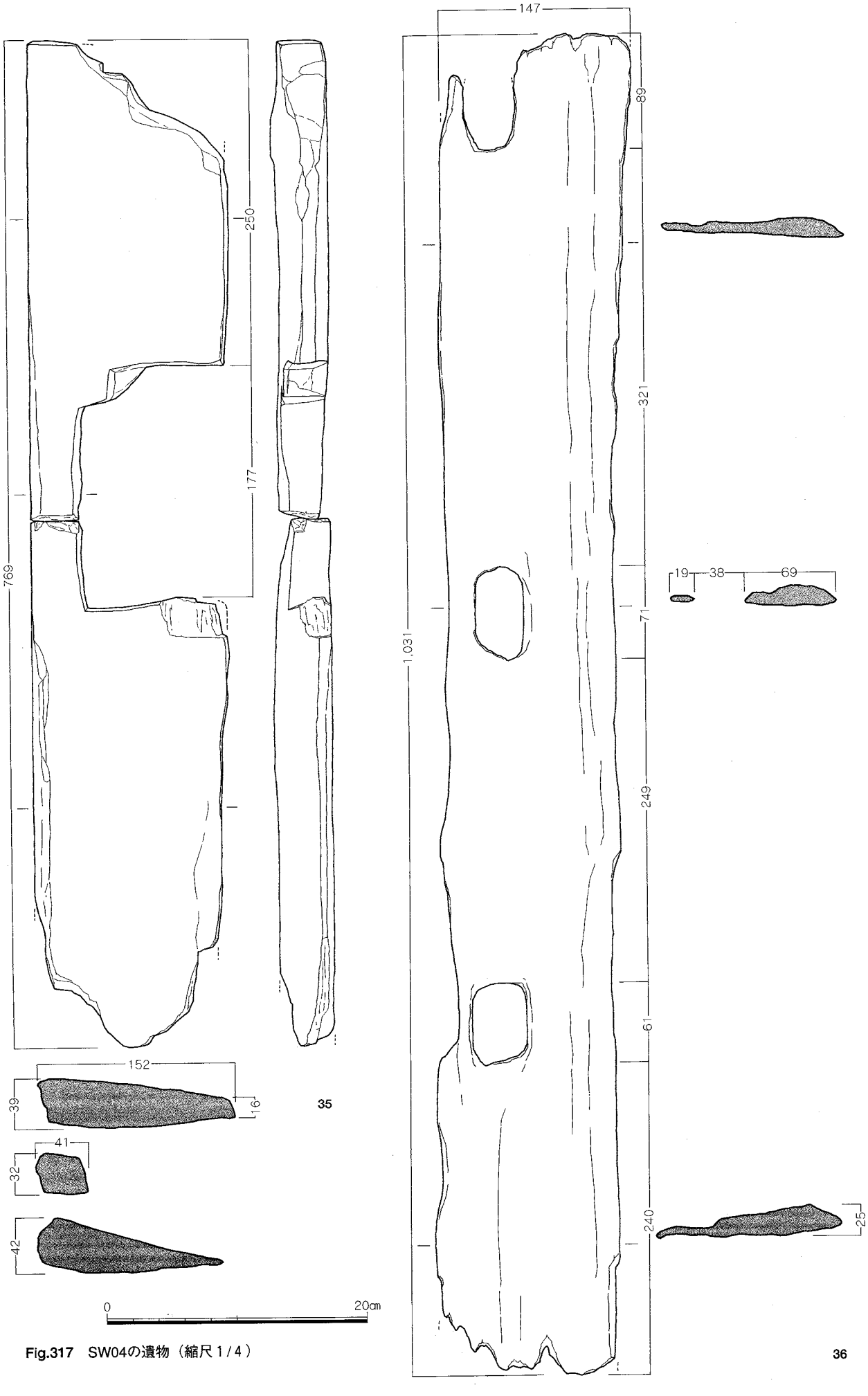


Fig.317 SW04の遺物（縮尺1/4）

第５号凹地SW05　X31グリッドにあり、SW04の北側約２ｍに位置する。その北西部をSW03に切られている。平面プランは長軸7.5ｍ、短軸5.6ｍの不整楕円形で、断面では深みが２か所に分かれている。土層ではレンズ状に堆積しており、数十本の小枝が不規則に埋没し、その間から土器や木製品が出土した。土器は弥生時代前期後半から中期前半が主で、SW04とほとんど差がない。

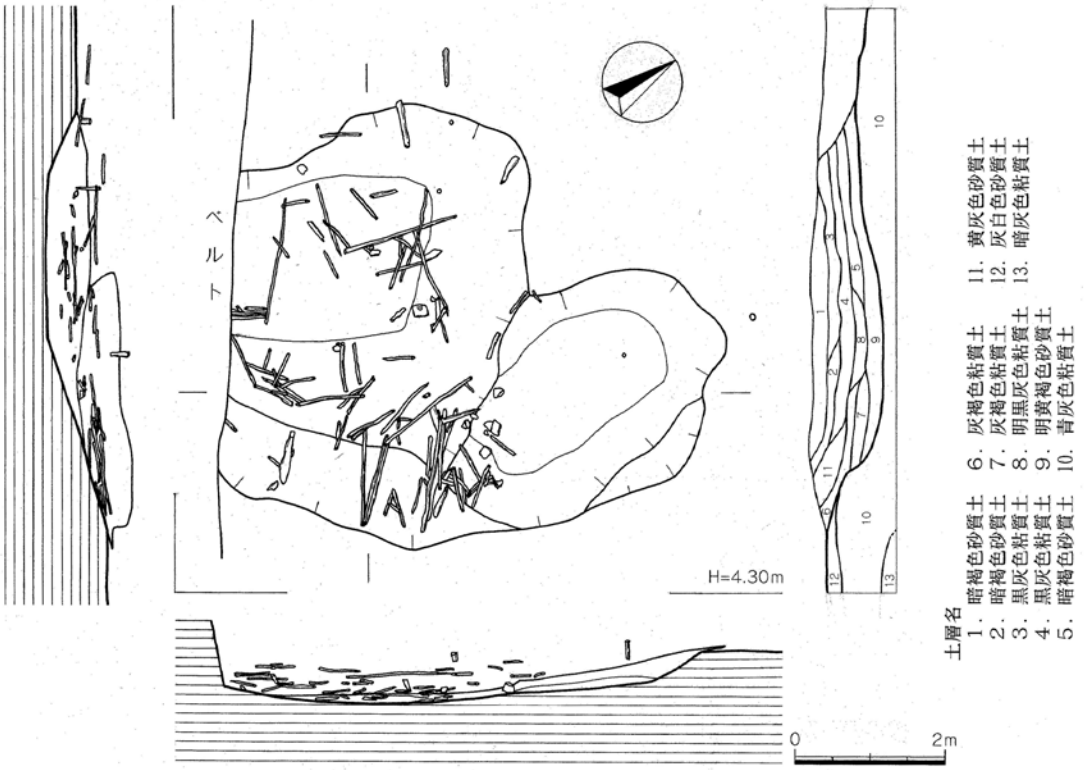


Fig.318　SW05実測図（縮尺１/100）

Fig.319　SW05（東から）

土　器　1～5は如意形口縁の甕と鉢。2は直線的に直に延びてきた体部に屈曲した口縁部が付くが、その端部は内側に微妙に湾曲している。刻み目は口縁下端に小さく入れている。3は口径20.8cm、口縁部は短く屈曲している。4も同じような口縁部で、体部の傾きから鉢とした。5は口径30.4cm、口縁部は水平に近く強く屈曲する。

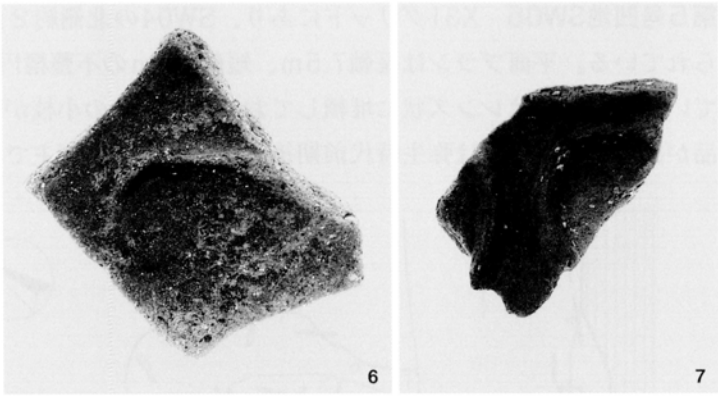


Fig.320　SW05の遺物

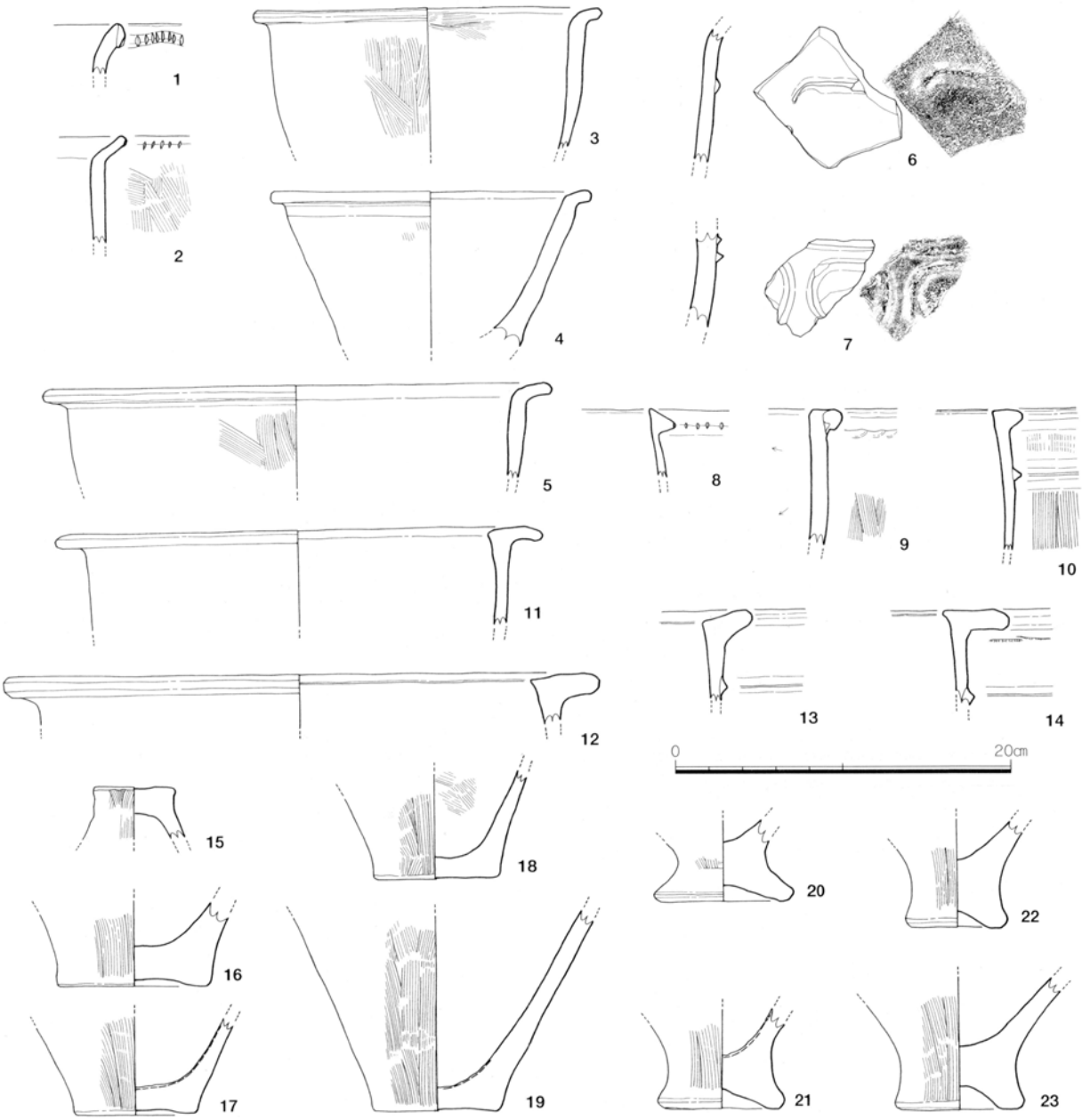


Fig.321　SW05の遺物（縮尺1/4）

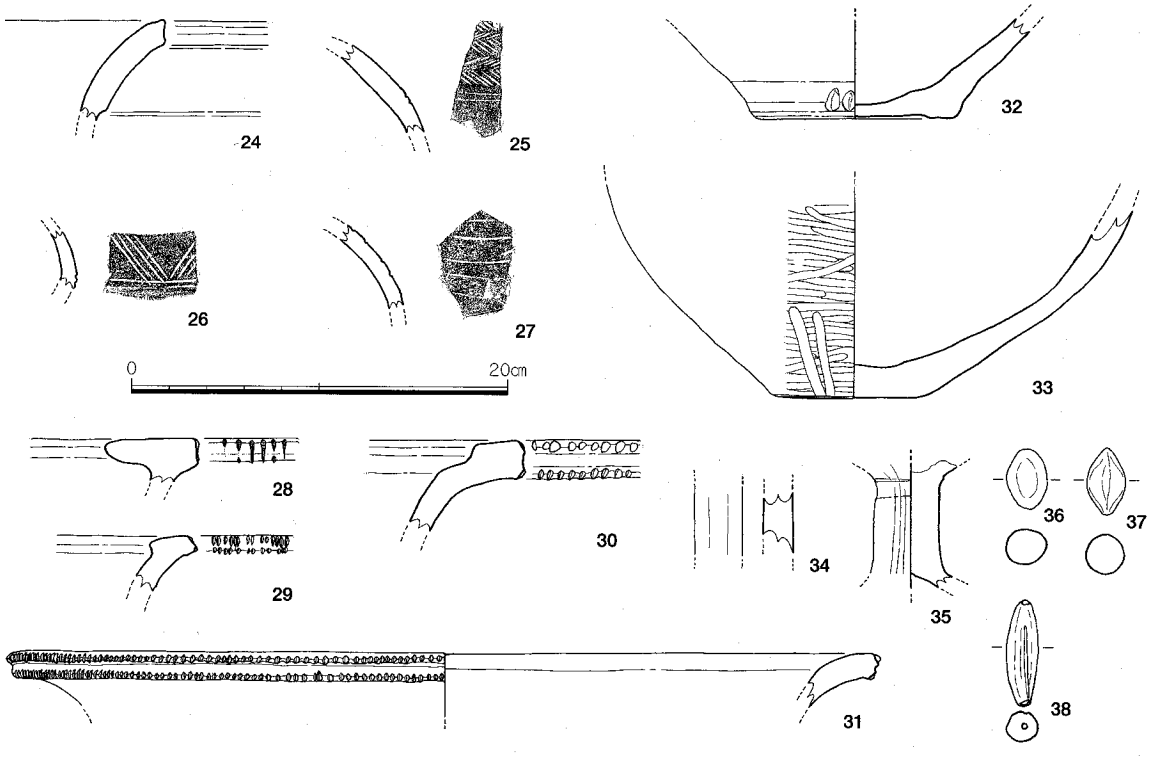


Fig.322 SW05の遺物（縮尺1/4）

6、7は口縁部下の突帯が鉤状文様となる。6の鉤状突帯は下方に湾曲しているが、あまりにもひ弱で鉤の持つ威力を感じさせない。7は口縁部下の突帯は2条でその下段の突帯が互いに下方に湾曲している。全体に摩耗しているが突帯の貼り付け、湾曲は力強い。8～10の口縁部は外側に粘土紐を貼り付け、断面が三角形や円形になっている。9は貼り付けが不完全で下端に空洞がある。外面は縦ハケ目調整で煤が付着している。11～14はL字形口縁の甕。口縁部上面が盛り上がるもの、水平なもの、内傾するものなど多様である。14は内側へ小さく突出しており、口縁下に断面三角形突帯を1条貼り付けている。15～23は甕の底部。体部との境が括れ外底の中央が凹むものと平底がある。24～33は壺。25～27は胴部上半の羽状文、山形文、連弧文の文様。32、33は底部。33は円盤状の底部ではなくそのまま胴部へ延びている。外面は横ミガキ調整。焼成で黒色を呈し光沢がある。28～31は広口壺の口縁部。28は内側へ長く延び、外端には縦の細い刻み目。31は口径46.6cm、口縁端部の断面は口唇状

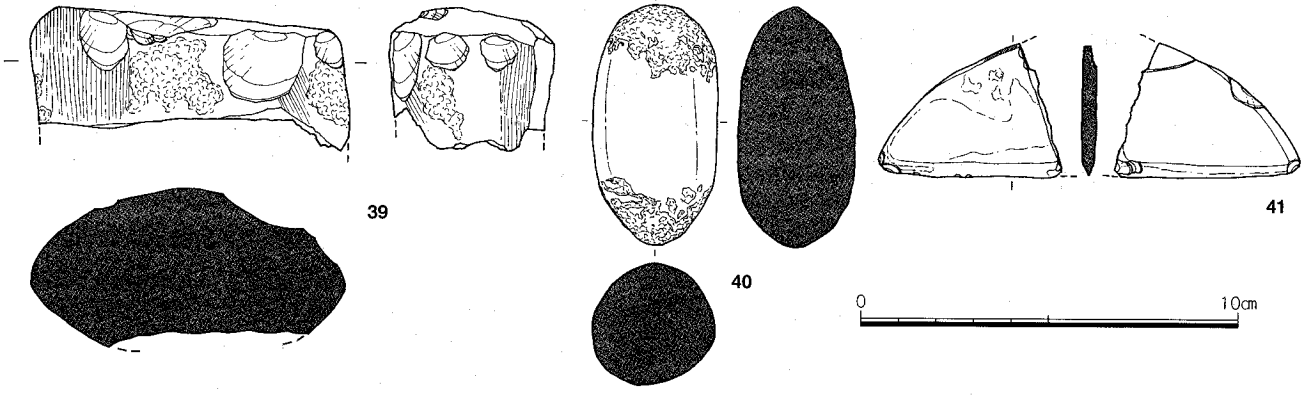
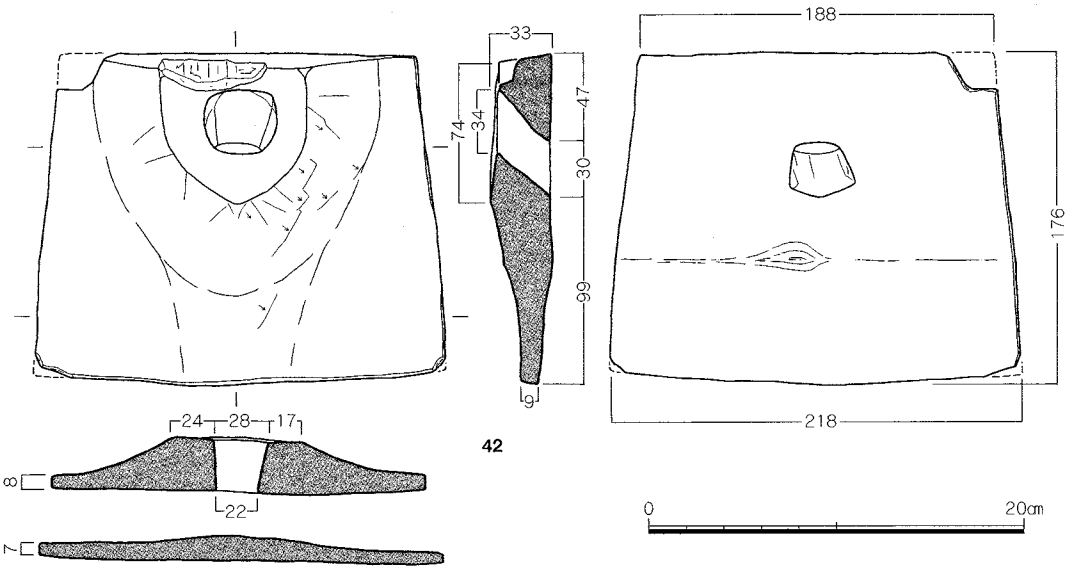
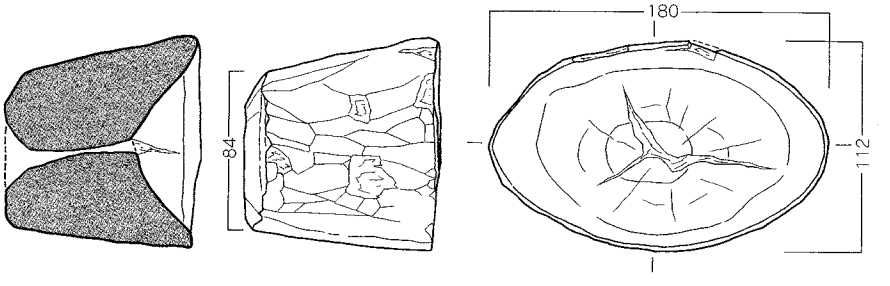


Fig.323 SW05の遺物（縮尺1/2）





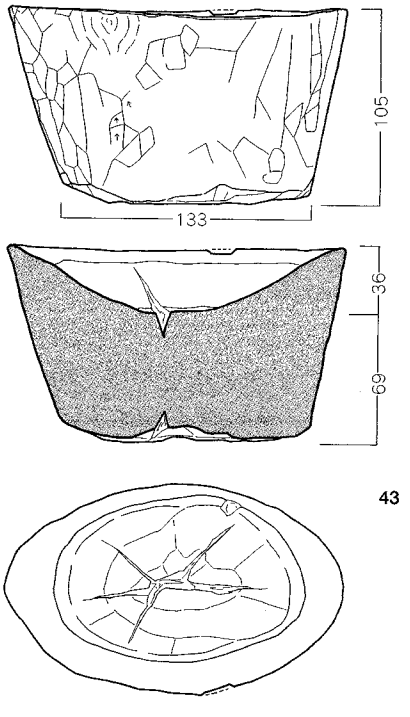


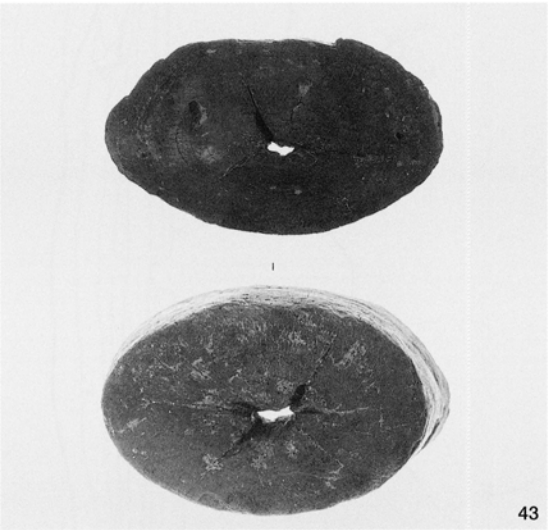
Fig.324 SW05の遺物（縮尺1/4）

で上下に右方向からの細かな刻み目を入れている。**34**、**35**は高坏の脚柱部。**36**、**37**は投弾。3.15cm、3.5cmの長さで、横断面は正円に近い。２点とも精良土が用いられている。**36**は丸みがある。**38**は長楕円形の土錘。長さ5.65cm、中央部の径は1.7cm。外面に細い溝があり、紐圧痕か。

石製品 **39**は磨製石斧の頭部小破片。玄武岩製、頭部は水平で側縁は平行する。横断面は割りに厚みのある楕円形。**40**は安山岩質の磨り石。自然石の両端が摩耗している。**41**は石鎌の先端部。頁岩で刃部は両面から研ぎ出している。

木製品 **42**は横鍬。身は頭部上辺が刃部よりわずかに短く台形状。刃部は水平ではなくわずかに湾曲している。刃部は尖らず厚みがあり、打ち込むには向いていない。柄孔は腐食しいまは不整楕円形となっているが、元は円形だったのだろう。後面の径が大きいのは柄が後面から挿入したことを示している。後面の隆起は半円台状に盛り上がり上面は平坦となっている。**43**は芯持ち材を楕円形に加工している。容器とも考えたが、厚みがあり手に持つには重量があり、また窪みも浅いことから容器でなく小型臼とした。ただなぜ円形でないのか。

44は針葉樹の枝の一端を削り尖らせている。枝は樹皮を剥いだままで小枝の節もきれいに削り落としていない。図上端の削りも半周だけである。同じように枝を加工した木製品がSW04で４本出土している。うち２本は明らかに弭の加工が施されていることから弓と断定した。残り２本は本例の加工と同じように削りだけで弓の可能性はあるものの弓の断定を避けた。ただ祭祀など非実用的な目的のために弓のコピーをしたと推定することは許されるだろう。



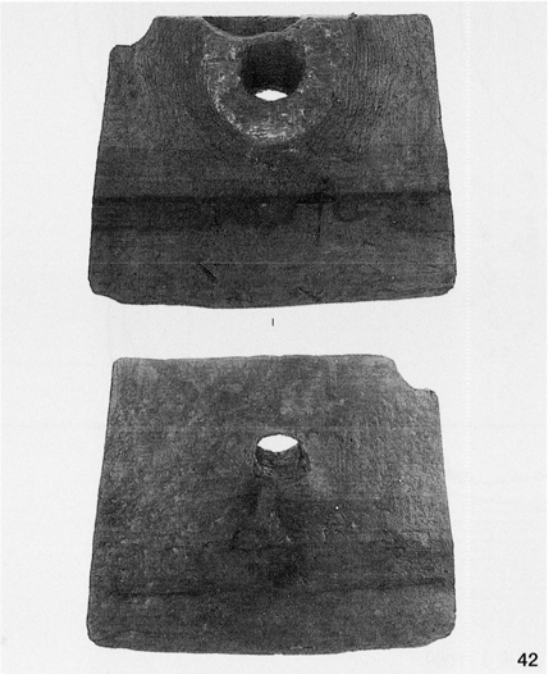
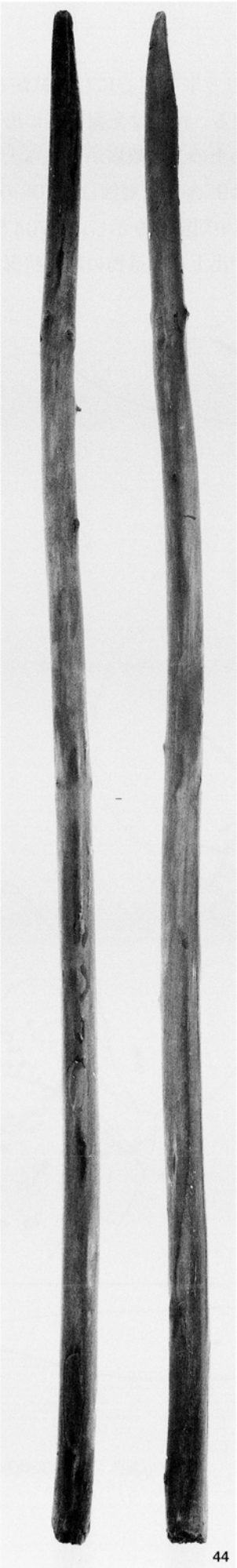


Fig.326　SW05の遺物



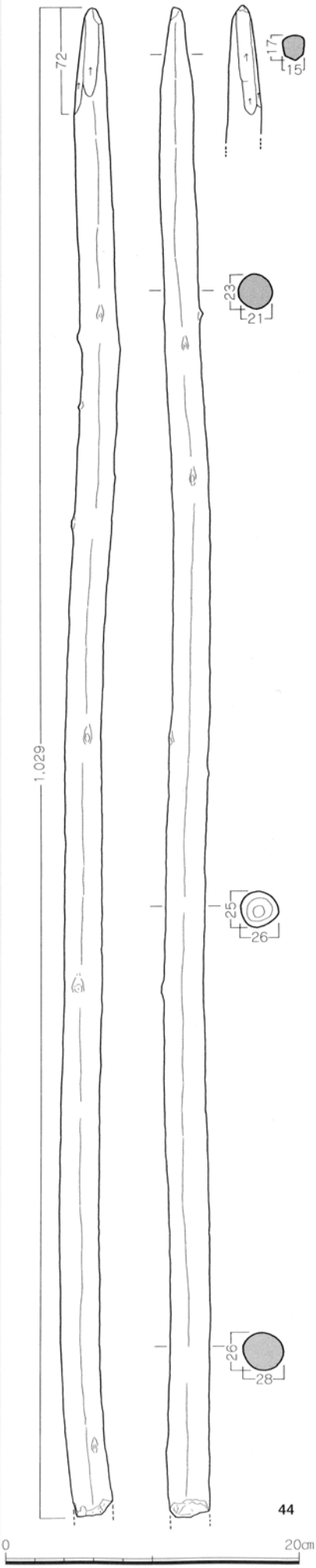


Fig.325　SW05の遺物（縮尺１/２）

第6号凹地SW06　Z29グリッドを中心にして拡がる凹地。SW04の南西側に位置し、長軸方向をSW04と同じように南北に取る。南側は発掘区外に出ており開口するのか閉じて楕円形になるのか不明。底部の断面、および埋め土の土層観察から立ち上がるものと予想した。検出した大きさは、長軸約12m、短軸約9m、深さは95cm。土層図はSW05の中央ではないが、レンズ状に堆積し、攪乱はない。出土遺物は主に弥生時代中期前半を示し、SW04とほぼ同時期に並んで存在していたことになる。特に土層観察用の帯から臼が出土し、遺物の埋没状況を確認することができた。

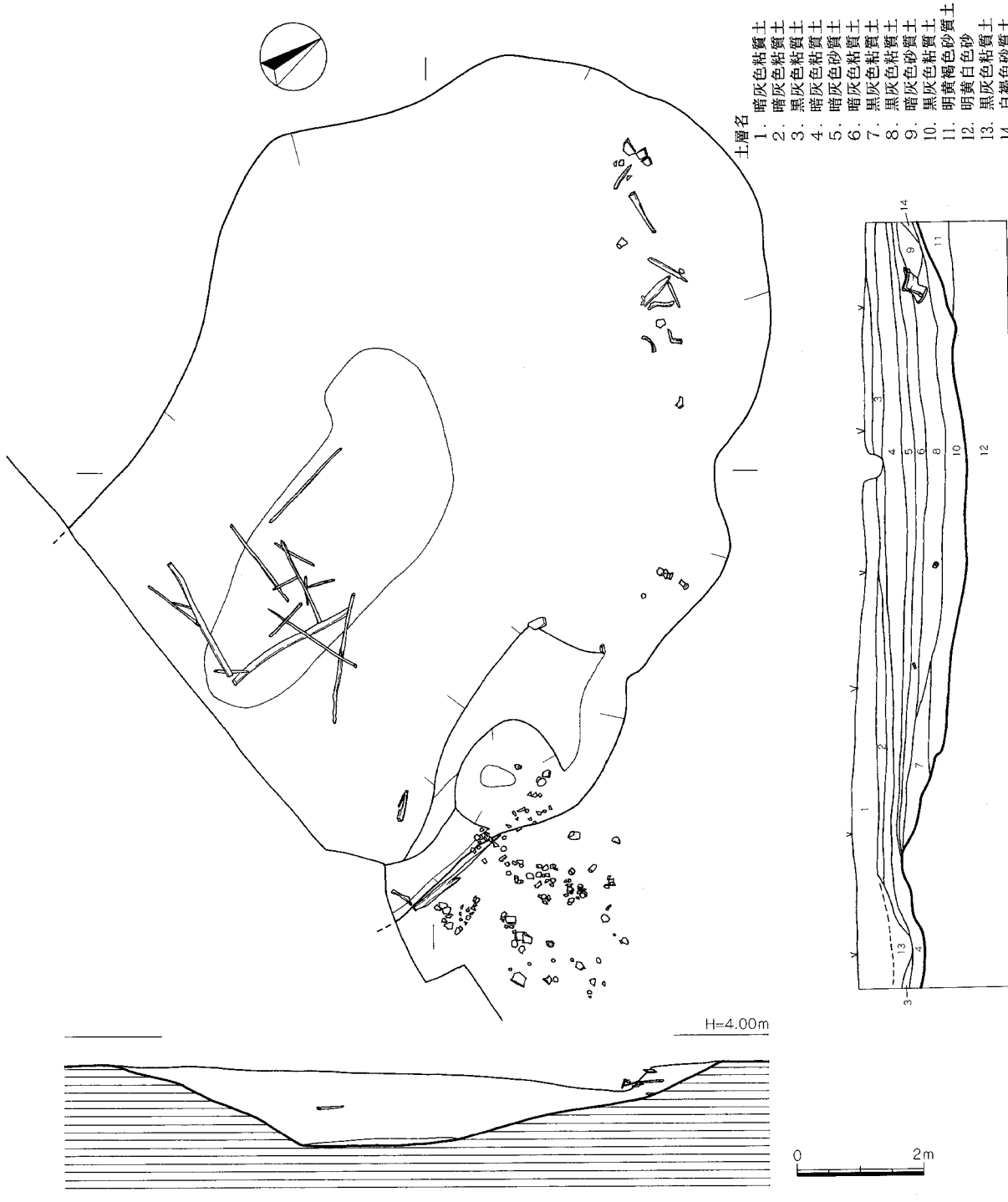


Fig.327　SW06実測図（縮尺1/100）

土　器　**1**～**6**はL字形口縁の甕。**1**は口径30.1㎝、口縁部の上面は少し盛り上がり内傾している。外端に刻み目、板状工具の木目が残る。体部は中位に断面三角形突帯を貼り付け、この上方は直線的に延びている。上半は暗文風のナデ、下半は横ミガキ。甕にしては器形、調整ともに丁寧である。**2**は丸みのある体部に長く延びた口縁部が付く。口径31.6㎝、口縁上面は内傾する。**3**は口径27.1㎝、口縁の形状は**5**によく類似する。**4**の口径は36.9㎝。口縁外端は肥厚し、上面はわずかに凹む。内端に小さく突出する。**5**の口縁上面は微妙な凹凸があり、わずかに内傾する。口縁下の２条の突帯はM字にはなっていない。**6**は口径54.3㎝の中型甕。口縁内側への延びが著しくT字形の断面となっている。SW06の遺物では新しい時期を示す。**7**は台付きの坏形をした手捏ね土器。**8**～**11**は甕底部。**8**は括れが強く、径6.5㎝の小さな底部となっている。**9**は底径8.5㎝、外面は縦ハケ目調整。**10**は底径11.9㎝、中央がわずかに凹んでいる。括れは弱い。**11**は厚みがあり、ハ字形に張り出す。

Fig.328　臼の出土状況

Fig.329　SW06（東から）

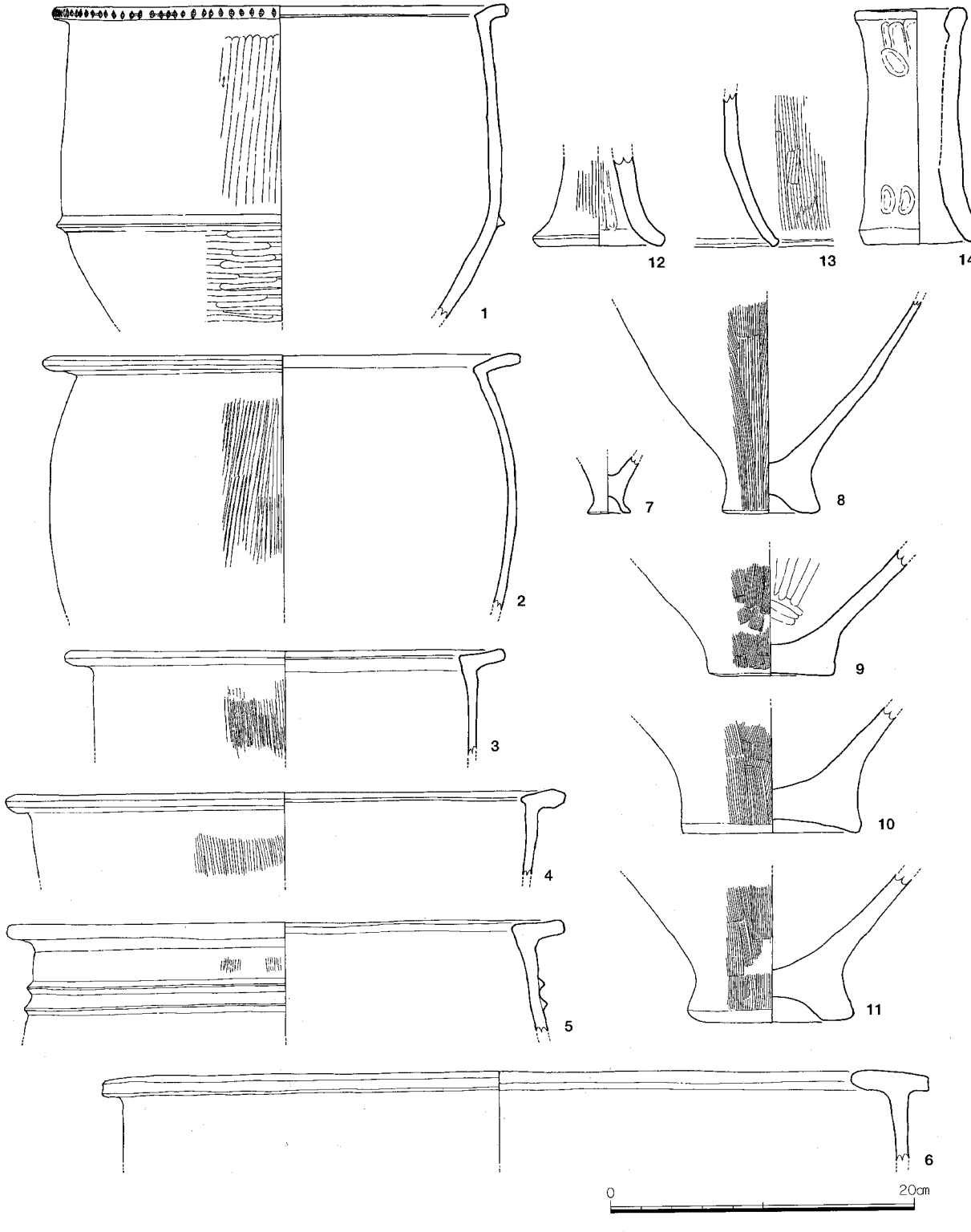


Fig.330 SW06の遺物（縮尺1/4）

12～**14**は器台。**12**は底径8.7cm、**13**は器壁が薄い作りあるいは別の器種か。**14**は円筒状で底径7.8cm。指頭圧痕が上下に残る。

15～**18**は壺。**15**は胴部上半に３本沈線で弧文を描く。**16**、**17**は広口壺。**16**は口径17.5cm、口縁内側の粘土紐貼り付けは雑で、内側に垂れている。**17**の口縁内側に粘土紐を貼り付け幅広の面を作る。

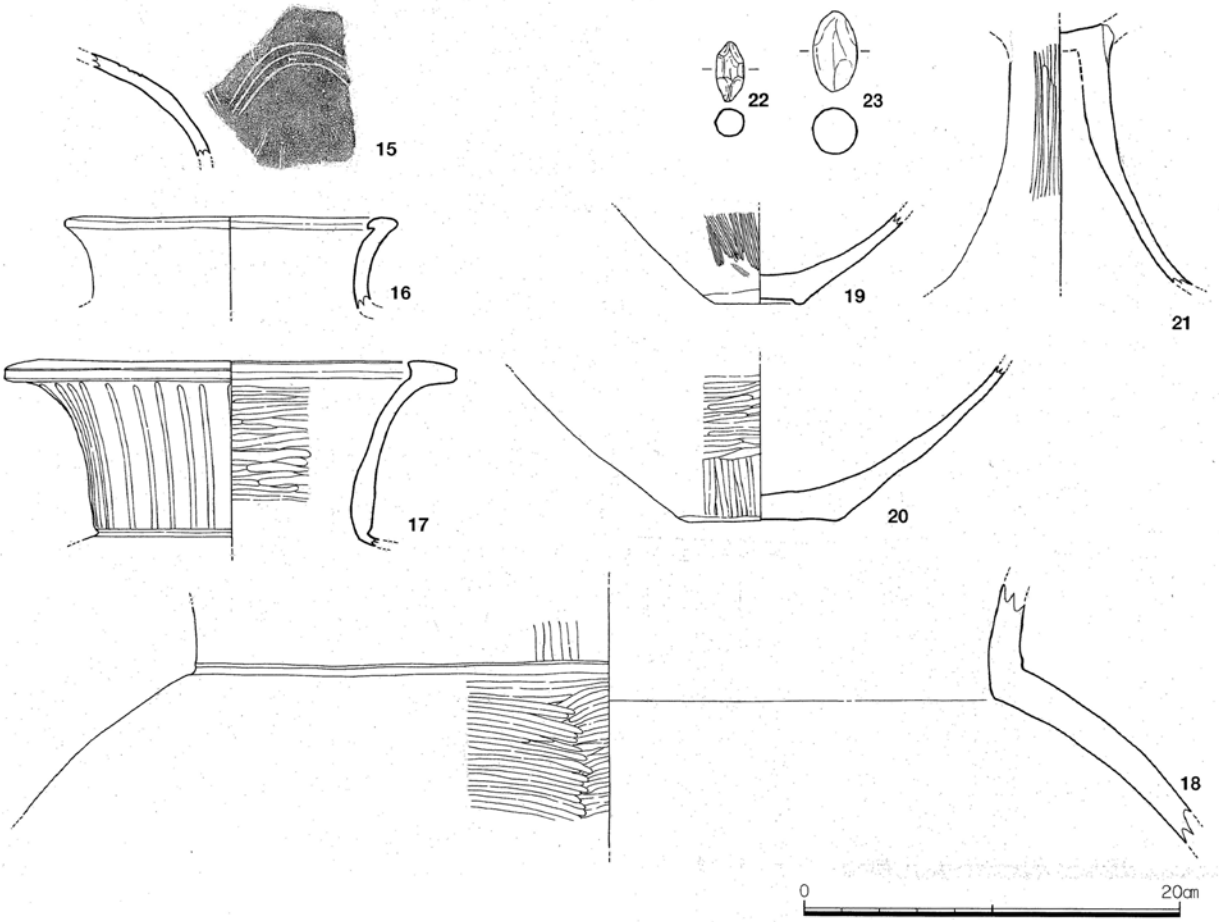


Fig.331 SW06の遺物（縮尺1/4）

頸部は縦の暗文、口径23.8cm。**18**は大きめの器形で、頸部は直に立ち上がる。外面は丁寧なミガキ。**19**、**20**は壺底部。**19**は底径4.6cm、底部は外縁を残し凹んでいる。**20**は底径8.8cm、外面はミガキ調整、黒褐色を呈する。

21は高坏の脚裾部。外面は縦のミガキ風。

土製品 **22**、**23**は投弾。**22**は長さ3.2cmで両端が尖り気味。**23**は長さ4.2cm。断面は正円に近い。

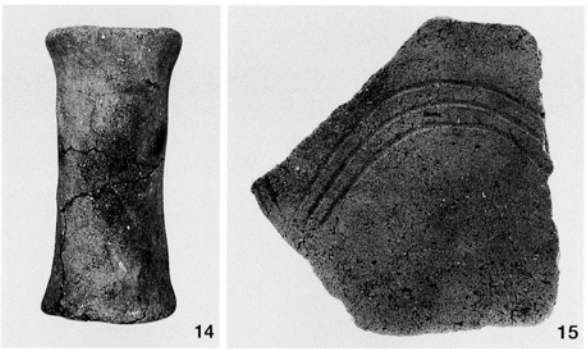


Fig.332 SW06の遺物

石製品 **24**～**26**は石包丁。**24**は外湾刃の石包丁。刃部は通常通り両面からの研ぎ出し。小孔は両面穿孔だがややずれている。全体に研磨が施されているが部分的に敲打痕が残っている。**25**は両面穿孔の小孔があることから石包丁としたが、原形を留めていないので断定不可。**26**は頁岩製。石包丁端部の小片。全面が風化し、研磨痕はよく残っていない。**27**、**28**は磨製石剣、いずれも剣身の下半を欠く。**27**の横断面は扁平菱形であるが、鎬の研ぎ出しが弱い。刃部も同じように鋭利さを感じさせない。現在長12.5cm、幅4.0cm。**28**は現在長17.0cm、幅3.65cm。横断面は扁平菱形ではなく、扁平な板状をなす。辛うじて刃部を研ぎ出してはいるが、なぜか面取りをしている。身の裏表に敲打痕も残しており、未製品なのか。切っ先（鋒）も丸みがある。**29**～**32**は磨製石斧。**29**は玄武岩。側縁が平行して長方形となる形状。横断面は丸みのある楕円形。刃部は使用によって潰れ、剥離している。**30**は側縁が平行する形状で、刃部は左右対称の蛤刃で使用

で潰れている。横断面は厚みのある楕円形。身の一部に敲打痕が残るが全体に研磨が施されている。**31**は雀居遺跡の石斧としては珍しく縦に割れている。頭部が丸みを持ち、側縁が刃部に向かって開く長台形状となる。横断面は厚みのある楕

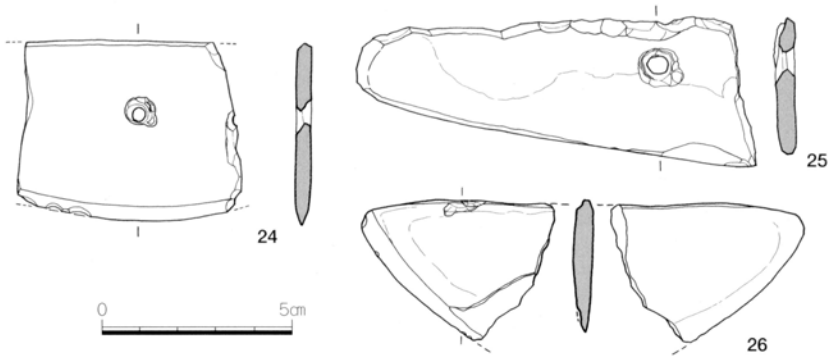


Fig.333　SW06の遺物（縮尺 1 / 2）

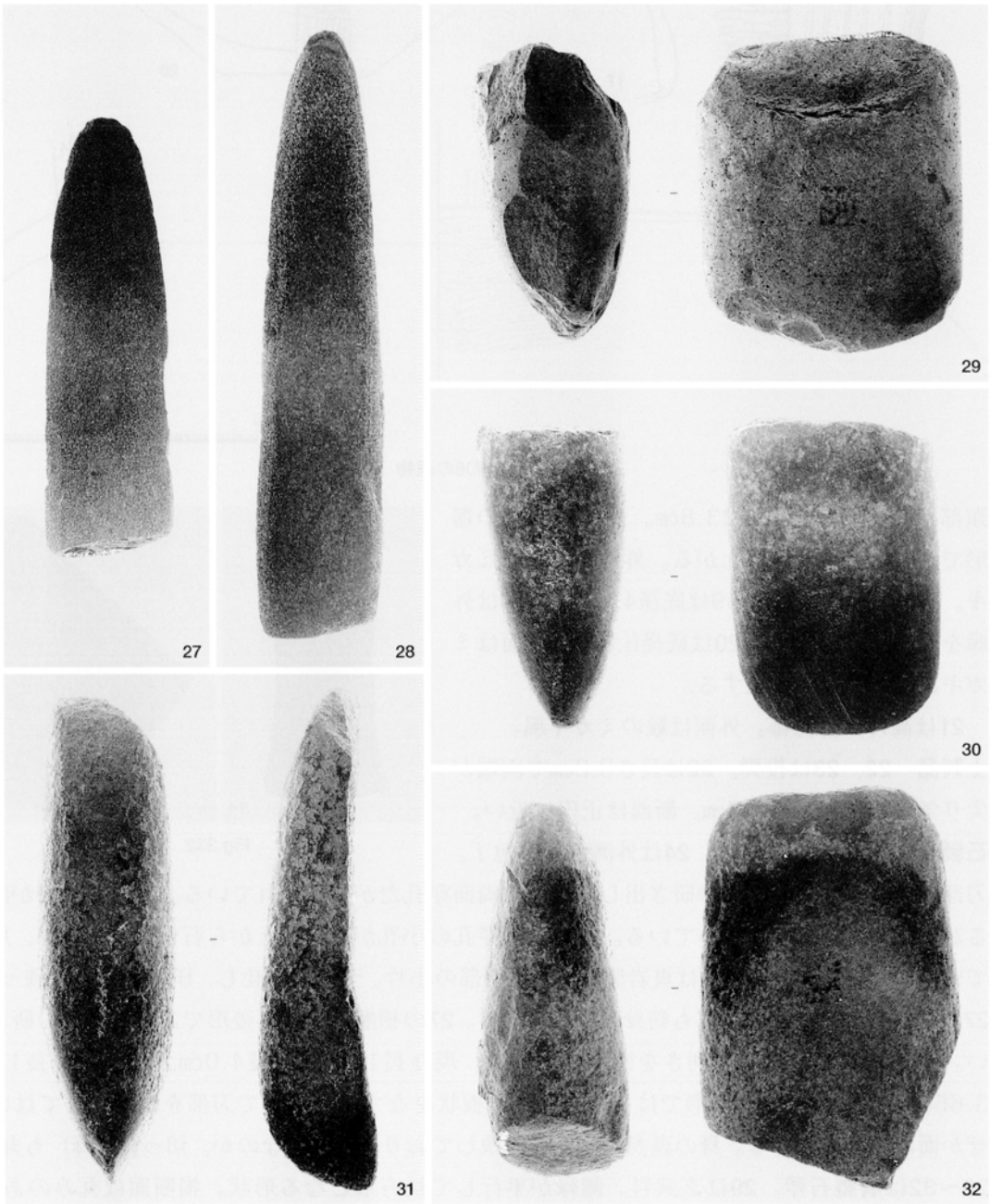


Fig.334　SW06の遺物

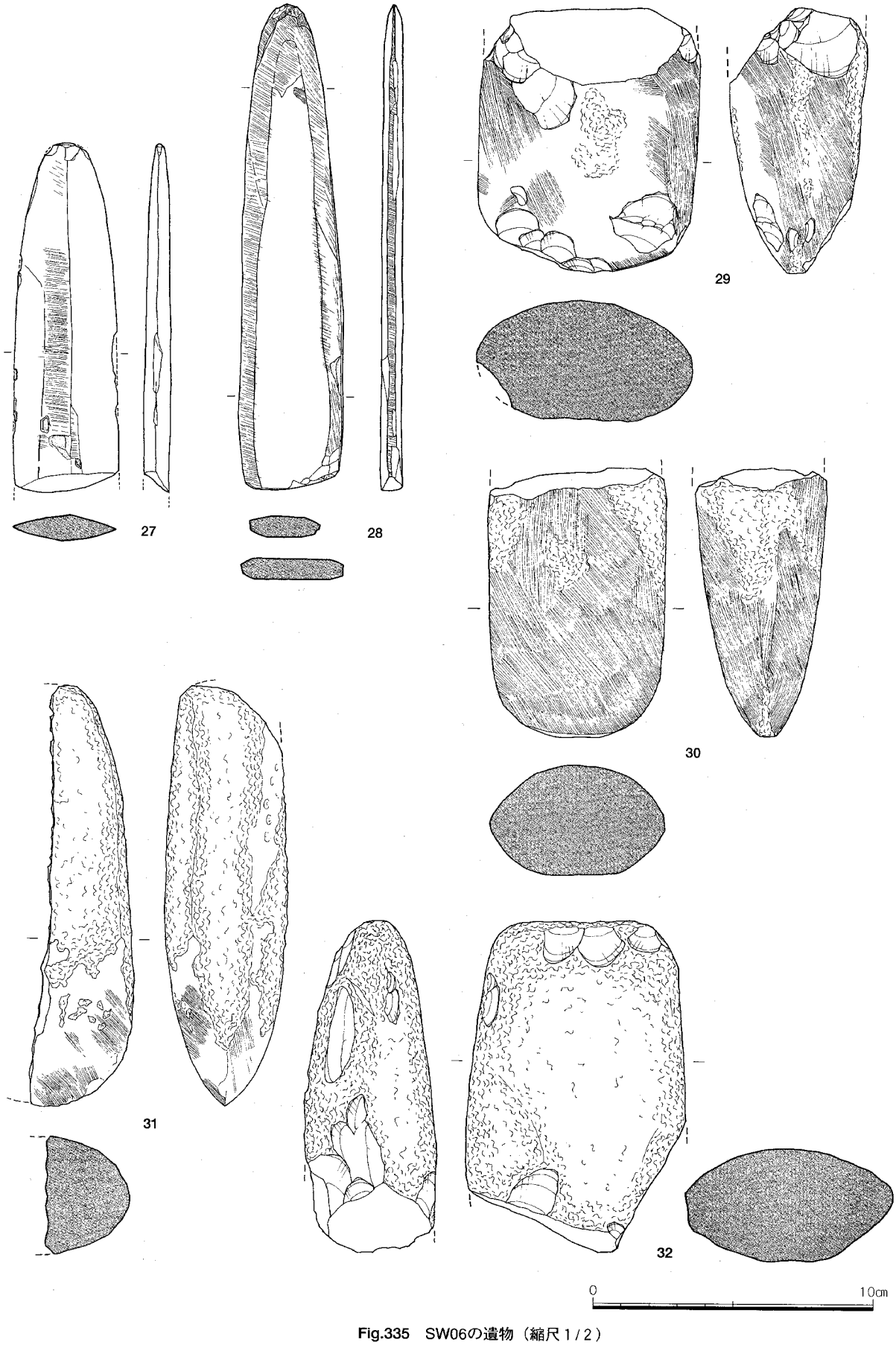


Fig.335 SW06の遺物（縮尺1/2）

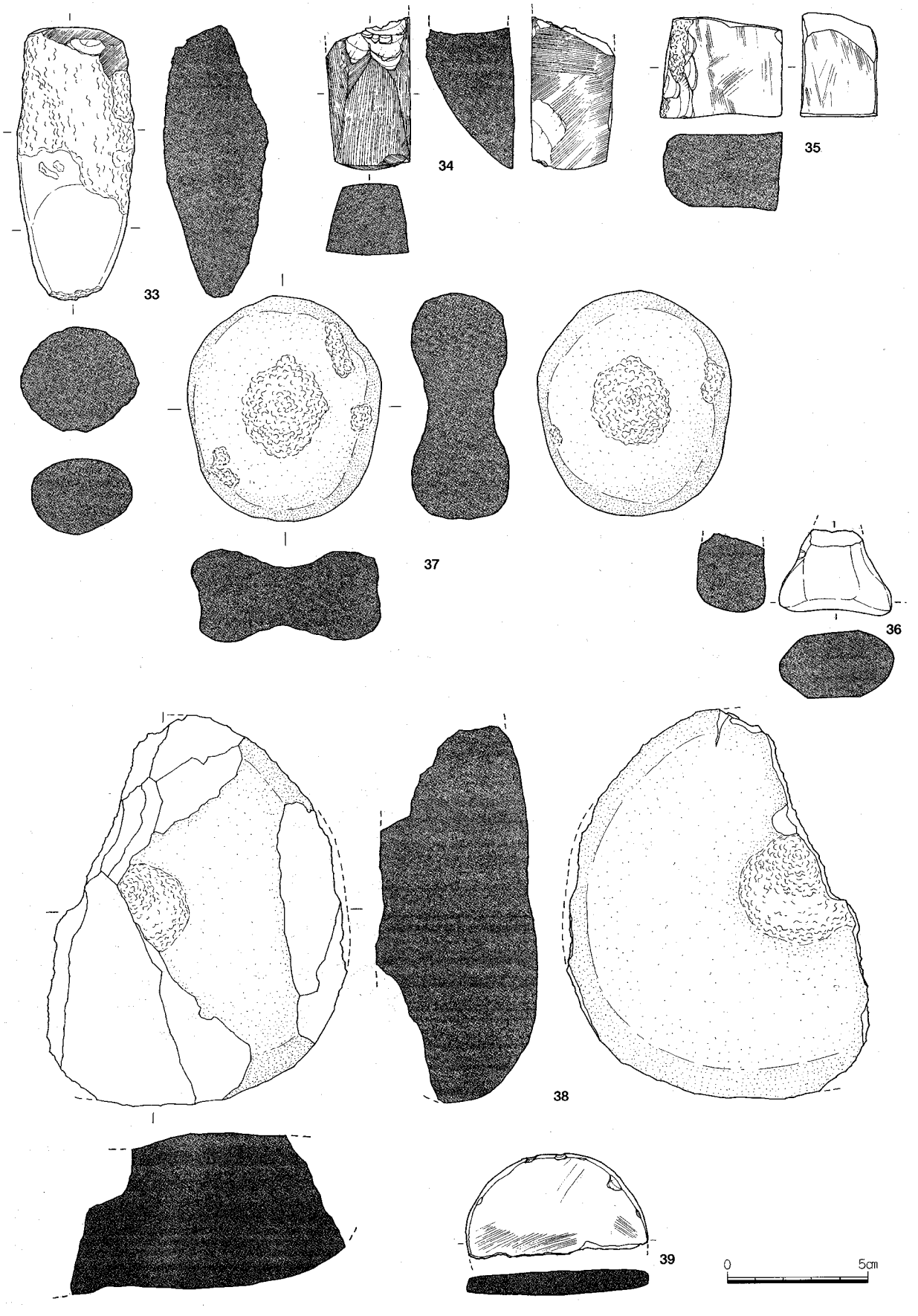
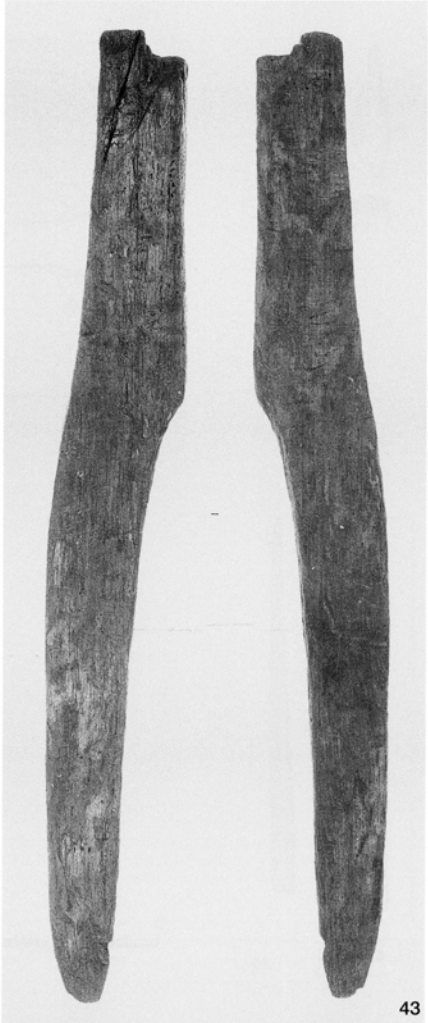
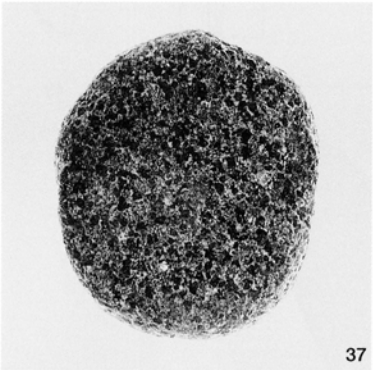


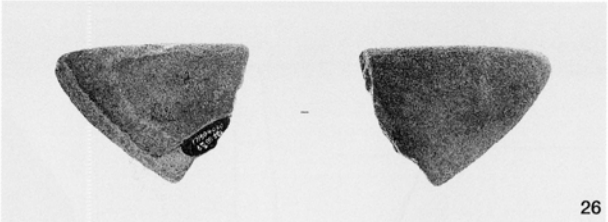
Fig.336 SW06の遺物（縮尺1/2）

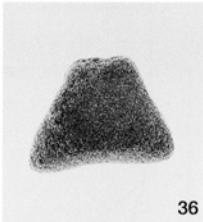
円形。刃部はよく研磨されているが、他は敲打痕のままである。**32**は玄武岩。側縁が長台形に開く。頭部はほぼ水平。全面に敲打痕がよく残っている。**33**は小さな棒状の砂岩で、図下半が両面から研磨され尖った先端は敲打で丸くなっている。手持ちで研いだり敲いたりする機能と思うが、適当な名称がなくここでは磨り石とする。**34**は頁岩の柱状片刃石斧。横断面は台形でシャープな加工となっている。刃部の研ぎ出しもよい。**35**、**36**は砥石。**35**は砂岩。３面が研ぎ面となっている。**36**も砂岩。基部が台形状に拡がっており、全面が研ぎ面となっている。**37**、**38**は凹石。**37**は丸い自然石の裏表と側面に凹みがある。**38**は14.0cm×10.3cmの斑糲岩。裏表面の中央は敲打で凹んでいる。**39**は直径6.5cm、厚さ0.9cm。紡錘車の未製品としたが、紡茎を入れる小孔はまだ穿孔されていない。

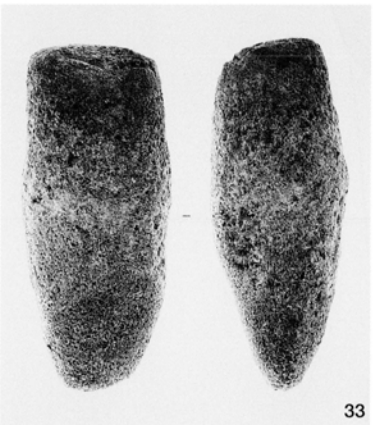
木製品　**40**は木鏃によく似た形状であることから実測したが、明らかな加工痕がなく疑わしい。**41**は独楽のように頭部が丸く、もう一端が尖っている。頭部とした方は竪杵搗き部のようによく摩耗している。**42**は針葉樹の板目材。よく詰まった木目で、図の下端は鋭く斜めに切断されている。表面は削り痕が顕著だが、裏面は不鮮明。用途不明。**43**は二又鍬の破片。側縁は肩の張りが弱く、なめらかにカーブして刃部に延びている。身は刃部に向かって次第に薄くなっているが、刃部先端では約１cmと

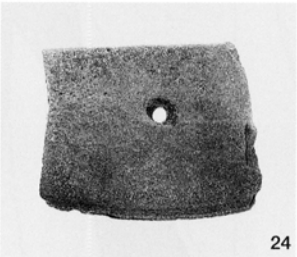


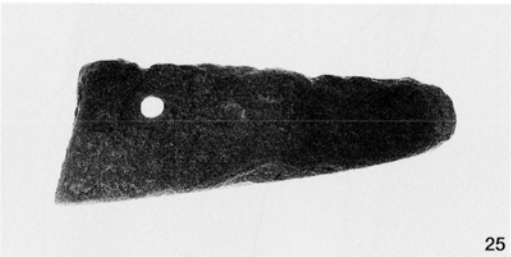


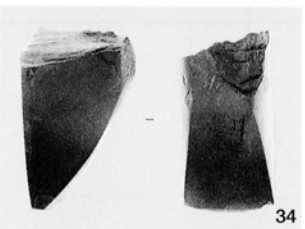












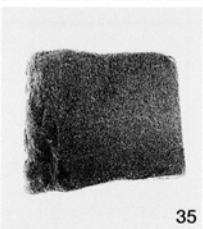


Fig.337　SW06の遺物

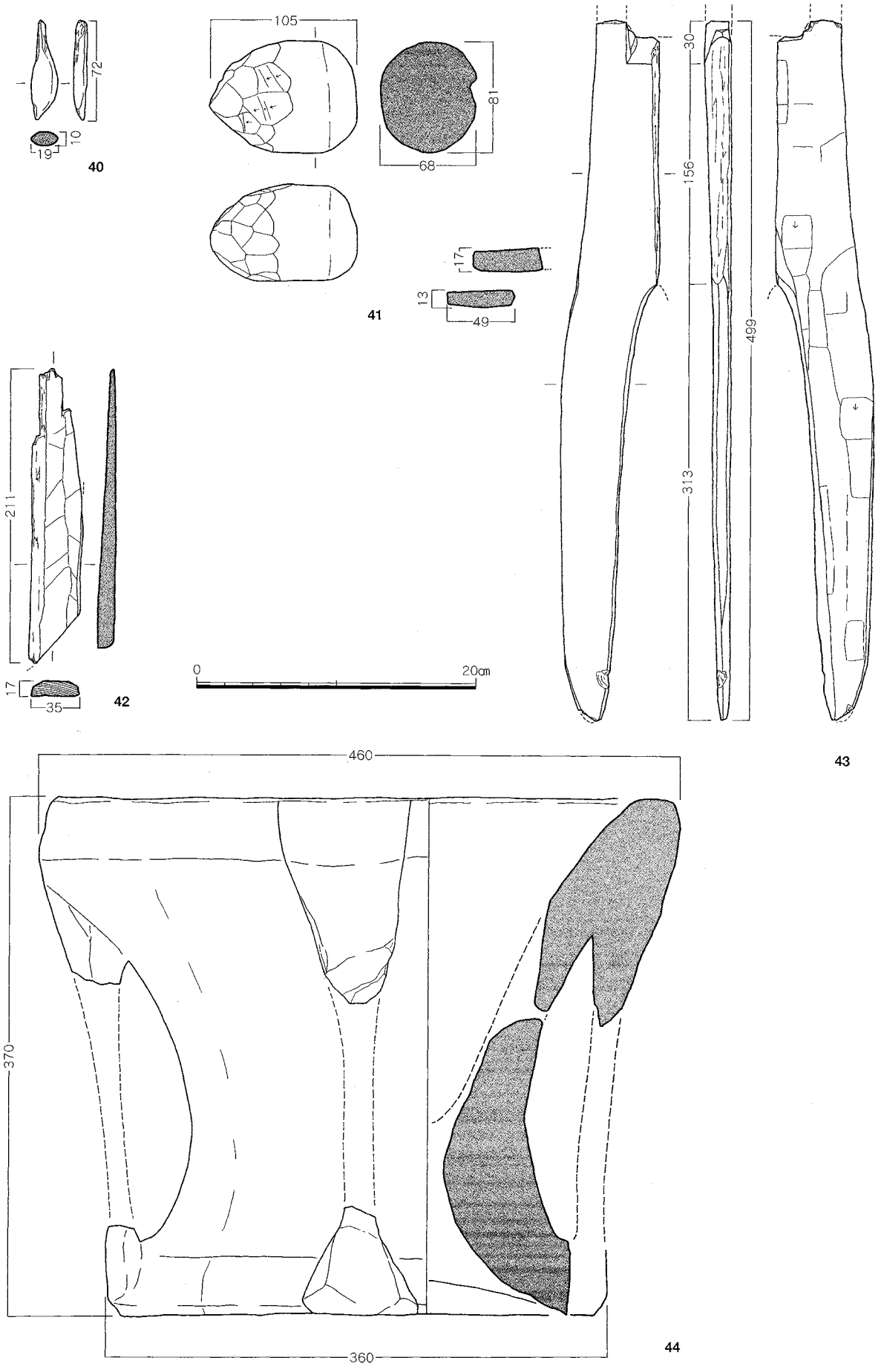
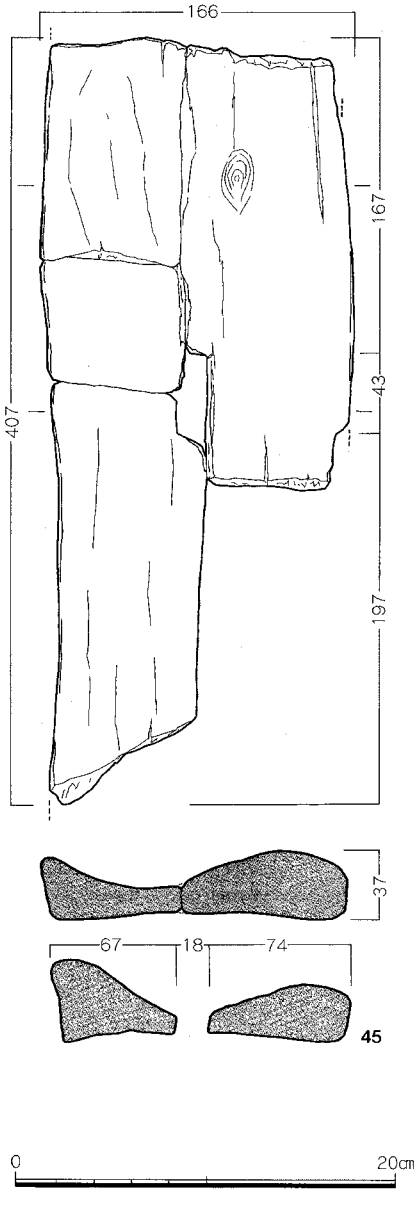


Fig.338 SW06の遺物（縮尺1/4）

厚く作られている。柄孔は方形で、後面は削り痕柄が残っている。**44**は臼。底部より２層上で発見した。SW05が堆積していく過程で埋没している。長い間乾燥したのか変形が激しく原形を留めていないが、どうにか図のように復元できた。芯持ち材で円周の４か所に柱状の透かしを刳り抜いている。本体の腰は緩やかに括れ、内側は深みのある搗き部となる。**45**、**46**は板状で建築材か。２点とも凹凸があり、均一な厚さではない。



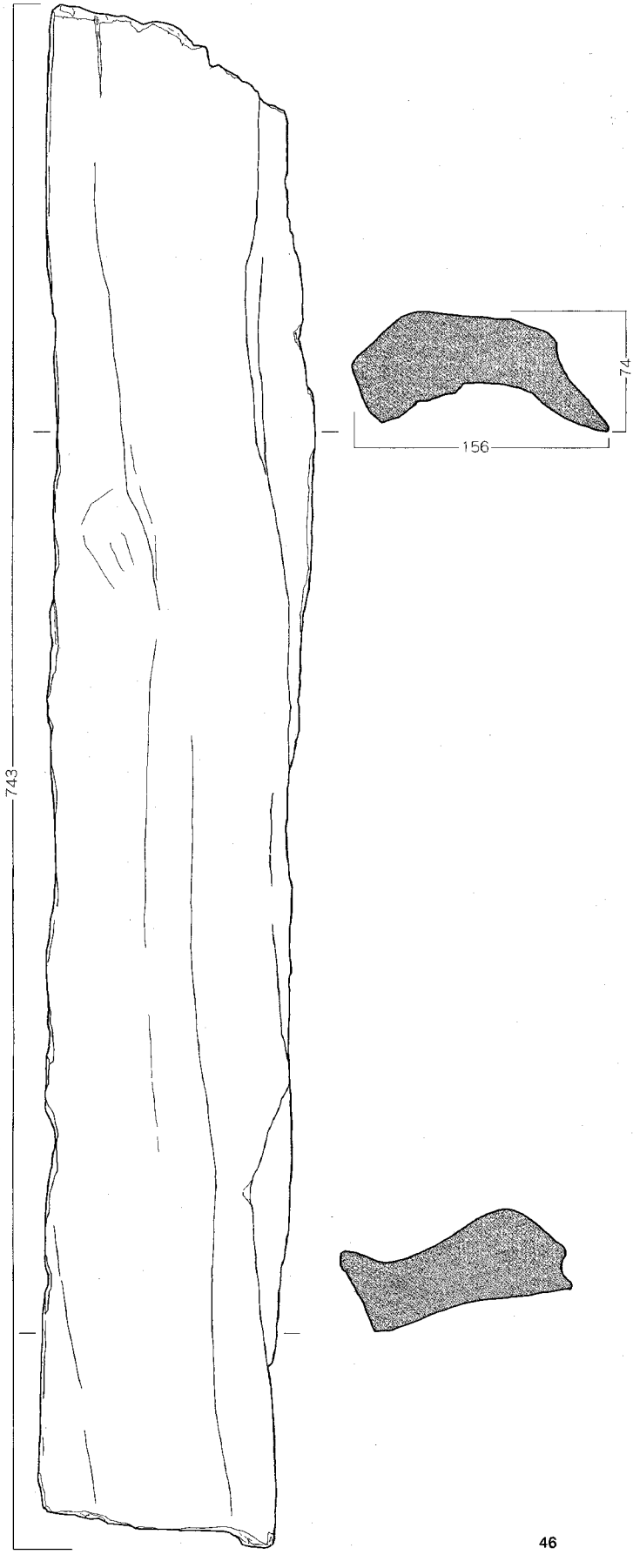


Fig.339　SW06の遺物（縮尺１/４）

第7号凹地SW07　う30グリッドを中心にして南側が発掘区外に出ている。他の凹地では湧水に悩まされながらの発掘作業を強いられたが、SW07ではその心配もなく掘り下げを行った。水田跡を除く遺構としては最も南端にある遺構である。砂地の中に長軸12.3m、短軸9.0mの隅丸方形状の落ち込みとなっており、埋め土は黒色粘質土である。水気が少ないために木製品の出土はなく、遺物の出土はきわめて少ない。ただ上部で弥生時代前期までに収まる土器が部分的にまとまって出土したことから、実測、図示した。

Fig.340　SW07検出作業（南から）

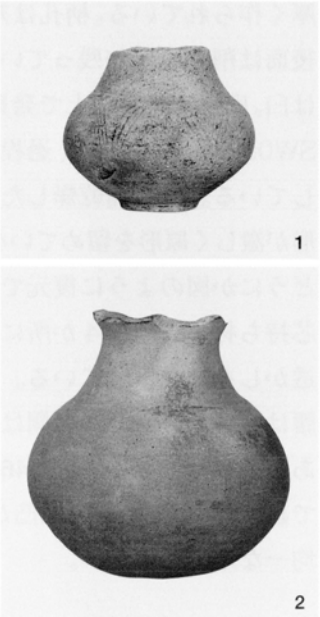


Fig.341　SW07の遺物

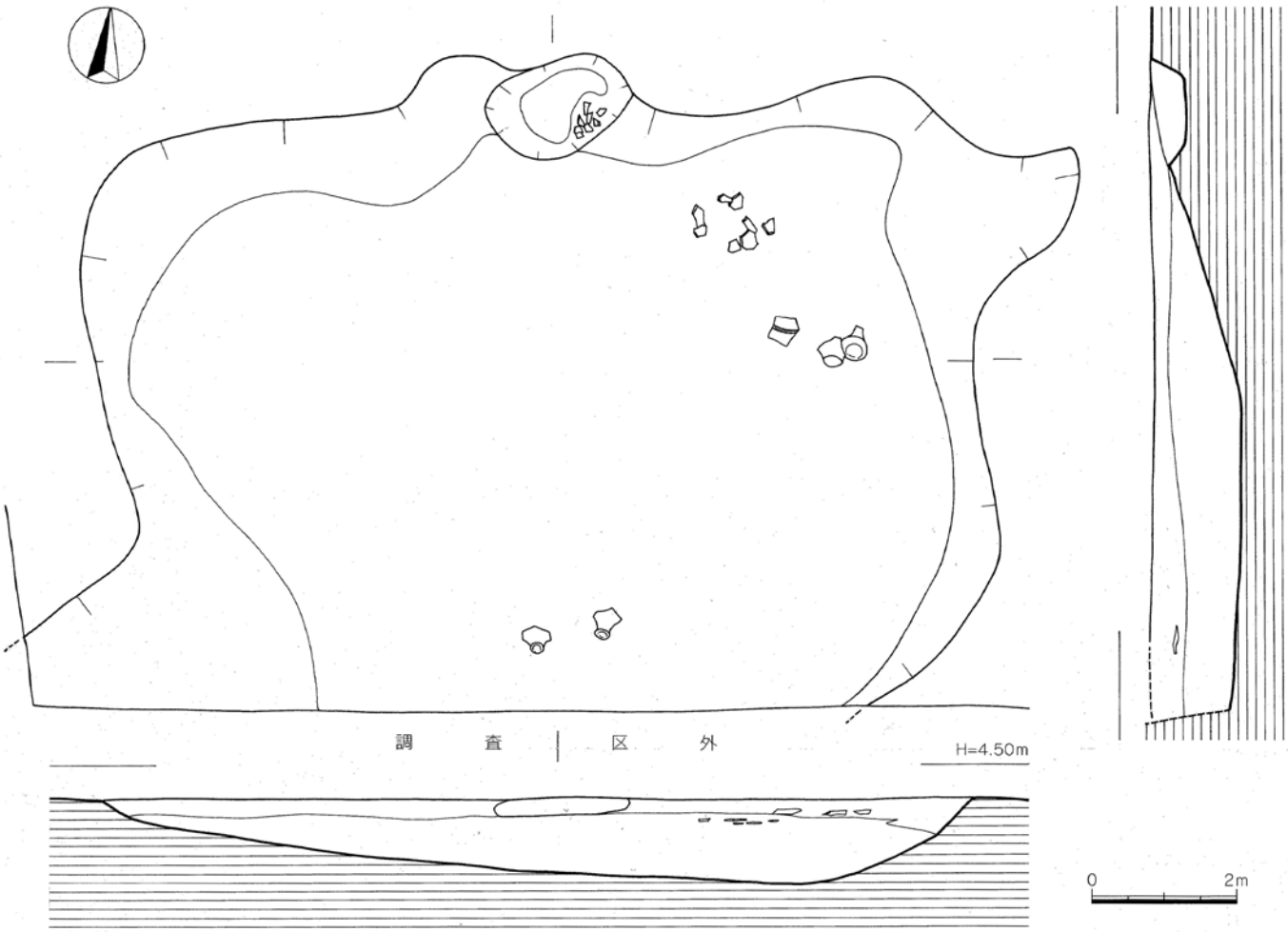


Fig.342　SW07実測図（縮尺1/100）

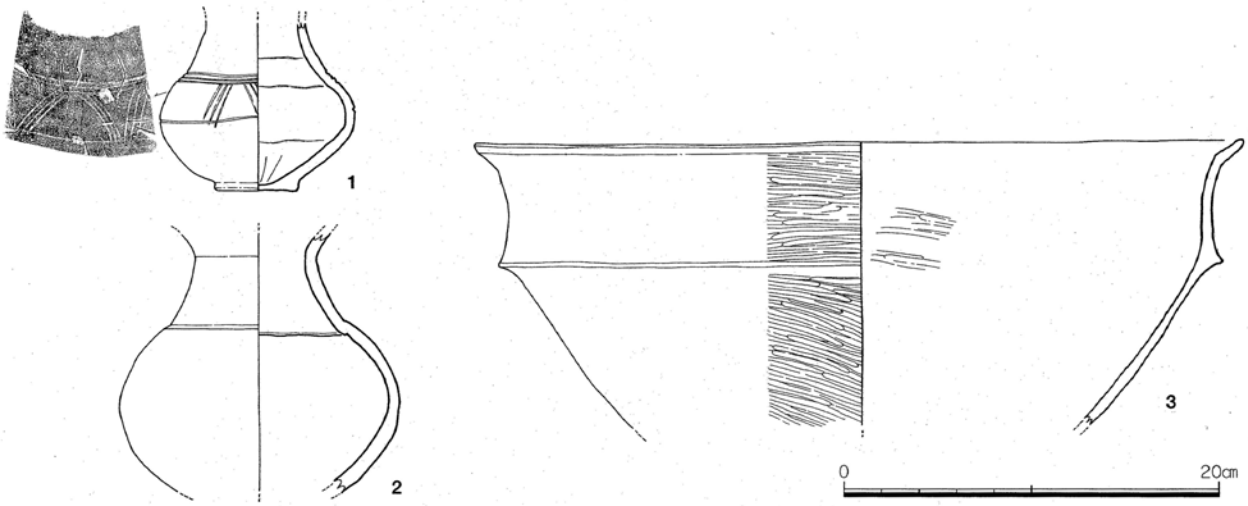


Fig.343 SW07の遺物（縮尺1/4）

土　器　**1**は発掘区の壁近くで、**2**と並んで出土した。口縁部を失っているので器高不明。胴部最大径10.3cm、底径4.4cm。底部中央は薄い器壁になっており完全な円盤ではない。胴部は最大径の位置が中位にあり玉葱状に上下が詰まった器形。頸部は直線的に内傾している。口縁部は段を設けないでそのまま外湾するのであろう。胴部上半に沈線で上下を区画した中に山形文を飾るが、その順序はまず中位に沈線１条を巡らせ、３本沈線の山形文を連続して１周し、最後に頸部との境に３本の沈線を入れている。**2**は口縁部と底部を欠くが、胴部と頸部はバランスのよい器形となっている。胴部最大径は14.9cm。精良土の胎土で焼成はよい。胴部下半に黒斑がある。**3**は凹地の北寄りで出土した。**1**、**2**よりも約60cm低い。口径41.0cm、器壁の薄い作りの鉢。体部中位よりやや上で屈曲し、直に延び外湾する口縁部となる。屈曲部外面は断面三角形突帯状に飛び出している。外面は細かな横ミガキ調整。

Fig.344 作業風景（西から）

6．杭列（SX）

第１号杭列SX01　X31グリッドに位置する。SW04、SW05二つの凹地を検出作業中に確認した。この間は青灰色粘質土が基盤となっており、この土層に径５㎝前後の丸太杭が打ち込まれている。杭列は２列で、幅約90㎝、東西方向に4.3ｍ延びている。丸太杭は樹皮を残すものがほとんどで、先端を削り尖らせただけのもので、ほとんど垂直に打ち込まれている。その深さは30㎝から70㎝前後とかなり差がある。おそらく時間を置いて数回に分けて打ち込まれた結果であろう。平面的にも直線に並んでいないことからも肯けるであろう。この杭列は水田区画や水利施設、あるいは護岸などで打ち込まれたとは思えない。周辺にその対象が存在しないからである。しかも発掘区ではこの部分だけに見られる遺構で、何か特別な目的があったのだろう。発掘作業中はあまり根拠のないことだがSW04とSW05の間に挟まれ、これより西側は低湿地になって足下が悪いことから、杭列で通路を確保したと想像した。さらにSW04の北端で木材が井形状に組み合わさったように重なって出土したが、これを通路の手すりだったとした。弥生時代の手すりは、博多区那珂君休遺跡でも弥生時代の井堰近くに構築されており、集落や水田、水利などの施設の一つとして普及していたのであろう。

Fig.345　SX01杭列

Fig.346　SX01杭列断面

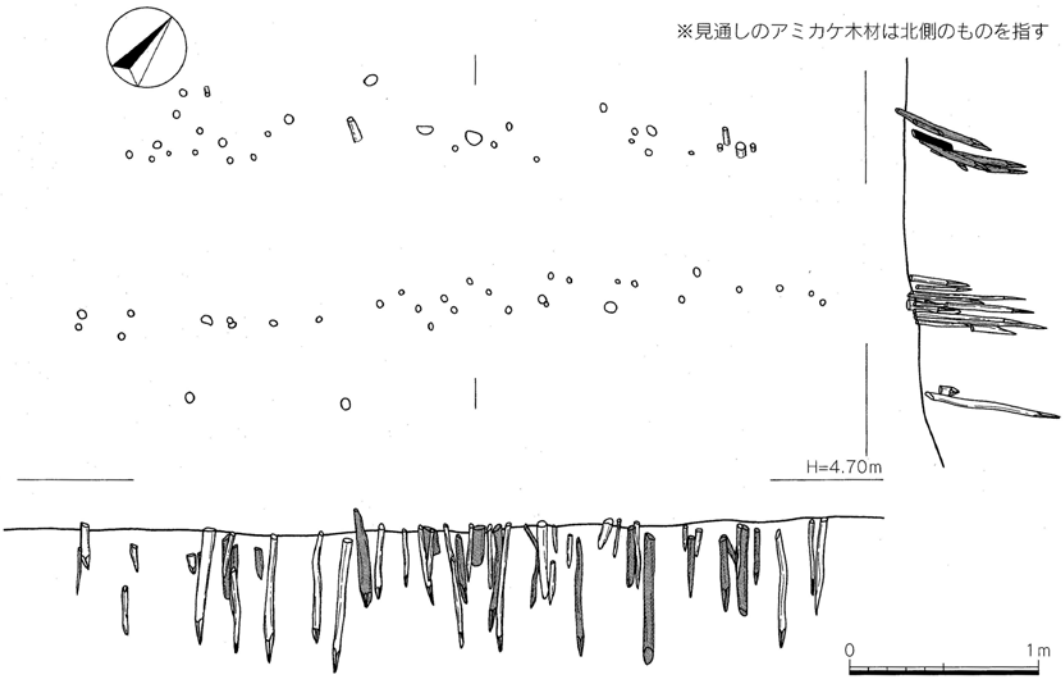


Fig.347　SX01杭列実測図（縮尺１/40）

第６節　第Ⅳ面（弥生時代早期～前期）の調査

１．円形溝

前年実施した第10次調査では、最下面である弥生時代前期の遺構調査を終えようとする間際になって、初めて目にする遺構が出てきた。それは直径２ｍ足らずの円形溝で、五輪マークのようにいくつも重なっていた。中には隅丸長方形であったり、楕円形であったり様々な形状で、溝底には小さなピットが並んでいることもある。弥生時代前期の竪穴住居跡に切られたこれらの遺構は、人工的な遺構であることは疑いようがないが、遺構の構造や目的を明確にできないまま調査を終えた。その後、

Fig.348　円形溝分布図（縮尺１/300）

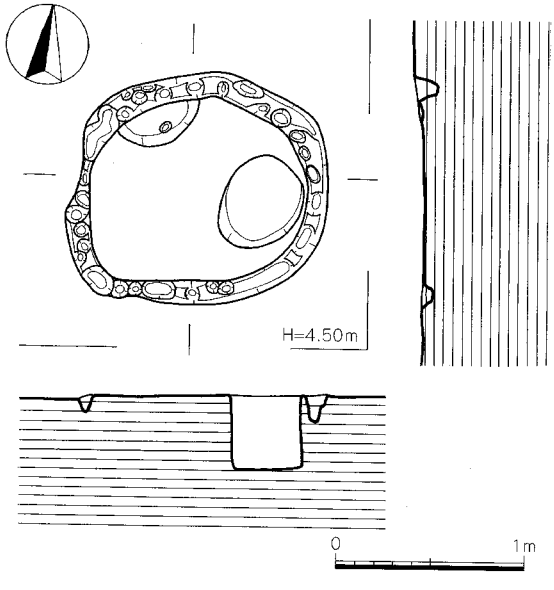


Fig.349　SS01実測図（縮尺１/40）

福岡県工業技術センターの鳥丸貞江専門研究員（現大阪芸術大学教授）が中国貴州省で撮影されたブタ小屋の写真をいただき、また第10次調査に参加していた中国吉林大学の陳國慶氏をはじめとして多くの方々から助言を得てブタ小屋のような柵囲いの構造を想定した。

第12次調査では、円形溝そのものの構造や機能だけでなく、面的な広がり、集落の中の配置、時期などの追究、確定などを目的として第Ⅳ面に望んだ。先述したように第12次調査区では、黒色粘質土層が薄いこともあって第Ⅲ面で円形溝も見つかり、ここでは第10次調査と同じように第Ⅳ面の遺構として円形溝だけを取り上げる。

第１号円形溝SS01　O28グリッドで検出。第12次調査区では最東端であるが、第10次調査区との

接合部分に当たり、第10次調査SS13からは西に５ｍしか離れていない。平面形は東西にやや長い楕円形で長軸137cm、短軸120cm。溝の幅、溝底の小ピットは溝幅からはみ出すのも含めて大小30個あり、検出面からの深さは13cm前後である。遺物は皆無。弥生時代前期中頃の土器を持つSP0038より切られていることから下限は押さえることができる。溝を円形に巡らせ、さらに丸太杭を打ち込んだ構造と分かり「円形溝」という遺構名にも矛盾しないが、内側の面積が狭く、家畜小屋とすると家畜の大きさや種類などが限定されよう。

第２号円形溝SS02　S31・32グリッドに跨って位置し、方形周溝SR01北西コーナーの西側２ｍに当たる。２基の円形溝が切り合い、さらに南側で土壙と重なっている。切られている円形溝を第２号、切っている円形溝を第３号とする。先に作られた第２号円形溝は、全周の1/3程度しか残っていない。南西から幅約15cmの溝は東に弧を描きながら延び北側で途絶える。その延長を辿る事ができないが、検出した湾曲からすると直径3.5ｍ前後の大きさを想定できる。全周が残っていないのは後世の削平が主な原因であろうが、開口部などの工作があり杭で固定していなかった、あるいは杭先を浮かしていたことも考えられる。この円形溝も時期を決定できるような遺物は出土しなかった。

第３号円形溝SS03　SS02より中心が東にずれている。平面形は東西にやや長い楕円形で、長軸230cm、短軸225cmを測る。溝幅15cmの溝底には計39個の小ピットが並んでおり、一部は溝幅からはみ出ている。溝底のレベルは一定ではな

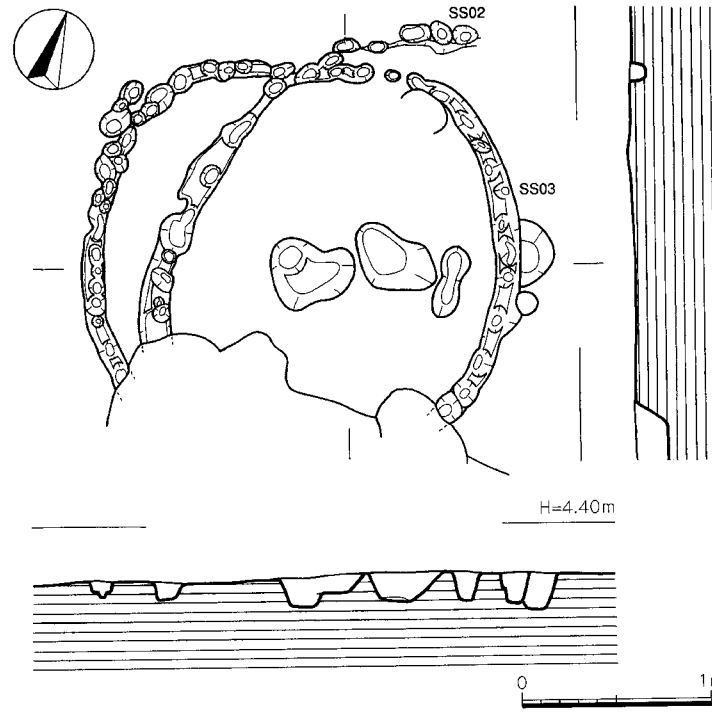


Fig.350　SS02・SS03実測図（縮尺１/40）

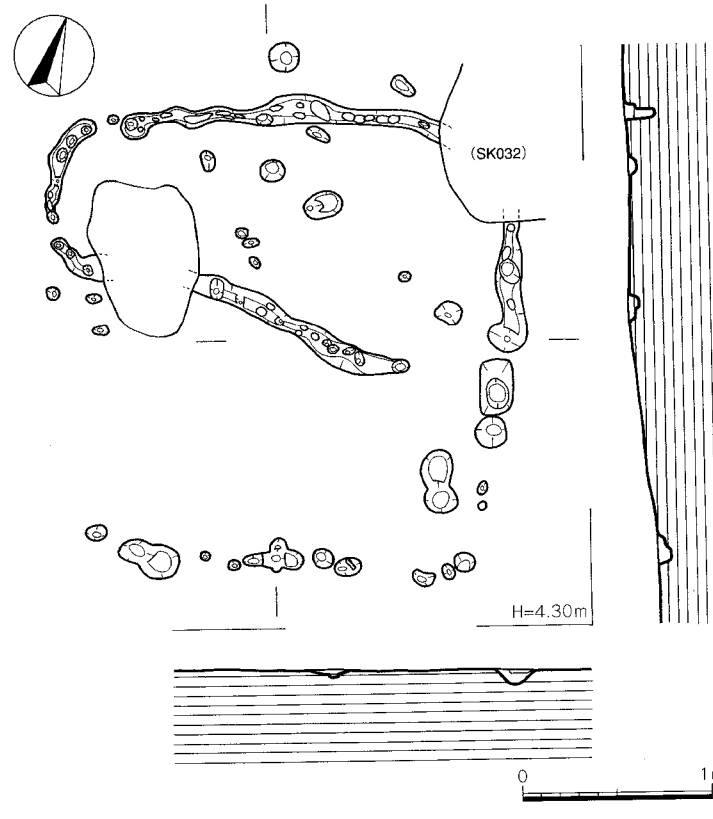


Fig.351　SS04実測図（縮尺１/40）

く東側が深く、西側が浅い。

5号円形溝SS05 R34グリッドの北拡張区で検出した。SS05は円形ではなく隅丸方形のプランである。また溝も幅7㎝と細く、小ピットの径も小さい。第10次調査でも隅丸長方形のSS04があることから、本例のような形状も囲いの目的からすると納得できるが、どれだけ上部が削平されたとしても強固な上部構造を期待できそうもない。家畜だと簡単に逃走しそうな余計な心配をしたくなる。物置のような機能も検討すべきだろう。内側に斜めに走る溝と小ピットは仕切りとも見える。遺物の出土はないが、北東隅が弥生時代前期中ごろの土器を出すSK032に切られている。

第12次調査では以上の4基を検出した。第10次調査区からするとその範囲は南北約30m、東西約40m、1,200㎡に及び一か所に集中することなく分散している。また時期については決め手がなく、他遺構との切り合いから弥生時代前期中ごろの下限を押さえるに止まった。

Fig.352 SS01

Fig.353 SS02

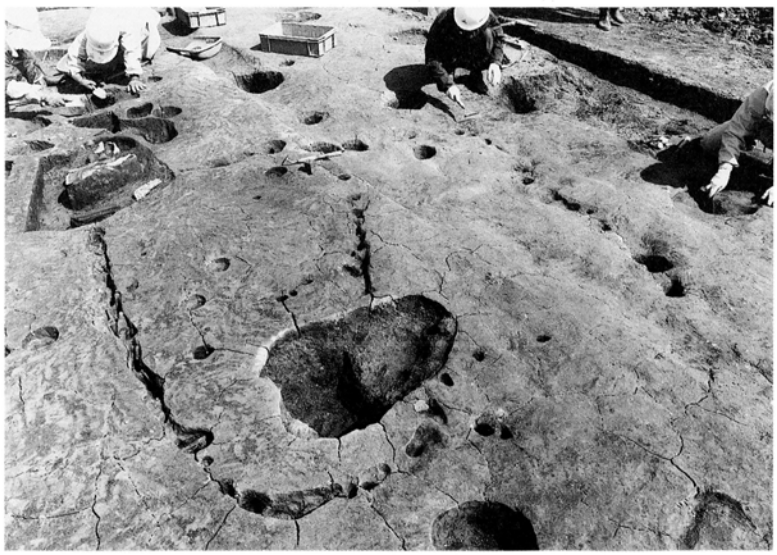


Fig.354 SS03

第３章　おわりに

１．小　結

福岡空港西側整備に先立つ雀居遺跡の発掘調査は、北から国際線ターミナルとエプロン部（第２、３、６、８、11次調査）、POL（燃料タンク）用地周辺（第10、12、13次調査　本書では西地点と呼んだ）、厚生施設（第７、９次調査　東地点と呼んだ）、そして自衛隊施設地（第４、５次調査）の４か所（順にⅠ～Ⅳ地点と仮称する）に大きく分けることが出来る。調査面積は福岡空港の１％にも及ばないので、御笠川東岸低平地における遺跡の動向を語る段階ではないが、発掘調査で確認した知見を基に想像も加えて雀居遺跡の歴史的変遷を辿ってみよう。

この地に人間が踏み込んだ確かな痕跡はⅡ地点（第10次調査）で曽畑式土器が出土していることから縄文時代早期まで遡ることが出来る。しかし本格的な進出と定住化は縄文時代晩期（弥生時代早期）になってからのことで、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ地点の３か所でほぼ同時に集落が営まれ始め、古墳時代前期まで規模を変えながらも継続している。この３地点は、御笠川低平地の中の形成された微高地に営まれており、地形だけでなくその後の消長も異なっていることから独立した集落と言うことが出来る。南西1.5kmに位置する板付遺跡は、台地に営まれた環溝集落で周辺には水田が拡がり、きわめて安定した自然地形に恵まれている。一方低平地の雀居遺跡はおそらく御笠川の氾濫に遭う頻度も高く、水田可耕地としては劣悪だったと思われる。しかしⅡ、Ⅳ地点からは数多くの木製農具が出土し、その質量は決して板付遺跡に見劣りすることはなく、同じような農耕技術だったことを示している。水稲耕作は板付遺跡のように選ばれた特定の場所で始まったであろうが、間髪を入れず条件の悪い低平地にも進出し急激な速度で水田化を果たしている。弥生農民の力強さを強烈に感じるが、稲作という生産活動に一斉に突入した社会的要求、動機、そしてムラ人たちの構成などの解明が今後の課題である。ところでやや後になるが当時のムラ人たちの墓地がⅡ、Ⅲ地点で発見された。Ⅲ地点（東地点）では甕棺墓８基と土壙墓９基からなる小規模の墓地で、微高地（62ｍ×48ｍ前後）の南東端部に位置している。Ⅱ地点（西地点）では甕棺墓７基（うち２基は中、後期）、土壙墓２基、木棺墓１基で、なぜかまとまりがなく広い範囲に分散している。人骨は合わせて17体あり、中橋孝博教授の報告によると渡来系弥生人の特徴と縄文集団に頻繁に見られる抜歯型式が認められている。水稲耕作の伝搬と受容の情況をこれらの人骨は如実に語っており、一層の研究進展が期待される。Ⅱ地点第10次調査の第３号甕棺墓、第12次調査の第１号土壙墓は、生後間もない乳児であった。第３号甕棺墓は廃棄土壙と思われるSK018にあり、甕棺墓の遺構名称を与えたもののムラの構成員と認められず不用な土器と同じような扱いと考えた。しかし土中に戻すという行為自体は、乳児に対する敬虔な埋葬行為の結果であって粗末に扱ったものではなく、先の推測を訂正したい。また西本豊弘教授に依頼した動物遺体の中にも少なくとも３体以上の死産児が含まれており、母親やムラ人達の深い悲しみが伝わって来る。乳児の埋葬例としては貴重な資料となろう。ところで当時の食糧事情であるが、Ⅱ地点では炭化米と700点を超す動物遺体が出土した。動物遺体のすべてが食糧であったかは確かめようがないが、中には周辺ですぐに入手出来ないものもあり、ムラ人の行動や交易が広範囲に及んでいたことを伺わせて興味深い。

住まいである竪穴住居跡の発見は弥生時代を通じてきわめて少ない。しかし遺物の出土量、種類の多様さからすると集落の旺盛な生活力や勢いを感じる事が出来る。弥生時代前期になってⅡ地点の西側の数か所に凹地が出現する。水田は発掘では検出できなかったが御笠川寄りに作られていたのであ

ろう。ムラ人たちは凹地の間に杭列で補強した通路を抜けて水田と集落を行き来した。この凹地は大量の土器や木製品の投棄場所としてだけではなく、時には異様な文様の土器を供えての祭祀も行われたようである。弥生時代中期初頭になると、掘立柱建物が軒を並べる。これが住居なのか倉庫なのか検討を要するが、ムラの風景としてはもっとも賑やかな時期であっただろう。ところが直後、唐突にⅡ、Ⅲ地点の集落が縮小し後期に至る。一方、南側約350mのⅣ地点では後期になって環溝集落ができ、大型の掘立柱建物が威容を誇っている。環溝からは楯や木製短甲などの武器が出土し当時の緊張した社会情勢を反映している。小集落の存在は許されず、権力者によって集落が統廃合された結果であろう。弥生時代後期終末から古墳時代になると再びⅡ、Ⅲ、Ⅳ地点で集落が復活し、弥生時代同様の活況さが戻っている。Ⅱ、Ⅲ地点の微高地縁では土器溜が形成され、完形の土器や馬鐸の出土から祭祀行為の結果とも想像される。だがまたしても忽然と集落は姿を消してしまう。集落はどこに移動したのだろうか。その原因は一体何だったのだろうか。

古代、９世紀前後には条里制の地割りで整然と水田が区画される。墨書土器、木簡、斎串、人形などの遺物が出土していることから、大宰府に通じる官道や官衙的な施設が近くにあった可能性が強い。しかしこの水田も大規模な洪水で厚く砂層に覆われ完全に埋没する。10～11世紀になってⅠ地点の砂層が盛り上がった場所に小集落が営まれているが、火災にあったのか消滅し、その後は洪水に幾度となく襲われたようである。ようやく近世以降安定して昭和に至った水田とその集落であったが、昭和19年になって軍部の飛行場建設で強制移動を余儀なくされる。

このように雀居遺跡の集落は、自然の災害だけでなく権力者や国家的な政策によって断絶を繰り返したと言うことができよう。

紙数の制限から成果の一つ一つについてまとめることができなかった。佐藤洋一郎先生をはじめとして各専門分野の先生方に原稿を寄せていただき内容の充実を図ることが出来た。また北村幸子、境聡子、西堂将夫調査員の熱意なしには本書は完成しなかったであろう。最後になったが、発掘調査以来、多くの方々のご協力とご指導を受けたことを明記し、感謝の意を表する。（力武）

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第７４７集

福岡空港西側整備に伴う埋蔵文化財調査報告

雀居（ささい）8

平成15年（2003年）３月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡県福岡市中央区天神１－８－１
電　話　０９２－７１１－４６６７
ＦＡＸ　０９２－７３３－５５３７

印　刷　福博綜合印刷株式会社
福岡県福岡市博多区堅粕3－16－36

Sasai Sites Ⅷ: 12th campaign of the excavation

Fukuoka city, which is located in the northern region of Kyushu, played an important role in Japanese history as an entrance to accept culture, men and things from the Asian continent.

Fukuoka Airport as a gateway of Modern times need a new facility due to rapid increased air traffics; therefore, the rescuer excavations of the Sasai sites was carried out before development.

The Sasai sites are situated at a low terrace on the east bank of Mikasa River, and the area including the Sasai sites is known to the oldest one for the rice cultivation in Japan. Near the sites including the Itazuke site, important sites of the Yayoi period have been found. As a result, the excavation of the Sasai sites was expected to came to light the settlement and rice cultivation of the beginning of the Yayoi period.

The excavations of 1991 through 1998 lasted the thirteen campaigns, and during the campaigns archaeological remains and artifacts belonging to the early Yayoi period (4th century B.C.) through the late Heian period (11th century A.D.) were unearthed. The Sasai sites helped to bring us the important archaeological finds and results.

This is the report of the 12th campaign. Excavated area is just west of the area of the 10th campaign. Archaeological remains belonging to the Ⅰ through Ⅲ phase were excavated.

Ⅰ phase belongs to rice fields as found in the excavated area of 10th campaign; they were found with a neatly plan in rectangular shape beneath a thick layer of sand. Unearthed objects seem to be dated to about the 9th century A.D. Wooden-human figures were unearthed. They were used for a ceremony held by the government, and they seem to indicate that there were a public house as an administrative office and a road near.

Ⅱ phase belongs to the settlement of the late Yayoi through the early Kofun period (3rd through 4th century A.D.). Pit-dwellings, pits, and holes filled in piled earthenwares were unearthed, and many wooden objects were found in a hollow either. These archaeological remains and objects can help to imagine not only daily life and religious attitude, but also agricultural tools of those days.

Ⅲ phase belongs to the settlement of the Early Yayoi through the first half of the Middle Yayoi period (3rd through 1st century B.C.). Pit-dwellings, pits, tombs, and hollows were unearthed. Above all, wooden objects were found in a hollow of the Yayoi period, and they can help to understand rice farming and technology of making wooden tools in those days.

Ⅳ phase was not found, but four circular ditches were uncovered. They are thought to be small barns to keep pigs,

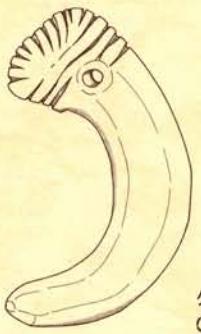
As a result of 12th campaign, we could confirm the westernmost area of the settlement of the Yayoi through Kofun period. Assistant Prof. Shinichiro Fujio dates jars of the earliest and early phases of the Yayoi period by carbon attached the surface. This data is shown in the supplement.

（英訳：林田憲三）

Results of the 12th excavation of the Sasai sites

SASAI 8

Report of Archaelogicai Investigations of Fukuoka city, Vol.747



勾玉
Comma-shaped Bead

March 2003

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY
JAPAN